2011 2020

山海虹路
SAN KAI KOU RO

山田町復興記録誌

山田町復興記録誌

山 SAN
海 KAI
虹 KOU
路 RO

2011〜2020
岩手県山田町

あの日から立ち止まることなく

―写真でみる今の山田町―

「あの日」からもうすぐ10年目の春――。
春霧漂う十二神山、霞露ヶ岳、鯨山が、まちと海を抱きしめる。
若草萌える豊間根の水張り田んぼが空色を映す。
山田湾にシーカヤックが遊び、空に花火が咲く夏。そして誰もが、帰る場所はここだと「山田祭り」の秋に集う。
ここは、私たちのふるさと。
山のように豊かな そして海と空のような澄んだ心で、鯨のように悠々と、大きな未来を目指そう。

山田町役場の屋上から見た街の風景（撮影日：2020年９月）

あの日から
立ち止まる
ことなく

多くの商業施設が集まる長崎街道。三陸鉄道リアス線の踏切と、奥には金融機関が並ぶ（撮影日：2021年2月）

❶ ❷
❸ ❹

❶ 共同店舗棟「オール」（撮影日：2020年8月）
❷ 3棟を構える山田中央団地（撮影日：2020年9月）
❸ 高台に移転した船越小学校（撮影日：2020年9月）
❹ 整備が完了した船越漁港（撮影日：2020年9月）

あの日から立ち止まることなく

2020年7月、桟橋や遊歩道の整備が完了したオランダ島（撮影日：2020年8月）

❶ エメラルドグリーンの海と白い砂浜が広がる荒神海水浴場（撮影日:2019年5月）
❷ 浦の浜海水浴場でシーカヤックを楽しむ親子
❸❹ 2020年には、オランダ島で震災後初となる海開きが行われた（撮影日：2020年8月）

あの日から
立ち止まる
ことなく

大津波と台風、2度の災害に見舞われた
鯨と海の科学館。
2020年7月15日に再オープンを果たした
(撮影日：2020年10月)

再建された陸中山田駅に入線する列車(撮影日：2020年11月)

三陸鉄道陸中山田駅 外観(撮影日：2020年8月)

三陸鉄道岩手船越駅 外観(撮影日：2020年11月)

三陸鉄道織笠駅 外観(撮影日：2020年12月)

三陸鉄道豊間根駅 外観(撮影日：2020年12月)

発刊にあたって

山田町長　**佐藤　信逸**

東日本大震災の発生から10年の歳月が経とうとしております。

改めてお亡くなりになった方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

未曽有（みぞう）の大震災からこれまで取り組んできた復興事業も完成となり、一区切りを迎えることになりました。

震災から今日までの道のりは、決して平坦なものではありませんでした。復旧・復興・発展と険しく長い道のりをここまで歩んでこられたのも、多くの方々のご理解とご協力の賜物であると感じております。ここに改めまして深く感謝を申し上げる次第であります。

震災の年に山田町に生を受けた子供92人は、現在、小学3・4年生になっています。その後に生まれた子供たちも相当数になり、この子供たちにも大震災のことをしっかりと伝え、町の将来を担う人材として育成していかなくてはならないと思います。

多くの町民を亡くし、焼け野原になったあの日の光景から、今日の町の姿をだれが想像しえたでしょうか。新しい街並みは三陸鉄道陸中山田駅を中心に商業施設や金融機関、災害公営住宅を集め、コンパクトな街づくりを進めてきました。

また、細浦・柳沢線の開通により三陸沿岸道路に直結し、県立宮古病院等へのアクセスも格段に向上したところです。

復興計画で掲げた、コンパクトで利便性の高い中心市街地の形成、命をつなぐ道路整備、既存集落に配慮した高台住宅団地の形成などの事業を、この10年間で形として実現することができたと考えています。

一方、地球温暖化の影響か、おととしの台風19号の例を見ても災害の激甚化、多発化が懸念されております。また、鮭などの寒冷地の漁が不振であるなど新たな課題も生じてきています。

更には、新型コロナウイルス感染症が世界に暗い影を落としております。これらのことからもわかる通り、千年に一度と言われる大震災も人知を超えて起こりうるということであり、今後は千島海溝、日本海溝での地震による津波も懸念されています。

この度の復興記録誌の発刊が、これまでの取り組みの成果や課題などを記録として残し後世に伝えるとともに、今後の災害に対する備えと教訓としてお役立ていただければ幸甚です。

令和3年3月　山田町長　佐藤　信逸

山田町復興記録誌 2011-2020

山海虹路（SANKAIKOURO）

目次

あの日から立ち止まることなく ― 写真でみる今の山田町 ― ―― 002
発刊にあたって ―― 010
目次 ―― 011
特別寄稿「3・11の星空～夜空が導く未来」
　広島大学宇宙科学センター教授　川端　弘治 ―― 012
岩手県・山田町とは ―― 014

第一章
未曽有の災害に際会した日　015
～咆哮し襲い来る大津波
山田町の概要 ―― 016
三陸と山田町の海嘯史 ―― 017
東日本大震災発災　地震と津波の規模 ―― 020
あの日起きたこと ―― 022
絆　つながり　たすけあい ―― 026
津波の爪痕 ―― 030
仮の暮らしから復興へ向けて ―― 034
Photo essay　わたしの一枚「おらいの船と夕焼け」 ―― 036

第二章
復興計画の策定　037
～明日を創っていくために
復興へのスタートライン ―― 038
復興ビジョン ―― 041
復興計画行政素案 ―― 043
山田町復興計画の公表 ―― 045

第三章
山田町復興 十年のカレンダー　049
～山田町の十年の歩み
2011年 ―― 050
2012年 ―― 052
2013年 ―― 054
2014年 ―― 056
2015年 ―― 058
2016年 ―― 060
2017年 ―― 062
2018年 ―― 064
2019年 ―― 066
2020年 ―― 068
特別寄稿「新たなふるさとへ、ありがとう。」
　タレント　山田　邦子 ―― 070
Photo essay　わたしの一枚「復興の夜明け」 ―― 072

第四章
産業分野別復興状況　073
～再生と創造未来を築く
①基盤整備 ―― 074
②漁業 ―― 084
③農林業 ―― 092
④商工業 ―― 096
⑤観光業 ―― 100
⑥教育 ―― 108
⑦医療・介護・福祉 ―― 116
⑧住民生活 ―― 124
⑨交通 ―― 130
⑩公共施設 ―― 134
⑪上下水道 ―― 138
⑫防災 ―― 140
⑬津波伝承 ―― 142
⑭外からの視点 ―― 144
⑮台風19号の被害 ―― 150
⑯新たな観光拠点 ―― 158

第五章
感謝　161
～支援から生まれた絆
岩手県警察本部　警備部長　石川　康さん ―― 162
山田町水産商工課　高山賢次さん
　同建設課　市澤裕二さん ―― 164
静岡県経営管理部行政経営局行政経営課
　矢崎祐美さん ―― 166
京阪ホールディングス株式会社　長瀧元紀さん ―― 168
北海道池田町・北海道池田高等学校 ―― 170
岩手県立不来方高等学校 ―― 172
Diningわかんたんか　店主　瀬川弘勝さん ―― 174
認定NPO法人国境なき子どもたち（KnK）
　マネージングコミッティ　清水　匡さん ―― 176
公益財団法人国際開発救援財団（FIDR）
　ネパール事務所所長　前田桂子さん ―― 178
公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）
　国内事業部　山田心健さん ―― 180
国連児童基金（ユニセフ）
　ジンバブエ事務所教育部　近藤智春さん ―― 182
東日本大震災　山田町での支援活動内容 ―― 184
特別寄稿
「やまだまち“との出会い」
絵本作家　山田　マチ ―― 186
Photo essay　わたしの一枚「船越公園グラウンドゴルフ場」 ―― 188

第六章
クローズアップ山田人　189
～心に夢と希望と誇りを灯し
①教育の十年 ―― 190
②鉄路のチカラ ―― 198
③定点観測写真 ―― 204
④消防士を志して ―― 206
⑤鯨と海の科学館 ―― 208
⑥役場職員の十年　座談会 ―― 212
⑦県立山田高等学校の取り組み ―― 220
⑧やまだワンダフル体験ビューロー ―― 230
Photo essay　わたしの一枚「荒れ地に立つコスモス」 ―― 236
支援者の方々 ―― 237
ボランティア団体一覧 ―― 259
長期派遣職員一覧 ―― 262
災害協定締結一覧 ―― 263
参考図書一覧・奥付 ―― 264

山海虹路〈SANKAIKOURO〉

嵐が過ぎ去ったあと、山と海とをつなぐように、美しい虹の路〈みち〉が山田湾に架かるシーンをイメージした誌名です。
山と海があるまち・山田の「未来航路」が、輝きながら遥かに続いていきますようにと願うものです。

「3・11の星空 ～夜空が導く未来」

広島大学宇宙科学センター教授 川端弘治

山田町大浦の実家を離れて30余年。今でも時折、山田を舞台にした夢を見ますが、変に都会化されていたり、山田湾に橋が架かっていたり、夢の中で見る山田の景色はさまざまです。

大浦は船越半島にある小さな港町です。凪の夜に岸壁へ出ると、そこには海の十和田湖とも呼ばれる山田湾。わずかな波の音だけの静寂の中に、いずこかの漁作業や夜釣りの音がかすかに聞こえ、対岸の灯がきれいに映し出された水面の上には、たくさんの星が輝く夜空が広がっていました。私は今、広島大学（広島県東広島市）で教鞭をとりながら天文学の研究を行っていますが、天文学に関わったきっかけは、小さい頃に地元で見上げていた、時折海よりも深く感じられたあの星空にあったと思います。

２０１１年３月11日の午後、職場のひとつ、東広島天文台にて、東京方面での大地震の報に接し、急いでテレビのある部屋に向かいました。東京近郊の発電所の火事の映像に重なった「大津波警報」のテロップと、地図上で真っ赤に点滅する三陸の海岸線を見て、胸騒ぎを感じながら、小さい頃に受けた津波教育を反すうしていました。大浦では毎年、明け方に地域のサイレンが鳴り響いて高台に避難する訓練があり、１９３３年の三陸大津波を経験した年配者の話を聞いたりすることがありました。大きく揺れた後、まず海の水が引いて海底が見え、手づかみで魚や貝が採れたこと、そのせいで逃げ遅れた人、津波はいわゆる波のようなものではなく海全体が怒ったようにせり上がるもの、強い地震があったらこの小学校（現・大浦漁村センター）より高いところへ逃げろ、船は沖合に出すほうが良い等々、地域独自の津波教育があり、三陸大津波はだいたい50年周期で起こるからもうすぐ来る、とも聞いており、60年経っても、話に聞いたような津波が無いことが何とも不気味でしたので、初めて接した大津波警報には空恐ろしい戦慄を覚えました。東広島天文台では普段通りに天体観測が行われましたし、物資の流通も十分で、生活は日常そのものでした。私の親兄弟の安否が不明だった数日間は、ありきたりの日常と、断片的に知る山田町の惨状とのはざまで、気持ちを整理しながら過ごした記憶があります。

当時、山田では停電が復旧するまで、夜空はとても暗く、星がたくさん見えたそうです。小さい頃に私が見た空よりも、もっと深く、悠久に感じられたでしょう。愕然とする現実に直面しながらも、夜空にきらめく星々を見て、復興へ歩み出す力を得た人もいたかもしれません。

私は一応、科学者のはしくれで、非科学的な事はあまり好きではないのですが、壮大で普遍的な存在に接することで、安寧を感じたり、身近な問題を客観視するきっかけを得る感覚には共感できます。当時の夜空の星々がそういった存在になったのであれば良いと思います。

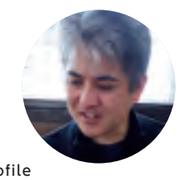
あれから間もなく10年が経ちます。山田の復興は道半ばという印象ですが、いずれ克服できると信じています。気候的にも地理的にも、あれだけの厳しい環境にありながら、何百年以上も前から漁業を中心としたコミュニティーが点在し、50-80年ごとの津波や、幾度の飢饉も乗り越えて発展してきたことは、歴史が証明してくれています。過疎化に関しても、この度のコロナ禍によって一極集中型・都市化指向の危険性が露呈し、地域分散型の安定感が見直されつつあると思います。宇宙でも、物質が一極集中した最たる現場と言って良い超巨大ブラックホールは、その膨大な重力エネルギーが災いし、不可逆的で破滅的な現象しか起こしませんが、星々や星間ガスが適度にばらけて緩やかに相互作用する環境なら、持続的な進化に有利に働きます。この前、岩手に帰省したとき、最近整備された復興道路の利便性に驚きました。山田町と周辺地域を結ぶ新たな動脈として大いに役立つことでしょう。山田の各地域に古くからあるコミュニティーはそのままに、周辺の市町村と連係したネットワーク型の地域社会が醸成されていくことが期待されます。災害に耐えつつ、豊かな海産・森林資源に支えられて育まれてきた山田の潜在力を信じて、さらなる復興を見守っていきたいと思います。夢の中で見る山田の景色だけでなく、10年後、20年後の未来の山田がどんなものか、楽しみにしながら。

A 広島大学宇宙科学センター附属東広島天文台とその夜空。（撮影：伊藤亮介氏）

B 1974年3月、実家近くの大浦港岸壁にて、山田湾と十二神山を背景に実姉と実兄、従姉とともに。川端氏の実父が撮影。

C 2011年3月19日、震災直後の大浦港岸壁。（撮影：川端弘治氏）

D 2017年7月、東広島天文台での観望会にて、望遠鏡による観望の案内をする川端氏。（撮影：内海洋輔氏）



Profile

山田町出身。東北大学大学院理学研究科修了、国立天文台研究員、広島大学大学院理学研究科助手等を経て、2017年現職に就任。専門は観測天文学で、最新技術を採り入れた観測機器を開発しながら、超新星などの恒星における爆発現象や、ブラックホール・中性子星などの強い重力が引き起こす激しい天体現象を研究している。今も年に一度は山田町へ帰省している。

第一章

咆哮し襲い来る大津波

未曽有の災害に際会した日

2011年3月11日、春の到来が待たれる季節だった。この日、午後2時46分。日本で近代的な地震観測が始まって以来最大規模の超大型地震の発生。そして大津波の襲来。大切なものが一瞬にして奪われていく未曾有の災害を、誰が想定しえただろうか。誰もがその現実を受け止められずにいた。あれから10年。確かに町は再建に向けて復興してきた。しかし、あの日何が起こったのか。あの日どれだけの挫折と絶望を感じながら、それでも前に進み続けようとしたのか。残された者は語り継いでいかなければならない。伝え続けていくことで、「津波の犠牲のない町、山田」に近づいていけるのである。

岩手県・山田町とは

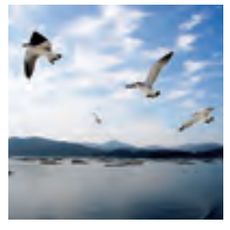
震災前の人口
19,270人（平成23年3月1日）

現在の人口
15,073人（令和3年1月1日）

面積 262.81平方キロメートル

町の花・ハマナス

海岸の砂地に生える落葉低木で、6～7月に開花し、香りがよい。最近は少なくなったが、漉磯海岸などの一部に生息している。



町の鳥・ウミネコ

山田町で普通に見られるカモメ類で、その鳴き声がネコに似ている。純白な姿は典型的な浜の鳥であるが、尾の先端に5cmほどの黒い帯があり、他のカモメと見分けられる。

町の木・スギ

日本特有の常緑高木で、その名は直木（すぎ）またはすくすく伸びるの意から出たといわれている。建築材料として重要で、山田にも多くの造林がある。

町章

町民の平和、協力、発展をそれぞれ湾、波、船としてあらわしたもの。

山田湾と山田中心市街地を望む（震災前）

山田町の概要

山田町は陸中海岸のほぼ中央に位置し、北部は宮古市津軽石地区、南部は大槌町、西部は宮古市川井地区と接し東部は太平洋に面している。

町内で発掘された遺跡や遺物から、約6500年前の縄文時代早期には大規模なムラがつくられ、古代から人々の生活が営まれていたことが分かる。

明治22年（1889）、市町村制が実施され山田村・飯岡村の2村、豊間根村・石峠村・荒川村の3村がそれぞれ合併し、山田町・豊間根村・大沢村・織笠村・船越村の1町4村となる。その後、昭和30年（1955）、1町4村が合併し、現在の新しい山田町が誕生した。

山田湾中央に「オランダ島」と呼ばれる大島がある。東北唯一の無人島海水浴場で、平成15年（2003）、環境保全と公共利用を目的に山田町の所有となっている。

湾の北部にはかつて捕鯨基地があり、捕鯨の町としても知られていた。

しかし、IWC（国際捕鯨委員会）の商業捕鯨規制により昭和63年（1988）、町の捕鯨は閉幕となった。一時代を築いた証しとして、世界最大級のマッコウクジラの骨格標本が「鯨と海の科学館」に展示されている。

市場での評価も高い殻付きカキ

山田湾と船越湾に挟まれた船越半島は、海岸性原生自然の景観に優れ、その価値は学術的にも高く、本州に残された最後の秘境とも称され、昭和30年（1955）には国立公園に指定されている。震災後の平成25年（2013）には青森県、宮城県それぞれの一部とともに三陸復興国立公園となっている。

オランダ船プレスアンス号の入港後に描かれた「オランダ船入津の図」（「南部領内総絵図」「正保国絵図控」より・盛岡中央公民館蔵）

シイタケ栽培などの農林業も盛ん

豊かな自然に恵まれた山田町ではあるが、歴史の中では幾度も大津波に遭遇し、そのたびに町は大きな痛手を負いながらも再建を果たしてきた。

過去の災害から学び、明治29年（1896）の津波被害が大きかった船越地区や、昭和8年（1933）の震災後には田の浜地区が集団で高台移転をするなど、それぞれ対策を実施してきた。さらに津波を防ぐため防潮堤を設置するなど、町では防災に向けたさまざまな対策を講じてきたが、平成23年（2011）に発生した東日本大震災では、三陸海岸一帯に防潮堤を越える規模の大津波が押し寄せ、大きな被害をもたらしたのである。

三陸と山田町の海嘯史

遺跡発掘調査で発見された縄文遺跡はほとんどが高台に位置している。このことから、その頃の人びとは高潮や津波を警戒し、海に近い低地ではなく高台に生活の拠点を置いたのではないか、と縄文時代を研究している考古学者は語っている。

三陸地域は過去、幾度も津波の被害を受けてきた。古くは「貞観地震津波」「慶長三陸地震津波」「明治三陸地震津波」。そして昭和以降に発生した「昭和三陸地震津波」「チリ地震津波」、記憶に新しい「東北地方太平洋沖地震」などがある。この東北地方太平洋沖地震は政府によって「東日本大震災」と名づけられ、日本で近代的な地震観測が始まって以来、最大規模の超巨大地震であった。このようにこの地域は大地震・大津波の発生に見舞われてきたのである。

貞観地震津波

貞観11年5月26日（869年7月13日）、三陸はるか沖を震源にマグニチュード推定8・3の地震が発生、それは夜のことであった。この時の様子を伝えている「日本三代実録」によると、「陸奥国に巨大地震、津波が発生。人的被害は溺死者1000人、圧死者不明。物的被害は家屋の倒壊、多賀城の城郭・倉庫・門・櫓・築地塀の倒壊、広大な津波浸水被害であった」とある。残されている唯一の資料と言われ、明らかにされていない点も多いが、「海を去ること数百里、原野も道路も大海原と化した」とあることから、この地震による大津波で現在の山田町が被害を受けたことは想像できるが、岩手県下でどの程度の被害があったかは不明である。

慶長三陸地震津波

徳川幕府が開かれた江戸時代、慶長16年10月28日（1611年12月2日）、慶長三陸地震が発生。地震から約30分後の午後2時頃、津波が押し寄せ多くの家屋が流失し、犠牲者が出た。この日は朝からたびたび地震があり、大音響とともに大波が押し寄せ川を遡上。引き波で多くの家屋が波にのまれていったとある。現在の山田町（旧山田村、旧船越村）の地震の規模は震度2～3。無感の地域もあったとされるところから、この津波はいわゆる「津波地震」によるものとみられている。津波地震とは、人に感じられる揺れが小さくても、発生する津波の規模が大きくなる地震を指す。

山田、田老で25メートルを記録したこの津波による犠牲者は3000人。うち山田町は20人・船越村50人との記録もあるが、詳細は不明である。

三陸沖地震と言われていたこの地震は、近年に行われた調査から震源域が三陸沖にとどまらず、北海道の十勝沖から根室沖、さらには北方領土の択捉島まで連なったプレート境界地震であったと考えられている。

明治三陸地震津波

慶長三陸地震から300年近く経た明治29年（1896）6月15日、午後

7時半ころ、三陸の沖合で地震が発生した。記録に残る地震の規模は震度4。体に感じる揺れは弱いものであったと言われ、この揺れによる被害はほとんどなかったとされている。しかし、地震から30分くらいたったころ、地域一帯が大津波に襲われたのである。後に津波地震の典型例とされた。三陸一帯の被害は、波高24・4メートル、犠牲者数1万8158人、家屋の流失4801戸、家屋倒壊726戸。うち山田町の死者は2950人、負傷者は約370人。家屋の流失や全壊など多くの被害を受けている。

昭和初期の山田湾の様子

昭和三陸地震津波

三陸沿岸は貞観11年（869）から昭和8年（1933）の間に21回もの地震による津波に襲われている。

高台の山々に雪が残る肌寒い昭和8年3月3日、午前2時31分、三陸沿岸は強い揺れに見舞われた。昭和三陸地震である。観測された揺れは震度5。人々の体感として3分ほど続いて2回の揺れがあったが、3回目以降揺れは小さくなっていった、とある。さらに三陸の人々には、「冬の季節と晴天に津波はこない」という言い伝えがあり、こうしたことから地震のあとも深い眠りにあった人々も多かったという。

震源地は三陸沖日本海溝付近で、三陸から沖合に200キロほど離れていたが、そのエネルギーは、マグニチュード8・1と大きく、規模としては巨大地震であった。

地震発生後、「大砲を打ったような」異常な音響が各地で確認されている。海岸で聞かれたというこの音は津波が海岸、断崖に打ち当たった音ではないかと当時の人々は思ったという。

明治三陸地震の教訓から、「津波が来る、逃げろ」という人の一方で、揺れに飛び起きたものの、海岸が何ら異変もないことから再び眠りに就いた人もあったとされる。しかし、牙をむくかのように地震の発生から30～50分後に高さ3～8メートル、高いところで28・7メートルの津波が来襲し、瞬く間に沿岸一帯をのみ込んだ。被害は死者1823人、行方不明1140人、家屋の流失倒壊6837戸。うち山田町の犠牲者は7人、流失と全壊は320戸。

〈津波記念碑〉
山田町船越大浦「大海嘯記念」昭和九年五月建立

〈表〉
- 大地震の後には津波が来る
- 地震があったら高い所へ集まれ
- 津波に追はれたら、何処でも此所位の高い所へ
- 遠くへ逃げては津波に追付かる
  近くの高い所を用意して置け
- 県指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな

〈裏〉
昭和八年三月三日午前二時三十分上下ニ動揺スル強震アリ
續イテ三時頃ヨリ大音響ト共ニ大津浪ノ襲來アリ
浪ノ高十米三時十分頃最モ被害アリ
被害戸数船越區流失二十三戸半潰一戸死者三名
田ノ濱區流失百八十三戸半潰二戸床上浸水十一戸死者二名
大浦區流失五戸半潰十四戸床上浸水十六戸ナリ

昭和8年3月3日津波による死者、家屋流失倒壊図

明治三陸地震津波と比較して深夜だったにもかかわらず山田湾内で犠牲者が少なかったのは、過去の体験と教訓が生かされてのことではあったが、加えて、「町を救った交換嬢の機転」があったと、当時の岩手日報がこの日の電話交換手の機転を伝えている。この日、山田郵便局の当直だった3人の電話交換手が、大槌郵便局から津波が来そうだとの報を入手。電話からかすかに聞こえる〝津波だ！〟〝津波だ！〟の声に3人は、町の電話加入者100余名の家全戸に津波の来襲を連絡。これを聞いて町民はすぐに高台に避難し難を逃れることができたという。

街は南町（現中央町）半分より南方境田まで全壊流失した。津波に襲われた後しばらくは人通りも少なく、家々の電気も所々に付くだけの寂しい街並みだったという。

この震災以降、津波に関する調査研究が多く行われるようになった。その結果に基づき復興計画が立てられ、三陸沿岸における津波防災の骨組みがつくられた。3カ月後の6月には、文部省（現文部科学省）震災予防評議会「津波予防に関する注意書」により、護岸、防潮堤など10項目の予防対策が提案された。中でも高台移転は強く推奨されていた。被災地では集団による高台移転なども行われたが、さまざまな問題から海沿いの低地に戻るケースも少なくなかった。

昭和三陸地震津波による山田町の惨状

チリ地震津波

津波といえば、大きな地震に伴って起こるもの、というのが一般的に考えられていることではないだろうか。過去に三陸沿岸を襲った数度の津波も、全て三陸沖で発生した地震によって引き起こされている。ところが昭和35年（1960）の津波は違った。

5月23日、午前4時11分（日本時間）、南米チリでマグニチュード9・5という観測史上最大の地震が発生した。日本から見て地球の裏側にあるチリでの大地震。誰が地球を半周し大津波となって太平洋沿岸に到達すると想像しえたであろうか。津波は、地震発生からおよそ23時間かけて日本の沿岸に到達。その勢いは衰えることなく三陸海岸を襲った。山田町では午前3時5分、海上にいた人が異変に気付いている。第1波午前2時半ころ、第2波が3時ころ、そして第3波が押し寄せた4時24分過ぎには、水かさが増し、見る間に護岸を超えている。

被害は、北海道から沖縄に至る太平洋沿岸ほぼ全域に及び、全国で死者139人、家屋の流失全壊2830戸、半壊2183戸、浸水3万7195戸と甚大であった。特に三陸海岸では、波高8メートルを超えたところもあり、死者が岩手県大船渡市で53人、宮城県37人という数に見るように、三陸に集中している。幸い山田町では、死者はなかったが家屋の流失、全壊、床上床下浸水などの被害があった。

この津波では、警報の遅さが指摘された。気象庁からの警報は、三陸沿岸が数回もの津波に見舞われた後の午前5時20分であった。こうしたことから日本も太平洋津波システムに組み入れられ、遠方で発生した津波が伝播（でんぱ）してくる「遠地津波」に備える、現在につながる体制が構築されたのである。

三陸沿岸はリアス海岸で、岬と入り江が複雑な海岸線となっている地形が、被害を大きくする。中でもV字型の入り江に入り込んだ津波は、両岸が狭くなるため波がより高くなるのである。幾度も津波被害に遭遇してきたこの地域では、町を守る防潮堤や防波堤、そして先人たちが命を守る願いを込めた津波記念碑などが多く建立されている。

チリ地震津波での被害

東日本大震災発災
地震と津波の規模

これまで三陸沿岸は、人も町もどれだけ地震による津波被害を受けてきただろうか。

そのたびに人々は、知恵を結集し復興し、自然はまたそれを一瞬にして破壊。けれども人々はまた立ち上がって震災に負けない新しい町をつくり、その繰り返しで生活が営まれてきた。

高度な技術発展による防潮堤なども震災に負けない町づくりのひとつであるが、物質的文化の発展の一方で、地震や津波を正確に予測することは、現代の科学をもっても難しい。

それは、不意をつかれて突然やってきた。

佐藤信逸山田町長は言う。

「突然に尋常じゃない揺れに見舞われました。一瞬にして慣れ親しんだ町をこの世の地獄に変えました。当時、数日前から地震が頻発していて、中でも2日前の3月9日、午前11時45分に起こった震度4の地震が大きかったと記憶しています。この日も間もなく津波注意報が出されましたが、それほど大きなものではなく事なきを得ました。ちまたでは最近地震が多いね、との声が聞かれていました」

強い揺れだったにもかかわらずそれほど大きな津波ではなかった、ということに安堵した町民が多かったのである。まさか2日後に襲われる震災が、この穏やかで美しい町に深い悲しみと途方もない喪失感をもたらす震災になると、誰が予想しえたであろうか。

平成23年（2011）3月11日、午後2時46分。三陸沖・牡鹿半島の東南東約130キロメートル付近を震源に、東北地方太平洋沖地震が発生。その範囲は、岩手県沖から茨城県沖に至る長さ約450~500キロメートル、幅約200キロメートルに及びマグニチュード9・0という、日本の観測史上最大規模の超巨大な地震だった。アメリカ地質調査所（USGS）によると、この地震の規模は、1900年以降、世界でも4番目の大きさであったとある。

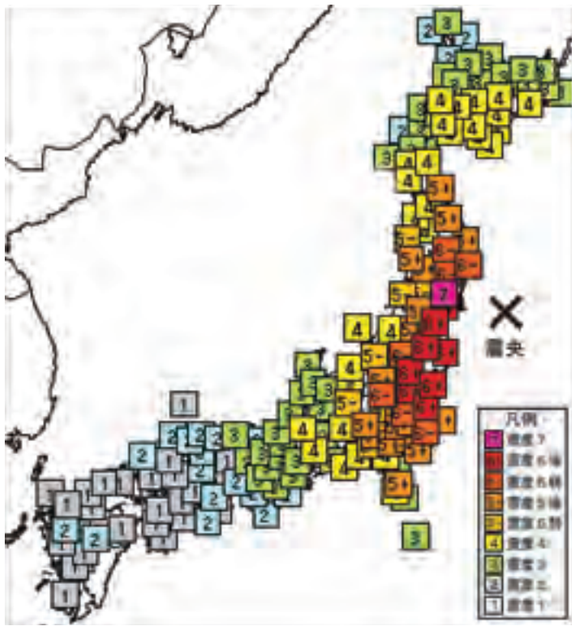
本震による震度は、宮城県北部の栗原市で最大震度7が観測されたほか、福島県や茨城県、栃木県で震度6強、また首都圏でも震度5強が観測され、北海道から九州にかけて広い範囲で揺れが観測されている。

岩手県内での震度は、

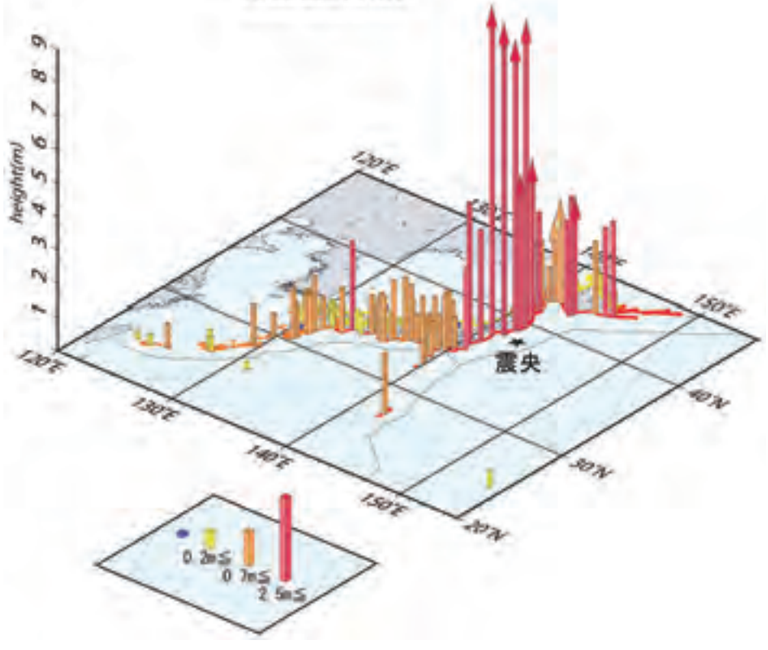
震度6弱　大船渡市、釜石市、

震度5強　滝沢市、矢巾町、花巻市、一関市、奥州市、宮古市、山田町、盛岡市、八幡平市、北上市、遠野市、金ケ崎町、住田町、平泉町、普代村、久慈市、野田村、二戸市、一戸町、雫石町、葛巻町、岩手町、軽米町、紫波町

――であった。その後、4月7日には宮城県沖を震源に、震度6強の最も大きい余震が発生している。



東日本大震災の震度分布図　気象庁技術報告第133号 平成23年（2011年）「東北地方太平洋沖地震調査報告」より



津波観測状況　気象庁技術報告第133号 平成23年（2011年）「東北地方太平洋沖地震調査報告」より

首都圏では、交通機関が不通となって乱れ、多くの帰宅困難者であふれた。帰宅がかなわなかった人々は、勤務先やホテルなどで夜を明かした。東京都の発表によると、この日都は緊急の収容施設として都の関係施設や都立学校などを開放。およそ9万4000人が利用した。また、関東では東京をはじめ茨城や千葉、埼玉、神奈川など広い範囲で液状化現象が起こり、マンホールからは砂が噴出。一時、ライフラインがストップする事態も発生した。

北海道南部から神奈川県に至る広い範囲で、東日本の太平洋側に未曽有の大津波が襲来。国土地理院によると浸水した範囲は青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の6県62市町村。三陸沿岸では、福島県相馬市で9・3メートル以上、岩手県宮古市で8・5メートル以上、岩手県大船渡市で8メートル以上、宮城県石巻市鮎川で7・6メートル以上などが観測された。岩手・宮城・福島の3県には午後2時49分、津波警報（大津波）が発表された。

山田町では、激しい地震の揺れが長く続き、屋内ではさまざまなものが散乱。しかし、本当の意味で三陸海岸の美しいこの町と人々の穏やかな日常が壊されていく恐怖は、揺れの後に襲ってきた巨大な津波によって引き起こされた。

最大震度5強（大沢地震計）を観測した山田町での津波到達時刻は地区によって異なるが、3時22分ごろ、最大級の第1波が到達した。地区の中では船越湾側の小谷鳥が最も早く、最も遅かったのは山田湾内の山田地区だった。波高は大沢地区約6メートル、柳沢北浜地区約7メートル、山田地区約7メートル、織笠地区約8メートル、田の浜地区約19メートル、大浦地区約9メートル、小谷鳥地区約17メートルとそれぞれ記録されている。

内陸につながる国道45号はがれきで寸断され、進む道をはばまれた山田町では大火災が発生した。流出した船舶や車のガソリン、プロパンガスなどに次々と引火して燃える津波火災である。火の手が上がっているのに道路の寸断や水道管の破損等で十分な消火活動が行えず、JR山田線陸中山田駅周辺の町中心部が広い範囲で焼失した。

田の浜地区の火災では、住民が津波火災から避難したところ、周辺で発生していた林野火災のため、自衛隊のヘリコプターによって山田高校に再避難した。

警察庁のまとめによると、令和2年（2020）3月1日時点で死者は1万5899人、行方不明者は2529人。うち岩手県の死者は4675人、行方不明者は1112人。いまだ57人の身元が分かっていない。

平成30年（2018）11月13日に発表された山田町の死者は824人、行方不明者1人。全半壊家屋は3167戸（平成24年6月1日現在）に達し、あの日、人々の尊い命と築き上げてきた町が瞬く間に奪われたのである。

あの日起きたこと

発災から9年を迎えた令和2年（2020）、世界的に流行し拡大を見せていた新型コロナウイルスの影響で参列の制限はあったが、「東日本大震災・大津波　山田町犠牲者九周年追悼式」が午後2時半から行われた。

あの時に生まれた子どもは9歳になり、小学生だった子どもが成人式を迎えている。その年月とともに過酷な状況や不安の中から、励まし、支え合って少しずつ前を向いて復旧・復興に進んできた。

前に進んでいく。振り返らない。それは大切なことである。

しかし、犠牲になった人たちやふるさと山田から離れていかなければならなかった人びとの思いを重ねるときに、この震災を風化させてはならない、忘れてはならない。

あの日、山田湾の美しい景色、海の輝きは、いつもと変わらない姿を見せていた。職場にいた人、訪問先にいた人、家族の送迎に車を走らせていた人、授業中だった人…人びとの生活もいつもと変わらない日常の中にいた。それは、そんないつもの日常をあまりに突然に襲ってきたのである。平成23年（2011）3月11日午後2時46分のことだった。

立っているのも困難なほどの揺れは、ゴーッという地鳴りとともに襲ってきた。本震の後も大地を揺らす大きな余震が続いた。停電になり、携帯電話もつながらない。一人でいるお年寄りや体が不自由で動けない家族と連絡が取れなくなった不安から多くの人たちは、職場や移動先などから急ぎ家に戻っていった。

震度5強を観測した山田町では、直ちに災害対策本部が設置された。2時59分には大津波警報が発表された。家に向かう多くの人たちは、町の防災放送が伝える「予想される波の高さは3メートル」というアナウンスを聞いている。しかし、それまでも幾度も津波を経験している町の人々は、「3メートルなら防潮堤を越えることはないだろう」と思ったのである。ところが現実は違った。時間を追って見てみると次の通りであった。

午後　2時46分　三陸沖でマグニチュード9の地震が発生
2時59分　大津波警報発表　全町に避難指示発令
3時17分　船越地区で津波が水門を破る
3時22分　山田湾湾口から4～5メートルの波を確認
3時24分　山田地区で津波が防潮堤を越える

海を眺めていた人は、「異常なほど静かな海を感じて不思議に思った」と証言している。山田伝津館（でんしんかん）制作の「実写岩手県版　これが巨大津波だ」のDVD映像でも防潮堤を越えるまでの波は、これが津波だろうかと目を疑うほど、静かに思える。しかしその一方で、オランダ島と小島に目をやった人には、200メートルほども離れているはずの2つの島が陸続きに見えていた。津波前の引き波で海底が露出していたのだろう。「これはとてつもなく巨大な津波がくる」そう思った瞬間であったという。

やがて、高台や指定避難所に避難が始まった。静かに見えた波が牙をむいて、黒いカーテンのような高い波が港に押し寄せてくる。あっという間に水かさが増して湾の中に注ぎ込み、港は水没。押し寄せる波と引き波で停泊していた船は渦を巻き、家と家がバリバリと音を立ててぶつかり合って、ものすごいスピードで海へ持っていかれるのである。高台に避難した人たちはその光景を〝早く逃げろー〟〝もっと大きいのが来るぞー〟〝明治の津波以上だ〟〝町がなくなる〟口々に叫び声を上げ、なすすべもなく見ていることしかできなかった。

あちこちから流された車のクラクションが鳴り響き、指定避難所への避難途中に波ががれきとともに押し寄せ、全身に水をかぶりながら必死にもがきながら逃げる。襲いかかるように町に海水が流れこみ、建物の2階も瞬く間に浸水。波にグルグルもまれながら漂流をはじめる建物たち。水流に逆らうことなどできない地獄絵図だった。

堤防を乗り越え町へ流れこむ津波

住宅が密集していた地域もがれきの山に

山田湾の引き潮の様子。小島周辺の岩が露出している

山田町は、津波による被害だけではなかった。津波火災の悲劇にも見舞われたのである。3時25分、田の浜と織笠で、3時30分には八幡町と長崎、大沢新開地で火災が発生した。津波で押し流されたがれきの山が大規模な火災を引き起こした。津波火災によりどんどん火の手の勢いが増していくが、がれきなどで道がふさがれ、さらには水源地も壊されたため配水池にくみ上げられていた水もなくなった。消火活動がままならず3日間燃え続けたのである。

停電し、暗闇の中にオレンジ色に光るその炎が爆発音とともに響き渡って火柱が上がる。大きくなる火と音が恐怖をあおり、逃げ込んだ人は「まるで夢を見ているようだった」と眺めていたという。

がれきの中から出火し炎が上がりはじめる

役場に炎が迫った八幡町では、保健センターや中央公民館などに避難していた1000人以上が豊間根地区の避難所へ、また山田中学校の避難者は、山伝いに迫ってくる火災の延焼の恐れから、山田高校体育館へ夜半に再避難をしている。

住民の安否が不明だった田の浜地区では、100余人が地区の山上にある日蓮宗瑞然寺（ずいねんじ）の修練道場に逃げ込んでいたが、津波直後の火災が山林に延焼していた。炎にはばまれ孤立していた地区に、アマチュア無線の資格を持つ山田町消防団第2分団の団員によって「火災が迫っている。救援を頼む」のメッセージが発信され、町の対策本部が自衛隊にヘリコプターによる救助を要請。山田高校などの避難所に搬送されたのである。12日午前3時35分のことだった。

いったい何が起こっているのか。状況をのみ込めない中に少しずつ、明らかになっていく津波被害の現状。町では、混乱のうちにも迅速な対策を打ち出していった。

火災は自動車のガソリンなどに引火し、深夜になっても延焼し続ける

3月11日

午後3時39分　豊間根支部へ炊き出しを依頼
4時55分　航空自衛隊に消火要請
5時28分　消防団全部車両消火出動要請
9時25分　山田地区への最初の炊き出しが荒川地区から到着
9時39分　自衛隊から物資提供
11時18分　道路復旧のため町内業者の重機が間木戸林道で待機

3月12日

午前2時23分　役場周辺へ火災が延焼、中央公民館などの避難者を豊間根地区へ移動開始
6時11分　境田地区で山林火災
8時6分　自衛隊がヘリコプターによる空中からの消火開始
11時45分　山田道路・船越～柳沢間復旧
午後2時41分　旧タブの木荘から山田高校へのヘリコプターによる避難者搬送開始
3時17分　大沢・柳沢間の国道復旧

停電、ライフラインの遮断、電波基地局の破壊などによって情報が得られず、大切な家族や友人、知人たちの安否すら確認できないままに夜を明かさなければならなかった町民たち。津波や火災により800人以上の尊い命が失われ、家屋の被害も全壊2789戸、半壊187戸、一部損壊120戸。

町の基幹産業である漁業関係では、登録漁船2138隻のうち1590隻ほどの船が流失し、養殖施設や作業小屋のほとんどが壊滅的な被害を受けた大震災である。その現実を受け止め、向き合っていかなければならない日々の苦悩がここから始まっていくのである。

漁港から数十メートルも流されて打ち上げられた漁船

石油ストーブで暖を取りながら苦しい避難所生活が始まる

絆　つながり　たすけあい

第一波襲来時、家に残った家族の安否。あるいは仕事や学校でその瞬間、離れ離れにいた家族の行方。連絡が取れずに不安の中に過ごす人々がどれだけいただろうか。

地震直後から、地元の警察や消防、自衛隊などの各機関では生存者の救出や行方が分からなくなっている人たちの捜索を行ってきた。

宮古警察署山田交番の所員たちは、役場で情報を収集。防潮堤からの潮位の確認やパトカーによる避難の呼びかけなど、まだ余震が続く中を避難の誘導のため各地区へと向かった。「大津波警報発表」のアナウンスが流れる町内をパトカーで国道45号に向かった所員は、「大津波警報が発表されました。急いで高台に避難してください」と繰り返し伝える。しかし、2日前に起きた強い地震による津波の被害がなかったことから、今回も大丈夫だろうと思う人もいたという。そうした影響からか防潮堤上で海の様子を眺める人、あるいは写真撮影をして避難しようとしない人などの姿もあったため、所員たちは、何とか避難を促し続けた。「津波が来た」と国道を走ってきた住民の声に、危機を感じ一般車両の町内進入を禁止し、直ちに交通規制を行った。無線で現状報告をしようにも、沿岸各署からの津波の到達を知らせる無線が止むことなく入るため、こちらからの無線を送ることもままならなかった。

また防潮堤での潮位変動の観測と報告にあたった所員も、避難誘導には苦労をした。防潮堤から山田湾を見渡すと、岸壁際の海底が見えるくらい潮位が引いている。「津波が来ます、逃げてください」と叫び続け、避難誘導に応じない人たちの手を強引に引きながら避難をさせた。倒壊した家屋からの救出にも当たった。すぐそばまで火の手が迫ってくる現場での救出もあった。救い出すために必要な道具などない中での救出劇が町内の至る所で展開されていたのである。そこには、一人ひとりの所員の心に「絶対にこの人を助ける」「一人でも多く救出する」という警察官としての使命感があった。

町の消防団は、延焼する火災の消火活動と担当地区の捜索に当たった。町中ががれきで埋め尽くされている。そのがれきを一つ一つ手作業で取り除いていかなければならなかった。町は停電し明かりがない。夜はあたりを警戒しながらくすぶり続ける火の消火を行い、翌朝、日が昇ると行方不明の人たちの捜索活動に従事。団員の中には当然のことながら被災者もいる。それでも活動を続けたのは、「大切な町を自分たちの手で守りたい」との思いからだった。

山田消防署の署員たちは、火災が鎮火すると救急活動が中心となった。3月11日から4月9日までのおよそ1カ月に行った救急搬送は、通常の3カ月分に相当する162件。道路がふさがれ、宮古市まで片道3時間近くかかることも少なくなく、休息も満足にとれない過酷な状況が続いた。こうした中を他県からの応援を受けて、救援活動を続けたのである。

大掛かりな救出・捜索活動には、陸上自衛隊第9特科連隊、航空自衛隊北部航空方面隊などが駐留して当たった。活動の妨げとなるがれき等の撤去作業に大型の重機が多数投入され、倒壊した家屋に閉じ込められている人たちの救出や行方不明になっている人たちの捜索に当たったほか、食料や水、毛布などを避難所へ運んだ。また医療班の派遣や給水、風呂の設営を行うなど支援は多岐にわたった。

横倒しになった車に人はいないか。海中に沈んでいるがれきの中に不明者がいないか。その捜索には自衛隊員だけではなく、民間団体の協力もあった。

自衛隊による支援は、給食支援11万食、入浴支援の利用者4万4000人、救援物資は大型トラック650台というものであった。

7月まで続いた支援。7月12日に行われた陸上自衛隊に対する感謝の会では、陸上自衛隊第9特科連隊長の小林栄樹（こばやしえいじゅ）一等陸佐が「派遣活動を通じ町に親しみが湧き、古里に対する愛着のような気持ちを抱くようになりました。美しき町が復興発展するように祈っています。がんばれ山田町」と力づけ、また7月19日に行われた航空自衛隊に対する感謝の会においても、航空自衛隊北部航空方面隊須田浩（すだひろし）一等空佐が「活動期間中、勇気と誇りを頂いた。活動は一区切りとなりますが、山田に分屯基地がある航空自衛隊は今後も変わらぬ身近な存在でありたいと思っています」と述べられた。

安否が分からない家族や友人、知人たちの捜索が実施されていく一方で、津波から難を逃れた人たちもまた過酷な状況下に置かれていた。

地震発生直後の町内は、大規模停電や断水、通信網の遮断や交通網のまひなどで相当な困難が発生していた。このような状況にあって、後方支援基地として大きな役割を果たしたのが津波の被害を直接受けなかった内陸部の豊間根・荒川地区であった。荒川婦人防火クラブ、石峠ミセスクラブなどの組織がある。町の災害対策本部はすぐさま炊き出しの要請を行い、多くの町民が避難している避難所に炊き出しが開始された。

豊間根地区の避難所には、火災から逃れてきた山田地区の住民が多く避難してきた。ここでは豊間根、荒川地区にある9つすべての自治会を中心にそれぞれの家庭から米や梅干し、のりなどを持ち出し、ご飯を炊いた。白米が無くなると発電機で精米機を動かし、玄米を精白した。深夜まで炊き出しは続き、おにぎりは初日で1926個にも上り、毎日続けられた。長期化する炊き出し支援で困ったことは、田植えの時期が迫ってきたことであった。こ

過酷な状況の中捜索を続ける警察官（愛知県警察）

ヘリコプターを使った自衛隊の支援活動

航空自衛隊員による捜索活動

仲間と協力し合いながら横倒しとなった車を確認する消防団員

震災直後から炊き出しを続けてくれた陸上自衛隊の皆さん

の地域は町内でも農家が多い地区で、米をつくる準備を始めなければならなかった。そこで考えられたのが避難生活をしている人たちによる炊き出しの協力であった。中高生なども協力し、みんなでおにぎりづくりが始まると、次第に避難をしている人たちの表情が明るくなっていった。この炊き出しは、あらゆるライフラインが絶たれた人びとの命をつなぎ、希望につながる一歩となったのである。

人が生きていくうえでなくてはならない水。供給には県内市町村をはじめ、長野県や京都府、大阪府、兵庫県、秋田県の市町職員が給水車で給水を行った。全面復旧にはおよそ2カ月を要した。

国道や県道の封鎖により、医療機関までの移動に支障をきたしたことから、山道に待機させていた豊間根地区の建設業者が重機で道を切り開き、う回路を造ってけが人などの搬送時間の短縮に尽力した。しかし、町内の病院や診療所が被災したため、町内診療所の医師らは、山田南小学校（当時）避難所で救護所を立ち上げ、けが人や不調者の手当てに当たった。

その後、全国各地から医療チームが続々と町内に入り、ここのほかにも山田高校などを拠点として各避難所の救護活動を実施した。

大浦出身の小林すずさんが所属するわらび座が大浦小で公演

保健センターで行われた航空自衛隊の演奏会

柳沢地区国道45号沿いに立てられた感謝を伝える看板

みんなを笑顔にさせた山田邦子さんの訪問

大沢小で笑顔を見せるラサール石井さんと子どもたち

善意のボランティアも忘れてはならない。4月9日、山田町災害ボランティアセンターが開設。全国から多い日で300人以上集まる日もあった。土砂の撤去や写真の洗浄、家具の移動、食器の洗浄などを手伝ってくれた。中でも思い出が刻まれている写真の洗浄は人びとの心に、前を向いて生きていく光を与えた。

被災した町民の力になりたい、助けたいという多くの支援の心に支えられて、震災直後の絶望から少しずつ笑顔を取り戻していった山田の人びと。震災発生から5カ月の8月11日、山田漁港でLIGHT UP NIPPON（ライト アップ ニッポン）主催の花火大会が開催された。夜空を彩る花火は、亡くなった方々への鎮魂であると同時に、生き残った人びとの希望でもあった。過去幾度も津波の大災害を乗り越えて刻まれてきた山田町の歴史を振り返りながら、今回の大震災も町民が力を合わせ、絆を深めていった時には必ず乗り越えられる、そう信じて空を見上げていたのではないだろうか。被災した店舗の修理や、新たなプレハブでの営業再開に向けて立ち上がり歩み始めた山田の人びとの姿がそこにあった。

花火会場には、全国から寄せられた「がんばろう」「復興」と書かれた短冊がつるされた風鈴が、風に揺れていた。

復興の願いを込めた山田漁港での花火大会

津波の爪痕（つめあと）

津波常襲地帯といわれる三陸沿岸。山田町は、過去に襲われた明治三陸地震津波の被害に学び、長い年月と多大な費用を投じて災害に備えて大規模な防潮堤を造ってきた。しかし、東日本大震災・大津波は防潮堤をいとも簡単に越えた。それは越えただけでなく、巨大なコンクリートの防潮堤をなぎ倒して、住宅や施設をのみ込んでいった。

どれくらいの時間だったのだろうか。津波が引き、収まりを見せた時、そこにあった町のほとんどは無くなり、壊滅していた。

町民の足であるＪＲ山田線は線路や鉄道施設が流失。国道45号をはじめとする道路も各地で寸断。交通網が遮断された。

建物、施設についても大打撃を受けた。警察、消防施設が被災し緊急活動や消火活動に支障をきたしたほか、漁港、水産加工場、市場などの水産関連施設等も全壊。船越小学校や介護老人保健施設、医療施設ものみ込まれた。

家屋については、豊間根地区を除く沿岸地域の家屋のうち45・8％が全壊し、大規模半壊や一部損壊までを含めるとおよそ55・8％が被害を受けた。

人的被害も甚大であった。震災から3カ月ほどの平成23年（２０１１）６月28日時点で被災前の人口の約４％が死亡・行方不明となった。

しかし、これらはライフラインや交通網、建物といったいわば目に見える物の被災状況である。あの日、大地が大きく揺らされ、人々は心も被災しているのである。

〝高台を目指して走って逃げた〟〝自宅で波にのまれながら奇跡的に助かった〟〝生かされた命である。しかし、〝助かった〟人であっても生き地獄を見たのである。

大切な人や町、財産を失った喪失感、また地震と津波の恐怖感などが原因となって起こる心の不調、震災ストレスに襲われる人々が急増した。もっともなことだった。

小高い場所に避難しホッとしたところを背後から津波に襲われて流された。流れてきた家につかまって、何度も泥をのんだ。時々意識が薄れ「このまま死ぬんだ」と迫りくる死の恐怖に耐えた。あの日、波にのまれて自分は死ぬんだ、と思った恐怖を体験した人、また家族や近所に住む人と手をつなぎ波に翻弄されながらいつしかつないだ手が離れ、「一緒にいた人を助け

山田地区

郵便局の屋根に乗り上げた漁船

被災し火事で焼けたJR山田線陸中山田駅

JR山田線の線路上にひっくり返った燃料タンク

大沢地区

国道45号沿いの店舗

山田湾方面を望む

山田町ふるさとセンター付近

られなかった」いう罪悪感にさいなまれる人など心の傷は深い。

発災後、早急な取り組みが求められた事業のひとつとして、被災者の一時的な住居の確保、生活再建の足がかりとするための「応急仮設住宅」の建設があった。6月時点で避難所に避難していた人の数は2076人。避難所以外にも知人宅や親戚宅に身を寄せている人も数多くいた。

町は県と協力し、建設場所の選定や地権者との交渉に奔走、発災直後の3月末から建設に着手し、8月中頃に46団地、1940戸を完成させた。

応急仮設住宅の建設までの期間、被災者に対して多くの支援をいただいている。その中でも、内陸部の宿泊施設へ被災者を一時的に受け入れてくれる岩手県の事業が、雫石町の協力により実施された。山田町からの受け入れを表明していただいた、繋温泉清温荘、ホテル安比グランド、鶯宿温泉長栄館、ホテル森の風鶯宿、雫石プリンスホテル、松川温泉松川荘には、3月末から8月末まで、町内20カ所の避難所等から352人を受け入れていただき、一時的な避難場所としての提供以外に、被災者を心身ともに癒やしていただいた。

震災直後から、全国各地、また世界の国々から大きな支援と励ましをいただきながら町は全力でライフラインの復旧に努め、がれきの撤去等で道路を確保、住まいをなくした人たちの仮設住宅の準備、基幹産業である漁業関係の再開、雇用の確保など困難に立ち向かってきたが、こうしたハード面はもとより、震災で受けた心のダメージをも復興させていかなくてはならない。

気が遠くなるほどの取り組みである。しかし、町も人も復興していかなくてはならない。それが生かされた側の役割である。

この震災では、町民同士が声を掛け合って高台避難をし、危険を顧みずに手を握り合いながらかぶる津波の中を避難した、そんな場面が多くあった。町民の心底にある「励まし合い」「助け合い」という"絆"によって、この気の遠くなるほどの難局を乗り切って行けるものと信ずるのである。

織笠地区

津波で流されたJR山田線の織笠鉄橋

織笠大橋・山田湾を望む

被災した織笠川鮭ふ化場付近

船越・田の浜地区

前須賀から荒神方面を望む

船越小付近

船越湾漁協周辺

大浦地区

崩壊した大浦漁港

被災した小谷鳥地区

被災した大浦地区

仮の暮らしから復興へ向けて

東日本大震災直後、町では事業再開のめどや雇用の場の確保などはおろか、5600人（最大）以上の町民が避難所生活を強いられていたが、震災から2カ月後の5月23日、町は復興に向けた計画策定の基本方針を取りまとめ、7月1日、復興の基本的な考え方をまとめた「山田町復興ビジョン」を公表した。

1年後の平成24年（2012）3月2日、町は復興計画の高台移転事業について事業化に向けた着手式を実施、復興整備事業をスタートさせた。これは町と独立行政法人都市再生機構とで行う事業で、岩手県・宮城県・福島県の被災3県17市町村への復興支援であるが、事業に着手したのは山田町が初めて。着手式において沼崎町長（当時）は「復興に向けた槌音を響かせることができ、励みになる」と述べた。

3月15日には三陸沿岸道路全線開通に向け、三陸沿岸道路の用地幅杭設置式が行われた。山田道路は震災時に物資や救急搬送に利用され「命の道路」と呼ばれた。全線開通によって、より三陸沿岸の発展を支えていく道路になる。

震災前、日本一の生産高を誇っていた山田の特産品「殻付きカキ」。震災によってカキ養殖施設が軒並み流失し、船や道具などすべてが失われた生産者と観光協会は営業の再開に向けて踏み出した。その一歩は「三陸山田かき小屋」の復興である。

養殖作業をはばむがれきの撤去、失った船や道具など問題は山積。しかし、こうした問題を一つ一つクリアしながら、平成23年内の再開を諦め営業を停止していた山田かき小屋が10月29日、船越地区浦の浜に再オープンした。初日には待ちわびていた人たちが蒸し上がったカキを堪能。ゼロ、いやマイナスからのスタートには、関係者の復興に向けた並々ならぬ思いがあったのである。

また、これからの山田町を背負っていく子どもたちが安心して学べる場所「山田町ゾンタハウス」が開所された。これはNPO法人「こども福祉研究所」の森田明美理事長が長崎地区に設立。震災後、仮設住宅やさまざまな環境の変化にともなって、子どもたち

「弥生灯火会」で行われた灯籠流し

東日本大震災・大津波山田町犠牲者二周年追悼式

「鎮魂と希望の鐘」の除幕式

が勉強する場所をなくしているという現状に差し伸べられた希望の手であった。

津波の影響でダメージを受けた建物を町民と東洋大学の学生たちがボランティアで復旧。夏休みには大学生たちが学習の支援まで実施した。東洋大学教授でもある理事長の森田さんからは「日本中、世界中には君たちを支えてくれるいい大人たちがいっぱいいるから希望を失わないで」というメッセージが送られた。ここでは物質的な支援だけではなく、大人が子どもたちに希望を与え続ける場所として、地域の中から支援のエネルギーが生まれる環境づくりが行われたのである。

（2020年8月31日をもって活動を終了）

一瞬にして日常が奪われたあの悪夢から一年。

3月10日、船越地区浦の浜で、「弥生灯火会」が行われた。震災直後「とむらしび」が戻ってくる度に多くの人々が復旧への手応えと希望を感じたことにちなんでの灯籠流しである。町内の保育園児が描いた置き灯籠は、温かな光をともしながらゆらゆらと海に揺れる。参加者は流し灯籠にどんな思いを込めて流したのだろう。

11日には、町の中央公民館大ホールで、「東日本大震災・大津波山田町犠牲者一周年追悼式」が行われ、遺族代表の木下文（当時鈴木）さんは「大震災から1年たった今も大切な人を失った悲しみと心の傷が消えることは決してない。でも、前に向かって強く歩まなければいけない。一日一日を大切に生きて行く」とメッセージを述べた。

また「御蔵山」と呼ばれる旧町立図書館跡地では山田ロータリークラブ（阿部幸榮会長・当時）が犠牲者の冥福と復興への願いを込めて建立した「鎮魂と希望の鐘」の除幕式が行われ「この鐘は復興の証。たくさんの人にこの地を訪れてほしい」と述べた。

この日、町の各所では犠牲になられた方々へ追悼の祈りがささげられた。「災害は忘れたころに」と言われるが、忘れてはいけない、忘れられるはずがない。しかしその一方で、何もなくなった土地には新たに仮設店舗が並び始め、少しずつ前を向いて歩きだしていることもまた現実である。

未来へのメッセージに寄せた山田中学校（当時）の湊安里さんは、「今日から復興事業が始まることを知り、いよいよ前に向かって進んでいくことができるんだ、ととてもうれしく思っています。震災前の山田のように、みんなが明るく、楽しく、支え合って暮らしていける町、地震や津波に負けない強い町になってほしいです」と伝えている。

町では、生活再建に向けたさまざまな取り組みが、長い年月積み重ねられていくことになる。復興における町の永遠のテーマは、「二度と津波による犠牲者を出さない」。何よりも津波から命を守る町づくりを目指し、町民一人ひとりが主体となって、全町民で取り組んでいく、それが山田町の復興なのである。

Photo essay
わたしの一枚
～私が見つめた復興の十年～

おらいの船と夕焼け

私の実家の船と夕焼けを写した一枚です。
勝運丸といいます。
東日本大震災の津波で被害を受けたものの、修理して今も活躍しています。
私は、現在、漁業の手伝いをしています。
この船は東日本大震災からの復興、再建のため走り続け、
これからも私たちと漁業を頑張り続けます。

小林（こばやし）　秀人（ひでと）（山田町船越　20代）

撮影日　2014年9月18日

場　所　大浦漁港

第二章

明日を創（つく）っていくために

復興計画の策定

町は、平成23年（2011）3月11日の東日本大震災による大津波の襲来から73日が過ぎた5月23日に、津波被害からの早期復興を目指し「復興計画策定に向けた基本方針」を発表した。まだ復旧の途上、被災の爪痕（つめあと）が残っているころで、行方不明者の捜索が続けられ、ライフラインの復旧、がれきの撤去、また被災者の住まいの確保、さらには各種産業の復旧、雇用の確保など、解決すべき喫緊（きっきん）の問題が山積みだった。未曽有（みぞう）の大災害に見舞われてしまった私たちの郷土。しかし、そのような状況を一日も早く打開し、復興に向かって歩み出さなければならない。「基本方針」は、まさにその第一歩であった。以後、町では7月に「復興ビジョン」を、9月初めに「復興計画中間報告」、10月初めには「復興計画行政素案」を示し、国、県、有識者、そして住民と協議を重ね、12月22日「山田町復興計画」を策定し、公表した。山田町の復興計画はどのように策定されていったか。その過程をたどる。

復興へのスタートライン——復興計画策定の過程

被災直後の状況

国では、東日本大震災発生の直後より、被災した地方の被害規模の把握を急いでいた。

マグニチュード9・0というかつてない大きな地震と、それに伴って発生した大津波災害から再び立ち上がるためには、被災した地域の力だけでは及ばず、国による支援が不可欠であった。このことから、復旧と復興のための施策を速やかに開始するため、国から被災した市町村へ、国土交通省（以下、国交省）を中心に職員が派遣された。

被災市町村では、復興計画を策定するための専門部署を設置し、国や県、さらには学識経験者や住民等と連携・協力しながら、まずはおおむね10年後の姿を見据えた「復興計画」を練り上げていくこととなった。

足掛かりとなる体制づくり

町では、復興計画の策定の足掛かりとして、総務課内に「復興推進室」を設置した。

配置した職員は4名で、それに加えて国交省から派遣されていた職員と、同省所管の独立行政法人・都市再生機構（UR都市機構）の職員2名も加わった。

復興計画行政素案に関する住民説明会（2011年10月8日／織笠小学校）

その後、7月16日には、復興推進課となり、職員も増員。国交省から派遣された専門職員は、技監として正式に任用した。

しかし、これほど大きな災害からの復興計画など、誰も作った経験がなく、職員には戸惑いもあった。「五里霧中、暗中模索といった心境だった」と、当時、自身もまた避難所にいた職員は述懐する。

避難所にいた町民の間にも「もうこの町には住めない」「山田町は終わりだ」といった嘆きの声も聞こえた。発災から1カ月以上が過ぎ、誰も未来、将来を描けずにいた。

復興計画の策定は、そんな中でのスタートとなった。

策定に向けて

復興には、スピード感と同時に合意形成も必要となる。

そのため、まず、復興計画の基となる「基本方針」を作ることから始め、つぎに、計画策定に向けて具体的な青写真を示した「復興ビジョン」を作成。その後、それらで示した基本理念や方向性に基づき、復興計画の叩き台となる「行政素案」を作成し、住民説明会などを経て「山田町復興計画」を策定する手順を踏むこととした。

計画策定のプロセスには、透明性、客観性、合理性などが求められる上、技術的・専門的な検討も必要なことから、学識経験者や町内各団体の代表者による「山田町東日本大震災津波復興計画策定委員会」及び「山田町東日本大震災津波復興ビジョン策定専門部門会」を設置した。

基本方針のあらまし

復興計画の策定において重要なことは、実現可能な計画であることだ。

しかし、この時点では、復興を担う国の組織である復興庁もまだ出来ておらず、いったい何にどれぐらいの予算が必要となるのか。見えない事柄も多かった。

町は国・県と協議を繰り返し、その都度必要な事業を加えながら、これほどの被災規模であるならこれぐらいの事業費が必要になるだろうとの概算を立てていった。

そして5月23日、町は「復興計画策定に向けた基本方針」を公表。復興計画策定に向け、その理念と取り組みの方向性を町民に示した。

この方針に基づき、各界の有識者および町民らから広く意見を聞きながら、年内を目標に復興計画を策定し、復興への第一歩を踏み出す方向で進めていった。

基本方針の大まかな内容は以下の通り。

基本的な理念

(1)津波から命を守るまちづくり

住居の高台移転、地盤のかさ上げ、コミュニティーの再構築、地域福祉や地域医療の再生などを考慮する。

(2)産業の早期復旧と再生・発展

水産業・養殖をはじめとした産業関連施設や企業活動の早期回復。被災者の雇用の場の確保。当面の営業再開を可能とする手法の早期検討。そして、単

住民説明会に臨む役場職員たち（2011年10月9日／山田南小学校）

なる復旧にとどまらず、被災前以上の発展を目指すこと。

(3)住民が主体となった地域づくり

町民同士が互いに手を取り、助け合い、励まし合いながら、この難局を乗り越えなければならない。そして、この経験を後世に伝えるために、計画段階から住民が主体的に参画し、地域の結束を高める地域づくりを目指すこと。

町の未来像を思い浮かべながら誰もが真剣に聞き入った(2011年10月10日／B&G海洋センター武道館)

そして、取り組みの方向性、計画期間、復興計画策定までのスケジュールなどを示した。

町民たちの声

この基本方針を携えて、町では避難所など町内外19カ所で行われた住民説明会に臨んだ。

しかし、震災から2カ月以上が過ぎてなお、町には未だがれきが積まれ、火災のあとも残されている中で開かれた説明会では、未来がなかなか見通せない町民らのいら立ちが会場であふれ出した。

「町はこれからどうなるのか?」「なぜこんなに復旧が遅いんだ?」「住むところを早く決めてほしい」「このまちで仕事は続けられるのか?」「いつになれば安らげる場所ができるのか?」「理念より も具体的な方策とスケジュールを示してほしい」

この段階では、町民の質問一つひとつについて明快な答えは出せなかった。聞かされた言葉はきつくて辛辣(しんらつ)なものも多かったが、それらは正直な思い、意見、要望でもあったことは間違いない。

町は、そうした「声」を持ち帰り、次のステップである復興ビジョンの取りまとめに取り掛かった。

復興計画行政素案の関しての住民説明会では地区(集落)ごとの具体的な取り組みや施策も示された

住民からの意見や質問も活発に飛び交った
(2011年10月10日／船越防災センター)

復興ビジョン

実現可能な計画であること

基本方針から復興ビジョンへと策定の段階が変わっていくその間にも、現地調査は綿密かつ詳細に行われた。

町は、その調査結果を基に「津波から住民たちを守る」ための計画を練り上げていった。

町では、「こんな事業が組まれそうだ」「防潮堤はこうなりそうだ」といった、国や県などの情報を基に、具体的な事業手法や期間などの姿を示す作業が進められた。

また、策定の過程で大切なことは「町民の意見」「実現の可能性」「国の方針・施策・予算」のバランスだった。要望・希望をすべて盛り込むことはできない。その上で確実に復興の道を歩んでいくことができる計画でなければならない。

理念と大命題

もう一つ重視したのはスピード感だった。町民の声も、これが大きかった。

基本方針と前後して行った住民アンケートでも「いつからやるのか?」「住むところを早く決めてほしい」「流された漁具への補償などはあるのか?」「魚市場はいつ再開する?」「我々は何年待たされるのか?」といった質問などがあった。

時間軸を決めていくための調整もまた、復興計画の策定における重要なテーマであった。

復興ビジョンは、「もう一度、この郷土をつくっていく」という意思を明確にした基本方針と年内の策定を目指す復興計画とをつなぐもので、山田町の特性や実情に即した復興の道筋と手だてと見通しを、描きだしたものだ。

これを基に、町としての復興の考え方を国や県に対して積極的に示す。そうすることで、各種の支援を早い段階から要請していく。

同時に、復興ビジョンは町民へも示し、住民懇談会などを通じた意見交換を、より活発化させ、さまざまな意見を集め、復興計画に反映していく。

復興ビジョンには、大命題として、「もう二度と津波による犠牲者は出さない」という言葉を冒頭に据えた。

この言葉は、未曽有の災害を受けた山田町が、これからまちづくりを進めていく上で、根本に据えるべき不変の考えだ。

二度と同じ悲しみを繰り返したくない、繰り返さない。

多くの死者・行方不明者を出した町の願いだ。

事業の規模と期間

復興ビジョンでは、より具体的で持続可能な山田町の十年後の姿が示された。その達成のための期間をおおむね十年とし、その十年を「復旧期」「再生期」「発展期」の三つに分け、各段階における事業と事業規模、期間を示した。

復興ビジョンの内容は、以下の通りである。

①津波による被害を最小限に抑えるという発想から、減災の観点による災害に強いまちづくり、津波から命を守るまちづくりを目指す。

②防潮堤に頼ることには限界がある。防潮堤は、津波の力を分散、受け流す仕組みを考え、道路や鉄

復興計画着手式で工事着手を宣言。練り上げた各種事業がスタート

道、防潮林等の複数の施設を複合的に組み合わせることも検討する。

浸水した低地部の居住可能性を調査し、土地は地盤のかさ上げなど土地利用と一体となった防災対策の実施により安全な市街地を再生・復興する。

③周辺市町村より勾配が緩やかという特徴がある当町は、移転や丘陵地での高台宅地造成も比較的容易であることから、地域コミュニティーや低地部の水産業・商工業との連携にも配慮しながら高台居住を積極的に推進する。

④水産業を海から離れた場所に移すことは現実的に困難である。そのため、従来のエリアでの操業継続の見通しなども考慮しながら段階的に復旧・再整備を進める。

漁港や市場の統合再編も含めて町全体としての水産業の強化を図る。

商業に関しては、高台宅地の整備、鉄道や道路のルート変更なども考慮し、都市構造再編の中で適切に商業用地を配置する。

計画期間と各産業の復興や住居について、よりはっきりとした「姿」を示した復興ビジョン。

このプランを、有識者や専門家による検討会議に諮りながら、さらなる肉付けを行っていった。

役場屋上から見た山田地区。発災直後（2011年3月26日）と復興9年目（2019年8月8日）

復興計画行政素案

中間報告の公表

復興計画を12月までに策定する―ということは、スタート時点では明確に決まってはいなかった。しかし、6月24日の「東日本大震災復興基本法」公布により、12月には復興庁が設置されるとの見通しができた。

国も町も、次年度の予算を組まなければならないし、また、新年度は復興元年として迎えなければならない。被災市町村の復興計画の策定も、復興庁の始動を目指すかのように次第に加速し始めていた。

復興ビジョンを公表した後、町では復興計画の策定に向け再びアンケートを実施した。その後、町は、計画の進捗を示す「中間報告」を9月1日に公表した。

ここでは復興計画の構成案および、土地利用と交通体系の基本的な考え方が示された。被災者たちは仮設住宅などへの入居も進んでいたが、誰もが復興スケジュール―これからの生活の見通し―を早く知りたかった。中間報告は、そうした町民らの不安を和らげることも目的としていた。

それを経て、9月29日、町は、復興計画策定の前段となる「山田町復興計画行政素案」を取りまとめ、公表した。

行政素案は、基本方針で掲げられた理念に基づき、また復興ビジョンで示した十年後の町の姿を達成するための復興各段階（復旧、再生、発展）で必要となる施策や事業の内容を、より具体的に盛り込んだものだ。

各種事業計画をより具体化

復興計画の仕上げに向けて、町は地区別の住民懇談会やアンケート調査などを重ねながら町民の意見を広く吸い上げ、12月の策定へと進めていく。

気を付けるべき点もあった。国や県が実施する事業との整合性だ。例えば防潮堤の建設など、県事業として展開されるものもある。町の考えや思いと、国や県が構想している事業に食い違いがないようにに計画を練り上げていかなければならない。

また、かさ上げや移転を伴う事業に関連し、町は防災拠点として機能を発揮できるよう、警察、消防署などを津波浸水の恐れがなく利便性の高い場所に整備する計画でいた。そうした機関との調整も必要になる。

行政素案では、「まちの骨格づくり」の方針を、次のとおり、よりはっきりと示した。

①既存の市街地や集落の再生を基本にする。丘陵部における新たな開発等は必要最小限にとどめ、山田湾・船越湾を中心にしたコンパクトな暮らしやすいまちを目指す。

②豊かな森を抱く山々に囲まれた山田湾・船越湾。海や山が近くに感じられ、市街地や集落と豊かな自然環境と調和し共生する美しいまちを目指す。

③三陸沿岸道路の全線供用に伴う広域的な結びつきの強化を念頭に、水産業、農林業、商工業、観光業などの多様な産業が活発に展開する活力あふれるまちを目指す。

また、新たな住宅建設予定地や各種インフラの整備、また各産業が再生・復興へと向かうための再建プラン、雇用確保の具体的な施策や事業を盛り込んだ。

そして、特に重点を置いたものは全住民参加のもとに練り上げてきた「地区別復興計画」である。

大沢、山田、織笠、船越、田の浜、大浦、小谷鳥の地区ごとの復興の構想を描き、まとめ上げ、具体的な取り組み、施策や事業を示した。

住民懇談会も開催した。復興計画の作成は、いよいよ大詰めを迎えつつあった。

山田町復興計画の公表

「住民主体の地域づくり」を明記

復興後の山田町が目指す将来像を明確にし、かつ、その実現のための具体的な事業施策や事業期間を示した「山田町復興計画」は、平成23年（２０１１）12月22日に公表された。

5月の「基本方針」や7月の復興ビジョンで示した理念や方向性に基づき、住民、有識者、そして国や県などとも意見交換や協議が繰り返されてきた。

以後、復興に関する事業や施策は、この復興計画に基づき推進されていくこととなった。

計画で示す「理念」は、

「二度と津波による犠牲者を出さない」

①津波から命を守るまちづくり
②産業の早期復旧と再生・発展
③住民が主体となった地域づくり

とした。

「山田町は、過去の苦い経験を教訓に、長い年月と巨費を投じて大規模な防潮堤を整備し、市街地や集落を形成してきたが、東日本大震災の津波は防潮堤を乗り越え、人々の暮らしを破壊し、多くの人命と財産を奪い去った。

しかし、それでも私たちは、新しいまちづくりに向けて一歩を踏み出す。町の将来を担う子どもたちのためにも、この郷土をもう一度築いていかなければならない。全町民が、子や孫たちが津波で命を落とすことなど二度とあってはならないという強固な意志を持って津波から命を守るまちづくりを目指す」というものである。

そして復興まちづくりの方向性の基本となる山田町の将来像として「全町民、全地区が一丸となって、震災で失われたまちをもう一度取り戻そう、将来にわたって誇れるまちを創っていこう」という思いを込め「みんなで取り戻す、人の笑顔、元気な産業、碧（あお）い海とともに暮らす町」と掲げた。

10年の計画と住民の主体的参加の訴え

山田町復興計画の実施期間は、平成23年（２０１１）から令和2年（２０２０）までのおおむね10年間と定めた。そして、その10年間を「復旧期」「再生期」「発展期」の三つに分け、段階に応じた施策や事業を展開していくとした。

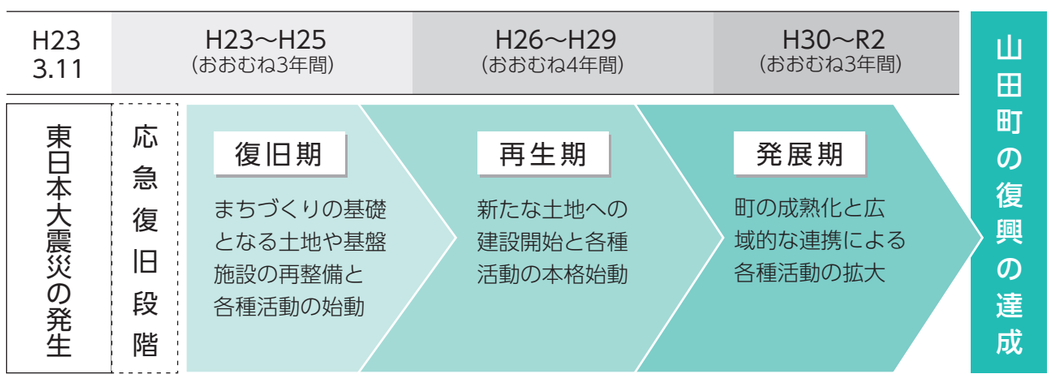
また町民一人ひとりが主体的に復興に取り組むこと。そして国や県、全国の自治体やＮＰＯ・ボランティア、民間企業、学識経験者などの支援や協力も得ながら、それぞれの立場・目線から知恵と力を出し合い、協働して復興に取り組むことの必要性を訴えた。

船越第8団地（69戸）

大浦第1団地（9戸）

長崎第2団地（42戸）

計画期間と各段階の考え方



防災と土地利用について

防災施設の配置と土地の利用、および交通体系についての基本的な考え方も示した。

防潮堤の整備は、既往第2位の津波高（明治三陸大津波）に耐えられる防潮堤を整備し、東日本大震災の津波レベルに対しては地盤の嵩上げや避難対策の強化（避難路や緊急避難施設の整備）により対応することとなった。

そして行政素案の作成時に重点が置かれた地区別復興計画は、素案作成後も引き続き行われていた意見交換会やアンケート調査などで得られた町民の意見を踏まえ、町全体の復興の考え方との整合性に配慮した内容となった。

本計画の策定以降も、十年という時間の中で引き続き協議・調整を行い、より詳細な設計が必要となる。他方の分野別復興計画では、「津波から命を守るまちづくり」「産業の早期復旧と再生・発展」「住民が主体となった地域づくり」の三分野ごとに、具体的な施策・事業を掲げた。

◆　◆　◆

復興計画立案の時点では、町はまだ応急復旧段階にあった。

仮設住宅の建設と入居などは一段落したものの、被災地域に残された津波の爪痕は依然生々しいものであった。

しかし、町の再生と復興へ向かう地図は出来上がった。

復興を達成するまでの十年は復旧期（おおむね3年）、再生期（おおむね4年）、発展期（おおむね3年）という三つの段階に分けられて、順次事業を進めていくこととなった。

次章からは、これら段階ごとの計画の進捗（しんちょく）などを見ていく。

1

5

2

6

3

7

4

8

1浦の浜防潮堤の上を通る町道
2県立山田病院
3船越公園
4大浦の防潮堤
5大沢の防潮堤工事
6町道細浦・柳沢線と桜山トンネル
7浦の浜と田の浜を結ぶ高台道路
8小谷鳥の防潮堤

山田町の十年の歩み

山田町復興十年のカレンダー

「山田町復興計画」は、10年を期間として、
さらにおおむね3年ずつをひと区切りとする「復旧期」「再生期」「発展期」という3つの段階を設定。
平成23年12月22日の計画策定と同時に復興のまちづくりがスタートした。
「復旧期」とは、まちづくりの基礎となる土地や基盤施設の再整備と各種活動の始動の時期。
「再生期」は、新たな土地への建設開始と各種活動の本格始動の時期。
そして「発展期」は、町の成熟化と広域的な連携による各種活動を拡大させていく時期となる。
「山田町の十年」を年表で追う。

分野別復興計画

分野別復興計画では、「津波から命を守るまちづくり」「産業の早期復旧と再生・発展」「住民が主体となった地域づくり」の３分野ごとに、今後取り組むべき具体的な施策・事業を掲げています。

分　野	大項目	小項目
津波から命を守るまちづくり	安全・安心で、活力を生み出す土地利用の実現	海岸保全施設の復旧・整備
		安全な居住地の整備
		活力を生み出す産業地の整備
		農地、公園等への土地利用転換
		防災拠点・避難場所の整備
		自然環境と風土・景観の保全
		津波の災害危険性に関する情報の周知
	災害に強く、利便性の高い交通網の形成	三陸沿岸道路の整備促進
		国道45号及び県道重茂半島線の整備
		避難道路の整備
		市街地・集落地間を連絡する道路の整備
		JR山田線の復旧
		バスネットワークの充実
	安定的な供給・処理の実現	上下水道の整備
		非常時における安定的な供給・処理施設の整備促進
		再生可能エネルギーの導入促進
		災害廃棄物の適正処理
		ごみの減量化・リサイクルの促進
	情報・通信基盤の強化	防災無線の再配置
		情報通信手段の多重化
産業の早期復旧と再生・発展	水産業の早期復旧と再生・発展	漁港・漁場（養殖場）の復旧
		市場･水産加工施設の復旧
		漁業経営体制の強化
		水産物のブランド化及び販売拡大
	農林業の早期復旧と再生・発展	農林業生産基盤の復旧・整備
		農林業経営体制の強化
		収益性の高い農林業の実現
	商工業の早期復旧と再生・発展	仮設施設による早期の事業再開
		経営安定に向けての支援
		商業施設の集積促進
		工業施設の集積促進
	観光業の早期復旧と再生・発展	総合的ブランド戦略のための体制整備
		新たな観光資源の発掘・整備
		滞在型観光施設の充実
		観光客の誘致
住民が主体となった地域づくり	コミュニティーの絆の再構築	復旧・復興情報の発信
		地域コミュニティーの再構築
		地域における祭り・イベントの開催
		震災経験の記録と継承
	被災者の生活支援	各種生活支援に関する情報の発信
		安定的な雇用の場の確保
		安心して暮らせる住宅の供給
	医療・介護・福祉・教育の再生	医療・介護・福祉施設の早期復旧
		地域医療体制の強化と保健活動
		介護・福祉サービスの充実
		教育施設の早期復旧
		児童生徒に対する心のケア
	まちづくり活動への支援	地域コミュニティー活動への支援
		地域防災活動への支援
		NPO・ボランティア団体への支援

▶復旧期Ⅰ◀

2011
平成23年

東日本大震災の発生
応急復旧事業が進められる中で
町は復興計画の策定にかかった

3月11日14時46分、宮城県牡鹿半島の東南東沖約130キロメートル付近で、マグニチュード9.0という、日本の地震観測史上最大の地震が発生し、それに伴って発生した巨大な津波が東北地方の太平洋沿岸をことごとく襲った。

山田町では、船越湾、山田湾に約6メートルから19メートルもの津波が押し寄せ、広い範囲での浸水被害により建物が倒壊。さらに市街地では火災が発生し、津波がれきなどに延焼して、約4割もの家屋が流失または焼失した。

ぼうぜんとするしかないほどの惨状だった。連日連夜、応急復旧対応が懸命に続けられていた。

変わってしまった町の姿を目の前にして、未来は見いだし難かった。しかし――。

「この未曽有の大災害からどう立ち上がっていくべきか」

町も、町民たちも考えなければならなかった。

発災から1カ月半、町では、震災後のまちづくりの基礎となる「復興計画」の策定に取り掛かる。

秋には、山田八幡宮の境内を中心として「山田八幡宮・大杉神社復興祈願祭」を開催。復興を願う人びとのエネルギーにも励まされながら、12月22日、町は「山田町復興計画」を策定した。

海、山の豊かな自然と調和・共生し、多様な産業とたくさんの人々が関われる活力あるまちを目指し、山田町は復興へと歩みだした。

山田魚市場が再開（10月20日）

2011年（平成23年）

3月11日	・東日本大震災発生	第1章	P015
3月28日	・応急仮設住宅の第一弾建設にとりかかる	第4章 住民生活	P124
5月1日	・役場総務課内に「復興推進室」を設置。「復興計画」の策定スタート	第2章	P037
5月23日	・「復興計画策定に向けた基本方針」を公表	第2章	P037
5月27日～31日	・「基本方針」をもとに住民懇談会を開催（町内及び内陸部の避難所19カ所）	第2章	P037
6月26日	・合同慰霊祭		
7月1日	・「山田町復興ビジョン」を公表	第2章	P037
8月	・応急仮設住宅（32カ所1542戸）すべてが完成	第4章 住民生活	P124
8月11日	・ライトアップニッポン主催の「花火大会」開催（山田漁港）	第1章 第6章	P015 P212
9月1日	・「山田町復興計画 中間報告」を公表 ・震災後初となる「広報やまだ」を発行	第2章	P037
9月17日～18日	・「山田八幡宮・大杉神社復興祈願祭」開催		
10月	・「山田町復興計画 行政素案」を公表	第2章	P037
10月	・山田第4仮設団地内にほっとサポートセンターを設置	第4章 医療・介護・福祉	P116
10月8日～12日	・「行政素案」の地区別説明会を開催（町内8カ所）	第2章	P037
10月20日	・山田魚市場が再開		
10月22日～30日	・「町民芸術祭」開催（町中央公民館）		
10月23日	・「山田農業まつり」開催		
10月29日	・「三陸山田かき小屋」がオープン	第4章 観光業	P100
11月1日	・「町立図書館」再開		
12月22日	・「山田町復興計画」を公表 ・第一期産業復興棟（共同仮設店舗）完成。八幡第1など9棟18区画	第2章	P037

三陸山田かき小屋再開（10月29日）

共同仮設店舗が完成（12月22日）

合同慰霊祭（6月26日）

順次建設された仮設住宅・町民グランド（5月19日）

陸上自衛隊ヘリコプターから撮影（4月11日）

▶復旧期Ⅱ◀

2012
平成24年

実質的な「復興元年」
復興計画に基づく各種事業がスタート
「動き」が目に見え始めた

平成23年（２０１１）の秋ごろまでの対応は「応急復旧段階」と位置付けられ、道路啓開や倒壊家屋の撤去、仮設住宅の建設と入居が対応策の中心であった。

そして年が明けた平成24年（２０１２）からは、前年末に策定・公表された復興計画が本格的に始動していく。

震災から1年がすぎた春、津波の爪痕はまだ深く残されていたが、犠牲者一周年追悼式という大きな行事を終え、そして間もなく新年度を迎えると、実施される復興事業は次第に増えていき、誰もがその本格的なスタートを実感していくこととなった。いわば実質的な「復興元年」である。

被災した住民たちの仮設住宅への入居もひと段落。災害復興公営住宅整備事業や防災集団移転促進事業なども動き始めた。土地の選定、用地買収、造成、建設…と時間はかかるが、新たな開発は最小限にとどめ、既存の市街地や集落等の再生を基本とする「コンパクトなまちづくり」を目指し、復興計画に基づく各種事業が展開されていった。

◀2012年（平成24年）

1月23日～31日	・山田町復興計画に関する住民説明会を開催（町内14カ所）	第2章	P037
3月2日	・山田町復興事業着手式を挙行	第4章 基盤整備	P074
3月11日	・東日本大津波山田町犠牲者一周年追悼式を挙行		
6月11日	・県が「復旧・復興ロードマップ」を発表 社会資本の復旧・復興の工程を公表		
6月11日	・災害公営住宅整備事業覚書締結		
6月12日～15日	・織笠・船越・田の浜・小谷鳥地区の災害危険区域における建築規制の住民説明会を開催		
7月11日～12日	・第一回内陸部説明会を開催（復興計画について）		
7月17日	・任期満了に伴う山田町長選挙において、初当選した佐藤信逸町長が第七代山田町町長に就任。沼崎喜一前町長は出馬せず勇退。		
8月4日	・第2期産業復興棟（共同店舗）完成 高砂通り商店街など24棟101区画が開所		
9月20日・21日	・山田地区の災害危険区域における建築規制の住民説明会を開催		
10月11日	・震災後初となる誘致企業である造船工場が大沢地区に完成		
10月23日	・第二回内陸部説明会を開催（復興計画について）		

復興事業着手式。高台住宅予定地のボーリング調査を実施（3月2日）

追悼式に参加する町民と関係者（3月11日）

大津波山田町犠牲者一周年追悼式（3月11日）

震災後初の誘致企業「ティエフシー」やまだ工場が完成（10月1日）

災害公営住宅整備事業覚書締結（6月11日）

▶復旧期Ⅲ◀

2013
平成25年

魚市場の稼働開始は基幹産業の復活の手応え
まちづくりのための基盤整備も本格化し
安全祈願祭が各地区で挙行された

復興計画の基本理念のひとつは「産業の早期回復と再生・発展」であった。

町の基幹産業である水産業は、津波により壊滅的な被害を受けたが、この年の秋、船越、山田の二つの魚市場が再建された。養殖施設なども順次再開し始め「海の十和田湖」と呼ばれるほど波穏やかな山田湾に養殖いかだが浮かぶかつての景色がよみがえりつつあった。

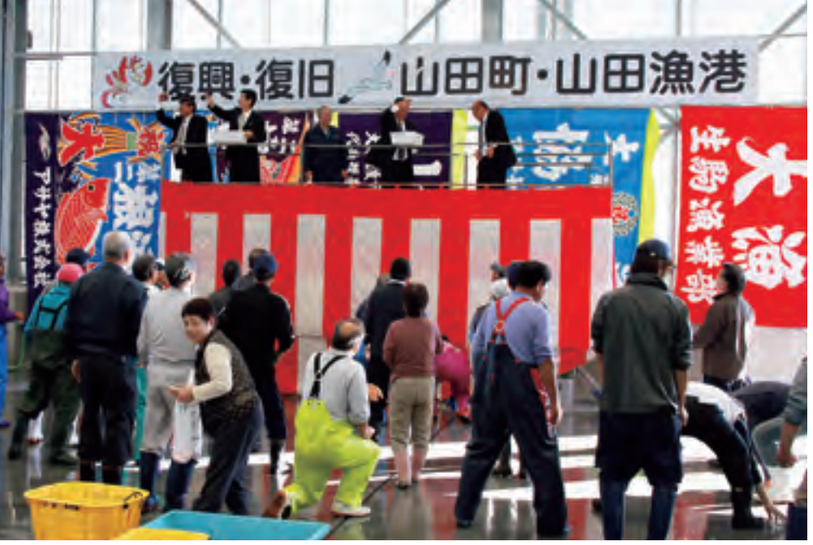
安心な日常生活を営むための基盤づくりもまた進められていた。

高台住宅地などの用地選びも進み、多くの地区でまちづくりがスタート。大沢・山田・織笠の3地区の復興関連工事を担当するUR都市機構と復興事業支援に係る業務委託協定を締結した。

一方、仮設住宅では、被災した多くの人たちの「仮の暮らし」が長くなり始めていた。戸建て住宅に暮らしていた人も多く、仮設住宅のような集合タイプの住宅での生活になかなか慣れないという入居者も多かった。

そうした人びとの心身の健康を守るため、住宅訪問による健康相談や仮設集会所での運動教室、料理教室といった事業を前年度から次々と展開。震災によって失われたコミュニティーをつくりあげるための支援を続けていた。

仮の暮らしから「ほんとうの暮らし」へ。復興の槌音が地域に響き始めていた。



山田魚市場落成式(10月10日)

山田魚市場　初競り(10月10日)

◀2013年（平成25年）

- 3月11日 ・山田町犠牲者二周年追悼式を挙行
- 4月1日 ・UR都市機構と業務委託協定を締結 第4章 基盤整備 P074
- 4月18日 ・田の浜コミュニティセンターの開所式を挙行 第4章 公共施設 P134 第5章 P176
- 5月 ・大沢地区に観光物産館「とっと」開設（～令和元年） 第4章 観光業 P100
- 5月24日 ・環境省が「陸中海岸国立公園」を「三陸復興国立公園」と改称 第4章 観光業 P100
- 5月25日 ・山田町津波復興拠点利活用検討委員会を設立 第4章 商工業 P96
- 5月29日 ・織笠地区復興事業安全祈願祭を挙行
- 9月24日 ・山田町を含む「三陸ジオパーク」が日本ジオパークのひとつとして正式に認定 第4章 観光業 P100
- 10月2日 ・山田地区復興事業安全祈願祭を挙行
- 10月2日 ・再建された船越魚市場が稼働開始
- 10月5日 ・災害危険区域条例の制定
- 10月10日 ・再建された山田魚市場が稼働開始
- 12月9日 ・大沢地区復興事業安全祈願祭を挙行
- 12月21日 ・船越・田の浜地区復興事業安全祈願祭を挙行

船越魚市場落成式(10月2日)

JR山田線復旧に関するシンポジウム(11月9日)

織笠地区復興事業安全祈願祭(5月29日)

船越家族旅行村の桜（4月23日）

▶再生期Ⅰ◀

2014
平成26年

新たなまちの基盤づくりが進む 観光事業なども再開の動きが加速し 暮らしの風景も「再生期」を迎えつつあった

津波被害のあと長く運休したJR山田線の宮古・釜石間は、三陸鉄道と沿線市町に譲渡されることとなり、各種産業の振興や、交流人口・関係人口の増加に「鉄路のチカラ」が期待されることとなった。

鉄路の継続が決まったほか、この年は三陸山田カキまつりの復活開催や荒神海水浴場の再開といった明るい話題もあった。

また、町内に9校あった小学校で唯一津波により被災した船越小学校の新校舎が完成。4月5日には落成記念式典と見学会が開催され、4月7日には入学式も行われ、男子13名、女子12名の計25名の新入生を迎えた。創立140年の伝統をつないだ学校は、再び新たな歴史を刻み始めた。

そして、整備と建築が進められてきた「県営豊間根アパート（鉄筋3階建て2棟、72戸）」が、町内初の災害公営住宅として完成し、7月から入居が始まった。

「復旧期」の3年間、整備が進められてきた基盤の上に、新しい暮らしの風景が築かれようとしていた。そして農林水産業、商工業、観光業など多くの産業が活発に展開する「再生期」がスタートし、人びとの各種活動もまた力強く再生・再開し始めた。

2014年（平成26年）

1月31日	・JR東日本は山田線の運行事業と線路など鉄道施設を三陸鉄道と沿線4市町に無償譲渡、経営移管する案を提示	第6章 鉄路のチカラ	P198
3月11日	・岩手県・山田町合同追悼式を挙行		
3月26日	・山田町震災復旧復興事業安全大会を開催		
4月	・浜の活力再生プラン策定推進事業（浜プラン）」取り組みを開始	第4章 漁業	P084
4月1日	・山田町社会福祉協議会がサポートセンター生活支援専門員事業開始（5地区仮設住宅集会所）	第4章 医療・介護・福祉	P116
4月5日	・船越小学校新校舎の落成記念式典を挙行	第4章 教育	P108
4月29日	・三陸山田カキまつりが復活開催		
5月24日	・「オランダ島ハウス」落成・寄贈式典を挙行	第4章 公共施設	P134
5月29日	・山田町まちづくり協議会を設立	第4章 商工業	P096
7月20日	・荒神海水浴場で震災後初の海開き		
7月23日	・町内初の災害公営住宅「県営豊間根アパート」への入居開始		
11月8日	・（仮称）山田町子ども交流センター（現「山田町ふれあいセンター」）建設の覚書を締結	第4章 公共施設 第5章	P134 P180
12月26日	・JR東日本より提示された山田線の運行事業と鉄道施設を三陸鉄道と沿線4市町に無償譲渡、経営移管する案の受入れを決定	第6章 鉄路のチカラ	P198

震災復旧復興事業安全大会（3月26日）

三陸山田カキまつりが復活（4月29日）

船越小落成記念式典（4月5日）

船越小落成式　声楽家・黒木香保里（くろきかおり）さんと児童（4月5日）

荒神海水浴場が海開き

再生期Ⅱ

2015
平成27年

整備された宅地の引き渡しが始まり暮らしの拠点となる住まいも次々に完成 新しい生活が見えてきた

平成24年から、土地の選定や買収、造成工事などが行われてきた防災集団移転促進事業や災害公営住宅など、次々に完了のときを迎えていた。

この年は、織笠・小谷鳥・大浦・大沢などの各地区で高台住宅団地の完成と引き渡しが続いた。災害公営住宅の入居も始まった。災害公営住宅への入居者は高齢者が多い。町では、健康づくりサポート事業の継続や住宅自力再建者支援事業などを通じて、住民たちの新しい生活に寄り添い、また、岩手大学の三陸復興・地域創生推進機構・地域コミュニティ再建支援班や社会福祉協議会などが、新たなコミュニティー形成のために力を尽くす活動を続けた。

同年3月には「山田町復興まちづくり計画」を策定。同じく3月に策定した「山田町まちなか再生計画」は内閣総理大臣より認可され、陸中山田駅周辺をコンパクトでにぎわいのある中心市街地として形成する取り組みが本格的にスタートした。

2015年（平成27年）

3月11日	・山田町犠牲者四周年追悼式を挙行		
3月24日	・山田町まちなか再生計画が内閣総理大臣から認可される	第4章 商工業	P096
3月29日	・織笠地区防集第1団地第1ブロックの完成記念式典を挙行		
5月	・「山田町復興まちづくり計画」を策定	第4章 基盤整備 第4章 商工業	P074 P096
5月	・「山田町観光復興ビジョン策定委員会」発足	第4章 観光業	P100
6月	・小谷鳥地区防集団地の引き渡し開始		
7月	・織笠地区防集第1団地第1ブロックの引き渡し開始		
7月	・被災者向け公営住宅として改修した柳沢第1団地への入居開始		
9月	・大浦地区漁集北団地及び南団地の引き渡し開始		
9月	・大沢地区漁集袴田団地の引き渡し開始		
12月	・災害公営住宅織笠アパートへの入居開始		

大沢地区漁集袴田団地（2020年9月撮影）

大浦地区漁集大浦北団地（2020年6月撮影）

大浦地区漁集大浦南団地（2020年6月撮影）

災害公営住宅柳沢団地（2020年6月撮影）

織笠地区防集織笠第1団地（2020年6月撮影）

小谷鳥地区小谷鳥防集団地（2020年6月撮影）

再生期Ⅲ

2016
平成28年

新たな施設が続々とオープン「県立山田病院」の開業も地域に大きな安心を与えた

防災集団移転促進事業や災害公営住宅の完成と引き渡し・入居が続いたこの年、やがて「リアス線」として開業する三陸鉄道の陸中山田駅前にも山田町ふれあいセンター「はぴね」、山田町まちなか交流センター、共同店舗棟「オール」といった新たな公共施設や商業施設が次々に完成。誰もがまちの再生が進んでいることを実感できた。

9月には、被災して以降、仮設診療所として診察を続けてきた県立山田病院の新しい病院施設が開院した。内科、外科、小児科、整形外科、眼科・リハビリテーションという6つの診療科があり、一般病床50床を備える。地域医療の中核施設として住民たちに大きな安心感を与えた。

また、9月29日には「希望郷いわて国体」開催に合わせて岩手をご訪問中だった天皇皇后両陛下が来町されて、「小中高生世代をはじめとする子どもの居場所」と図書館機能を持った施設として7月にオープンしたばかりの山田町ふれあいセンター「はぴね」をご視察された。

かねてから山田町へのご訪問を希望されていたという両陛下から気さくに声を掛けられた町民たちは「勇気をいただいた」と感激していた。

復興計画において示された「再生期」が終盤を迎え、住環境の整備と住宅再建はピークに。また、なりわいの再生に向けた各種活動も本格化し、まちづくりは次なるステージへと移り変わろうとしていた。

開所式に集まった笑顔の子どもたち(7月2日)

「山田町ふれあいセンターはぴね」開所式(7月2日)

2016年(平成28年)

2月	・大沢地区漁集大沢第2団地の引き渡し開始		
2月	・災害公営住宅跡浜団地への入居開始		
3月11日	・山田町犠牲者五周年追悼式を挙行		
3月	・「山田町観光復興ビジョン 山田プライド」策定	第4章 観光業	P100
4月	・災害公営住宅県営大沢アパート への入居開始		
4月	・織笠地区防集織笠第1団地第2ブロックの引き渡し 開始		
4月	・織笠地区防集織笠第2団地の引き渡し開始		
6月	・船越・田の浜地区防集船越第1・2・7・8団地の引き渡し開始		
6月	・災害公営住宅大浦第1団地への入居開始		
6月	・山田型復興住宅のモデルハウスお披露目会を開催	第4章 住民生活	P124
6月25日	・大沢地区漁集浜川目団地の引き渡し開始		
7月	・山田町ふれあいセンターはぴねの開所式を挙行	第4章 公共施設 第5章	P180 P134
7月2日	・浦の浜海岸で「山田パドルフェス」開催(第1回)	第4章 観光業	P100
7月31日	・大沢地区漁集「大沢第1団地」の引き渡し開始		
9月	・船越・田の浜地区防集第5・6団地の引き渡し開始		
9月1日	・再建された県立山田病院が開院		
9月4日	・織笠地区復興記念「きずなまつり」を開催		
9月29日	・天皇皇后両陛下が山田町をご訪問		
10月	・「希望郷いわて国体」開催(山田町は高校野球軟式競技の会場に)		
10月30日	・大沢地区復興記念「きずなまつり」を開催		
11月9日	・陸中山田駅前に整備した「山田町まちなか交流センター」が供用開始	第4章 商工業	P096
11月10日	・陸中山田駅前に共同店舗棟「オール」がオープン	第4章 商工業	P096
11月18日	・災害公営住宅北浜アパートへの入居開始		
12月1日	・災害公営住宅山田中央団地への入居開始		
12月11日	・大沢川向コミュニティセンターの開所式を挙行	第4章 公共施設 第5章	P134 P178

県立山田病院落成式(8月19日)

共同店舗棟オープンセレモニー(11月10日)

山田型復興住宅モデルハウス公開

山田パドルフェス(※写真は2019年)

県道重茂半島線安全祈願祭(7月11日)

▶再生期Ⅳ◀

2017
平成29年

基盤整備の総仕上げ
新たな道、新たな施策と取り組みで
まちの復興が加速しはじめた

新しいまちを築く基盤整備はおおむね完了し、暮らしとなりわいの再生のための住宅再建や商工業関連、そして公共関係の施設なども次々に開設・開業し、復興へと向かうスピードを上げていることが感じられた。

町では、次年度からの発展期に施行される各種事業を加速させるため機構改革を実施。新たに「復興企画課」が設置されたほか、健康福祉課は「健康子ども課」「長寿福祉課」に分かれ、住民の年齢や年代によって、より細やかな行政サービスの展開と対応を目指すこととなった。

また、観光客（交流人口）や、繰り返し山田を訪れ、町民やイベント、産業振興などにもかかわってくれる山田ファン（関係人口）を増やそうという取り組みも始まった。

山田町の象徴的施設のひとつ「鯨と海の科学館」が震災から6年を経て再開。浦の浜海水浴場も砂浜を再生し、再開を果たした。船越家族旅行村で行われていた桜の苗木の植樹も完了。震災の犠牲となった人たちと同じ数である824本の桜は、今後も町民を見守ってくれることだろう。

11月には、三陸沿岸道路が山田・宮古間で開通した。この高台を通る自動車専用道路は、三陸沿岸の新たな大動脈となり、交流人口の増加が期待できるとともに、災害時には緊急輸送道路、津波の際の避難道路として、命を守る道路となる。

2017年（平成29年）

3月11日	・山田町犠牲者六周年追悼式を挙行		
3月15日～19日	・山田線（三鉄リアス線）の町内4駅「愛称総選挙」開催		
3月	・山田地区の公共下水道終末処理場「クリエイトピュアやまだ」竣工	第4章 上下水道	P138
4月1日	・「子育て世代包括支援センター」が事業開始	第4章 医療・介護・福祉	P116
4月15日	・船越家族旅行村「復興さくらの丘」で824本の桜の苗木の植樹完了（平成25年～） ・「鯨と海の科学館」が6年4カ月ぶりに再開	第6章 鯨と海の科学館	P208
7月15日	・「浦の浜海水浴場」再開	資料	P263
8月8日	・山田町と静岡県富士宮市が「災害時における相互応援に関する協定」を締結		
8月30日	・山田高校「海の運動会」が7年ぶりに復活		
11月19日	・三陸沿岸道路山田宮古道路開通	第4章 基盤整備	P074

鈴木五輪相が入閣後初のお国入り（8月14日）

長崎・柳沢をむすぶ桜山トンネル貫通（9月30日）

山田高校の海の運動会が復活（8月30日）

山田町と富士宮市が協定を締結（8月8日）

終末処理場「クリエイトピュアやまだ」が完成（4月27日）

船越家族旅行村で復興さくらの丘植樹感謝祭（4月15日）

▶発展期Ⅰ◀

2018
平成30年

再生から発展へ
イベントや人的交流も活発化し
元気になったまちの姿も次々発信

町の防災拠点として位置付けて整備を進めてきた山田地区の高台に、2月には山田消防署が、そして3月には山田交番が再建された。

基盤整備が進められてきた新しいまちの輪郭と土台の上に、町民たちの各種活動や、広域的な連携によるさまざまな交流の拡大を目指す発展期がスタートした。

新たなイベントも次々に始まった。

5月のゴールデンウイークには船越公園で第1回「船越春のむらまつり」が開催された。また、8月には、山田の豊かな山、海の食材を使って楽しむ「バーベキューフェス」が浦の浜海水浴場で行われ、そして10月には、若者たちの地域活動への参加を促し、日頃培ってきた芸術や文化活動の成果を発表する場「やまだFES（フェス）」が開催。若い力と情熱がステージイベントやワークショップなどを通じて発信された。

発展期は、人々の交流やにぎわいが創出され、活力が生み出されていく成熟期でもある。

各種産業のさらなる発展と、住民たちが主体である地域づくり・まちづくりの動きがいよいよ活発化し始めていた。

2018年（平成30年）

2月9日
- 「山田消防署」落成
  - 第4章 防災 P140

3月11日
- 山田町犠牲者七周年追悼式を挙行
- 山田町・NHK盛岡放送局共同事業「旧・陸中山田駅再現プロジェクト」パブリックビューイング開催

3月27日
- 大島（オランダ島）・小島など山田湾の一部が「国立公園内海域公園地区」に指定される
  - 第4章 観光業 P100

3月30日
- 「山田交番」開所

4月1日
- 「やまだ斎苑」利用開始

5月4日
- 船越公園で第1回「船越春のむらまつり」開催

7月27日
- 本町が、東京2020オリンピック・パラリンピックの「復興『ありがとう』ホストタウン」に登録

8月25日
- 田の浜地区で防災緑地公園「いのちを守る植樹祭in山田2018」開催

10月13日・14日
- 中央公民館で若者に芸術文化の発表の場を提供する「やまだFES（フェス）」開催

12月23日
- 町道細浦・柳沢線全線開通
  - 第4章 基盤整備 P074
  - 第4章 交通 P130

「国立公園内海域公園地区」に指定されたオランダ島（大島）（3月27日）

「船越春のむらまつり」開催（5月4日）

町道細浦・柳沢線全線開通式（12月23日）

宮古警察署山田交番開所式（4月23日）

陸中山田駅再現プロジェクトAR体験会（4月21日）

山田消防署庁舎落成式（3月10日）

▶発展期Ⅱ◀

2019

平成31年／令和元年

復興のひとつの象徴となる三陸鉄道リアス線が開業
しかし秋には非情の台風が襲来

震災から8年。八幡町の御蔵山復興祈念公園に、震災で亡くなった人びとの魂を慰める「東日本大震災大津波犠牲者慰霊碑」と、殉職消防団員の魂を慰め顕彰する「消防殉職団員慰霊之碑」というふたつの慰霊碑が建立された。

「もう二度と津波による犠牲者を出さない」――。町の復興の基本理念でもあるその思いを今一度胸に刻み、十年を一区切りとする復興のまちづくりは大詰めに向かいつつあった。

元号は「平成」から「令和」へ。住まいの再建に係る基盤整備の完了を記念して、6月30日には山田町復興まちびらきが開催された。

しかし、10月12日、そうした歩みに水を差すかのように、台風19号の豪雨が町を襲った。田の浜地区では裏山から流失した土砂が排水管をふさぎ、多くの家屋が浸水。鯨と海の科学館も再び被災し、施設裏手の三陸鉄道リアス線は土台が流失するという大きな被害を受けた。

一方、良いニュースでは、1月12日、三陸沿岸道路の山田南インターチェンジ（IC）・大槌IC間が、さらに5月15日には、大槌IC・釜石北IC間も開通。山田・釜石間が結ばれた。

また、6月9日、青森県八戸市から福島県相馬市までを1本の自然歩道でつなぐ「みちのく潮風トレイル」が全線開通。風光明媚（ふうこうめいび）な三陸海岸を歩いて堪能できる日本最長自然道の整備完了は三陸地方全体の観光振興に大きな光となった。

山田南IC・大槌ICが開通（1月12日）

2019年（平成31年／令和元年）

1月12日	・三陸沿岸道路釜石山田道路の山田南IC・大槌IC間が開通	第4章 基盤整備	P074
2月	・「ふるさと探求高校生議会」を初開催		
3月	・「山田町地域公共交通網形成計画」策定	第4章 交通	P130
3月10日	・御蔵山復興祈念公園で「消防殉職団員慰霊之碑」除幕式挙行	第4章 津波伝承	P142
3月11日	・山田町犠牲者八周年追悼式を挙行 ・御蔵山復興祈念公園に「東日本大震災津波犠牲者慰霊碑」建立	第4章 津波伝承	P142
3月18日	・民間交番「山田地域安全センター」開所	第6章 鉄路のチカラ	P198
3月23日	・三陸鉄道リアス線が開通	第4章 公共施設 第5章	P134 P178
4月1日～15日	・山田町都市計画マスタープラン策定に関するアンケート調査を実施		
5月1日	・「飯岡コミュニティセンター」の利用開始		
6月1日～8月7日	・元号が「平成」から「令和」へと変わる		
6月3日	・「三陸防災復興プロジェクト2019」開催		
6月9日	・共同店舗棟「オール」に山田町社会福祉協議会の地域福祉活動拠点「ひなたぼっこ」が移転開所		
6月30日	・日本最長のトレイル「みちのく潮風トレイル」（総延長1025キロメートル）が全線開通。	第4章 観光業	P100
7月	・「山田町復興まちびらき」開催		
8月4日	・新設小学校の校名「山田小学校」に決定	第4章 教育	P108
9月19日	・田の浜地区防災緑地公園で「いのちを守る植樹祭in山田2019」開催		
9月29日	・岩手県立山田高等学校で岩手日報社の「碑（いしぶみ）」の記憶」を題材とする復興・防災学習を開始	第6章 岩手県立山田高校の取り組み	P220
10月12日～	・「織笠コミュニティセンター」新築落慶祝賀会開催		
	・台風19号による記録的豪雨で甚大な被害発生	第4章 台風19号の被害	P150

三陸鉄道リアス線が開通（3月23日）

みちのく潮風トレイル

学校給食センター完成式典（9月26日）

田の浜地区防災緑地公園「いのちを守る植樹祭」（8月4日）

「山田町復興記念まちびらき」開催（6月30日）

▶発展期Ⅲ◀

2020
令和2年

小中学校再編による新時代がスタート
新型コロナウイルス感染症流行のさなか
復興は次のステップへと進む

震災から10年。復興計画の中に位置づけられた「発展期」も大詰めである。

復興事業の多くがひと区切りを迎えたが、10年の間には修正や見直しが加えられたり、新たな関連事業がスタートするなどしたものもある。10年目がゴールではない。築かれてきたこれら土台の上に、暮らしをつくっていく人びとの、さまざまな活動によって、まちの「風景」は未来へ向かって彩られていく。

しかし、この年、日本を含む世界中は、新型コロナウイルス感染症の流行で混乱。各種の生産活動や経済活動は停滞し、移動や外出も制限され、予定されていた東京オリンピック&パラリンピックも延期になるなど、さまざまな分野に影響が現れた。

岩手県は、7月29日に至るまで、県内での感染者は発生しなかった。しかし、町を訪れる観光客は激減し、帰省を控える動きや各種集会・イベントが自粛となり、9月に予定されていた山田祭りも今年度の開催が見送られた。

そうした中でも、前年秋の台風19号で大きな被害を受けて運行が中止されていた三陸鉄道の再開や、同じく台風で被災していた「鯨と海の科学館」の一部再開など、住民の背中を押してくれるニュースもあった。

年が明けて令和3年3月11日は東日本大震災十周年を迎える。10年前に誓った復興への思いも新たに、山田町の歩みは続く。

山田町学校給食センターが始動(4月13日)

◀2020年（令和2年）

1月16日	・「マリンツーリズム山田」が、第15回「JTB交流創造賞」を受賞	第6章 やまだワンダフル体験ビューロー	P230
	・台風19号豪雨災害により運休していた三陸鉄道リアス線の陸中山田・津軽石間が運行を再開。	第6章 鉄路のチカラ	P198
1月22日～24日	・台風19号豪雨災害により被災した農地の「災害復旧事業説明会」を町内5カ所で開催		
3月11日	・山田町犠牲者九周年追悼式を挙行		
3月20日	・台風19号豪雨災害により運休していた三陸鉄道リアス線の陸中山田・釜石間が運行を再開。同日、全線運行再開記念イベントを開催	第6章 鉄路のチカラ	P198
3月31日	・荒川、大沢、山田北、山田南、織笠、轟木、大浦の各小学校7校と、豊間根中学校が閉校。各小学校は山田小学校として1校へ。豊間根中学校は山田中学校と統合。	第4章 教育	P108
4月1日	・山田町独自の支援である「就学前の保育料（0～2歳）を完全無償化」開始	第4章 医療・介護・福祉	P116
	・町内小学校3校・中学校1校で新学期がスタート　学校再編計画を実施	第4章 教育	P108
	・「まちなか循環バス」運行開始	第4章 交通	P130
4月6日	・山田小学校の開校宣言式開催	第4章 教育	P108
4月13日	・山田町学校給食センターが本格稼働開始	第4章 教育	P108
4月16日	・政府が新型コロナウィルス感染拡大に伴い緊急事態宣言を発令		
5月1日	・「山田町総合計画」策定にあたりアンケート調査を実施（～5月31日）		
6月	・台風19号の豪雨で大規模な土石流被害を受けた田の浜地区の復旧方針・復旧整備計画を策定	第4章 台風19号の被害	P150
7月15日	・台風19号豪雨災害により休館していた「鯨と海の科学館」が一部再開	第6章 鯨と海の科学館	P208
8月1日	・大島（オランダ島）の利用再開	第4章 観光業	P100

オランダ島の利用再開(8月1日)

台風19号の被害から一部再開した鯨と海の科学館(7月15日)

三陸鉄道リアス線が運航を再開(1月16日)

マリンツーリズム山田がJTB交流創造賞を受賞(1月16日)

「新たなふるさとへ、ありがとう。」

タレント 山田（やまだ） 邦子（くにこ）

A 訪問した仮設住宅にて、笑顔あふれる地元の皆さんと。

B 大杉神社神幸祭に参加した際の一枚。山田町の美しい海にふれる。

C "山田町復興ふるさと大使"に任命された山田邦子さんと佐藤信逸町長。

D 海の町・山田町自慢の新鮮で大ぶりなカキ。

あれから10年が経ったんですね。東日本大震災では多くの命が奪われ、行方不明者も。東京もコンクリートの道路が波打ち、壁が歪み、何とか自宅に戻ったものの、余震に怯え玄関ドアを開けたまましばらく中庭に立ち尽くし、しばらくしてから倒れた家具などを震えながら片付けましたが、翌日、またその次の日にテレビから続々と全国の被害の様子が中継され愕然としました。大地震の後の津波、火災。頭の中が真っ白になりました。家を失い、家族も失い、着の身着のまま命からがら逃げて助かった人々がそこにいました。

何かしなきゃ！　偶然、報道で『山田町』という地名を見つけ、山田？　これだ、ここに行こう！　と運命のように決めて地図で調べ、動ける友人たちに声をかけ、とにかく集められるだけの缶詰やお水、大人用オムツ、子供たちにはお菓子、おもちゃ、マットレスそしてお金。行った先で逆にご迷惑をおかけしないよう、いざとなったら寝泊まりが出来る4トントラックに積めるだけ詰め込み、自衛隊の方々のご迷惑にならないよう役場の方と連絡を取り、震災から約1カ月経ってから出発。学校など各避難所を回らせていただきました。

まず、釜石市に入った辺りの畑で漁船を発見。海からとても離れた場所なのに何故？　家の屋根にひっくり返った車が打ち上げられていました。柱だけ残ってくり抜かれた家屋。だんだん海岸に近づくにつれ車窓から見る悲惨な景色に皆、山田まで行かれるのだろうか？　不安もありましたが、1カ月の間になんとか車が通れる道が確保されていて、それだけでもどれほど大変だったのだろうと胸が熱くなりました。そして山田町に入ると、見渡す限りの焼け野原に絶句。震災から1カ月経っていたのにまだ辺りは焦げ臭く、海には流された家屋が沈み、漁協も何も無かった。家も家族も失い、それでも避難所の人たちはそれぞれの場所でルールを作り、がんばっていました。

私は初めての事でどう接したらよいのか戸惑っていると『邦ちゃん、ラジオ聴いてるよ』『遠かったでしょ？　よく来たね』山田町の皆さんの方からどんどん話かけてくださり、『またまた流れて来た畳にしがみ付いて助かったんだ』とか『逃げる時に転んで、その時の傷がこれ』など、ひざを突き合わせ体験談を聞きました。命からがら生き延びて1カ月我慢していた気持ちが一気に溢れ出し、泣いたり笑ったりしながら話す皆さんの気持ちを受け止めました。ひとつの避難所に行った時『何か歌ってよ』と言われ、不謹慎なのでは？『いーからいーから、ほらほら、はい皆さん拍手～！』と言ってマイクを渡されアカペラで歌ったりもしました。そして帰る時『ありがとうね、また来てね』えっ？『次はいつ来る？』と言われ咄嗟に『来月』と答え、不足している足りない物を翌月運びました。だんだん暑くなる頃で、小さな扇風機や時計、鏡、配られたお弁当や食べ物が好きな時に温められる電子レンジなど。

何度か行くうちに皆さんに『おかえりなさい』と言われるようになり、ついに〝山田町復興ふるさと大使〟に任命され、私にふるさとが出来たのです。嬉しかった。ありがとうございます。行く度に町が少しずつきれいになり、人の生きる力の強さを知りました。

海の町・山田の美しい海は、徐々に蘇り、カキ、ホタテ他美味しい特産品もネットでも買えるようになりました。男衆が神輿を担いだまま海に入り、神主さんと共に沖の神さまにお祈りをする大杉神社神幸祭にも参加させていただきました。私は釣りが趣味で海が大好きなので、念願の山田の海に出られてとても嬉しかったです。釣りもさせて頂きました。温泉もある、音楽も、シイタケもマツタケも絶品。でもなんと言っても山田町の復興を支える一番は皆さんの〝笑顔〟です。どんな時でも笑顔を忘れない山田町とめぐり逢えて私は幸せです。行く度に元気を頂きありがとうございます。これからも一緒に歩ませてください。

Profile

東京都出身。映画、ドラマ、舞台、バラエティー、ラジオDJ、小説執筆など多方面で活躍中のタレント。同姓であることが縁となり、震災直後から避難所に物資を届けるなどの支援を続ける。2013年、「山田町復興ふるさと大使」に任命。2020年、東京オリンピック・パラリンピック聖火リレーの山田町を走るランナーに内定。がんに対する知識と理解を呼びかけるチャリティー団「スター混声合唱団」の設立や厚生労働省のがん検診率向上委員を務めるなど、がん啓発活動にも力を入れている。

第四章

再生と創造 未来を築く

産業分野別復興状況

「山田町復興計画」は、発災から10年目をひとつの到達地点として、
行政と住民たち、そして内外の多くの人々や機関・団体の支援・応援を得ながら各種の事業を展開してきた。
「復興」はスピード感を求められた。同時にそれは、着実で確かな積み重ねでなければならない。
「復興」が目指してきたものは、誰もが安らげるふるさと山田町の再生と創造である。
なりわいを取り戻し、失った以上のものを未来の中に獲得していくために。
一人ひとりが輝きながら、安心して暮らせる郷土であるように「復興のまちづくり」は、まだ続いていく。

Photo essay

わたしの一枚

～私が見つめた復興の十年～

復興の夜明け

復興まで長い年月が経ちました。
震災のことを忘れず、
これ以上の災害が起こらないよう
願いを込めて合掌。

佐々木（ささき） 一彦（かずひこ）（山田町長崎　80代）

撮影日　2019年5月30日
場　所　山田湾

基盤整備

東日本大震災からの復興――。その第一歩は、大きな津波被害を受けてしまった「まち」の土地利用計画を見直し、産業と暮らしの礎となる諸施設を新たに集積していくための「基盤」を整備していくことだった。「山田町復興計画」の基本理念に基づいてスタートした「まちづくり」も、10年を経て、今、新たな局面へと向かう。

つくりあげてきた確かな基盤の上に町民たちの情熱と力を積み重ねる山田らしい未来を拓いていくために

発災から１カ月後。陸自ヘリで柳沢付近上空から山田漁港方面を撮影

発災から9年後。ドローンで柳沢付近上空から見た山田漁港方面

まちづくりのグランドデザイン

平成23年（２０１１）12月、町は「山田町復興計画」を策定し、10カ年の復興ステップを、「まちづくりの基礎となる土地や基盤施設の再整備と各種活動を始動する『復旧期』」、「新たな土地への建設開始と各種活動を本格始動する『再生期』」、「町の成熟化と広域的な連携による各種活動を拡大する『発展期』」のおおむね3年ずつの間隔で設定した。

復興計画の策定に当たっては、平成23年（２０１１）7月に国が示した「東日本大震災からの復興の基本方針」、同年8月に県が策定した「岩手県東日本大震災津波復興計画」との整合性を図りながら進めてきた。また、住民懇談会や地区別懇談会の開催を通じて住民の意見を取り入れるとともに、地域や各種団体の代表者、学識経験者等からなる「復興計画策定委員会」での協議・検討を重ねた上で決定するというプロセスで進められた。

計画の大命題を「二度と津波による犠牲者を出さない」とし、基本理念として「津波から命を守るまちづくり」「産業の早期復旧と再生・発展」「住民が主体となったまちづくり」を掲げ、「インフラ」「産業」「医療・福祉・介護」「教育」など分野ごとの課題を解決する施策や方針も示した。

これら、各種の政策を展開していくためには、まず、その土台となる土地を埋め尽くしている「震災がれき」を処理する必要があった。

津波と、それに伴って発生した火災等により、山田町は中心市街地をはじめ、その姿は大きく変わってしまった。震災直後は、倒壊・延焼した家屋の木材、漁港関連施設等のコンクリートがら、走行不能となった車両、津波堆積土砂など大小さまざまな震災がれきでまちが埋め尽くされていた。

新たなまちづくりを進めるためには、これらの撤去から始めなければならない。また、並行して土地の利用方法など町の「グランドデザイン」を決めていかなければならない。住宅地としての高台の選定や地盤のかさ上げ、商業施設や公共施設の建設、新しい道路の建設などまちの土台となる「基盤整備」を着実に計画的に進める必要がある。

そして、そのためには用地の買収など事務的な手続きも必要だった。

■ 都市の骨格形成イメージ

「復興整備計画」を策定

震災が発生した平成23年（２０１１）3月は、平成22年度の末だった。同年4月から平成23年度がスタートしたが、年度が替わったことなど意識する間もないまま、大急ぎで行われたのは、道路の啓開や電気・水道などインフラ設備の復旧、震災がれきや震災ごみと呼ばれるものになってしまった家屋や壊れた防潮堤などの撤去や処分などだった。

平成23年度は復興計画の策定を進める傍ら、これら事業が展開された「応急復旧段階」であった。

そして平成23年（２０１１）12月の復興計画策定後は、復興ステップの第一段階である「復旧期」としての各種施策を開始した。

平成24年（２０１２）3月29日、町は、その具体的な事業内容を示す「山田町復興整備計画」を作成した。

復興整備計画は、復興に向けたまちづくりや地域づくりのために必要となる市街地や農業生産基盤の整備などを行うための各種事業、すなわち「復興整備事業」を記載することができる計画である。

山田町復興計画が網羅的であるのに対し、復興整備計画では、事業の実施に際して円滑かつ迅速な実施をサポートするための各種の特例措置を適用することができる。

具体化された事業を進めるためには、開発許可（都市計画法）や農地転用許可（農地法）、保安林解除などの手続きが必要となる。この計画に記載された事業については、国・県・市町村・学識経験者で構成された「復興整備協議会」の承認を得ることで、各種特例措置の手続きがワンストップで処理され迅速化が図られるという利点がある。これまで20回の協議会が開催された。

UR都市機構とともに進めたまちづくり

山田町復興計画を策定した翌月の平成24年（２０１２）1月には、土木・建築等の各分野にわたる専門的技術者を有する独立行政法人・都市再生機構（以下、UR）と「東日本大震災にかかる復興整備事業等の推進に向けた覚書」を結んだ。

URは、大都市や地方中心都市における市街地の整備改善や賃貸住宅の供給支援などを行う法人である。URは、震災から間もない平成23年（2011）4月から山田町に応援職員を派遣、被災状況調査をはじめ、復興計画の策定や住民合意形成のための住民説明会など、町と歩調を合わせて復興への取り組みを開始した。

「覚書」締結後の平成24年（2012）3月には、町はURと「東日本大震災に係る山田町復興事業の推進に関する協力協定書」を締結。大沢・山田・織笠の3地区の復興整備事業に着手した。

被災した広大な市街地の復興計画を進めるには、土地区画整理事業や防災集団移転促進事業等の多くの事業を進める必要があった。

URとの協働で復興事業がスタート（山田町震災復興事業着手式／平成24年3月2日）

町とURは、被災者の生活再建を最優先課題とし、新たな宅地の整備と災害公営住宅の建設を急ぐとともに、コンパクトで利便性の高い中心市街地の形成、命をつなぐ道路整備、生活再建意向の変化に伴う計画の修正や関係機関との事業間調整など、その都度、町と協議を重ねて早期復興を目指して復興事業に取り組んできた。

URとの協定により委託した事業費は、8年間（平成24～令和元年度）で約661億円。大沢・山田・織笠地区の住宅地や高台道路整備、陸中山田駅周辺の中心市街地や山田地区高台の防災拠点整備を実施、また、災害公営住宅の建設についても208戸を整備するなど、成果を残した。

土地の用途と配置を決める

「新たなまちづくりのための基盤をつくる」とは、グランドデザインに従って土地の用途を決め、住宅地や商業地、産業用地、道路、公園、各種公共施設などの配置を決めていくことだ。

復興計画に記された土地利用構想の概要は以下の通りである。

①居住地のうち、被災を免れた既存集落は極力現在の配置を維持する

②居住地のうち、被災した区域の一部は、市街地開発事業などによりかさ上げを行い、新たな住宅地として配置する。

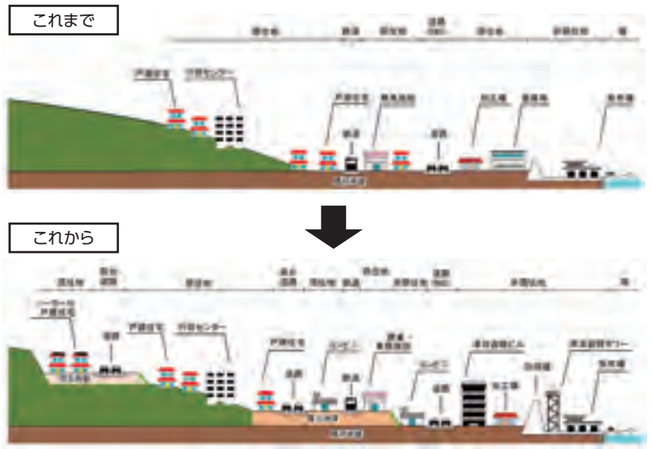
③居住地のうち、津波浸水被害が発生した地域や災害危険区域など、居住に適当でないと認められる区域内にある住居は、防災集団移転促進事業などにより、既成市街地や既存集落との関係に配慮しながら丘陵部で切り土造成を行い、新たな住宅地を確保する。

④中心市街地については、陸中山田駅周辺を中心市街地と位置付け、商店や飲食店、サービス施設や宿泊施設などの施設を誘導し、にぎわいのある空間づくりを目指す。

⑤漁港および漁業関連施設については、原則として現在の配置を生かし、漁港および関連施設を復旧する。

⑥国道45号沿いを産業軸として位置付け、沿道型商業・サービス施設、水産加工施設、流通施設などを誘導する。

■ 防災施設配置イメージ



⑦産業拠点（水産加工・流通等）は、漁港やインターチェンジなどとの関係に配慮しつつ整備を検討する。

⑧オランダ島などの観光資源との関係に配慮し、海に近い幹線道路沿いに観光施設（拠点）を配置する。

⑨三陸沿岸道路沿いの安全な高台に防災拠点を整備する。

⑩浦の浜周辺を観光レジャー拠点として位置付け、公園や海水浴場、キャンプ場などの再生や新たな観光施設の整備を検討する。

山田地区の高台に整備した防災拠点。山田病院（右）と山田消防署（左上）・山田交番（左下）

⑪農地については、大沢地区、織笠地区、大浦・小谷鳥地区などの既存農地の再生を図るとともに、河川沿いや海岸付近などの低地部（移転元）に新たな農地の配置を検討する。

海辺から高台へ。土地利用方針

こうして、各事業を開始した。その後も進捗状況や経年的諸事情の変化、各種計画との整合などに応じて、随時関係機関や地権者などとの協議・調整、交渉などを重ね、都市計画の決定・変更や各種調査、測量・設計などを行ってきた。

復興事業の実施・展開は、山田町の未来を創る一大事業であり、その第一段階となる復旧期は「まちづくりの基礎となる土地や基盤施設の再整備と各種活動の始動期」と位置付けた。

町の「土地利用方針」は、次のように明快なものとした。

海とともに暮らし、かつ津波から生命を守るために、海からの「近さ」は確保しながらも、山に向かって段階的に変化する土地の「高さ」を考慮した土地利用配置を基本とした。

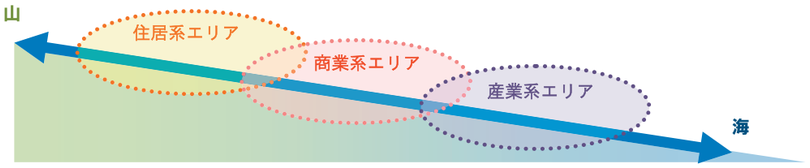
町の活力を支える水産業を中心とする工場・事業所が集積する産業系エリアは、山田湾および船越湾に面した低地部に。

人々が交流し、まちのにぎわいを生み出す店舗や飲食・宿泊施設等が集積する商業系エリアは、国道45号沿道や陸中山田駅前などに。

また、これら津波による浸水が想定される低地部には、高台へ向かう避難道路を配置する。

住居系エリアは、低地部の産業・商業系エリアとの連続性にも配慮しつつ、津波に対して安全を確保し得る高さに配置することを基本とした。

図　土地利用配置のイメージ



「コンパクト」なまちづくり

こうして「山田町復興計画」の理念である「津波から命を守るまちづくり」のための第一段階として開始したものは、県事業として進められる防潮堤の整備と歩調を合わせる形での「かさ上げ」と「高台移転」だった。

津波を防ぐのは、第一に防潮堤だが、万が一、防潮堤を越えて津波が押し寄せてきた場合は、地盤のかさ上げや避難対策の強化（避難路の整備など）により対応する。

そして高台移転は、浸水の恐れのない高い土地に住宅を移すことである。

また「山田町復興計画」の基本理念に基づく「都市の骨格形成（まちの空間イメージ）」では、「既存市街地・集落を基本にしたコンパクトなまちづくり」を目指すことを掲げている。

「コンパクト」の考え方は、既存集落とできるだけ隣接する形で高台団地や災害公営住宅を整備し、従来の地域コミュニティーのつながりを重視すること。過剰に山林を切り開くなどして市街地を広げていくのではなく、現存する集落の近くに新たな住宅用地を整えて、まとまりのある「まち」をつくっていくことだ。

自然環境と共存するまちづくり

地区別の住宅地の整備方針として、山田・織笠地区は、地盤かさ上げと新たな高台造成の二つの手法により行う。

船越・田の浜・小谷鳥地区は、既存集落に隣接した場所に新たな高台団地を造成する。

大沢・大浦地区は、かさ上げによる宅地整備を基本とし、新たに造成する高台団地は防潮堤などの公共施設整備に伴う代替地としての整備に限定。

こうして、大規模な土地のかさ上げや山林の切り崩しによる整備は、極力最小限に抑える計画で進められた。

災害公営住宅の整備に関しては、当初７７７戸を整備する計画で進められたが、住民の意向変化を反映させた形で最終的に６４０戸を整備することとなった。内訳は、集合住宅が５０７戸、戸建住宅が１３３戸で、各地区の高台団地やかさ上げ整備地など、利便性や安全に配慮した位置に建設をした。

先述の都市の骨格形成には、もうひとつ「豊かな自然と調和・共生する美しいまちづくり」というコンセプトがある。復興のためとはいえ、震災以前からある集落とコミュニティーを生かしながら過剰な開発を避けることにより、海と山が隣り合い、森の水が海の生命を育む本町ならではの豊かな自然環境と景観が守られている。

復興後の中心市街地

海と緑の景観に調和する織笠第一団地

住まいと暮らしを復興する

基盤整備における大きな主題のひとつは「住まいの復興」すなわち生活の基盤となる宅地・災害公営住宅を整備することである。

町は平成24年（２０１２）４月、各地区の復興関連事業スケジュールを公表し、住宅再建が開始できる時期を示した。

最も早く土地区画整理事業に着手できたのは、国土調査がすでに終了していた織笠地区で、事業が認可されたのは平成25年（２０１３）５月だった。次いで山田地区（25年11月）、大沢地区（12月）と続いた。

山田地区の高台造成では、日量３０００立方メートルの土砂の搬出が可能な大型ベルトコンベヤーを設置、土砂の運搬と搬出を効率化することで住宅団地の早期完成を目指して進めていった。

平成26年（２０１４）６月には大沢地区の土地区画整理事業地内の基礎撤去を開始。同年７月には山田地区でのかさ上げ工事もスタートした。

平成25年度内には、他の地区でも防災集団移転促進事業のための土地造成などが大きく動き出し、海沿いでも山手でも、風景はどんどん変化していった。

そして、平成27年（２０１５）２月には織笠地区の高台団地で申し込みの受け付けを開始した。

駅周辺を中心としたにぎわいの創出

宅地整備と同時に、山田地区の商店などを陸中山田駅の東側周辺に集約する方針も示している。

震災以前の山田地区は、中央町、八幡町、川向町、境田町付近に住宅街と商店が混在していたが、復興事業では、住宅地はかさ上げ地や高台への移転を推奨し、陸中山田駅前と国道45号に挟まれたエリアを「まちなか再生区域」と位置付け、これまで広範囲に分散していた商店や図書館、郵便局や銀行、ＪＡなどをここに集約することとした。

また、災害公営住宅である山田中央団地（１４６戸）も隣接させ、利便性を確保する。

10年目を迎えた現在の駅東側のエリアは、駅と隣接する形で、図書館機能を持ち合わせた山田町ふれあいセンター「はぴね」があり、駅前ロータリーを挟んで戸建て店舗や郵便局が造られている。

また、駅前通りを隔てた海側には、共同店舗棟と戸建店舗が並び、その北側には中央公園と、金融団として銀行2店舗と信用金庫、ＪＡがある。さらに北へ行くと、コンビニエンスストアや量販店、飲食店などが連なっている。

ＪＲ山田線の復旧については、バス高速輸送

大型ベルトコンベヤーを設置して、効率よく土砂を搬出

三陸鉄道陸中山田駅付近に金融機関の店舗が立ち並ぶ

システム（ＢＲＴ）での復旧が提案されたが、沿線４市町（宮古市、山田町、大槌町、釜石市）は、新たなまちづくりは鉄路復旧を前提としていることなどの理由でこれを拒否し、あくまでも鉄路での復旧を求める形で要望を重ねた。

そして、東日本大震災発生から３年９カ月後の平成26年（２０１４）12月、鉄路による復旧とＪＲ山田線の宮古・釜石間が三陸鉄道へ移管されることが決まった。復興計画が、復旧期から再生期へと移り変わろうとしていた時期、この報せは、復興への大きな追い風となった。

集落の孤立を防ぐ道路網を整備

基盤整備のもうひとつの柱は道路整備である。

町は長い間、隣接する市町と連絡する道が、ほぼ国道45号に限られるという状態が続いて来た。

南から西部にかけては大槌町に接し、北部は宮古市と、北西は旧新里村と旧川井村（いずれも現在は宮古市）に接しているが、西や北西へ抜ける道はなく、南北に続く国道45号だけが山田町の陸の入り口と出口である。

例外として、重茂半島を経由して宮古市津軽石地区へ至る主要地方道重茂半島線と、関口地区から豊間根地区へ抜ける町道があるが、いずれも幅員が狭く、流通の幹線道路としては心もとない。

また、山田町内でも、船越半島の田の浜、大浦、小谷鳥地区へは、半島付け根の低地部の道を通るため、東日本大震災では町道が被災。浸水により孤立する格好となった。

町全体および町内の集落を孤立させないことが、新しい道路整備においては最優先の課題となった。

避難道路ともなる町道整備

山田地区では、国道45号が津波で被災した場合にも寸断されず機能を果たすことができる道路として、織笠第１団地付近から山田インターチェンジ（ＩＣ）までを結ぶ「町道細浦・柳沢線」（延長3330メートル）の整備を計画した。平成30年（２０１８）12月、ルート上の桜山トンネル（336メートル）の南側で開通式が行われた。これにより国道を経由しなくても物資が搬送できるほか、避難経路も確保された。

船越半島へ向かう道は鯨と海の科学館と浦の浜海水浴場の間に、高さ11・６メートルの防潮堤を整備し、その上に町道を通した。また、その先の丁字路を右折して田の浜方面へ向かう道も高台を通る道として新たに整備。国道45号との連絡を確保している。

国道45号は、震災前のルートを基本としつつも、防潮堤の整備や市街地復興と併せて部分的に再整備が行われた。

岩手県が「復興関連道路」として位置づけ、整備が進められた主要地方道重茂半島線は、津波浸水しないルートに変更された。他の幹線道路や補助幹線道路も、各地区の街区や骨格を形成する形で配置した。

また、国道45号とは別に、沿岸の市町村を結ぶ新しい道路として、高規格幹線道路である「三陸沿岸道路」が整備されている。

山手に整備された町道細浦・柳沢線

津波浸水しないルートに整備された主要地方道重茂半島線

いのちをつなぐ道――三陸沿岸道路

この道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長３５９キロメートルの自動車専用道路だ。東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクト（課題解決のための先導的なプロジェクト）に位置付けられた「復興道路」である。北から八戸久慈自動車道、三陸北縦貫自動車道、三陸縦貫自動車道の三路線があり、三陸沿岸道路とはこれらの総称だ。

同路線は、まず平成14年（２００２）８月２日に山田南ＩＣ・山田ＩＣ間の７・８キロメートルが「山田道路」として部分開通した。

次いで、平成29年（２０１７）11月19日には、山田ＩＣ・宮古南ＩＣ間の14キロメートルが、平成31年（２０１９）１月12日には大槌ＩＣ・山田南ＩＣ間の８キロメートルが開通、さらに同年６月22日、釜石北ＩＣ・大槌ＩＣ間の４・８キロメートルが開通したことで、山田町は釜石市および宮古市とつながった。

さらに令和２年度中には、釜石・仙台間、令和３年中には宮古・久慈間も開通予定であり、文字通り、三陸地方を貫く自動車専用道路となる。

上り線への利用しかできない山田北ＩＣもフル規格化が待たれる

未来を見定める「復興まちづくり計画」

「総合計画」は、地方自治体の全ての計画の基本となり、地域づくりの最上位に位置付けられる計画である。町は、その計画に即してつくられる都市計画の基本的な方針である都市計画マスタープランに基づき、土地利用や都市施設の整備など都市計画の決定・変更を行ってきた。

東日本大震災から４年が経過し、山田町復興計画で掲げた復旧期から再生期に向かう節目の時期を迎えた平成27年（２０１５）３月、町はこの間進められてきた復旧・復興事業の進捗を振り返り、土地利用や都市施設、市街地開発等の各種事業を計画的に進めるため、都市計画マスタープランを補完する「山田町復興まちづくり計画」を策定・発表した。

まちづくりの主役は町民

この山田町復興まちづくり計画の策定に当たって、町では「町民が期待するまちづくりの方向性」について住民アンケート調査を実施し、今後の復興まちづくりへの取組に関する住民の要望や意見を把握した。

回答では、復興まちづくりで重点を置くべき内容として「快適な住宅地の形成」が最も多く、34・１％を占め、「便利な交通網の整備」が17・９％、「活気ある産業地の形成」が16・９％などとなっている。

「防災」「交通」「景観」の各分野の対策については、「防災関連」の対策について全般的に重要との回答率が高く、特に避難対策が最重要とされた。

交通に関しては、鉄道復旧が最も重視され、バスを重要とする割合は比較的低い。

景観について、自然景観を重要とする割合は比較的高いものの、建築物や看板等の規制について重視する向きは少ない。

そして「良好な街並みを形成するためのルールづくり」については、「行政がリード」と回答する割合が31・８％、「地域が中心」との回答も30・０％と拮抗している。

山田町復興計画には、理念のひとつとして「住民が主体となったまちづくり」が掲げられている。

そうして、良好な住環境を維持するためには、

まさに町民がまちづくりの主体となって積み重ねていかなければならない。

復興から再生へ「第9次山田町総合計画」

全国的に進む少子高齢化・人口減少は、地域の担い手や各種産業における後継者不足など深刻な問題となっている。本町においても例外ではなく、東日本大震災以降、特に顕著化している。

町が復興から再生へと進み、さらに、次世代を担う子どもたちへと引き継がれるまちを創り上げるため、「第9次山田町総合計画」（計画期間・平成28年度～令和7年度）を平成28年（2016）3月に策定した。復興事業の推進に主眼を置きつつ、結婚・子育て支援の実施、移住コーディネーターによるUIターンの促進、漁業担い手の確保・育成に対する支援など、出生率の向上や移住の促進に向けた取り組みにも力を入れる計画としている。

この計画の折り返しとなる令和2年度は、最優先課題として取り組んできた「震災からの復旧・復興」が節目を迎えることとなり、この復興の先を見据えた「第9次山田町総合計画」の後期計画（令和3～7年度）を発行予定である。

また、復興後の新たに目指すべき町の将来構想を示す「都市計画マスタープラン（目標達成を令和22年度に設定）」は、令和3年3月の策定に向け進めているところである。

境田町上空付近から三鉄陸中山田駅方面を望む

災害廃棄物の処理について

地震と津波、それに起因する火災などにより、東日本の太平洋沿岸部を中心に、13都道府県239市町村においては、約2000万トンの災害廃棄物と、6県36市町村においては、約1100万トンもの津波堆積物が発生した。

本町で発生した災害廃棄物（津波堆積物を含む）は約48万3千トンと、膨大だった。町の復旧・復興事業を進めるためにも、また、火災の発生や悪臭等による生活環境の悪化を解消するためにも、早期に撤去・処理することが求められた。

これらの災害廃棄物は、町独自で処理を進めるには、途方もない時間と労力が予想されることから、岩手県に災害廃棄物の処理に関する事務を委託し、連携して実施することとなった。

発生した災害廃棄物は、船越地区浦の浜の船越公園が一時仮置場に指定された。搬入される災害廃棄物は、コンクリートがらや金属くず、被災した家屋の建材、津波堆積土など様々ながれきが分別されず搬入される状況であったことから、まず分別から始めなければならなかった。岩手県は災害廃棄物分別処理施設を平成23年度に建設、平成25年度までの3年間で、コンクリートがら17万8千トン、不燃系廃棄物17万2千トン、津波堆積土5万9千トン、家屋建材等可燃物4万6千トン、金属くず2万トンなどの災害廃棄物を処理・処分した。

また、災害廃棄物の処理については、県内外の民間施設や自治体施設で受け入れていただいたほか、全国の自治体による広域処理も進められた。福島原子力発電所の被災に伴う災害廃棄物の放射能汚染の風評がある中で、静岡県内の5市（静岡市、浜松市、島田市、富士市、裾野市）、富山県の「富山地区広域圏事務組合（富山市、滑川市、立山町、上市町、舟橋村）」、「新川広域圏事務組合（魚津市、黒部市、入善町、朝日町）」、高岡市から受け入れを承諾していただいた。これら自治体の協力もあり早期処理が図られ復旧・復興事業の大きな力となった。

	市町村名	処理品目	処理量
静岡県	静岡市、浜松市、島田市、富士市、裾野市	柱材・角材	1,869トン
富山県	【富山地区広域圏事務組合】 富山市、滑川市、立山町、上市町、舟橋村	可燃物	1,256トン
	【新川広域圏事務組合】 魚津市、黒部市、入善町、朝日町		
	高岡市		

ボランティアダイバーによる海中がれき回収作業

津波が引いたあとの海中には、建材や鉄骨など家屋・施設等の残骸、生活用品、漁具といった数多くの震災がれきが沈んでいた。これらを放置することは、景観を損なうことはもとより、腐食などによる海中環境の悪化を招く恐れもあるほか、また悪天候時には浮上して、船や漁網、養殖いかだの運行・操業に支障をきたし、漁業再開の大きな障害となる。

その状況に対し、有志ダイバーたちによって結成された「NPO法人ブルーサポートいわて」をはじめ「株式会社SSIジャパン」に関連するボランティアダイバーたちが、本町を幾度も訪れ、地域住民や漁協、漁師たちとの協力のもと、山田湾を中心としたエリアにおいて海中がれきの回収作業を行ってくれた。

両団体は、震災の翌年、平成24年（2012）から同28年（2016）まで、復興支援事業として継続的に海中がれき撤去ボランティアを実施し、毎回2トントラック数台分のがれきを回収するなど、海と漁業の再生に大きく貢献。その活動に対し、町は、両団体に対して感謝状を贈呈した。

災害廃棄物の約 80%は再生利用されている

漁　業

震災後、町と漁協は水産施設や港湾施設、定置網などの復旧を急ぎ、
水産業は震災前の姿に戻りつつある。一方、後継者問題など従前の課題も大きく浮上。
漁業者を支援する取り組みや各種プランを打ち出しながら、
ふるさとの海と産業の復興はこれからも続けられる。

私たちの暮らしの風景は これからもずっと 宝の海とともにある

養殖いかだや浮き球が並ぶ山田湾の代表的な景色

基幹産業の復興が創生のカギ

漁業は山田町の基幹産業である。基幹産業とは、地域の経済活動を支える最重要の産業分野であり、かつ、そこに従事している人（就業者）がもっとも多く、周辺への波及効果も大きな産業のことである。

本町には、山田湾と船越湾があり、さらに沖合には、北からの寒流・親潮、南からの暖流・黒潮、そして津軽海峡を通って太平洋に流れ出す津軽暖流という三つの海流がぶつかりあう世界屈指の好漁場「三陸沖」の大海原が広がる。

人びとは、その海に船を浮かべ、魚を捕らえ、あるいは貝類や海藻などを養殖しながら海辺に生き、暮らしの風景を描き続けてきた。

産業を育て、地域を成り立たせるための第一のインフラは「地形」だ。「気候風土」と言い換えることもできる。地域の特性は、その土地の地形（海や大地）と自然環境（気象）にあり、そこに暮らす人びとが、与えられる恵みを生かす営みが、個性ある地域をつくる。

漁業や農林業は、その土地ならではの地形や環境の中から「自然の恵み」を得る。それらをそのまま販売し、あるいは加工という付加価値をつける工程を経て流通や販売へと乗せていく。

第一次産業は、商品経済の源流に位置する産業であり、そういう「基幹」の意味もある。

山田町の暮らしの原点である海と大地で営まれるこれらの産業が再生され、かつて以上の発展を続けていくことこそが復興であり、地域の創生へと続いていく。

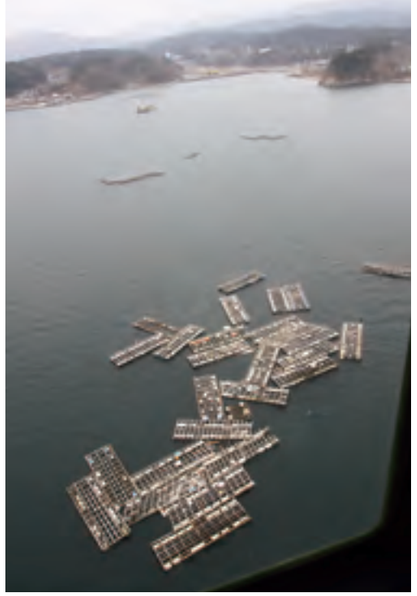
津波被害の規模

東日本大震災津波は、本町沖合にあった定置網や、湾内の養殖いかだやはえ縄、さらに漁船や漁港施設、漁業関連施設、水産加工会社の工場など、水産業に関連する諸施設全般に壊滅的被害をもたらした。

発災から 17 日後の船越漁港と田の浜地区（3 月 28 日）

発災から 12 日後の山田漁港

山田漁港でがれきを撤去する自衛隊の重機



津波に流されぶつかり合って漂う養殖いかだ

海辺を見渡せば、誰もが惨状にため息をつくしかない状況だった。しかし、水産業の復活なくして町の再生はない。

第一次産業は、季節の収穫物を追いかけていくなりわいである。復旧が一季遅れれば、収穫も一年待つことになる。

町内の漁業協同組合である「三陸やまだ漁協」と「船越湾漁協」の二団体では、それぞれが復旧計画を策定。また、町と県は、それぞれが管轄する漁港や防潮堤の復旧と再整備を急いだ。

津波による被災状況を、大まかにまとめると次の通り。被災前の数値は、平成22年（２０１０）

各漁港の被害状況（震災記録誌より）

		山　田	大　沢	船　越	大　浦	織　笠	小谷鳥
漁港施設	防波堤	70.4ｍ	961.2ｍ	870.9ｍ	175.0ｍ	628.0ｍ	347.6ｍ
	護　岸	283.3ｍ	264.4ｍ	245.1ｍ	413.9ｍ	287.0ｍ	99.3ｍ
	岸　壁	875.7ｍ		1511.8ｍ	180.6ｍ	33.0ｍ	
	物揚場			275.0ｍ	223.0ｍ	641.6ｍ	175.6ｍ
	船揚場		100.0ｍ		143.5ｍ	144.2ｍ	119.5ｍ
	突　堤			20.0ｍ			
	道路（橋梁）	1876.1ｍ	4287.2ｍ	1682.7ｍ	2104.0ｍ	306.6ｍ	252.0ｍ
	その他			航路・泊地など			泊地
海岸施設	防潮堤	672.5ｍ	875.0ｍ	829.7ｍ		1328.7ｍ	367.0（県営）
	水　門	1基	2基	1基	6基	2基	樋門1基（県営）
	陸　閘	17基	5基	4基	10基	9基	
	その他		防災看板他	防災施設他	防災標識等		
漁村施設	集落排水施設他		汚水処理場1棟		汚水処理場1棟		
被害額（百万円）		1,884	1,387	5,994	1,473	5,517	4,346

※県、町の資料（平成23年5月）を基に作成

時点のものである。

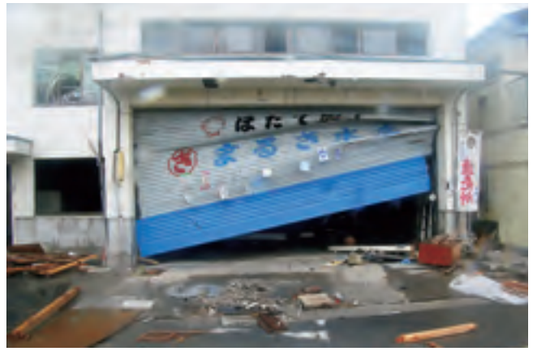
▼町には1992隻の漁船が登録されていたが、津波により、このうちの9割に相当する1791隻が流失や転覆、沈没、破損するなどの被害を受けた。

▼また、町の漁業の主力ともいえる養殖業では、カキ・ホタテの施設としていかだ式1505台、はえ縄式2667台、ワカメの養殖施設531施設の合計4703施設が大規模・広範囲に被災。

▼町内には山田、大沢、船越、大浦、織笠、小谷鳥の6漁港がある。それぞれ防波堤や護岸などの漁港施設、また防潮堤や水門などが大規模に被災した。

▼水産加工業では、個人を含む約30社のうち、1社を除いて被災。防潮堤から10メートルほど内側にあった加工会社の本社施設なども津波の直撃を受けるなどして半壊以上の被害を受けている。

壊滅してしまった小谷鳥地区の住宅地と漁港


シャッターが破壊された水産加工会社

漁港と海岸保全施設の復旧と再興

町が管理する織笠、小谷鳥の2漁港については、町が復旧工事を行い、県営である大沢、山田、船越、大浦の4漁港の復旧工事は県が実施した。

町では、まず、支障物除去事業を平成23年度に完了させ、あわせて町が管理する織笠・小谷鳥両漁港の復旧工事として「漁港施設災害復旧事業」を開始。これは平成29年度まで継続された。

また織笠漁港の海岸保全施設（防潮堤）を整備する「海岸保全施設災害復旧事業」は、令和元年度に完了した。

水産業は、山田町のなりわいを支えてきた産業であるだけに、復興事業の対象となる施設や設備も多く、場所や面積なども大きく広い。復旧に係る事業や施策の展開は実に多岐にわたった。

海を再生し未来へ伝える事業も

いわゆる「ハード面」から事業を振り返ると、復興計画に位置付けられた「復旧期（おおむね平成25年度まで）」には「漁港施設災害復旧事業」「漁港施設用地整備事業」などが行われた。

また、平成25年度には、漁港や漁場など海中に沈んだがれきの撤去や処分、打ち上げられたごみの回収処分などを行う「漁場漁港環境整備再生（産みの港づくり）事業」といった「海そのもの」を再生させるための事業も展開された。

海は、本町の庭であり、顔であり、多彩な恵みを届けてくれる大切な場所である。この場所を常に保全し、いつまでも美しいまま未来へと残し伝える必要がある。

なお、被災した水産加工業者は、修繕した工場や仮工場、仮設店舗などで事業を再開したほか、水産加工施設については、山田漁港を管理する県に対し、早い段階で約80センチメートルの用地かさ上げ工事を依頼、山田魚市場周辺に集約が図られた。

こうした基盤整備とあわせ、就業者への支援や、それに伴う施設や機能回復を支援する施策も多く実施・展開されてきた。

被災した漁船や漁具、定置網などの復旧に要する費用の一部を補助する「共同利用漁船等復旧支援対策事業」、被災した漁業関連機器や漁業関連施設などの復旧費用を一部補助する「水産業共同利用施設復旧支援事業」や「水産業経営基盤復旧支援事業」などが平成23年度から始まった。

海で働く「人」への支援

水産業の周辺には数多くの施設や機器類がある。これらを実際に稼働させ、使用していく漁業者への各種支援も実施された。

霞露ヶ岳を正面に望む山田漁港

外洋に面した小谷鳥漁港。防潮堤の整備が完了した

平成23年度の「水産団体機能回復支援事業」「漁業協同組合等機能回復支援事業」「製氷保管施設早期復旧支援事業」などは、応急的な機能回復のために真っ先に行われた事業である。

また、岩手県信用漁業協同組合連合会より、津波によって大きな損害を受けた漁業者への支援として「東日本大震災漁業経営復興特別資金」の貸し出しが行われ、それに付随する「東日本大震災漁業経営復興特別資金利子補給事業」を町が実施した。

漁業者への同様の支援策としては、平成24年度にカキやホタテの稚貝の費用を補助する「養殖用種苗購入支援事業」、平成24年度から開始した作業の共同化等により養殖業の生産再開に必要な経費を支援する「がんばる養殖復興支援事業」、平成25年度から開始した「がんばる漁業復興支援事業」、平成25年度から開始した「漁具等倉庫復旧整備支援事業」などがある。

海へ出る漁業者ばかりではなく、水産加工業者が施設や設備を復旧・整備するための「水産業共同利用施設復興整備事業」も平成25年度まで継続された。

平成25年度には、東京電力福島第一原発事故に関連する「水産物風評被害対策事業」も行われた。

なお、県では現在も、広報紙や公式ホームページなどを活用し、県民の安全・安心につながる放射性物質の現状や放射線影響対策などの県内向け広報、および風評被害の防止、岩手ファンの拡大につなげる「震災からの復興」、「岩手の魅力」の県外向け広報を展開中である。特に、県外向けの広報では、首都圏に加え、風評被害が根強い関西圏での交通広告などで情報発信に努めている。

高齢化・後継者問題

一方、震災後は、漁業からリタイアする人も少なくなかった。船や漁具などを津波で失い、それらを新たに取得してでも海で働こうという情熱を失ってしまった人は、主に高齢者に多い。

漁業従事者の高齢化問題や後継者問題は、震災が発生する以前から課題となっていたが、震災によってより顕在化した。

町内の漁業従事者の年齢階層別正組合員数は、令和2年（2020）3月末現在で10代が2名、20代が23名、30代が30名、40代が78名、50代が105名、60代が173名、70代が220名、80代が89名、90代が1名となっており、合計721名のうち60代以上の漁業従事者が全体の67％を占めている。

町内二つの漁協の正組合員数の推移をみると、震災前の平成22年度は三陸やまだ漁協が636人、船越湾漁協が424人の合計1060人だった。しかし令和元年度にはそれぞれ392人、329人で合計721人と約32％の減少となっている。

復興事業として直接的に扱う事柄とはまた違うが、「山田町復興計画」の中にも、漁業全体が将来にわたり発展を続けていくために、意欲の

ある若手経営者に対する支援などを通じて、経営の大規模化を図るなど、効率的な生産体制を構築していくことの重要性が記されている。

養殖漁業の再生と復興

山田湾で養殖される生食用殻付きカキは市場での評価も高く、漁業者はいかだの台数を増やして増産を目指していた。しかし、カキの餌となる湾内のプランクトン量に対してカキの種苗個数だけが増加したことで「過密養殖」の状態となり、痩せたカキが次第に目立ち始める。

また、全国的に生食用殻付きカキの生産を行うところも増え、注文数量も漸減、生産額も平成6年をピークとして減少に転じた。

過密状態の解消には、養殖いかだの台数を減らすことが最も効果的であり、町内の大浦、織笠、山田湾、大沢の4漁協では、それぞれ漁業者と話し合いも行ってきた。しかし台数削減には至らず、決定的な解決先は打ち出せずにいた。

前述した町内4漁協は、平成21年（2009）に合併し、「三陸やまだ漁協」となり、養殖漁業の再建に乗り出す。しかし、その矢先、平成23年（2011）に東日本大震災が発生。津波により山田湾内の全養殖施設が流失することとなった。

また、震災以前の過密養殖の状況改善のため、漁協及び漁業者は、養殖施設の台数削減ならびに施設の間隔を広くして復旧することを合意。養殖いかだが浮かぶ山田湾の風景もよみがえった。

令和元年度末のカキ・ホタテの養殖施設数は2206台。平成21年（2009）年の4172台からほぼ半減している。

台数削減により、湾内全体の種苗個数が少なくなったことで1個のカキが食べるプランクトンの量も増え、養殖環境および成長・身入りとも震災以前には考えられないほど改善され、山田産カキに対する評価も向上した。また、ホタテやホヤもカキ同様に成長・身入りはよくなった。

その一方で、カキ・ホタテ・ホヤの成長を妨げる、ムール貝、ユウレイボヤ、ヨーロッパザラボヤの付着が問題となっている。

漁業者は、垂下縄を短くする、間隔を広げる、すぐ出荷するカキを上側につるして出荷に時間がかかるカキは下側につるす、あるいは雑物の付着を減らすためのカキの温湯駆除及びホタテ洋上クリーナーを導入するなどの対策を講じ、日々研究を繰り返し、良質な養殖物の生産と山田湾ならではの豊かな漁業の風景を守り続けている。

整備が完了した船越漁港

織笠漁港。オランダ島を正面に望む

大浦漁港。小型船が多く並ぶ

重茂半島の入り口部にある大沢漁港

四季彩鮮やかな光に包まれて働く漁師の仕事

定置網漁は減産傾向に

定置網は、三陸やまだ漁協が2カ統の自営定置網（そのうち1カ統は宮古市の重茂漁協と共同経営）を操業し、他に生産組合の定置網が6カ統あり、合計8カ統ある。

船越湾漁協は、3カ統の自営定置網を操業し、他には組合員である生産組合の定置網が1カ統、組合員の小型定置網が3カ統ある。

余談だが、定置網漁法の方式のひとつである「大謀網」は、文政12年（1829頃）、船越村の田代角左衛門が開発した「陸前式大謀網」が原型である。

日本の定置網の歴史は、慶長年間（1615頃）に山口県豊浦郡で開発された「長門式大敷網」、元和年間（1621頃）に富山県射水郡で開発された「越中式台網」が、藩政時代の主流として使われていたが、大敷網や台網は網の入口が広く、魚が網に入りやすい半面、網から出やすいという欠点があった。

一方、大謀網は網の一部だけを開口しており、魚は網に入りにくいが、いったん網に入ってしまうと出にくいという構造で、大きな網から小さな網へ魚を誘い込み、大漁を狙う。

船越生まれの大謀網は、その後、宮崎県や富山県で改良が加えられ、200年後の現在も主流となっている。

（※参考「定置網漁業の漁獲向上技術に関する研究」長崎大学）

定置網では、春はサクラマス、夏から秋はサバ類、イワシ、ブリの幼魚（汐子）、スルメイカなどが多く、他にもカレイ類やソイ類、アイナメ、マンボウといった豊富な季節の旬魚が漁獲されている。

なお、「山田町といえばサケ」と言われるほど、かつては定置網が破れるほどの水揚げ量であったが、震災以降の水揚げ高は減少している。

「浜プラン」の作成と実施

平成26年（2014）、水産庁は、水産業の持続的な成長産業化を図るため、所得の低迷といった各地方の「浜」ごとの課題を把握し、必要な対応の方向性を明確化するため「浜の活力再生プラン」（以下「浜プラン」）の作成と取り組みを支援する「浜の活力再生プラン策定推進事業」を打ち出し、同年より実施している

浜プランを作成・実施する中心事業者は全国の漁協である。5年間の取り組みを通じて漁業者の所得を10％向上させ、それによる漁村の活性化を目標とした。

東日本大震災の発生と、水産庁が当該事業を打ち出したことは直接的には無関係である。しかし、漁協を中心として復旧・復興に向けた取り組みが懸命に続けられてきた三陸沿岸市町村では、津波被害に加え、水産物の消費低迷・魚価安に近年の燃油価格の高騰が追い打ちをかけるなど、経営を取り巻く環境は厳しさを増し、漁業所得は減少していた。

こうしたことから、地域の活性化に早急に取り組み、漁業所得を向上させ漁家経営の安定化を図ることは重要な課題であった。同年、三陸やまだ漁協と町は「三陸やまだ漁協地域水産業再生委員会」を立ち上げ浜プランを作成。関連する水産業（主に漁業）を取り巻く現状や諸課題

に対応し、漁業の所得向上と経営安定化のためのさまざまな対策と取り組みを開始した。

当時、掲げられた取り組みは、

①燃料および資材高騰への取り組み（船舶等の燃油消費量削減のため、船底・プロペラの定期的な清掃や減速航行に取り組む）

②資源維持と環境保全への取り組み（主としてサケ資源の回復。サケ稚魚の安定的な放流の実施、回帰率向上に向けた取り組み）

③付加価値向上への取り組み（漁獲物の鮮度保持、品質向上への取り組みにより付加価値を高める）

山田湾織笠付近からは水平線も見える

④ＰＲ活動・魚食普及活動への取り組み（水産物の販路拡大、知名度アップに向けたＰＲ活動。魚食普及活動の推進）

⑤労働環境への配慮および担い手対策への取り組み

――などであった。

一方、船越湾漁協でも、町との協働による「船越湾漁協地域水産業再生委員会」を立ち上げ、平成27年度から浜プランによる各種の取り組みを開始した。

水産資源の維持および管理の取り組み、燃料など漁業コストの削減などは三陸やまだ漁協の浜プランと同様だが、サケ資源の増大という課題に加え、ホヤ養殖の実施、ウニ生産量の増加、アワビ生産量の増加、ワカメ養殖の生産量増加など、水産資源について細やかな具体策を掲げていたのが特徴的である。

山田広域水産業再生委員会の設立

そして平成30年度からは、二つの再生委員会に加え、山田漁業協同組合連合会、岩手県漁業協同組合連合会、岩手県により構成される「山田町広域水産業再生委員会」が設立された。

取り組むべき課題として真っ先に掲げられたものは、新規漁業就業者および漁家後継者の減少、漁業従事者の高齢化などである。また、震災後は低投資かつ短時間操業が可能な採介藻（さいかいそう）漁業のみに従事する漁業者が増加していることについての対応であった。

高齢化している漁業者の漁業継続や、新規就業者の確保と育成については「漁業を魅力的かつ安定的な収入がある仕事」にすることで「生涯、漁業を営むことが可能となる」ように関係者が力を合わせ、「町内水産業を盛り上げる機運を高めなければならない」。また、「販売戦略や付加価値向上等の具体的な取組に積極的に参画・協力していかなければならない」としている。

「さかなのまち」のイメージアップと創造

浜プランでは、他にも養殖業（カキ、ホタテなど）、定置網漁業、採介藻漁業など漁業種ごとの課題として生産量の減少とそれに対応する資源保護管理や、養殖方法の改善・改良、新たな販路の開拓などについて、協働すべき課題や解決策を提示している。

また、ネット通販による販売促進、さかなのまちイメージアップ作戦、アイナメのブランド化といった新たな試みについても触れている。

さらには、町内の児童・生徒が、海や漁業への理解と関心を深める機会の創出や、就業希望者と漁業者のマッチング、新規就業者への支援、中核的担い手の育成などのため、国の「漁業経営セーフティーネット構築事業」「競争力強化型機器等導入緊急対策事業」「強い水産業づくり交付金」や、県の「地域再生営漁計画」といった支援措置法の活用など具体的な方途が示されている。

宝の海の輝きをいつまでも

令和2年（２０２０）には、新型コロナウイルス感染症の発見と流行で社会は混乱していた。しかし、そんな中で、例えば次々に登場する新しいＩＣＴツールなどを活用した就業形態の変化や、居住地を都市部と限らず地方へ脱出する動き、あるいは異業種への新規参入といった動きも増えていった。

時代はどんどん移り変わり、人々が地方へ目を向ける機会も増えている。交流人口の獲得から関係人口の構築へ、そして移住・定住へという潮流については、近未来的な動向として全国各地方の自治体が注目し、さまざまな施策を打ち出している。

住民の高齢化、または人口減少など、地方が抱える問題は直ちに解決できない、しかし、山田には、なにより他郷にない美しいリアスの海がある。それは来訪者にとっても新鮮な気づきや魅力となり、海に生きる山田人の仲間になってくれる可能性もある。

水田の稲は人の足音を聞いて育つという。人が手間をかけることで稲は喜び大きく育つという意味だ。

山田の海もまた、未来にわたって人や船やいかだが浮かび続け、その価値と美しさが人々によって守られていくことで、「宝の海」の輝きは続く。

美しい海こそが山田人の一番の誇りである

農　林　業

海から離れた豊間根・荒川地区は、東日本大震災により被災した地区を支える拠点地のひとつとなった。同地区は今、震災後に実施した農地の区画整理事業を経て、農地の大規模化・農業経営の効率化を図りながら「山田の食糧基地」化を目標に、認定農業者や集落営農組織等の育成支援など積極的な営農が進められている。

区画整理と担い手育成と農地利用集積で豊間根・荒川地区を「山田の食糧基地」に

豊かな稔りの風景が広がる豊間根地区

山田町の農業地帯・豊間根・荒川地区

東日本大震災の津波による農地・林野への被害は、大沢、織笠、船越、大浦、小谷鳥の各地区で約33ヘクタールの農地、農林道2750メートル、水路6950メートルなどが被災した。

また、潮害、飛砂・風害の防備機能を備えた、前須賀、浦の浜、小谷鳥の各地区の海岸防潮林が津波によって消失したほか、田の浜地区では、津波襲来直後、住宅街で発生した火災が東側背後の山林へ延焼し、宅地と山林を合わせて約165ヘクタールを焼失している。

本町で農業地帯と言えるのは、町の北部、津軽石川の上流部に位置する豊間根地区と荒川地区および町の南部の織笠地区である。豊間根・荒川地区は町の中心市街地から北西へ約7キロメートル離れ、海から遠く、標高も高いため、津波の被害は皆無であった。

発災直後の逸話がある。

沿岸部の各地区が津波に襲われ、または炎に包まれていたとき、町の危機を知った豊間根・荒川地区の女性たちは、停電の暗がりの中、5升炊きのガス炊飯器をフルに稼働させてごはんを炊き上げ、食品工場の生産ラインのような鮮やかなリレーでおにぎりをつくっていった。婦人防火クラブ、自治会、近隣同士である女性たちの自発的な救援活動だった。

おにぎりは、豊間根地区8カ所の避難所をはじめ、山田地区や大沢地区の避難所へ温かいまま届けられた。炊き出しの動きは豊間根・荒川地区の9カ所で同時多発的に起き、農繁期直前の4月まで続けられた。

米は、稲作農家の貯蔵分もあったが、やがて支援物資で届けられた米に変わった。しかし、おにぎりに添えられた梅干しや漬物は、豊間根・荒川地区の〝農家のおかあさん〟たちの手づくりだった。

「豊間根・荒川地区から競い合うように届けられたおにぎりはおいしくてうれしくて、ありがたく、あの味は忘れられない」と、今も町の人たちの間で語り草になっている。

荒川地区での炊き出しやおにぎりづくり。米や梅干し、のり、ラップなどは各家庭から持ち寄った

区画整理事業で農業復興を

平成23年度、町では、被災した農地を再開するための復旧作業を行った、織笠および小谷鳥地区の農業復興組合への補助を行う「被災農家経営再開支援事業」や、被災した農業用ハウスや農機具などを整備した組織への補助である「震災農業生産対策事業」、また「放射線測定器購入事業」といった事業を行った。

津波が押し寄せた農地での塩害除去作業は、織笠地区18ヘクタール、大沢地区4ヘクタール、小谷鳥地区8ヘクタール、大浦地区5ヘクタールなどを対象とし、実施した。

また、平成24年度からは「農用地災害復旧関連区画整理事業」として、それまで小規模で行われ

区画整備によって一区画が広くなった豊間根地区の圃場

ていた農地などを大型機械が入れるように整備した。小規模農業経営を集約・集積し、農業生産の効率化を図る目的で実施したものだ。

山田町一帯が一つの農場として機能する「山田一農場」構想を打ち出し、「中山間地域総合整備事業」も並行して行い、被災した農地に限らず、豊間根・荒川地区の農地も対象とした。

豊間根・荒川地区の農地を整備して大規模化するという要望と構想は震災前からあり、先の炊き出しの逸話にもみられるような農業地帯としての豊間根・荒川地区を「山田町の食糧基地」として改めて整備したいという狙いもあった。

農業振興のための施策でもあり、町の農業政策上の永年の課題でもあった。

また、農地利用集積を加速化させたいというのは国の農政の方針でもあった。例えば平成17年（２００５）、農林水産省は「担い手への農地の利用集積の現状と課題」というレポートの中で、「望ましい農業構造の姿（『効率的かつ安定的な農業経営』が経営する農地が７～８割程度）を実現」したいとしている。

小規模または分散している農地を大型機械の導入も可能な農地へと整備して、それを担い手へ貸し付け、借り受けた担い手が農産物を生産するという農地利用集積の形にすることが施策の目指す方向だった。

認定農業者を担い手として

ここでいう担い手とは、「農業経営改善計画」の認定を受けた農業経営者すなわち「認定農業者」を指す。

また「農業経営改善計画」とは、農業経営を営む、または営もうとする農業経営者が、５年後の農業経営の目標を定めて作成する計画書のことである。その内容が各市町村策定の「農業経営基盤強化促進基本構想」に照らして適当と認められた場合に「認定農業者」となり、行政は計画の認定を行うとともに、計画の実現のために支援を行っていく。

認定農業者に期待されるのは、安定的な農業経営ばかりでなく、地域そのものをつくりあげていく担い手としての役割でもある。

豊間根・荒川地区では、作付けされる農産物は水稲（すいとう）が基本だが、水稲以外では連作が耕作の障害となる観点から転作も奨励され、近年は大豆の作付けが増えている。水稲から大豆へと転作するケースもあるほか、水稲と大豆を隔年で作付けすることで収穫量が増加しているといった効果もある。

組合結成の動きもある。組織化することで補助事業を導入できたり、有利な制度を活用しやすくなるといったメリットがある。また、農業者同士が同じ方向へ向かっての取り組みも行いやすくなる。例えば大豆の収穫量が増大化した際には加工品をつくり、将来的には三陸沿岸道路の山田インターチェンジ付近に建設が計画されている新しい「道の駅」で販売しようといった、これからの夢や展望も広がる。

転作により連作障害を防ぎ、同時に多彩な農産品を作る

原木シイタケは生産量が減少

震災による被害では、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって漏れ出した放射性物質が、本町における主要農産品の一つであった「原木シイタケ」の生産と販売に深刻な影響を与えた。

平成24年（２０１２）４月、国は食品中に含まれる放射性セシウムの新基準値を「１キログラムあたり１００ベクレル」と設定。そして３月から５月にかけて実施された国の放射性物質検査では、本町を含む県内14市町において、その新基準値を上回る数値が、原木生シイタケ（露地栽培）から検出された。

ほだ木の撤去作業

これを受けて、船越、織笠、山田、豊間根、荒川の各地区では出荷制限を余儀なくされ、そればかりか国が定めた指標値である「１キログラムあたり50ベクレル」を超過したほだ木（シイタケ栽培の際に種菌をつけるナラ、クリ、クヌギの幹などを用いた原木）の処分や、ほだ木を置くほど場の落葉層の土の除去（除染作業）を行わざるを得なくなった。

平成26年（２０１４）以降、出荷前検査で基準値を下回った21生産者が出荷制限解除を受けた。

しかし、生産者の高齢化や後継者問題など農業環境を取り巻く従前の課題とも相まって、生産者・生産量はともに減少している。

雇用型農業で人材を育てる

本町の農業生産額は、震災後はわずかながら増加傾向にある。

日本の農業は、零細な農家が多いことから、その基盤が脆弱（ぜいじゃく）であるとも言われている。

生産規模が小さな農家の農地が点在して残る状況は、規模の拡大や農地の集積を求める農業者の思いや希望をかなえ難くしている。

山田町復興計画では、「農林業経営については、震災の前から収益性の低さが問題となっており、高齢化等に伴う後継者不足が懸念されていたことから、中核的経営体への農地の利用集積を図るとともに、認定農業者や集落営農組織等の育成支援を行っていく」とした。

高齢化や後継者不足を理由に離農者が増加している問題は、一次産業全般に見られる全国的な傾向である。本町においても、農林業分野における新たな担い手の発掘がテーマとなっている。遊休地を解消する大規模化は進めてきた。今後は雇用型の農業法人の形態を強化して、必要な人材を育てるなどの試みが課題となるだろう。

山田の農産物をPRする恒例の「山田農業まつり」

商　工　業

山田地区を中心とする「まちづくり」は、震災前は「国道沿いに南北に細長い商店街」であった。
震災以前の姿を描きながらもコンパクトな整備を実施した。
まちの玄関口である駅前に公共駐車場を整備し、商業関連施設を集積、車でも、徒歩でもいける。
新しい〝まちのにぎわい〟に触れることができる。

商業施設や飲食店、公共施設が集まる陸中山田駅前

震災以前の山田町中心街（2006年7月13日）

コンパクトでにぎわいのある空間に多彩な交流を生み出す「まちづくり」元気と笑顔で地域活性を目指す

山田町の商業は小売業が中心

震災以前の山田町では、商店街と呼ばれるエリアは山田地区にあり、その立ち並んだ商店の中を国道45号が貫いていた。

商店街には、駐車場を備えた店舗は少なく、自動車で訪れた買い物客は買い物をする間の駐車スペースの確保に難儀していた。

震災後の平成26年（２０１４）、町が実施した「購買動向調査」では、「お店選びを重視する点」として「車で行きやすいこと」と回答する町民が多かった。

本町の商業は、個人経営の小売販売業が多く、平成19年度の商業統計調査では、町内の店舗数２６０のうち、飲食料品小売業が85（32・７％）と最も多かった。以下、織物・衣料・身の回り品小売業が30（11・５％）、家具・什器（じゅうき）などの小売業が24（9・2％）、卸売業が34（13・１％）であった。

近隣の大型店などへの流出も

地方の小さな町や過疎地域の主要産業は、公共事業や都市部の資本・市場といった外部の環境変化の影響を受けやすく、そして、それら主要産業の経営状況はまた、小売業の販売にも影響を与えやすい。

町の主要産業である第一次産業は、これらに加えて気候や自然環境の影響も受けやすく、漁獲量や農産物の収穫量は農林漁家の経営に直接影響する。もちろん出荷先（市場・消費動向）の影響もある。いわば「内需型」の小規模小売業の商業基盤は強くない。

さらには、宮古市や大槌町など近隣市町での大型店出店、また通信販売の普及などにより、平成９年（１９９７）に３４７店舗あった町内の商店数は減少する傾向にあった。そこへ東日本大震災が追い打ちをかけた形である。

先の購買動向調査では、食料品、医薬・化粧品、日用品などの町内利用は70％あったが、耐久消費財や趣味品といった買い回り品（購入や買い替え頻度が低く、購入にあたっては複数の商店で品質や価格を比較検討するなどして選ぶ商品）の町内利用は20％程度にとどまり、近隣の宮古市をはじめ盛岡市などへの流出傾向があった。

震災以前の商店街（川向町）

駅周辺に商業施設を再整備

大津波が押し寄せた後の中心市街地では大規模火災が発生し、商店や事業所などのほとんどが流失または焼失するなどする大規模な被害を受けた。

震災以前の平成21年度の「経済センサス」では、町の商工業者数は７８６、小規模事業者数６７８。町の商工業者の約６割が加入する山田町商工会は、会員４６１（被災時点）のうち、３３７の会員が被災した。

震災から４カ月後の平成23年（２０１１）７月、山田町商工会を含む沿岸４市町村の商工会と岩手県商工会連合会は合同委員会を開き、各地の商工業復興ビジョンを行政の復興計画に反映させようという取り組みを開始した。

そして、平成24年（２０１２）、山田町商工会は、中心市街地であるＪＲ陸中山田駅周辺に商業施設を整備する方向性を打ち出した「商工業復興計画」を策定。事業の再生と地域経済の活力再生をめざして、町の復興計画と歩調を合わせていくこととなった。

まちなか再生計画の策定

山田町復興計画が、復旧期から再生期へ移行する平成27年（２０１５）、町は、ふたつの計画を発表した。

まず、同年3月、中心市街地のにぎわいを創り出すための先導的な役割を担う拠点的商業地の整備を目的とする「山田町まちなか再生計画」を公表。

そして5月には、復興計画に基づく各種復興事業や土地利用をより計画的かつ効果的に展開することを目的として、被災沿岸部の将来都市像を示す「山田町復興まちづくり計画」を公表した。

２つの計画のうち、前者の山田町まちなか再生計画は、商工業の復活と再生をより強く推進するための計画である。

山田町復興計画では、山田地区の中で市街地の範囲を踏まえ、徒歩圏で移動できる範囲に商店、飲食店やサービス施設、宿泊施設などの施設を誘導し、コンパクトでにぎわいのある空間づく

りを目指す区域（JR陸中山田駅東側を中心に周辺を含む）を「中心市街地」とした。

また、「中心市街地」のうち、町全体のにぎわい創出と各地区の生活利便性維持を図ることを目指し、商業施設、金融機関など生活利便施設を複合的に集積させる拠点的商業地を「まちなか再生区域」とした。

まちなか再生計画区域の整備イメージ

協議会で方向性を議論

「山田町まちなか再生計画」の策定に当たっては、商業団体、漁業団体、金融機関などによって平成25年度に組織された「山田地区津波復興拠点利活用検討委員会」等での議論を踏まえ、さらに平成26年度、上記メンバーに加えて医療・福祉分野や消費者代表、出店予定事業者らを加えて新たに組織された「山田町復興まちづくり協議会」での話し合いと検討結果をベースとした。

協議会では、町のなりわい再生や魅力ある拠点エリアの再生に向けて、町の利便性向上や魅力付けの方策等の意見を伺いながら山田町復興計画とも整合性を図りつつ、まちなか再生計画の策定を進めていった。

こうした過程を経た後、山田町まちなか再生計画は復興庁の認定を得て、平成27年度から事業が実施されていった。

コンパクトな街並み

同再生計画によるまちづくりの大枠は「震災以前の姿」を描きながら、コンパクトに設計・整備していく計画とした。

現在の三陸鉄道リアス線・陸中山田駅東側の概観は、駅前のかさ上げ地にスーパーマーケットや飲食店などが入る共同店舗棟「オール」や戸建て店舗、金融関連4店舗、町民の交流や集いの場となる「山田町まちなか交流センター」、図書館を併設した山田町ふれあいセンター「はぴね」といった施設群をコンパクトに集約している。

町には「新生やまだ」「やまだうみねこ」「川向」という3つの商店街があり、それらが加入する山田町商工会の被災会員の復旧・復興状況は、平成28年（2016）4月1日時点で継続・再開が59・6％、未再開が1・5％、廃業が37・7％、転出が1・2％で、事業所数の減少率は全体平均でマイナス14・7％となっている。

上空から見た中心市街地

新生やまだ商店街

買い物客らでにぎわう「いちび」（2018年7月8日）

川向商店街

やまだうみねこ商店街

観光業

三陸海岸の中央にある山田町。海と山が織りなす自然美あふれる景観と、豊富な海の恵みや山の幸は、訪れる観光客に多彩な楽しみを提供できる可能性を持つ。山田ならではの体験と味覚を磨き上げ、あるいは創出しながら、町は、復興後の交流人口の拡大を目指す。

海と山の風景、味覚、そして人…
多彩な体験プログラムで魅力を発信
町ぐるみでもてなす山田型観光の確立を

透明度が高い船越湾の荒神海水浴場

国立公園の真ん中のまち

山田町は、昭和30年（1955）5月に指定された「陸中海岸国立公園」のほぼ中央に位置する。

同公園は、東日本大震災により、指定区域が大きな被害を受けたことから、平成25年（2013）、震災からの復興および被害の伝承を目的として、青森県の種差海岸階上岳県立公園および八戸市鮫町の2地区を編入して「三陸復興国立公園」という新しい名称に改められた。

さらに平成27年（2015）には、宮城県の南三陸金華山国定公園を編入し、続けて宮城県内の県立公園を編入することも検討されている。その後の公園の名称は、被災地域の復興状況を見て将来的にふさわしい名称を検討するとされている。

本町で三陸復興国立公園に指定されているのは、国有林三陸北部森林管理署の森林と、その地先海岸、地先島嶼および地先岩礁の全部、飯岡・織笠および船越の各一部で、町域面積（2万6380ヘクタール）の約8・2％に相当する2151ヘクタールが指定域となっている。

山田町の主要観光資源

山の緑と、海と空の青色と、耕地や砂浜や岩などが織り交ざって四季それぞれの色合いを見せる山田町の風景のなかには、いくつもの見どころがある。

町のイメージとして真っ先に挙げられるものは「海の十和田湖」とも呼ばれる波静かな「山田湾」である。

北の「十二神山（731メートル）」や南東の「霞露ヶ岳（504メートル）」などの森藹深い山並みに囲まれ、寄せ来る浦風も波も穏やかな湾内には、「オランダ島」と呼ばれる大島と、従うように浮かぶ小島、そして養殖いかだや浮き球の秩序ある列などが、のどかな漁村のたたずまいを見せている。歴史と文化を感じさせるリアスの海辺の暮らしの風景は町の代表的な景観である。

また海辺あるいは山あいにも雄々しい自然風景がいくつもある。町ではそのうちの8スポットを、「山田八景」としてPRしている。

①海の十和田湖「山田湾」
②赤い明神鳥居や白い灯台が立ち、かつては「幻の絵画」蜃気楼も現れたこともある山田湾口の「明神崎」
③船越半島霞露ヶ岳の中腹が海に落ち込んでできた高さ350メートルもの赤褐色の大絶壁「赤平金剛」
④断崖と岩礁の間の景観が〝海のクレバス〟と呼ばれる水路「大釜崎」
⑤タブノキが自生し〝タブの大島〟と呼ばれる「船越大島」
⑥かつて交通の難所にして現在は展望台なども整備され、船越大島をはじめ漁り火揺れる水平線などを見晴らす「四十八坂」
⑦昔は修験者の修道場だったという奥宮や境内の赤い橋が印象的な「関口不動尊渓流」
⑧いまだすべてが解明されていない鍾乳洞があるなど、本町に残された数少ない秘境のひとつとされる「豊間根川源流」

――などだ。

岬の先端には赤い鳥居が建てられている「明神崎」

観光施設や体験プログラムも多彩に

他にも雄大な自然風景に触れられるエリアとして、日本ジオパーク委員会認定の「三陸ジオパーク」や、青森県から福島県までの三陸海岸約1000キロメートルを結んだロングトレイル「みちのく潮風トレイル（鯨山、荒神海水浴場、霞露ヶ岳、漉磯海岸、大釜崎自然遊歩道など）」といった〝体感型〟の観光資源がある。

観光施設としては、ケビンハウスやオートキャンプ場などを備えた町の宿泊施設「船越家族旅行村」、水揚げされたばかりの殻付きカキを鉄板の上で焼きながら味わえる「三陸山田かき小屋」、泳ぐ魚が見えるほど透明度が高い「荒神海水浴場」や「浦の浜海水浴場」、世界最大級のマッコウクジラの骨格標本の展示などで捕鯨の歴史や海の不思議を学ぶことができる「鯨と海の科学館」などがある。

また、アクティビティ（体験型観光メニュー）ではマリン・ツーリズム山田の「漁師の船でのクルーズ&養殖いかだ見学」をはじめ、「シーカヤック体験」「浜焼き体験クルーズ」「漁師の番屋体験」「いか徳利作り」「そば打ち体験」「季節の野菜摘み取り体験」といった、海と山、漁業と農業が隣り合う本町らしい多彩なプログラムが体感できる。

そして「三陸山田カキまつり（4月下旬）」「山田パドルフェス（7月上旬）」「やまだの花火大会（8月中旬）」「山田の鮭まつり（12月上旬）」など

のイベントも多彩である。中でも「山田祭り（9月中旬）」は、お盆や正月に帰省しない人も、これにあわせて帰ってくる本町出身者も多い。

震災による観光資源被害と復旧状況

東日本大震災は、観光関係施設およびアクティビティなど観光プログラムにも大きな被害を与えた。

被災した規模および再開の状況は以下のとおりである。

近年人気を集めるスタンドアップパドルボード（SUP）

施設関連では「三陸山田かき小屋」が被災・流失。現在は、浦の浜に場所を移して再開している。

「鯨と海の科学館」は被災し、施設の性格上、丁寧な復旧作業が必要となり、長期の休館となった。

再開したのは被災から6カ月後の平成29年（2017）7月だった。しかし、2年3カ月後の令和元年（2019）10月、大型の台風19号により後背地から流れ出した泥土（でいど）が館内に流入して再び閉館を余儀なくされた。再度の復旧工事や館内の大規模清掃などを経て、令和2年（2020）7月、一部再開している。

「船越家族旅行村」の施設群は高台に位置していたことから津波の直接的な被害はなかったが、ケビンハウスは復興関連工事に伴い工事関係者の宿泊施設となり、オートキャンプ場とともに長く休村。ケビンハウスおよび場内の散策路のみ平成25年（2013）に再開した。

船越地区浦の浜には、震災以前、浦の浜海水浴場があったが、砂浜が大きな傷を受けたことで長期閉鎖されていた。その後、県の事業として、砂を運び入れて平成29年（2017）に再開している。なお松林は海岸保安林として、こちらも県事業で復旧が図られている。

体験型観光への被害もあった。

漁師たちが中心となって震災以前より活動を展開していた「マリン・ツーリズム山田」では、カキ・ホタテ養殖など地元の漁業を活かした体験プログラムを提供していたが、東日本大震災により漁船の流失などの大きな被害を受け、また、漁師の本業である漁業そのものへの影響も大きいことから、体験プログラムの実施は中断を余儀なくされた。

遊具もあり子どもにも親しまれている「船越家族旅行村」

山田流のおもてなしで

山田町の観光復興への取り組みは、官民問わず、比較的早かった。

三陸山田かき小屋のオープン、鯨と海の科学館の復旧のほか、体験型観光においても「マリン・ツーリズム山田」が早期に復活。また、震災語り部による防災に対する学びの提供、シーカヤック体験といった民間独自の取り組みのほか、大学や省庁等と連携した日帰り観光ツアー（パッケージツアー）への取り組みも行われてきた。

復興事業が進行するなか、各種事業が完了する前に津波被害の大きさを実際に知っておきたい、復興の様子を見届けたいという訪問者も多かった。

こうした訪問者に対し、町民たちは、被害の大きさだけではなく、復興が進む「現在」の元気な姿を案内し、楽しい思い出を持ち帰ってもらおうと努めた。

山田流のもてなしの心は、水揚げしたての貝を試食してもらおうという漁師の笑顔に表れ、震災語り部の「町のおいしいものを食べてもらおう」という復興まち歩きつまみ食いツアーの明るい声となって表れ、本町ならではの復興の歩みや防災を目指すまちづくりを学ぶ機会を提供してきた。

漁師の船に乗ってクルーズ&養殖体験

「鯨と海の科学館」の骨格標本

船越地区浦の浜に再建された「三陸山田かき小屋」

町民の気持ちとパワーをひとつにする「山田祭り」

観光復興ビジョンと体験観光への取り組み

一方、町は、環境省が推進する「エコツーリズム」への取り組みを震災前から検討していた。

エコツーリズムとは、地域にある文化や習慣などの魅力を観光客に伝えながら、そのエリアの自然や環境を保護する観光方法のことだ。平成20年（2008）には「エコツーリズム推進法」も施行されている。観光客に地域の観光資源をアピールし、実際に体験し学んでもらう。その集客への

取り組みの中で、町民もまた、地域の魅力や価値を理解して保護へと結びつけようと考えるものだ。「自然環境の保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育」などの推進が目的となっている。

平成27年（２０１５）、町は、復興後もさらに続いていく「まちづくり政策」の柱のひとつとして「観光の振興」を掲げて「山田町観光復興ビジョン策定委員会」を組織。委員会の特徴は、ありがちなコンサルタント業者に計画づくりをまかせるのではなく、観光に携わる人がワーキング委員として計画をつくりあげることである。観光面から山田町の震災復興のあるべき姿についての検討を開始した。

震災から4年が過ぎ、山田町復興計画に基づいて進められてきた復興事業も復旧期が過ぎ、再生期から発展期へと差し掛かろうとしていた。町のグランドデザインも定まり、各種施設の復旧・再開も進む中で、元々あった町の魅力も改めて浮かび上がってきた。

基盤整備工事など整えられたハードの上に、町の魅力を発信するソフト事業を乗せていく。その大きな柱が「観光の復興」だった。

「観光復興ビジョン」の策定に当たっては、策定委員会、策定ワーキング委員会を設置しての会議、専門部会、勉強会が開催され、観光に携わる立場からの現場の声、専門的な視点、町民による検討などを積み重ねた。

さらに翌年の平成28年度には、体験型観光やエコツーリズムなど観光復興ビジョンに盛り込まれたプランを実現し、実施するために体験観光推進を目的として「山田町体験観光推進協議会」を設立した。

オランダ島無人島体験ツアー

山田湾のシンボルであるオランダ島は、震災前までは町の海水浴場として、町民はもちろん、県内外の観光客に真夏の憩いの場を提供してきた。震災により、砂が流出するなどして、砂浜は小さくなり、トイレなどの設備も失い、巡航船の運行もなくなった。震災後は、マリンツーリズムの漁船で島へ渡り、島の周辺でシーカヤックを楽しむ体験等が行われてきた。

平成29年度から、地域資源利活用施設整備事業を活用し、オランダ島の復旧に取り組み、地盤沈下により使用が困難となっていた桟橋を浮桟橋として整備し、島を訪れた方が穏やかな山田湾の景色を楽しめるよう島周辺に遊歩道を設置し、事業は令和2年（２０２０）7月末に完成した。

令和2年（２０２０）には町民限定での海水浴場が復活し、また町は、今後のオランダ島の観光活用策として、同年10月、アウトドアの専門家によるテストキャンプを実施した。町の地域おこし協力隊が事業を推進している。

今後、三陸海岸の真ん中にあるオランダ島でのキャンプが実現すれば、他県からの集客も期待できる。

テストキャンプでは、県内外から集まったキャンプインストラクター5人が島でテント泊を行った。釣りや散策などのほか、町の海産物を使ったバーベキューも実施した。

令和3年度からのツアー客の受け入れに向けて準備を進めている。

波穏やかな山田湾は初心者でもシーカヤックが楽しめる

農家が栽培したこだわり野菜の収穫体験

地元漁師と海の体験・食の体験。作業小屋で漁師体験ができる

山田観光の魅力を明確化

山田町体験観光推進協議会では、観光客向けの体験プログラムの取りまとめ、体験観光希望者との連絡、受け付けや交渉などを行う際「やまだワンダフル体験ビューロー」という名称で活動を始めた。

復興観光政策を展開する町の現状と課題について、いくつか触れておく。

まず、観光施策を展開する上で、目指すべき方向性を明確化する。そして何より大切であり必要なことは、観光政策を通じて地域経済が潤うこと、生活の質が維持される（高まる）こと、

住民の活躍する場ができることである。

町に人を呼び込む第一歩は、まず「山田町を知ってもらうこと」だ。

観光復興ビジョンには、「現状と課題」として「山田への来訪、体験を通じて『山田ファン』を育てることが必要である」と記されている。

山田町へ行けばどんなことができるのか、どんなおいしいものが食べられるのか、どんな出会いがあるのか。山田らしい観光の姿を明確にするということだ。

町にある風景や名勝、四季の味覚といった地域資源を生かしながら観光客に提供する。地域住民とも交流ができる。また、展開されるさまざまな事業やプログラムは地場産業や地域経済とも結ばれ、山田の看板商品や新たな名物がつくられたり、宿泊型の観光地としての魅力創出にもつながる。

誰もが「地元の良さ」「山田の魅力」を自分の言葉で語れることも目標のひとつである。

「泊まりたくなるまち」にする

体験型の観光では、訪問客に対して物産・味覚と宿泊施設の提供も重要なテーマである。

物産・味覚では、山田町は海産物が豊富であるという強みがあるが、その中でも柱となる商品やメニューが必要だ。

観光客のニーズに合い、また山田産であることを強くPRし、ブランド力も付加する。加工品開発では、海産物を安定的に確保し、また、新たな販路開拓も必要となる。

そのためには、生産者との連携を深め、また観光との連携を深めること、市場の把握もしっかり行うことを目標とした。連携に向けた仕組みやアレンジも工夫し、「食」「グルメ」に関するツーリズムも検討課題である。

また、宿泊に関しては、観光客を受け入れるための宿泊容量が不足している。

平成26年（２０１４）のデータでは、山田町内全体の宿泊容量は総部屋数２４７室、総宿泊可能人数６６５名だった。このうち一般観光客の利用が想定されない「陸中海岸青少年の家」と、

連絡船でオランダ島へ

２週間以上連泊の男性を対象とした長期宿泊施設（法人・団体のみ）を除外すると実質的な宿泊容量は総部屋数１６３室、総宿泊可能人数３８６名であった。

宿泊者数の推移を見ると、平成15年（２００３）は5万７８３名で、そこから漸減（ぜんげん）し、震災前年の平成22年（２０１０）は3万１０４４人、平成23年（２０１１）は1万７０８４人。

しかし、翌年からは一気に増加し、平成27年（２０１５）には8万４３２９人にまで伸びている。ただしこれは復興工事関係者、いわゆる復興需要が大きい。その後は減少に転じ、令和元年（２０１９）には4万４５４３人であった。

また、観光入込数の推移を見ると、平成19年（２００７）から平成21年（２００９）にかけては順調に増加を続け、延べ64万人の入込があった。平成22年度から統計手法を変更し、実人数推計値は約20万人と集計。震災があった平成23年度以降も徐々に回復し、平成26年度では約32万人となっている。

なお、観光入込数が最も多いのは夏期だ。シーカヤックや釣り、海水浴など海辺のレジャーや体験メニューを求めてくる観光客が多い。また、生食用が多い山田産の「カキ」を目当てに訪れる人も多く、冬期も一定の集客がある。

宿泊施設の新規建設や容量の単純な増加増設は、将来を見通した経営戦略的には不透明感が付きまとう。常に新たな顧客の発掘とリピーターの獲得、宿泊したくなる魅力づくりが課題だ。

そのためには復興関係者などとの持続的な関係構築も大事である。潜在的なリピーター候補であり、山田町滞在経験者として対外的に町の魅力を伝えてもらうこともできる。

多彩な交流と関係が生まれるまちに

平成30年（２０１８）、環境省は三陸復興国立公園の海域において、リアス海岸の湾部にある優れた内湾景観を評価し、海域景観の維持および適正な利用を図ることを目標として、山田湾を海域公園地区として設定した。

また、これを踏まえて保護規制計画を変更、山田湾の大島（オランダ島）と小島の約７ヘクタールの区域を第１種特別地域（第２種特別地域からの振替）と定めた。

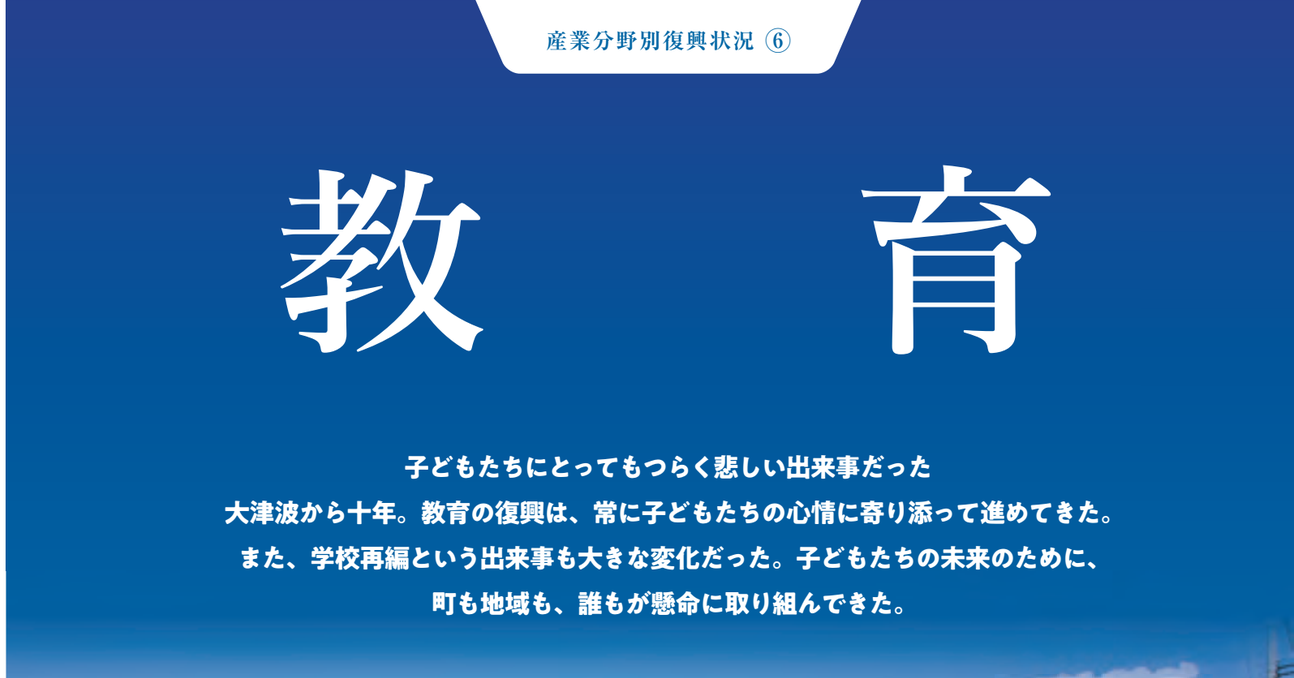
三陸復興国立公園は、「みちのく潮風トレイル」などの遊歩道整備で三陸の豊かな自然や文化に触れるとともに、震災遺構や被災キャンプ場を保存するなどして津波の脅威を学ぶことができる国立公園を目指す。

震災から10年。復興してきた海とまちを知ってもらう。そして、これからも復興を続ける山田町を発信し続けながら、たくさんの人と交流し、多彩な関係が結ばれていく町にしていかなければならない。

2020年に桟橋の整備が完了し、10年ぶりに海開きを行ったオランダ島海水浴場

教　育

子どもたちにとってもつらく悲しい出来事だった
大津波から十年。教育の復興は、常に子どもたちの心情に寄り添って進めてきた。
また、学校再編という出来事も大きな変化だった。子どもたちの未来のために、
町も地域も、誰もが懸命に取り組んできた。



広々としたグランドと、新校舎が完成した船越小学校

未来を担う子どもたちにとって より良い教育環境とは？ 地域みんなで考え続けた「教育の十年」

教育環境をも激変させた3・11

平成23年（2011）3月11日午後2時46分、山田町内にあった9つの小学校と2つの中学校では普段通りの教育活動が行われていた。

小学校では、低学年の児童は帰宅し、中学年・高学年の児童たちももうすぐ放課だった。一方、卒業式を翌日に控えていた中学校では、3年生が体育館で予行練習を行うなどしていたが、それももうすぐ終わり、下校の時間まで間もなくというころだった。

しかし、直後にやってきた大地震と大津波は、子どもたちのその後の生活に大きな影を落とす。

大津波や火災で自宅や家族を失った子どもも少なくない。町外へ転校して行った児童や生徒もいた。学校は避難所となり、卒業式や入学式も延期となった。学校が再開されたのは4月下旬になってからだった。その後も狭い仮設住宅での暮らしでは自室が持てず、学習への取り組み意欲が減退するといったケースも見受けられた。

大人たちもまた、慣れない暮らしの中で蓄積されたストレスがさまざまな形で噴き出すこともあった。

学校は、児童や生徒たちの心のサポート・ケアを行うのと同時に、保護者に対する心の手当ても行った。津波の傷は、長く人びとの日常や心に難渋を強いた。

子どもたちの心に寄り添ってきた教職員や教育関係者の活動、いわゆるソフト面での事業については「第六章①『教育の十年』」に記述がある。

ここでは、主として施設の復旧や再建といった環境整備に関するハード事業や、町の教育に関して震災後10年の中で最も大きな事業だったとされる「学校再編事業」などについて触れる。

発災直後、避難所となった山田高校体育館

ふるさとの惨状を子どもたちはどう捉えていたのか

町内で唯一校舎が被災した 船越小学校

山田町において、津波による建物被害を受けた学校施設は船越小学校（以下、船越小、他の小学校も同じ）だった。

船越小は、船越半島西側、船越湾の海岸からのやや高台に位置していた。標高約13メートル170メートルばかり離れた

船越小は、町指定の避難所、緊急避難場所となっていた。いざというときには、生活の場ともなる。建物は鉄筋2階建て。地震が発生したとき、校内には児童・教職員約150名がいた。

直後、教職員らは同校の避難マニュアルに基づき、全校児童を校庭の北側に集めた。

なお、町内の小学校での防災訓練は、毎年最低2回行われることになっている。3回以上行うかどうかは地域性があることから、各学校の裁量に任されていた。

船越小では避難訓練が年に4回行われてきた。校内にいたときばかりでなく、例えば通学途中のどこにいたら学校と自宅のどちらへ行くのか、といった個別かつ具体的なルールも決められて

泥土が流れ込んだ船越小学校体育館

いた。

3・11の2日前の3月9日、その前震とされるマグニチュード7・1の地震が三陸沖で発生した際、各学校に多くの保護者が子どもを引き取りに来て混乱するという事態が発生した。このため、町教育委員会（以下、町教委）は「津波警報が解除されるまでは原則として児童の引き渡しは行わない」旨の緊急通達を出す。しかし、その通達が各校に配布されたのは3月11日の午前中であり周知されぬまま大震災となった。

そして当日、一部の学校では引き渡しが行われ、2名の児童が犠牲になった。一方、学校にいた児童たちに被害は無かった。

県の施設を間借りして授業再開

児童たちが集められた船越小の校庭北側からは海が見えない。この時、同校には田の浜地区の漁家出身である校務員が勤務していた。昭和三陸大津波の様子などを父親から繰り返し聞かされていた校務員は津波の襲来を予想。校庭の南西側にある防潮堤の上に何度か立って海を観察し、その幾度目かのとき、水平線が盛り上がっているのが見えた。

校務員は校長へ「あとで笑われてもいいからもっと高いところへ逃げたほうがいい」と進言。それを受けた校長は学校北側の裏山へ児童たちを誘導した。

その直後、津波は18メートルの高さとなって学校敷地内へ駆け上がってきた。波は2階建て校舎の2階床上まで到達。体育館の壁は破られ、教職員の車は渡り廊下の屋根に乗り上げるなどしたが1人の犠牲者も出すことはなかった。

校舎は使用不能となり、児童らは平成23年（2011）4月から、船越湾の対岸、直線距離で約4キロメートル離れた県立の研修施設「陸中海岸青少年の家」を間借りして授業を再開した。

同年6月2日、町教委は、文部科学省（以下、文科省）に対し「原校地内への移転・新築の理由」を提出した。

国が定める復興事業の多くは「原形復旧」が基本となる。文科省の方針も「主体構造物に致命傷がなければ現校舎の補修・復旧」というものだった。

同年7月12日、町教委は、船越小の保護者や地域住民に対し、復旧に関する説明会を開催した。

被災直後の船越小学校（4月11日）

3つの復旧事業案を提示

このとき町教委が提示した復旧事業案は、①児童を近隣の小学校へ通学させる②学校のそばの山を切り崩して校舎の1階部分を吹き抜けとする3階建て校舎を建てる③現在地以外の高台に校舎を再建する――という3案であった。

近隣の小学校となるのは、織笠小または大浦小だ。通学に際しては、もちろんスクールバスが運行される。

学校のそばに校舎を再建する案は、裏山を切り崩して新校舎を建設するもの。3・11の浸水地点よりも高く盛り土し、また、再建する3階建ての校舎1階部分は吹き抜けにして減災を図るほか、屋上から避難する道路も整備する。

町教委では、これら2つの案については、最短で平成24年度内に校舎再建が可能だと説明した。

一方、現在地以外での再建という3つめの案では、用地確保などに難航が予想されることから、完成まで5年以上かかるという見通しを示した。

説明を受けた保護者から出された意見のうち、最も多かったのは「子どもが海を怖がっている。現在地以外に建設してほしい」というものであった。

津波が到達した現在地での復旧は、児童に心理的な圧迫感を与え、警報が発令されたときなどには心的外傷がよみがえり、避難行動に萎縮などの影響が現れることが懸念された。

事実、震災後には海を怖がる子どももいた。それは保護者も同様で、震災以降、地震速報が流れるたびに、あの日を思い出して胸が苦しくなると語る人も多かった。

町教委では、以後も断続的に文科省と協議を進めた。また保護者・地域住民との話し合いを重ね、8月9日には「船越小学校区推進協議会」と「船越小学校ＰＴＡ」との合同会議も行われた。

発災から1カ月。子どもたちの笑顔

子どもたちの心情を第一に 移転を決断

同月には県教育委員会（以下、県教委）の現地視察が、また、9月1日には文科省による災害復旧対応状況ヒアリングも県教委、文科省合同で行われた。

多くの話し合いや協議が重ねられてきた中で、町教委は、児童たちの心情を第一に考え、また、保護者感情にも配慮して、補修・復旧によらず、現在地以外の高台への移転・新築を決断。10月30日には船越小学校再建（災害復旧）事業に係る説明会」を開催し、校舎は近隣高台へ移転・新築すると説明。そして11月18日、文科省からは、船越小の被災校舎は「原形復旧が不適当な場合に該当する」との回答が得られた。

これらを受けて、町教委は11月22日、「山田町立船越小学校再建の基本構想（東日本大震災・災害復旧事業）」を策定。そして12月26日には新校舎の基本設計業務委託を発注し、正月明け早々の平成24年（2012）1月6日には被災校舎の解体工事（環境省補助）を発注するなど、スピード感を持って船越小学校災害復旧事業業務に当たった。

平成24年（2012）は、校舎建設予定地の埋蔵文化財調査、予定用地の取得、基本設計に対する学校意見・要望などの聞き取りが行われ、同年9月4日には、造成工事に着手した。

被災地で最も早く再建を達成

平成25年（2013）4月24日、校舎建設工事の安全祈願祭が行われ、建設工事を開始。また、年末には新校舎における翌春からの小学校生活に関する保護者説明会も開催された。

年が明けた平成26年（2014）2月27日、校舎や屋内運動場（体育館）などの工事完了検査が実施され、翌28日、新校舎と体育館の引き渡しと取り扱い説明会が実施された。

3月23日には、ＰＴＡ主催で「陸中海岸青少年の家」の清掃作業が行われ、約3年間にわたって学び舎として過ごした施設に、感謝の意が伝えられた。

そして4月5日、完成した新校舎の落成記念式典が開催された。2年生から6年生までの児童、来賓が出席し、また式典後には地域住民向けの見学会も開催。卒業生も来校し木の匂いとぬくもりを感じながら、新たに整備された防災学習室や、地区の防災拠点ともなり得る備蓄庫や調理室などを興味深く見学した。

4月7日は入学式も挙行され、男子13人、女子12人の新入生を迎えた。

船越小は、被災した青森・岩手・宮城の3県で、

海を見下ろす高台に建つ船越小学校の校舎

建て替えが必要とされた公立小中学校約100校の中で最も早く復興を成し遂げた学校となった。

校舎が建つのは海抜24メートルの高台だ。新しい校舎のどの教室からも海が見える。

校歌はもちろん継承され、そこには「真白き砂に照り映えて／海の光の満つところ／学びの業（わざ）の華（はな）と咲く」とうたわれている。

その詞のごとく、子どもたちは、船越湾の碧（あお）い光と潮の香に包まれて、新たな歴史を紡ぎ始めている。

震災後最大の課題「学校再編」

震災以降に本町における教育の十年間を振り返るとき、町教委が「最大の事業だった」と位置付けるのは「学校再編推進事業」である。

町の復興事業が進む中では、土地利用再編による居住区や商業地区の分離、地域コミュニティーの再編、道路の付け替えや交通体系の変化など、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化してきた。

また、全国の大都市圏を除き、地方では長期的に少子高齢化が続いている。財政の逼迫（ひっぱく）といった問題も多くの地方自治体に広がっており、2000年代に入ってからは、市区町村立の幼稚園、小・中学校、県立・公立の高等学校など、すべての学校段階で統合・再編の動きがいっそう進行している。

学校施設の改修や改築整備もまた、多くの自治体が直面している課題だ。第二次ベビーブーマーまたは団塊ジュニアと呼ばれる世代の増加に併せて、日本全国では昭和40年代後半から50年代（1970年代前半）にかけて多くの学校施設が建てられた。現在、それらが耐用年数（建設後50年）を過ぎようとしている。

日本の、または地方の人口が、これからも長期的に減少し続ける傾向にあるのかどうかは、国の少子化対策や移民政策といった政策によって変動する可能性もあるが、現時点では、この先の人口動態を見越したうえで、改修や改築を施（ほどこ）す学校を絞り込む必要性がある。

近年、各地で小・中学校の統合再編が進行する背景にはこうした理由もある。

複式学級の解消目指し大規模な見直しに着手

町教委では、平成30年度から学校再編推進事業を開始した。

震災前の平成18年（2006）には、当時の教育長が町議会において「統合再編についてはやがて検討されるべき」との答弁を行っており、その「やがて」という時期が訪れたともいえる。

本町の場合は、やはり児童数の減少が顕著であり、町内の小学校9校のうち6校で複式学級を有していた現状があった。複式学級とは、複数の学年で1学級を編成して教育活動を営む学級のことで、平成29年（2017）現在、岩手県内486の小中学校のうち小学校100校、中学校5校で複式学級による授業が行われていた。

町教委は、平成29年度に実施した「山田町学校規模適正化検討委員会」から「複式学級は解消すべきであるということ、10年後20年後を見越して大きく学校規模の見直しを図ること、具体的には①豊間根地区と山田地区で小・中学校各1校または②町全体で小・中学校各1校」との提言を受け、平成30年（2018）7月から11月にかけて、全小学校区単位で学校再編を検討するための住民説明会を開催した。

20回を超える議論を重ね小学校3校、中学校1校へ

学校の統廃合は、町の住民の誰にとっても大きな課題だった。地区によっては反対する向きもあり、説明会は各地区1回ずつでは終わらず、1年間で20回以上行われた。

船越地区では船越小が、地区の防災拠点としての機能を持たせて再建されたばかりであった。統合それ自体への反対は多くなかったが、統合予定の新小学校が既存の山田南小の古い校舎であるなら、新しい校舎が建つまでは、船越小はこのまま残してほしいという意見が出された。新校舎は復興のシンボルでもあった。

一方、多くの地域では児童数の減少についての議論が多く、「複式学級よりは大人数の友だちの中で学ばせたい」「6年間同じ仲間だけで過ごすのでは新しい関係性を形成するという経験が少なくなる」などの意見もあり、小学校の統合にはおおむね賛同が得られた。

中学校については、豊間根地区から反発もあった。中には「津波から逃れて、海のない豊間根地区へ引っ越したのに、また海辺へ子どもを通わせるのか」という声もあった。

海辺の地区から豊間根地区の仮設住宅へ入り、そのまま豊間根に家を建てたという人もいた。10年という時間の中では、旧来の地域コミュニティーの中へ溶け込み、豊間根という地区で子どもたちを小学校に通わせたい、豊間根地区の核施設でもある小学校は残したいと考える人が多かった。

結果として、小学校は荒川小が豊間根小に統合、大沢小、山田北小、織笠小、轟木小、大浦小の6校は1校に新設統合し、船越小は存続することとした。中学校は豊間根中学校が山田中学校に統合し、小学校3校、中学校1校に再編されることになった。

平成31年（2019）4月、「再編推進準備委員会」が立ち上げられ、令和2年（2020）4月からの新体制に向けた準備が開始された。

新校舎落成記念式典

新生・山田小学校の船出

準備委員会では、新小学校の校名、校章、校歌などを定めていった。

校名と校章は公募によって募集した。校名は町内外の248人から129種が集まり、最終的に「山田小学校」と決定した。また、校章についても町内外の35人から51点の応募があり、その中から決定された。

校歌は、八戸市出身で東日本大震災の支援活動も精力的に行なっているミュージシャンの北山陽一（きたやまよういち）氏（ゴスペラーズ）に制作を依頼した。

また、閉校となる荒川小、大沢小、山田北小、山田南小、織笠小、轟木小、大浦小、豊間根中の8校をまとめた閉校記念誌を各校協力のもとに作成した。

学校再編事業は、新しい小学校の校名や校章のアイデアを広く公募したり、運動着についてのアンケート調査を行った。学校、児童・保護者、地域が一体となって町の新しい小学校のあり方、子どもたちにとってのより良い教育環境とはどのようにあるべきかといったことについて考える機

閉校前の７小学校、１中学校

織笠小学校

荒川小学校

轟木小学校

大沢小学校

大浦小学校

山田北小学校

豊間根中学校

山田南小学校

会となった。また、学校を盛り上げようという機運の高まりにつながったといえる。

多くの友人たちと触れ合う中で、山田町の各地区の良さ、伝えられてきたことの美しさを知って理解できる子どもとして成長し、次代へ伝承する力を養ってほしい、と大人たちは願っている。

学校給食センターの完成で完全給食の実施

学校関連の事業では、令和2年度から「学校給食」がスタートした。

それまで町の学校給食は、大浦小でのみ自校式給食を実施していたが、県内で唯一学校給食が実施されていなかった。町では、センター方式での学校給食実施に向け、給食センター建設事業に着手していたが、東日本大震災が発生し復興事業を優先して実施するため、一時凍結とされていた。

しかし、子どもたちの健全育成に資する施設として、また、保護者からの強い要望があったことから、平成30年（２０１８）７月「山田町立学校給食センター」として事業着手。令和元年（２０１９）８月に完成、令和2年（２０２０）４月からセンター方式での完全給食を実施している。

令和２年４月13日から学校給食センターが本格稼働を開始した

今後はできるだけ地元の食材を使い、子どもたちに山田の味わいを学校給食でも感じてもらいたいと、できる限り地元産の食材の使用に努めている。

地産地消は地域経済の活性化にも資する。また近年は「身土不二（しんどふじ）」という言葉も耳にする機会が増えた。身体は「食」で支えられ、食材は環境（土）が育てるもの。つまり身体と環境は一体であるという考え方だ。

山田のものを食べ、山田に暮らすことはまた、山田の気候風土をそのまま学ぶことでもある。

学校給食の献立例（中学生の量）

子どもたちに届けられた大きな支援

震災発生後、本町の学校・教育に係る分野には、多くの団体からたくさんの支援をいただいた。

震災直後には、国際的な活動をする団体である「認定ＮＰＯ法人・国境なき子どもたち（ＫｎＫ）」から、教育・学校関連の支援の申し出があった。町は、その申し出に感謝し、同団体に対してスクールバス６台の支援を願い出たところ、バスはわずか約１カ月で寄贈され、通学時の懸念を解消することができた。また、体操着や制服、さらには教職員住宅の改修など多方面にわたっての支援をいただいた。

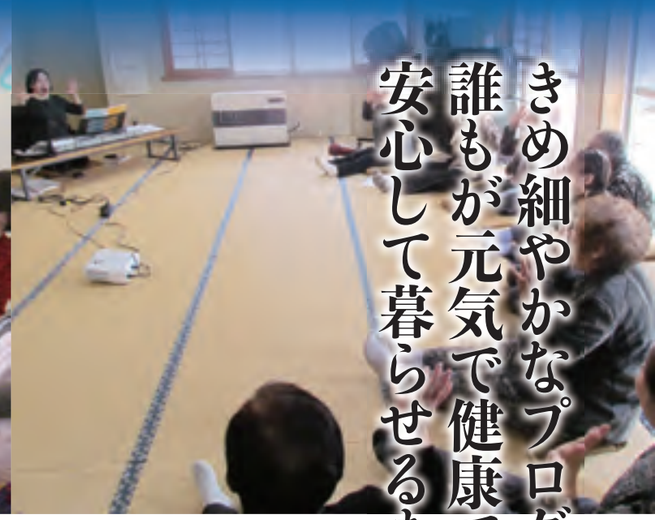
また「公益財団法人・国際開発救援財団（ＦＩＤＲ）」からは、学校図書の寄贈、部活動サポート、スポーツ少年団（以下、スポ少）への支援などを、そして「公益財団法人・日本ユニセフ協会」からは、全小中学校への天井掛け扇風機の設置、文房具、学用品、体操着、リコーダーなどの支援、さらに「公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」からは、学校備品、学用品の配布、スポ少・部活動支援に加え、「山田子どもまちづくりクラブ」のメンバーとデザインした子どもたちの居場所となる施設「山田町ふれあいセンター」を三陸鉄道陸中山田駅に建設し、町に寄贈した。同施設は図書館機能を兼ね備えており、多くの町民に利用されている。

町の児童・生徒たちに対し、数多くの皆さまにご支援をいただいたことに深く感謝申し上げるしだいである。（関連記事 第五章　感謝）

医療・介護・福祉

震災は、明日へと続いていくはずだった日常生活や
コミュニティーを突然破壊し、多くの人が喪失感に打ちのめされた。
生活と心の復興なくして真の復興はあり得ない。
「誰一人置き去りにしない―」。支えて、支えられてともに生きる。

えがおの和（全地区）では、小物づくりを中心に活動



にぎやかに楽しんで活動する、荒川地区かめさん教室

きめ細やかなプログラムや事業を展開し誰もが元気で健康で安心して暮らせるまちを創る

生活の復興とコミュニティー再構築

復興の過程には、インフラや建物などの、いわゆるハード面の整備とともに、被災した住民が抱える問題に寄り添った生活の復興を両輪として進める必要がある。

一人ひとりが健康を守ること。そして身体だけではなく心もまた元気であり続け、誰かと関わり合い、助け合い、支え合う関係―地域コミュニティーの絆―を再構築することが非常に重要となる。

東日本大震災の時も、地域の住民たちは互いに手を取り合い、高台に逃げたことで多くの命が救われた。避難所や仮設住宅でも、助け合ったり励まし合ったりしながら懸命に難局を乗り越えてきた。

山田町復興計画では、基本理念のひとつとして「住民が主体となった地域づくり」を掲げている。町民の「自分たちのまちは自分たちでつくり、守っていく」という思いは、これからもまた引き継がれる。

津波は、昔ながらの近所付き合いや地域の結び付き、すなわちコミュニティーをも破壊した。震災後の新たな日常においても、仲間たちと集い、支え合う地域社会の絆の再構築は、高齢者世帯の見守りや、あるいは祭りなどの伝統・伝承活動といったまちづくりや地域づくりのためにも重要な課題のひとつである。

地域の生活者の安全を地域のみんなで守る。あるいは地域の課題や希望をみんなで話し合い行政に伝える。

目には見えないつながり・絆。それらをより強くすることで、一過性ではない、確かな地域づくりの底力が生まれる。

山田町復興計画では、これまで長年にわたって築かれてきた住民同士の信頼関係や〝ご近所付き合い〟といったものが失われたり、高齢者や社会的弱者の方などが孤立したりすることのないよう、地域の絆に配慮した居住地再編を進めるなど、コミュニティーの活性化を目指してきた。

非常時は要援護者対応からスタート

震災の直後、町は「高齢者生活機能実態調査事業」を実施し、避難所や仮設住宅での高齢者の生活実態の把握に努めた。高齢者福祉は非常時対応の最優先事項のひとつである。避難所の被災者、在宅の被災者、高齢者施設の入所者への対応など、まずは「要援護者」の存在と実態をつかむことから始められた。

当時は高齢者施設だけで3カ所が被災していた。被災した入所者は、被災していない特別養護老人ホームや小規模多機能事業所に「福祉避難所」として受け入れてもらうなどの措置で対応した。高齢者、障がい者、寝たきりの人など、避難所生活において何らかの特別な配慮が必要となる被災者を対象とした。

そして、町ではその後、大規模災害が再び発生した場合に備え、町内のほとんどの事業者と福祉避難所の開設に関する協定を結び、有事の際の高齢者の対応を明確化している。

地域支え合い体制づくり事業「やってみよう会」※仮設集会所サロン（間木戸仮設集会所）

地域支え合い体制づくり事業「生きがいデイサロン」※イベントの様子（ほっとサポートセンター）

「地域で支え合う体制」づくりを目指して

避難所が次第に閉鎖されていく中、5月からは高齢者、障がい者、要介護者、妊婦、子どもたちなど、いわゆる災害弱者へ対応する各種事業がスタートした。

仮設住宅などに入居した高齢者や障がい者の支

地域支え合い体制づくり事業「やってみよう会」※仮設集会所工作サロン（旧長崎団地仮設談話室）

援を目的とした事業としては「地域支え合い体制づくり事業」がある。

震災以前は戸建てに暮らす住民が多く、慣れない仮設住宅での暮らしは、例えばストレス、あるいは運動不足などさまざまな形で心身の動きを不活発にする。自宅や家族を失った喪失感、将来への不安などもある。町では職員を巡回させ、心身の状態を見守る活動を続けた。これは高齢者に限らず、生活環境の変化から生じた健康不安や孤立感を抱える町民を対象に、日本社会福祉士会など外部からの応援も受けながら実施した。

仮設住宅への入居が始まって3カ月ほど過ぎた平成23年（２０１１）10月、町では仮設住宅入居者の不安や戸惑いに応えたり、健康状態などを見守るための支援体制として、山田第４仮設団地（山田地区間木戸）内に「ほっとサポートセンター山田」を設置した。また、規模が大きな6カ所の豊間根、大沢、山田、織笠、船越の仮設住宅にサポート拠点となるブランチがおかれ、ライフサポートアドバイザーが常駐した。

そのほか、山田町社会福祉協議会（以下、町社協）が岩手県社会福祉協議会（以下、県社協）から委託を受けて、生活支援相談員を配置し、被災者の見守りや生活相談を実施し、必要とされる支援を関係機関につなげることで、住民を支えてきた。

地域みんなで弱者を支える。地域のことは地域で支え合い、助け合う。そういった関係の構築は災害発生時には大きな「地域の力」となる。

平成25年度から始まった、地域包括ケア体制づくりのための施設整備補助事業「介護基盤復興まちづくり整備事業」や、高齢者介護予防に取り組む地域コミュニティー団体への補助を行う平成26年度からの「高齢者地区組織支えあい事業」などは、「お互いに元気で過ごして行こう」と地域で共有しながら健康づくりを進めていくことを目的に実施されてきた。これらは地域コミュニティーの再構築の上にこそ大きな効果を発揮した。

地域支え合い体制づくり事業「看護師ボランティアによるサロン」※健康講話（猿神仮設集会所）

地域支え合い体制づくり事業「生きがいデイサロン」※脳トレゲーム（ほっとサポートセンター）

山田町社会福祉協議会の対応

町社協では、震災直後から「被災者への寄り添い」をテーマに、被災者一人ひとりに向き合いながら「つながりづくり＝コミュニティー再構築」に取り組み続けてきた。

ただ、震災直後の避難所では、コミュニティーづくりよりも「まず助ける」が最初の対応だった。要援護者のトイレ介助や入浴車での支援、おむつの確保や手配など、物資が不足している中での介護支援が主だった。次第に届き始めた支援物資の仕分けも並行して行なった。これには避難者自身も参加した。

震災の４～5日後には、豊間根地区の上豊間根自治交流会館へ要介護者とその家族が移り、ヘルパーの支援が入った。その後、要介護者は福祉避難所へ移ったり、内陸の施設に受け入れてもらうなどした。

時間の経過とともに全国ホームヘルパー協議会からの支援申し出も入り、山田町には県社協を通じて2名が派遣され、ローテーション体制で介護支援が行われた。

また、ボランティアへの対応も町社協が担当した。全国各地からボランティアを申し出てくる人は多かったが、ニーズとのマッチングが難しかった。のちに青年会議所（ＪＣＩ）や、全国社会福祉協議会の災害派遣（静岡県と長野県内の市町村社協の職員）が訪れ、町内のどこでどんなボランティアニーズがあるのか、その数や場所を事前に把握してくれたことで、訪れたボランティアとのマッチングがスムーズに進むこととなった。いわば助ける人をサポートするという体制で、この応援には大きく助けられた。

一方、県社協はボランティアバスを組織。更には本町も長野県、静岡県、みえ災害ボランティア支援センターなどから多くの応援をいただくこととなった。

本町へやってきてくれたボランティア団体は２７３５団体にもなる。4月の災害ボランティアセンター開設後、住宅敷地内や側溝の泥出し作業など主に力仕事のほか、炊き出しなどもしてもらい、これは11月ごろまで続いた。

12月以降は仮設住宅でのサロン活動の調整や、ニーズに応えてイベントや各種の行事も手伝ってもらった。お茶っこ飲み、お菓子作り、あるいは手工芸や折り紙教室などといったメニューは、ボランティアスタッフが企画・運営した。こうした活動は仮設住宅でのコミュニティーづくりや強化、入居者の安否確認などにもつながる。

仮設住宅は、避難所と違いプライバシーを確保できる空間だったが、その一方では部屋にこもりきりになる人もいた。また公的支援の情報が届きにくくもなる。そうした情報を伝えたり、困りごとをすぐに相談できる窓口となったのが、仮設住宅を巡回訪問していた生活支援相談員である。

生活支援相談員は、仮設・災害公営・再建住宅の安否確認などを行ったほか、地域の資源や課題を共有する「支え合いマップ」を制作したり、「カ

生活支援相談員

カフェよりあいっこ

町内 17 の福祉団体が協力して開催した「第一回やまだ福祉まつり」

フェよりあいっこ」という交流の場の設定や、料理を通じた住民交流会などを災害公営住宅・再建住宅地・既存住宅地などで展開してきた。

また、地域の困り事を掘り起こす「生活支援サービスのニーズ調査」、関係者とのネットワークを構築する「アクション90」といった各種の事業を通じて、ひきこもり気味になる人の孤独感を解消するなど、震災後の新たなコミュニティー構築に大きな役割を果たしてきた。

「住民自治意識」の醸成を

仮設住宅でのコミュニティーは、顔を合わせるきっかけと場所づくり、そしてイベントや各種教室のメニューを用意することで、入居者の心を引くことからだんだん形成されていった。生活支援相談員は全戸を回り、その結果を町とも共有し、入居者の変化に合わせてさまざまな支援策を打ち出した。

なかには人付き合いが苦手、あるいはおっくうという人もいる。そうした人を仮設住宅でのサロン活動へ誘うためのメニューを見つけるのも大変だったという。コミュニティーづくりとは信頼関係をつくっていくことでもある。

被災者の生活の場が仮設住宅から災害公営住宅へと変わると、コミュニティーづくりの支援はまた一からスタートし直した。そのひとつに「自治会設立」のためのサポートがあった。

災害公営住宅は、新しい「地区」でもある。顔合わせイベントなどを行ったり、交流の場を設定したりするなどしてお互いを知り、それから「自分たちの地区を自分たちでつくっていく」ための自治会づくりを支援する。

これは町と社協、外部からのアドバイザーと協力しながらの作業だった。押し付けではなく、文字通りの「住民自治」の形成を促す方法で進められ、災害公営住宅や高台住宅団地に新たなコミュニティー組織を形成することができた。

山田中央団地自治会主催の盆踊り大会

関谷はなもも健康教室

「地域包括ケアシステム」で住民サポート

「地域包括ケアシステム」は、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるように「医療・介護・生活支援・介護予防・住まい」の５つの要素が連携しながら、高齢者の在宅生活を支える仕組みである。厚生労働省は団塊（だんかい）の世代が75歳となる２０２５年をめどに、仕組みづくりの構築を目標に掲げており、各自治体で構築が進められている。

町では「地域包括支援センター」を中心として、このシステムの構築とサービスの実施に努めてきた。

支えて支えられる地域であることが「包括」のベースとなる。

高齢者から子どもまでも対象に「健康づくり」

山田町の子どもたちは、肥満の傾向にある。また、大人では脳卒中死亡率が高く、糖尿病も多い。震災後は、仮設住宅に入居した人や災害公営住宅に移った人が運動不足になって運動機能が低下したり、さらには生活習慣病や不活発病などを発症する例も多かった。

健康を保つことは病院にかかることを減らし、さらに将来的には要介護者を減らすことにつながっていく。

町では震災の前から特定保健指導としてメタボリック症候群改善のための運動教室なども実施してきた。震災後は、こうした傾向をより改善するために、親子を対象とした食育教室、外部から講師を招いた健康づくりのための講演会、高齢者のための「シルバーリハビリ体操」の奨励、健診データに基づいた戸別訪問指導などのほか、現在は脳卒中を予防することに特化した指導なども進めている。

一人ひとりに寄り添う「こころのケア」

震災後、消し去りがたい心の傷を負ってしまった被災者も多い。家を失ったり、身近な人を亡くしたり、中には「生き残ってしまった」と罪悪感を抱く人さえいた。

さらに仮設住宅での慣れない生活が追い打ちをかけた。子どもや孫と離れて暮らすことになって寂しさを感じたり、落ち込んだり、あるいは隣室の音が気になる、エアコンの室外機がうるさいといって怒りっぽくなったという人などもいた。

2017年３月11日 山田高校の生徒が企画した「3.11 ともしびのつどい」

県は、震災直後から「こころのケアセンター」を岩手医科大学とともに運営してきた。継続して中長期的に「こころのケア」を推進することを目的に、全県の中核となる「岩手県こころのケアセンター」を岩手医科大学に設置するとともに、特に沿岸4地域には、地域における「こころのケア」を推進する「地域こころのケアセンター」を設置した。

山田町には、宮古地区に置かれた同センターから精神科医や精神保健福祉士・心理士・保健師等が派遣され、仮設住宅集会室での講話や戸別の訪問などを行った。対象は仮設住宅入居者ばかりでなく、広く町民に対してストレスの緩和方法や睡眠についての指導、また家族を亡くした人への遺族支援なども実施。そして仮設住宅から災害公営住宅へと移行しても支援は継続された。

これらの結果やデータは、町の保健師や看護師も共有。逆に町からこころのケアセンターへ情報を上げて、対象者に医師を紹介することなどもあった。

兵庫県では、阪神淡路大震災の後、10数年が過ぎてから、初めて精神科医の元を訪ねた人もいるという。何年経っても癒やされない悲しみが、あるとき急に膨らむこともある。

東日本大震災から10年。消えない悲しみを抱えて生きている人は多い。

心の復興なくして「生活の復興」は成し得難い。

子どもたちへの支援

船越地区では、船越小学校の一部教室を使用し「船越小学校放課後児童クラブ」とするため改修中だったが、被災し子どもたちの居場所、特に仮設住宅に入居した子どもたちが落ち着いて勉強できる場所がなくなった。

そうした現状に対し、オランダ系企業や団体によって設立された「一般社団法人オランダ島」から、その代わりとなる施設を建設したいという申し出があった。平成26年（2014）5月に完成した「オランダ島ハウス」である。

放課後児童クラブとして子どもたちに遊び場と学習スペースを提供するほか、「子育てサロン」を開催し、仮設住宅暮らしの中で、孤立しがちだった母親たちのための情報交換の場ともなった。午前の子育てサロンでは、子育ての悩みなどの相談を受けたり、母子の健康状態を把握するなどの活動が続けられた。

オランダ島ハウスでの活動

また、台湾赤十字組織と日本赤十字社の協力により「山田北小学校放課後児童クラブ」「豊間根地区放課後児童クラブ」も整備され、子どもたちの遊び場、生活や学習できる環境が整えられ、震災で行き場を失った子どもたちの健全な育成に貢献した。

さらに、保健師・看護師・栄養士らが支援チームを組織して、子どもたちがいる家庭をはじめ、高齢者世帯も訪問の対象として入居者の健康状態を把握する「仮設住宅の入居者健康支援事業」を町全域で実施した。

なおこの事業は、仮設住宅がほぼ撤去され、本設や公営住宅へと移った現在も継続実施中である。

震災による孤児・遺児への対応では、児童相談所職員や県・町の職員により、祖父母などが里親となって養育している家庭へ定期的に訪問を行い、心身のケアを行っている。

安心して子育てができる町に

保健師による幅広い世代への様々な支援は、震災前も震災後も変わらず手厚く行われてきた。しかし、震災後は、寄せられる町民たちの声にもさまざまな変化と思いが込められている。仮設住宅では子どもの泣き声にも気を遣う、収入面に不安があるので働きに出たいが子どもがまだ小さいので条件が合わない、子育て中の母親であれば、新しいコミュニティーの中で相談する相手が減った、見つけられない、といった悩みを抱えていた。

平成29年（2017）、町では「子育て世代包括支援センター」を立ち上げ、そこには助産師も加わり「助産師なんでも相談」という子育てに関するいろいろな相談を受け付ける窓口を開設。育児への不安や乳幼児の世話、授乳の悩みなどは、助産師に相談することで解決できるケースもあり、母親世代の女性たちから好評を得ている。平成27年（2015）からは「特定不妊治療費助成」もスタート。特定不妊治療に要した費用については、県と町で全額助成している。

また、令和2年度からは、少子化対策事業の一環として「保育料無償化」を実施。令和元年（2019）10月から始まった国の制度による3～5歳児までの保育料無償化に加え、町独自に0～2歳児までの保育料についても無償化の対象としている。

震災は、例えばそれまでは普通にあった三世代同居や、近隣家庭との関わりや地域ぐるみで子どもを育てるといった、子育て環境も激変させた。

震災から十年を経て、環境はなお変化を続けている。町では、時代のニーズに合う施策やプログラムを常に模索し、あるいは実施しながら、今を生き、そして未来を創っていく子どもたちと母親と、やがて母親になる女性たちを応援している。

誰もが元気なまちづくり

高齢者が安心して暮らしていけるよう、日常的な福祉支援を包括的に提供する「地域包括ケアシステム」の構築と強化をいっそう進め、支えて支えられる福祉のまちづくりを目指す。

子どもたちは夢と目標を高く掲げてはつらつと、高齢者は生きがいを感じながら日々を生き生きと。復興計画はひとつの区切りを迎えるが、元気な町民たちによるまちづくりはまだまだ続く。

助産師なんでも相談

子育て世代包括支援センター

山田中央公園に、子どもたちの笑い声がこだまする（2021年2月11日）

住民生活

震災後、町内には約2000戸もの仮設住宅が建てられた。
災害公営住宅の建設、または防災集団移転など住民の暮らしは変わり続けた。
これからもコミュニティ再生や空室の有効活用といった課題解決を図りながら、
新たな「まち」をつくる大事業は続いていく。

山田地区（かさ上げ部）土地区画整理事業（475戸、20.3ヘクタール）

家を失った大災害から十年
災害公営住宅と防災集団移転による「仮」から本設の暮らしへ

被災家屋の8割が全壊

東日本大震災で発生した津波と火災は、山田町にあった7199棟の居宅のうち、46・8％に当たる3369棟に被害を与えた。

その被災家屋3369棟のうち、「全壊」が2762棟（約82％）、「大規模半壊」が202棟、「半壊」が203棟、「一部損壊」が202棟（それぞれ約6％）で、町にあった家屋の半数近くが一部損壊以上の被害を受け、また被災家屋の8割が「全壊」という大規模災害だった。

以上は棟数であり、住まいを失くした人の数は算出していないが、町内に建設された応急仮設住宅の数は1940戸に上った。

震災以前、町では災害が発生した際の応急仮設住宅の建設場所と建設戸数について、公有地で約1000戸程度を想定し、県に報告を出していた。

しかし、東日本大震災の被災規模はそうした想定をはるかに超えた。

しかも津波浸水区域は広大であり、浸水箇所に建設することはできない。想定していた公有地もまた浸水被害を受けた場所がある。要望戸数を満たすだけの土地が用意できないという事態となった。

そのため、町では民有地の所有者に協力を仰いだ。とはいえ、もともと休耕地であったりと住宅建築のための更地ではなかったため、造成にも時間がかかり、最後の避難者が入居を完了したのは5カ月後であった。

応急仮設住宅の着工と建設

震災発生翌日の3月12日、県は被災市町村に対して応急仮設住宅建設希望調査を開始し、同時に社団法人・プレハブ建築協会に応急仮設住宅の事前準備を依頼した。

3月13日には、県から同協会に対して、当面8800戸の建設を想定している旨を連絡。3月14日に同協会の担当業者と協議に入り、同協会に建設を正式要請、3月16日、建設候補地の現地調査を開始した。

そして3月19日には、陸前高田市と釜石市で応急仮設住宅第1弾の建設に着手、3月25日には大船渡市、宮古市で、そして3月28日からは山田町と大槌町でも第1弾建設に着手した。

災害規模が明らかになるにつれ、建設戸数は何度か修正された。3月31日、県は岩手県における必要戸数を1万8000戸とすることを発表。5月9日には1万4000戸に修正された。

本町で追加分の建設が着手されていったのは、4月は8日、同15日、同22日、同29日。5月は6日、同13日、同20日、同27日、6月は3日、同14日、同17日（グループホーム型）、同18日、同21日で、6月27日には、県内で全ての応急仮設住宅が工事に着手。ただし7月20日には本町追加募集に対応して150戸が追加着手された。県内すべての仮設住宅が完成したのは8月11日だった。

災害公営住宅の整備戸数

応急仮設住宅とは、文字通り「仮の住まい」である。入居した被災者は、やがてここを出て、各自が建てた本設の住宅あるいは災害公営住宅

大沢アパート（35戸）集合・県営

へと移らなければならない。

公営住宅は、マンション型の鉄筋コンクリート造集合住宅や木造の戸建て住宅などがある。一方、本設（自費で住宅を再建）する場合、平地部が少ない本町の場合は住宅用地の確保が難しいという課題がある。

もともと自宅があった場所へ再建する場合は、そこが災害危険区域に指定されていれば再建は認められない。「防災集団移転事業」や、嵩上げされた「土地区画整理事業」によって造成・整地された土地あるいは、自力で土地を探して建築するかという選択になる。

仮設住宅の建設（2011年3月30日）

本町における災害公営住宅の入居に関しての業務は震災から11カ月目の平成24年（2012）2月、まずは入居を希望する人の大まかな数を把握する作業から始めた。同年9月には個別面談も開始し、希望戸数を772戸と把握、未定も含めると831戸となった。

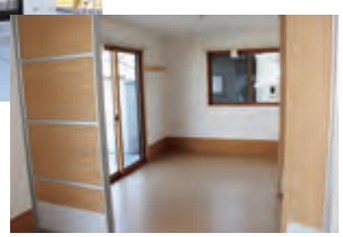
災害公営住宅の供給は、市町村が中心的な役割を担い、県が一部分担や業務代行するという形で協力し、そして国が財政的・技術的に支援するという枠組みで進んだ。

まず、どこに何戸を整備するかという供給計画を策定。そして計画に基づき住宅を整備し、完成した住宅の入居者を決めていく。

次いで個別面談などヒアリングが行われ、地区ごとの整備戸数や戸建、集合などの建て方、間取りの配分などをまとめ、そして「仮申し込み」という形で確度の高い意思表示が得られたら、その申込状況を元に供給計画の内容（室数・建設戸数など）を確定し、それから建設着手へと移る。

入居希望戸数は時間とともに減少

被災地の災害公営住宅建設について、このように時間がかかったことは、今後の課題として残された。しかし「とにかく急いでたくさん」という方式では、仮に空室などが大量に出た場合は、将来的な維持管理に影を落としかねない。過去、他地方の例では、余剰ストックの維持管理が自治体の財政を圧迫しているというケースもあった。


戸建てタイプの災害公営住宅（外観／上、内観／右）

また、仮設とは違い「終の棲家」ともなりうるため、入居後の生活を考慮した設計や丁寧な施工でなければならない。さらには人手不足と人件費、建設資材の高騰といった課題や、平地が少ない本町の場合は、用地の確保に時間が費やされたという事情もある。

平成25年（2013）12月から平成26年（2014）1月にかけて、入居者の希望登録（仮申し込み）が行われ777戸の希望登録があった。

しかし、こうした間にも都市部で家を建てた長男と同居する、いっそ他地方へ引っ越したい――など入居を希望していた住民にもさまざまな事情が発生した。平成28年（2016）4月からは再度、意向調査を実施し、同年9月、希望登録777戸は38戸減った739戸となり、供給計画はこれをもとに策定していった。

しかし、その後も戸数変更が2回あり、平成29年（2017）7月には650戸となり、平成30年（2018）4月になって最終調査を行い、山田町の災害公営住宅の戸数は640戸と確定した。内訳は、県営が4カ所231戸、町営が14カ所409戸である。

住宅団地の整備

町では、被災した住民の新たな住宅再建場所を整備するための事業として「防災集団移転促進事業（防集）」や「漁業集落防災機能強化事業（漁集）」、「都市再生区画整理事業（区画整理）」「津波復興拠点整備事業（津波拠点）」により進めた。

これらの事業は、新たな防潮堤整備後、東日本大震災規模の津波が発生した場合のシミュレーション結果に基づき検討を進め、各地区の整備手法として最も有効な事業として選択した。

防集は、「山田地区」「織笠地区」「船越・田の浜地区」「小谷鳥地区」の4地区、漁集は「大沢地区」「大浦地区」の2地区、区画整理は、「織笠地区」「山田地区」「大沢地区」の3地区、津波拠点は「山田地区」に導入。高台造成や盛土嵩上げにより安全な居住地を確保するための事業として計画した。この計画を基に各地区で住民説明会などを開催。意見や要望を取り入れながら、より具体的な計画として練り上げ、最終的な整備方針を決定した。

町では、この計画を基に高台住宅団地での再建、災害公営住宅への入居、自力での再建などの意向を確認するため、個別面談による住宅再建意向調査を平成24年（2012）3月から順次実施、全地区の調査が終了したのは25年（2013）3月で約1年を要した。

意向調査の結果に基づき高台住宅団地の整備戸数が把握できたことから、各団地の造成規模を算出、必要となる用地を取得するための動きを加速する必要があった。町は行政組織の機構改革を行い、新たな部署として25年（2013）4月に「用地課」を設置。災害公営住宅用地や高台住宅団地、道路等のインフラ整備に必要となる用地の買い取りを専門的に行う部署として位置づけた。工事着手に必要な用地取得の体制整備が図られたことにより、この年から各地区の造成工事が大きく動き出したのである。

防集で最初に造成されたのは織笠地区だった。ここは震災以前に国土調査も終了していたことから合意形成が早かった。

他の地区でも、災害公営住宅も防集も用地の取得はおおむねスムーズに進んだ。とはいえ、山を削り、道を開き、電気も引き、水道管も敷設して、その上で家を建てていくという工程は時間がかかる。まちをつくり未来を創るという

2015年3月に完成した織笠地区防集第1団地第1ブロック

2014年9月に行われた織笠地区高台団地の現場見学会

ことはまさに大事業なのである。

また、町は、住居を失った人が住宅を新築する場合の「住宅再建支援金」制度を準備し、再建を支援した。

国の「被災者生活再建支援金・加算支援金」と県・町の「被災者住宅再建支援事業補助金」および、その追加分（町）と併せて最大５００万円までが制度の対象となった。

今後の維持管理の課題

震災から10年を経て、土地区画整理事業や災害公営住宅、防集など、復興に係る住宅関連の事業は終了した。今後の課題は、新しいコミュニティーの構築や地区自治会の結成と維持、将来発生するであろう空き家・空き部屋などへの対応である。

2016年12月1日に入居が始まった災害公営住宅「山田中央団地」

災害公営住宅は「維持管理」という局面へと移行しつつある。町では、町営住宅の管理については指定管理業者へ委任している。例えば土日祝日に水道のトラブルなどが発生した場合の対応も素早く入居者からも好評である。

また、今後は造成団地の草刈りなどは地区自治会などで行ってもらえるような自治意識の醸成も課題である。

北浜アパート自治会による草取り作業

災害公営住宅で空き部屋が増えれば家賃収入も減少する。家賃は、起債の償還に充てたり、今後の修繕などの費用としたりするものだ。空き部屋といえども、維持管理は財政的な負担となる可能性も大きい。

令和2年（２０２０）9月から災害公営住宅の入居要件を緩和し、被災者以外の人も申し込みが可能となったが、今後、さらに有効利用を検討していくことになる。

町と地元業者の共同企画「山田型復興住宅」

行政にとって、復興のまちづくりを進めるということは大事業だが、一方、個人が家を建てるということもまた、一生に一度あるかないかという大きな事業だ。

特に津波で家を失い、再建することは被災者にとって資金的な負担も大きい。

被災者の住宅再建を助けたい――。平成28年（２０１６）、町と町内の住宅会社・地元工務店では、被災者がもう一度〝我が家〟を建てて、いつまでも町に暮らしてもらうことを応援するため「山田型復興住宅協議会」を結成。地元産の木材を使い、山田町の気候風土を知り尽くした施工業者が低廉で良質な住宅供給を実現する「山田型復興住宅」の提案を開始した。

設計はある程度固定し、基本的なタイプを用意することで建設工事費も抑え、坪単価49・5万円で建築するというものだ。

基本のモデルは3タイプあり、７７０万円から１２２５万円。間取りや設備を変えたい、もっと大きくしたいといった設計変更への対応も地元業者ならではの気軽さがある。

協議会に加盟するのは、7社の施工業者と20社の会員事業者だ。

建設のための自己資金が不足している場合は、被災者生活再建支援制度や災害援護資金貸付制度、生活再建住宅支援事業といった支援制度も活用できる。

町と地元業者が一体となって進めた住宅供給システムは、他の市町村には例がなく、この事業は県も注目し、やがて他の建設業者もこれをモデルとして類似の事業を始めている。

なお事業実績は、令和2年（２０２０）8月現在で29棟となっている。

山田型復興住宅のリーフレット（表紙）

山田型復興住宅モデルハウス

交　通

かつて「遠い土地」と言われていた三陸地方も、延伸を続ける高規格道路や新路線として復活した鉄道が、震災後の交流や物流に新しい動きを生み出している。域内交通においても、新システムの導入なども模索しながら、これからも利便性の確保に努めていく。

平成31年3月23日に三陸鉄道の盛駅（大船渡市）から久慈駅（久慈市）までの163kmの全線が開通し、「三陸鉄道リアス線」として一貫運行を開始

鉄路があり三陸沿岸道路もある町
時代変化と地域内移動の利便を
常に模索し続ける交通行政

鉄道の復活、自動車道の開通

東側に広がる海と、西側にそびえ連なる北上高地の山塊に挟まれた山田町は、古来より、町内を南北に貫く道だけが交通・流通の動脈だった。

南の大槌方面へ向かう道は、かつて九十九折れの狭い道が続く「四十八坂」という難所だった。北の宮古方面へも山あいをたどって峠を越える険しい道で、荷事などは行き来に苦労したという。

昭和の時代になり、国道45号が整備され、また国鉄山田線（当時）が盛岡から延伸し、交通の不便は大きく改善された。しかし、このふたつの交通手段が地震や自然災害で被災してしまうと、町は孤立してしまう状況は長らく変わらなかった。

現在は、町の高台を走る三陸沿岸道路も開通し、宮古市や釜石市の中心部へは30分もかからずに到着することができる。２０２１年内には八戸から仙台まで高規格道路で結ばれることとなる。また、被災し、一時は廃線も検討されたＪＲ山田線は平成31年（２０１９）３月に「三陸鉄道リアス線」として復旧している。

オランダ風車をイメージした三陸鉄道陸中山田駅

三陸鉄道陸中山田駅ホーム。鉄道の復活はまちに大きな力をくれた

三陸鉄道リアス線のチカラ

ＪＲ山田線が、三陸鉄道リアス線として復旧し、運行が再開された経緯については、本章一節「基盤整備」または第六章②「鉄路のチカラ」にも記述がある。

宮古・釜石間の鉄道の復旧は、ＪＲ東日本の事業である。町は、その経過を見守り続けた。町の願いは、バス高速輸送システム（ＢＲＴ）ではなく、あくまでも鉄路の復旧であった。鉄道の復活を願う町民たちの行動や運動も大きく作用した。復活までのプロセスには多くの人が関わった。

平成26年（２０１４）末、ＪＲ東日本と岩手県沿線４市町と三陸鉄道が、経営移管の基本合意を結んだという報せは、復興計画を進めていた町の背中を大きく押した。

鉄道復活が町に与えた最も大きな力は、なによりも鉄道復旧をまちづくりの前提とし、駅前ににぎわいをつくりだそうとしていたまちづくり構想においてであった。

従来の陸中山田駅を、これまでのように「町の玄関口」として、駅前地区に商業施設や生活利便施設を集積し、人の流れとにぎわいをつくりだすという計画は、平成23年（２０１１）に策定された「山田町復興計画」にも「陸中山田駅周辺を中心市街地と位置付け（中略）多様な機能を集約的に配置」することが明記され、これは平成27年（２０１５）策定の「まちなか再生計画」、同年5月策定の「山田町復興まちづくり計画」にも継承されている。

鉄道の復旧は、さまざまな復興事業実施の前提であり、まちづくりの核でもあった。

また、運営会社がＪＲから三陸鉄道に替わったことも小さな変化ではない。岩手県の沿岸部、久慈市から大船渡市までの10市町村を結んで走る、日本最長の第三セクター鉄道会社である三陸鉄道株式会社は、観光列車の企画や運行などにも力を入れている。町の観光行政との連携も図りやすくなる。

地域のために走る「マイレール」である三陸鉄道とのコラボレーション企画など、沿線市町村とも連携を図った。三陸らしい、あるいは山田町ならではのプランを提案し、協働で展開していくという「夢」も膨らんだ。

静かだった線路に、8年ぶりに踏切の音が響いた

地域公共交通網形成計画の策定

駅が町の玄関口であるならば、都市（まち）の道路・交通計画、交通網の形成プランもまた、まちの中心市街地である駅前が、ひとつの発着地点となる。

復興まちづくり計画において策定された「道路・交通計画」では、第一に「災害に強い道路網の形成」が挙げられた。

低地部から高台に至る道路（避難路）の整備のほか、市街地内では延焼遮断効果のある幹線道路の整備を進める。

他にも「都市活動と産業活動を支える道路網の形成」、公共交通の利便性を向上しつつ歩行者ネットワークをも形成し、中心商業業務地では、住民や来訪者の快適性や安全性を確保する歩道の設置、バリアフリーに配慮した施設などを整備する「人と環境にやさしい交通体系の構築」が目標として掲げられた。

鉄道については前述の通り。そして、バスについては、復興後の道路網に対応した路線バスの再編を目指した。そして、公共交通不便地域への対応としては、地域の特性に合わせた持続可能な交通確保の手法を検討し、公共交通不便地域の解消に努めるとした。

平成31年（2019）3月、町は、新しいまちづくりに合わせて目指すべき公共交通ネットワークを描き、その実現のために取り組むべき施策体系を示す基本計画として「山田町地域公共交通網形成計画」を策定した。

バス運行の改善と路線の見直し

山田町ふれあいセンター「はぴね」と通路を共用することで、利用率の向上を図る

山田町地域公共交通網形成計画策定の理由は、復興事業の展開により、住宅の位置が変化し、新たな道路が山側に整備され、バス路線の変更などが必要となったこと。また、病院や金融機関、学校、商業施設といった生活に必要な施設が、国道45号沿線と、特に陸中山田駅周辺、大沢地区、豊間根駅周辺に多く立地しているなど、まちの姿が震災以前と大きく変化し、復興後のまちづくりの形に合わせた交通ネットワークの整備が必要となったことなどである。

町では、町民の外出状況や公共交通の利用状況、公共交通利用時の困りごとや要望などを地域ごとの特性に応じて把握することを目的として、平成31年（2019）1月、町内8カ所において懇談会形式でヒアリングを行った。

現状の外出状況や不便を感じていることとして挙げられたのは、「沿岸の地区は坂があり、行きはバスでも帰りは荷物を持って坂を上がれない。タクシー利用か、タクシーが利用できない場合は買い物をせずに帰ってくる高齢者が多い」「公共交通機関の運行が少ない地域の患者を無料で病院まで輸送する『患者輸送バス』が運行していない地区は不公平感を感じている」といった声であった。

また、公共交通の改善点や要望としては「バス停のない病院へもバスで行けるようにしてほしい」「住宅が高台に移転した地区にもバスを走らせてほしい」「鉄道とバスを時間によって使い分けたい」「バス停に上屋やベンチなどを整備してほしい」など。

別途行った町民アンケート調査では「高齢者ほどひとり暮らしや一世代（夫婦のみ）が多く、送迎を頼める人がいない」「お出かけ回数は、免許を持つ若い男性の方が多く、女性は少ない」「免許を返納した人も少なくない」など、公共交通の改善策としては「自宅や目的地のそばまでバスで行きたい」というニーズが最も高く、次いで、バス停の環境整備、まちなか循環バスの運行についての回答が多かった。

交通網充実を目指す町の「戦略」

これらの要望や課題のすべてに、一度に応えることは難しい。

町では、「まちの創生を実現させる新しい交通網の構築」を目指し、いくつかの戦略的施策を打ち出している。

そのひとつが「まちなか循環バス」の運行である。

復旧・復興事業によって再構築された「町民が住む場所」と「町民が集う場所」を循環バスで結び、町民の生活利便性を高めることが目的だ。

その路線は、国道45号、町道細浦・柳沢線および陸中山田駅を結ぶ「8の字」のルート。令和2年（2020）から実証運行を開始し、令和3年度からは本格運行を予定している。運行便数は、1時間に1本の間隔で、運賃設定は、どこで乗降しても200円（子ども100円）としている。

また、現在、3ルート（豊間根・関口ルート、織笠・外山ルート、大浦・小谷鳥ルート）で運行している「患者輸送バス」を、誰もが、どんな目的でも利用できるコミュニティバスにするプランもあり、令和3年度から試験運行する予定である。「地域の足」としてより使いやすい交通手段として、交通空白地の解消を図るとともに路線バスのルートとの重複や、無料であることに起因する不公平さについても解消していく考えである。

時代の変化を常に見据えながら

交通網の維持というテーマの周辺には、少子高齢化や人口の減少、また、漁村型集落、山村型集落、市街地など、地区によって異なる地域の特性や将来にわたって対応していくべき課題が数多くある。例えば交通空白地の解消、最寄りの三陸鉄道駅の交通拠点化、路線バスへの乗り継ぎ改善、高台の住宅団地へのバス運行の検討、路線バスの乗り継ぎ拠点整備、分散した施設を結ぶ循環バスの運行検討、患者輸送バスと路線バスの役割分担などである。

まちなか循環バス

「山田町地域公共交通網形成計画」では3つの基本目標として

①使える幹線交通：運行の持続可能性、効率性

―〝使える交通〟の実現

②守る支線交通：暮らしの安心、外出の便利さ―〝守る交通〟の実現

③にぎわう交通・交流拠点：歩行者数、乗り継ぎの便利さ―〝にぎわう拠点〟の実現

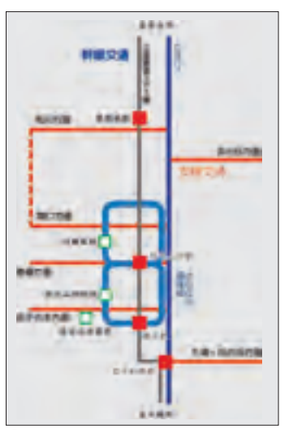
を掲げている。

そして、利用者数の変化や地区ごとの住民の外出頻度、歩行者通行などを目標指数として可能な限り毎年算出。変化と原因分析を共有し、目標の実現を推進することとしている。

また同計画には、自動運転車両・サービスの導入検討を、他地域に先駆けて行い、町が将来的に直面する可能性のある移動に関わる諸問題に対する解答を模索することも盛り込んでいる。

公共交通機関の運転手不足や高齢化などによる移動制約者の増加など、地方が将来的に直面するかもしれない重大な問題への一番いい答えとなりうる自動運転車両・サービスの導入と展開についてもあらかじめ検討しておくことは有用である。

新たな技術や時代の要請、地域事情に応じた取り組みを着実に行い、「住みやすい社会」の実現に向けて、常に見直しを続けていく。



「山田町地域公共交通網形成計画」目指す公共交通路線網

公共施設

被災した公共施設には、全国そして世界から
復旧や新設のための力添えがあった。そうした市民交流は、
ハード面への支援ばかりではなく、これからも続いていく交流の礎ともなった。
今、人びとが集う施設には、たくさんの笑顔が咲いている。

「山田町子どもまちづくりクラブ」のメンバー

子どもたちの構想から生まれた
「山田町ふれあいセンター」完成予想図

官民一体となって取り組んだ公共施設の復旧や新設
子どもたちの参画による復興事業も

多くの支援を受けた災害復旧事業

東日本大震災の津波は、道路、橋および上下水道といったインフラ施設ばかりでなく、集会施設や体育館、艇庫、そして鯨と海の科学館といった公共施設にも大きな被害をもたらした。

公共施設は人びとが集う場所であり、地域の活性化に直接つながる場所でもある。しかし、大規模災害の発生時や非常時には道路や通信、上水道などインフラ施設の復旧が優先される。

そこに支援や応援の手を差し伸べて、これら施設の補修・復旧または新設といった力添えをしてくれたのは、企業や大学、一般社団法人、一般財団法人、NPO法人、ボランティアといった団体・個人だった。

本町においても、集会施設や山田町ふれあいセンター、郷土芸能の備品や保管庫の整備などに企業や各種法人が支援を申し出てくれた。町は復興計画との整合性を図りながら、町の整備事業とあわせて調整と実施を行った。

復旧事業が一斉にスタート

平成24年度からは、各公共施設の災害復旧事業が一斉にスタートした。

鯨と海の科学館の被災した収蔵資料の修復、郷土芸能団体への用具・練習場の整備支援、山田勤労者体育センターの災害復旧、町立艇庫災害復旧に係る設計委託などだ。

山田町B&G海洋センター艇庫は、昭和54年（1979）、B&G財団が竣工し、昭和60年（1985）、町に無償譲渡され、山田湾での海洋性レクリエーションの拠点として多くの人たちが活用してきた。

鯨と海の科学館展示物の保存作業

被災した艇庫は国の災害復旧事業により、平成28年（2016）7月28日に再建した。同日の災害復旧舟艇器材配備式では、公益財団法人B&G財団から町へヨットやカヌー、ライフジャケットなどが贈られた。

鯨と海の科学館の収蔵資料の修復については、展示物を一つひとつ回収し、洗浄、修復して整理していくという科学館ならではの丁寧で繊細さが求められる作業には、文化庁と研究者たちが立ち上げた文化財救援委員会、国立科学博物館、岩手県立博物館のほか東京海洋大学、筑波大学などの研究機関も加わった。

新しいコミュニティセンター

被災したコミュニティセンターの建設にも、諸団体からの大きな支援があった。

田の浜地区の新たな集会施設となった「田の浜コミュニティセンター」の建設に当たっては認定NPO法人・国境なき子どもたち（KnK）とLVMHモエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン グループから支援を受け、平成24年（2012）9月に起工式が行われ、平成25年（2013）4月に完成した。

田の浜コミュニティセンターは、集会所機能や郷土芸能の練習など地域住民をつなぐ役割を担う。また、ソーラーパネルと応急給水設備を備え、停電、断水時に対応することができ、津波災害時の避難所に指定されている。

平成28年（2016）12月には公益財団法人・国際開発救援財団（FIDR）の支援を受けた「大沢川向コミュニティセンター」が開所した。大沢地区川向の集会施設は震災で全壊したが、FIDRの支援を受け高台に再建。地区住民の交流の場、避難所として利用されることとなった。

また、平成31年（2019）3月には、同じくFIDRの支援により「飯岡コミュニティセンター」が完成。落ち着きのある茶色のシックな外観で、同月運行を開始した三陸鉄道リアス線の車窓からも目を引く。

なお、FIDRは震災直後から本町および大槌

田の浜コミュニティセンター

町を中心に緊急救援・復興支援活動を行ってきたが、飯岡コミュニティセンターの完成をもって本町での8年間の活動に区切りをつけることとなった。

市民交流から生まれたプロジェクト

平成26年（2014）5月には、子どもたちの放課後の遊び場として、また、落ち着いて勉強ができる環境を提供する施設として「オランダ島ハウス」が完成した。これは震災前に完成間近を迎えながら震災で被災した船越小学校放課後児童クラブを受け継ぐ施設だ。

この施設は、在日オランダ商工会議所のメンバー（DSMジャパン、ラボバンクネダーランド銀行東京支店、ヴァンダーアーキテクツジャパン、PAインターナショナル）と日蘭協会による復興支援検討の中から生まれたプロジェクトだった。

約380年前の寛永20年（1643）、水や食糧を補給するために山田浦に入津（にゅうしん）したオランダ船ブレスケンス号の史実から、平成12年（2000）に山田町とオランダ王国ザイスト市の間で友好都市を締結。今でも両都市間での市民交流が続いている。

こうした縁から、前述のオランダ系企業や団体は、山田町の復興支援を目的として一般社団法人オランダ島（以下、（一社）オランダ島）を設立。この施設の再建支援を申し出た。

町は、（一社）オランダ島との協議で、医師等が育てサロン」の実施を提案、同法人はこれに賛同した。放課後児童クラブ開所前の時間を利用し、週2回、就園前の乳幼児をもつ母親たちの健康相談、母親同士の交流の場として施設を活用している。

海を越えた友情を受けて完成した「オランダ島ハウス」

子どもたちの企画・デザインによる、ふれあいの場

平成28年（2016）に陸中山田駅前の津波復興拠点エリア内に完成した最初の施設であり、復興のシンボルともなった山田町ふれあいセンター「はぴね」は、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下、SCJ）が施主となり、サントリーホールディングス㈱の資金提供による東日本大震災復興支援「サントリー東北サンさんプロジェクト」の一環として建設し、町に譲渡された施設だ。

施設の企画とデザインは、SCJの支援により結成された「山田町子どもまちづくりクラブ」のメンバーが、町や地域のひとたちと話し合い、さらには県内外への視察なども行いながら施設の構想をまとめていったものだ。

図書館を併設し幅広い年代がくつろげる「はぴね」

施設は陸中山田駅に隣接しており、列車で通学する高校生が待ち時間に教科書を広げたり、居場所を求めてやってきた子どもたちが遊んだりと、その活用方法はさまざまだ。図書館機能を有しており「寝転がりながら本を読める児童スペース」や「年配の方でもゆっくりくつろげる小上がりスペース」といった心地よく長居ができる工夫が随所に凝らされている。子どもたちだけでなく、大人たちも広く利用できる公益施設であり、町民のふれあいの場となっている。

仮設住宅を巡った移動図書館車

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（以下、シャンティ）が実施していた移動図書館プロジェクトについても触れておきたい。

昭和56年（1981）、日本で設立された国際協力団体であるシャンティは、アジアを中心に図書や図書館を中心とした教育文化支援事業や国内外の自然災害に対する緊急救援活動を行ってきた。

山田町ふれあいセンター「はぴね」

シャンティは、平成23年7月から、山田町のほか大槌町、大船渡市、陸前高田市の仮設団地などで移動図書館プロジェクトを開始した。その後は平成29年（2017）3月まで、宮城県山元町、福島県南相馬市など3県6市町でプロジェクトを実施してきた。

シャンティの撤退後は、町がその活動を引き継いだ。シャンティより寄贈された移動図書館車に折り畳み式コンテナを積み込み、町内の仮設住宅を巡回しながらお茶っこ飲みの場を設けるなどして、住民たちからも好評を得た。

そして仮設住宅の閉鎖が近づいた令和2年（2020）3月、仮設住宅を巡回する移動図書館事業は終了した。

町内を巡った移動図書館車

飯岡コミュニティセンター

大沢川向コミュニティセンター

上下水道

ライフラインの中でも最も重要とされる「水」。水道の復旧事業においては耐震管による布設、自家発電装置の配置など「災害に強い水道」へと取り組んだ。そして環境への配慮を強く意識した最終処理場を経て、水は海へ注ぐ。山田の海をいつまでも美しく守るために。

町の背後に連なる山からはきれいな水が流れ出す（荒川地区・多久里滝）

水道管の災害復旧工事

生活や産業を支える大事な「水」山田の森から海へと流れるその循環をいつまでもきれいなままで未来へ

急ぐべきはライフラインの復旧

インフラの中でも、生活の基盤や基本、土台となって特に日常生活を支えているインフラは「ライフライン」と呼ばれ、上下水道、電気、ガス、通信、交通を「5大ライフライン」ということもある。

大きな災害の発生により「交通」に支障が出ると、人命救助や物流にも影響が出る。「通信」の遮断は地域を孤立させ、「電気」がなければ夜間の活動もできない。そして「水道」「ガス」の不通は食事等にも大きく関わる。ライフラインの応急復旧が急がれる理由である。東日本大震災の発災直後、町では、5大ライフラインの筆頭ともいうべき「水」の確保と供給を急いだ。

震災から2ヵ月後に全地区通水完了

町の水道は、震災以前より95％近い普及率だった。しかし、平成23年（２０１１）3月11日の東日本大震災によって重要な水道施設である山田地区および織笠地区の水源地、浄水場、町内全域で配水管などが被災し、豊間根地区と大浦地区の一部地域を除いた町内全域で水の供給がストップした。

翌日12日から各施設の被害状況調査および復旧作業を開始し、13日からは、日本水道協会（中部支部、関西支部、東北支部）をはじめ県内の市町村及び自衛隊の応援をいただき、給水車による応急給水を始めた。

町の主な水源は、北上山系を源にする地中深くの地下水であり、水源そのものは海水に侵されていなかった。水道施設及び管路の応急仮設工事を進め、電力が復旧していなかったため発電機を設置し、発電を行った。震災から8日後の3月19日に山田水源地を再稼働し、山田地区の一部に給水を再開した。26日には織笠水源地を再稼働し、織笠地区の一部に通水を開始し、5月20日には全地区への給水を完了した。

その後の10年間、町が展開してきた事業は、復旧・復興によるものがほとんどだった。仮設住宅が建設されるときも、重機による造成作業が終わった土地には真っ先に水道管が敷設される。これはその後の各震災復興事業でも同様だった。

また、これら敷設する水道管は、地震に強い耐震管を採用したほか、山田水源地に自家発電設備を配置するなど災害に強い施設となるように取り組んだ。

クリエイトピュアやまだ

きれいな海を守るために

下水道は、山田地区では平成17年（２００５）から工事がスタートしていた。平成23年度末には下水道事業計画の約40％が整備されていたが工事完了分の約8割が被災。また、下水処理場も平成27年（２０１５）4月からの供用開始を目標に設計を進めていたが、これも津波により変更を余儀なくされた。

しかし、町は「海のまち」であり、ノロウイルスを除去して海を守るとの観点から、戸別処理よりも集合処理を行うことが最善であるとの判断に至った。その後は、町の「復興計画」に基づいた高台団地の整備や区画整理の復興工事と歩調を合わせて復旧が進められていった。

織笠地区の高台団地の造成が先行していたことから、平成27年（２０１５）8月、暫定の汚水処理場を整備し、供用を開始、平成28年（２０１６）7月には「クリエイトピュアやまだ」が完成、山田地区の汚水処理が開始された。

大浦地区と大沢地区では処理場が被災し、船越地区は中継ポンプ場が被災、災害復旧予算で下水道施設の復旧を行った。

現在は、復興計画の管渠（かんきょ）整備は終了し、山田・織笠地区での既存住宅のための管渠整備を進めており、令和2年（２０２０）3月時点での下水道普及率は約46％となっている。

山田地区と船越地区の公共下水道終末処理場には「クリエイトピュア」という名称とし、これは「きれいな山田（海）を創造する」という願いを込めている。

インフラを復旧させるときは、単に復旧前の状態に戻すだけでなく、安全性や機能性、利便性、効率性、環境保護なども考えながら「よりよいもの」への改善を目指して再整備することも重要である。

町の上下水道事業は、これからも海を守り、生活環境の向上を目指す。

防　災

避けられない脅威である自然災害――。だが、正しい避難行動で、何より大切な「命」を守ることはできる。発災後の混乱を小さくとどめるために、「二度と悲しみを繰り返さない」ために防災の設備、装備、心の備えを怠ることはあってはならない。

防災拠点を新たに整備
防災への意識も啓発し
誰もが「命を守る行動」を

山田消防署庁舎落成式

山田地区の高台に新築された山田消防署

山田町の消防防災体制

消防組織には、国では総務省消防庁があり、都道府県では消防・防災の担当部署がある。地域の消防・防災を担うのは、基本的に市町村である。全国の市町村は「わが町」の消防行政の任を果たすため、区域ごとに消防本部、消防署、消防団などが設けられている。

職業として消火や救急・救助業務を行うのは、消防署に勤務する消防士で「常備消防」と呼ばれる。これに対し、一般の住民によって構成されている消防団は「非常備消防」と呼ばれ、主に消火および火災予防活動を行い、また、災害時の救助や行方不明者の捜索など、状況に応じて幅広い活動を行う。

本町の「常備消防」は、宮古地区広域行政組合消防本部山田消防署だ。同消防本部では宮古市、山田町、岩泉町に消防署を、田野畑村および宮古市田老地区、宮古市新里地区、宮古市川井地区に分署を設置。1市2町1村を3署4分署体制でカバーしている。

大沢地区にあった山田消防署は東日本大震災により建物が浸水被害を受けたが、町民総合運動公園に避難させた消防車両は無事だった。

飯岡地区の高台に防災拠点を整備

「山田町復興計画」では、津波を含む各種災害の発生時において、迅速かつ効果的に応急・復旧活動を展開し、町民を災害から守るための活動拠点・備蓄拠点として機能する「防災拠点」を、安全な高台で三陸沿岸道路とのアクセスに便利な場所に整備することとした。

そして復興事業により新しい防災拠点となったのは、町道細浦・柳沢線沿道の、町立山田中学校に隣接する高台である。ここには山田消防署をはじめ、宮古警察署山田交番、県立山田病院などが整備された。消防署および消防団が災害時に機能を発揮できるよう、また津波浸水の恐れがなく、かつ車両出動の利便性が高い場所での整備を目的として建設を進めてきたものだ。

山田消防署は、平成30年（2018）2月9日、この防災拠点に新庁舎を建設し、消防吏員29名の体制で警防（消火・消防水利の保守）・予防（火災原因調査・火災の予防指導）・救助（事故・災害等発生時の救助活動）・救急（救急車の出動・応急手当）の業務を担い、町民の生命と安全を守っている。

一方、山田町消防団は13個の分団がある。東日本大震災では、このうち第3分団（大浦）、第4分団（織笠）、第6分団（境田町）、第7分団（八幡町・長崎）、第8分団（北浜町）、第10分団（大沢）の計6個分団の消防屯所が被災した。

第7分団を除く5個分団は新たな場所に移転、再整備が完了している。

大浦地区の山田町消防団第３分団消防屯所の落成式

津波到達予想時刻15分前に完全避難

津波警報が発表された際、消防団員は、消防車で警鐘を鳴らしながら地区を巡回して住民に避難を促すが、東日本大震災以前は「避難の呼びかけをいつまで行うのか?」という明確な基準や取り決めがなく、避難するタイミングは、各自の判断に任されていた。

結果、東日本大震災では、津波が迫る中、浸水の危険性がある地点にとどまり、防潮堤の門扉（もん）や河口の水門の閉鎖作業をしていた消防団員8名が津波の犠牲になった。

自身の命を顧みず町民の命を優先した行動であった。消防団員としての使命と職務を全うした8名、そして全ての消防団員に対し、感謝と敬意を表したい。

この悲劇を繰り返さないため、震災後は「津波到達予想時刻の15分前には完全避難する」ことを義務付けたほか、防潮堤の門扉等閉鎖は、県の事業により自動化が進められている。

防災訓練参加で災害への備えを

町は、東日本大震災津波で起きたことを教訓として、防災訓練時や防災指導、防災教育の場で「津波てんでんこ」「海を見に行かない」「一度避難したら戻らない」などを改めて徹底するよう周知している。

災害が発生するたびに言われる、「天災は忘れたころにやってくる」という言葉がある。常日頃、災害に対する備えと、災害の記憶を風化させることなく後世に伝えることが重要である。

町では、9月1日の「防災の日」に合わせて毎年9月第一日曜日に、町民参加による実践的な総合防災訓練を実施し、地域の災害対応力の向上を図っている。

津波伝承

震災後、「津波てんでんこ」という言葉とともにクローズアップされたのは、大災害に遭遇した先人たちが教訓を刻んで残した「津波記念碑」だった。私たちもまた「東日本大震災」の記憶を次代へ伝えていかなければならない。同じ悲しみを繰り返さないために――。

町民800余名の御霊を慰める「東日本大震災　津波犠牲者慰霊碑」(左)、
津波の犠牲となった町の消防団8名の活動を顕彰し慰霊する「消防殉職団員慰霊之碑」(右)

先人の教えから「恐れ」「畏れ」を学び「忘れないという文化」をつくり それを未来へと伝えていく

津波記念碑に刻まれた先人の教え

国土交通省の調査によると、東日本大震災以前の岩手県内には225基の「津波被害・津波石碑」があった。

内訳は、明治29年（1896）6月15日の「明治三陸地震津波」113基、昭和8年（1933）3月3日の「昭和三陸地震津波」83基、「明治・昭和」の合同設置11基、昭和35年（1960）5月24日の「チリ地震津波」8基、その他が10基となっている（国土交通省／『津波史跡概要』）。

石碑には、津波が襲来する前兆を記したものや津波被害の悲惨な様子を記録したものが多く、他には、避難の方法や居住場所に関する戒めが訓示されているものもある。

山田町では、織笠地区の旧織笠小学校前に「明治」と「昭和」の両三陸地震津波の被害と教訓を伝える「大海嘯記念碑」が二基並んで立っている。

碑文は漢文で、被災から3年目の明治32年（1899）に織笠村住民会の建立とあるほか、溺死者の数や家屋、船などが流失したこと、高さ1丈（約3メートル）ほど波が山麓まで到達したという当時の様子も伝え、文末には津波の恐ろしさを知って警戒するようにとの先人の教えも残されている。

大沢公園の津波記念碑。海を見晴らす高台にある

大沢公園にも、昭和三陸地震津波後に建立された「三陸大海嘯記念」の碑が立つ。山田湾に向かう面には当時の大沢村の被害について記されているほか「大地震の後には津波が来る」「地震があったら高いところへ集まれ」「県指定の住宅適地より低いところへ家を建てるな」といった訓戒が刻まれている。

山田町教育委員会（以下、町教委）が昭和57年（1982）に発行した「山田町津波誌」によると、石碑は旧町村ごとの津波浸水線上に建立されたとあり、現在も町内には、9基の記念碑がある。

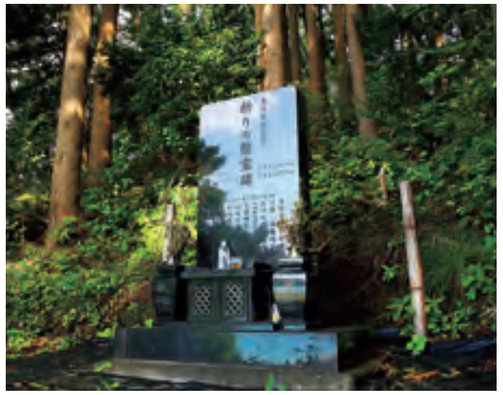
犠牲者を想い、復興を誓う慰霊碑

山田町役場から東側200メートルほど海よりにある、かつて年貢米を保管する蔵があったという御蔵山は、現在「御蔵山復興祈念公園」として町が管理している。国道45号との高低差は約5メートル。東日本大震災の津波もこの場所を飲み込むことはなかった。

平成31年（2019）3月10日と11日に、御蔵山では、津波の犠牲となった町の消防団員8名の活動を顕彰し慰霊する「消防殉職団員慰霊之碑」と、亡くなった町民800余名の御霊を慰める「東日本大震災　津波犠牲者慰霊碑」が建立された。

また、同公園内には、津波被害を語り継ぐモニュメントとして、JR陸中山田駅にあった大時計と、山田ロータリークラブによって建てられた「鎮魂と希望の鐘」もある。

この場所からは、防潮堤の向こうにオランダ島を浮かべて凪ぐ山田湾も見える。このふるさとの海の風景とともに、津波を恐れ、自然を畏れる正しい理解と私たちの「今」の思いを、いつまでも伝えていかなければならない。


小谷鳥漁港を見下ろす林間に建てられた慰霊碑

海とともに生きること

教育の現場でも、子どもたちに向けての「伝承教育」を行っている。町教委は、山田町町民憲章と「地域への愛着を育む学び」「豊かな人間性をもち、たくましく生きる子どもたちの育成」「防災教育を中心とした学び」の3つのテーマを柱とした「山田の魅力発見！」リーフレットを作成し、小学校の授業等での活用を図っている。

1節あたり4～6ページのリーフレットは13部構成で、11節から13節では「災害にそなえる」「身のまわりの安心・安全」「復興から未来へ」との表題で、自然災害への準備や発災時の行動、周囲にある危険、そして復興へと向かう町のこれからを学び、考える内容となっている。

海のそばで育ち、生きていくこと。それはどういうことか――。

子どもたちが学び、伝えていくことは、津波の悲劇や自然の脅威ばかりではない。幾多の苦難を乗り越えて、助け合いながらこのまちをつくってきた先人たちの歴史でもある。

郷土の地勢・気候及び歴史・文化など、すなわち「風土」を理解し、そして気付き、発見した「海とともに生きる力」を次代へと受け継いでいくことが大切である。

外からの視点

都市・地域デザインを専門とする三宅（みやけ）諭（さとし）准教授と
被災地のコミュニティー形成に取り組む船戸（ふなと）義和（よしかず）特任助教が、復興計画の策定、まちづくり、
コミュニティー再生、震災後の観光施策の展開といったさまざまな事業に関わりながら、
10年の復興まちづくりに付き添った。

コミュニティーの再生と構築 人と人の関係をつくることが 復興につながる

びはんプラザ前駐車場にて開催された「いちび」

はじめは「本当に復興できるのか」と思った

山田町の復興まちづくりは、被災から9カ月後の平成23年（２０１１）12月の「山田町復興計画」の策定を経て、24年（２０１２）から本格的に始動した。

計画は、町と住民が一緒に練り上げてきたものだ。5月、町が基本方針を示し、そこへ住民の意見を取り入れて6月に復興ビジョンをつくり、そして8月に中間報告、9月には行政素案をまとめるというプロセスを経た。

この一連の過程には、町の外からの視点を加えるため、大学教授や各分野の研究機関などから学識経験者や有識者を委員として招聘（しょうへい）、それぞれ専門の立場から、山田らしい復興のあり方や将来のまちづくりについて意見をいただいた。

岩手大学農学部の三宅（みやけ）諭（さとし）准教授（都市・地域デザイン研究室）へ、町から策定委員会への参考について打診したのは23年（２０１１）４月末だった。

5月、復興ビジョン策定に向けての会議に参加。そのとき改めて山田町や大槌町などを見て回った。しかし、そこで目にしたのは、震災がれきが山積みあるいは散らばっている、変わり果てたまちの姿だった。感じたことは「復興なんてイメージできない、難しい作業になる」ということだった。

呆然とさせられる景色が広がっていた発災直後の山田地区

三宅先生の専門は「まちづくり」である。学生時代は都市計画を学びハード面の設計ばかりではなく住民のコミュニティーづくり、そのあり方などをテーマとして調査・研究と実務に取り組んでいた。

「たとえ困難でもまちづくりの専門家として受けなければならない」。そう決心したという。

そしてもう一人、山田町のまちづくりに関わったのは、岩手大学研究支援・産学連携センター／復興・地域創生ユニットの船戸（ふなと）義和（よしかず）特任助教だ。岩手大学が進めるコミュニティー支援活動の研究として地域創生をテーマに、山田町の復興まちづくりの核は何か、新しいふるさとと山田をつくっていくために必要なものは何か。さまざまな試みをスタートさせた。そして平成29年（２０１７）からは「山田町地域コミュニティ形成アドバイザー」として専門的見地から町の事業に対する指導、助言を行っている。

「まち」は人びとがつくっていくもの

三宅先生は平成23年（２０１１）の「復興計画」の策定に委員として加わり、その後も岩手大学三陸復興・地域創生推進機構地域コミュニティ再建支援班の一員として活動しつつ、平成27年（２０１５）の「復興まちづくり計画」「まちなか再生計画」など、復興計画という上位計画の中に新たに位置付けられる実施計画の策定にも携わった。一貫して見つめ続けてきたものは「コミュニティーの創生」である。

被災地では、復興整備や基盤整備という土木あるいは建築工事によって物理的な空間がつくられていく。しかし、空間の整備だけでは「まち」にはならない。人が集まり、交流が生まれ、さまざまな社会関係が構築されていくことで場所になる。「まち」とは、人びとがつくっていくものだ。

商売をする人が店を構え、買い物をする人がいて、飲食したり、遊んだり会話したりという交流＝多彩な人間行動・社会活動が展開されてこそ「まち」ができていく。

場所を介して交流が生まれること。一人ひとりが生きていくことの喜びや楽しみを確かめることができる社会関係＝コミュニティーをつくる、あるいは取り戻すこと。それが被災地における「復興」になる。

まちなか再生計画の検討会議

交流を生み出す仕掛けときっかけをつくる

三宅先生と船戸先生は、商店街に人を呼びこむ仕掛けづくりなど、さまざまな試行を現場で行ってきた。それは「交流が生まれる場所」として整備された空間に、「実際の交流」が生まれるきっかけをつくることだった。

まちのにぎわいを創出する中心市街地の整備は、鉄路の存続が早い段階で決まったことに、三宅先生は「ほっとした」と語る。商圏が駅を中心としたコンパクトなエリアにまとめられたことは強みだとして、それを生かした「にぎわい」「人のつながり」をつくる。その仕掛けづくりだった。

山田高校と岩手大学が合同で行った七夕企画

船戸先生は、交流が生まれる催事として、山田町で毎月一度開催されている「いちびⅱ青空市」を支援する企画も行った。平成25年（２０１３）の春季から秋季まで月一回の開催。地域活性を学びたいという学生たちも同行した。岩手大学という外部の団体・人間が「市（いち）」に参加することは、町の人々にとっては新しい風だと感じることができる。そして何より重視したのは、そこを単なる買い物の場で終わらせず、新しい交流を生み出すために、出店や休憩場所の配置を工夫したり、子どもたちのためのおもちゃを用意して、その場に留まって世代間で幅広い会話や交流が生まれるような仕掛けを提供することだった。

いちびでは世代間交流も生まれた

継続性を考えたとき、外部からの参加者が出店するという一時的な集客よりも、町の人たちが、例えば朝採り野菜を持ち寄るとか、農林水産物の加工品を並べるなどして、地元の出店者で商売を行ったほうが望ましい。「市」という場をコミュニティー形成のための契機へと転換することが目的であった。

学生たちの支援が終了した後も「いちび」はその後、「高校生が、山田の子どもたちやお年寄りと触れあうことで山田を理解する」との趣旨で、運営を新生やまだ商店会が受け継ぎ、山田高校の生徒たちも引き続き子どもたちと交流している。

海の魅力を活力再生の核と起爆剤に

三宅先生は、人と人との関わりが生む「活性・活力」を市街地の中に考えていたとき、その活力を山田町という全体の中へ広げ、力強く再生していく源は「やはり海だ」という思いを改めて感じたという。

町の漁業は復興途上にあったが、産業としての漁業は全国的に衰退の傾向である。しかし、山田湾の景観は魅力的であることに変わりはない。観光を起爆剤とした交流人口の獲得が町の大きなテーマとなることを確信した。

船戸先生は、山田町に交流人口を呼び込むため「山田町『食と人』体験ツアー」を実施した。町の「食」の魅力は、海から届く豊富な海産物と山の四季が育む多彩な農林産物だ。「選べる３つの食体験」と銘打ち、「そば打ち」「手打ちピザ」「釜飯」から選んで、参加者が調理して（体験して）食べるという企画だ。

体験する、とは「人と人とのつながりをつくること」。現地の人と調理して一緒に食べることは「食」を介して人とつながる共同作業であり「一歩進んだ関係」が結ばれる。

ツアーは３年間で６回行われ、参加者が町で使った金額やニーズなども把握。おおむね手ごたえを感じた。「受け入れ先を増やし、いろんな角度から関係人口をつくることが大切。受け入れる側の人間を、町として意志を持って育てることが〝着地型〟観光の目指すところ」と船戸先生は言う。

ホタテ釣りを楽しむツアー客

山田町の魅力を「食と人」で伝える体験観光ツアー

岩手大学で行われたシーカヤック体験事業

さまざまな試行を経て、現在、山田型の観光は体験型として県内沿岸部でも独特のカラーを放っている。体験メニューのバリエーション数も、そこに関わる人の数も豊富だ。

特徴のひとつは、人懐っこい現地コーディネーター（体験案内人）の存在である。山田型体験観光が好評を得ているのは、受け入れる山田人の人柄によるところが大きい。

体験ツアーの参加者は、例えば養殖いかだ見学や野菜の収穫、あるいはシーカヤックで海へ漕ぎだすといった非日常を体験する。質問や疑問など参加者の興味に対し、山田の海や大地を知り尽くした自身の経験を、自身の言葉で語る。方言も温かい。

また、漁師も〝ガイド〟と呼ばれるよりも名前で呼ばれる方がうれしいし声も弾む。参加者と協働・共有する濃密な時間が、一歩進んだ関係をつくっていく。

共助という価値を広げるコミュニティーづくり

二人はまた、平成29年（２０１７）からは災害公営住宅のコミュニティーづくりにも携わった。高齢化率の高い集合住宅での住民組織（自治会）の設立と運営サポートだった。

三宅先生は、地域コミュニティーの再生には長く時間がかかるだろうと予想していた。復興計画

大沢地区で行われた、まちなか再生計画検討会

は違う地区に住んでいた人たちの〝集合〟である。それは住宅の入居者だけでなく、住宅が建つ地区に住む人たちにとっても同様である。

船戸先生は「〝共助〟という価値を広げることが大切」だと感じた。一人ひとりの力を結び合わせること。地域でできることに対して行政サービスの出番を待つのではなく「自分たちでやる」という〝意識づくり〟であり「自分たちでやるということとは自分たちでやってもらうこととは大違い。そして、そこで必要な仕組みは「共助を実体験する機会を、行政がつくること」であり「あらゆる人々の力が必要なのだと住民に感じてもらうこと」だという。

すべてを行政が行うのではない。つながりをつくるための機会をどれだけつくれるのか、が行政の仕事となってくる。

船戸先生は「人に焦点を当てて見てきた10年だった」と話す。「自分の人生は自分が創る。まちづくりとは、そういう人たちの力の結集です。いつだって人が主役でなければならない。それが復興です」。

祭りに見える山田の人と地域の底力

三宅先生も船戸先生も「山田人の祭りへの情熱はすごい」と口をそろえる。

山田町では、盆や正月には帰省しなくても、秋の「山田祭り」にあわせて帰ってくる人が多い。神輿が町を勇壮に練り歩き、八幡大神楽や八幡鹿舞、山田境田虎舞などが奉納される伝統の祭り。山田最大の大祭だ。

祭りには山田人の誇りとアイデンティティーが凝縮されている。居住地という物理的な枠ではなく、どこに居ようと、誰もが山田という地域を誇りに思い、愛着を持っている。その様子に地域の大きな可能性を感じたという。

三宅先生は「新しいコミュニティー像の構築も必要」と語る。時代が移ろう中では、新しい世代も増えた。従来あったコミュニティーも柔軟性を持つようになり、昔ほどのしがらみを感じさせなくなっている。実際、高齢化も進む中では従来型の「地縁コミュニティー」だけでは地域社会が存続しがたいのも現状だ。

祭りやイベントに限らず、地域内外の人が集まり、参加しやすい状況をつくる。「集まる場」があり、そこで人びとがつながり、交流する。

それは「ここに住んでいるから」という旧来的なコミュニティーの上に「集まる場があるから」という、より積極的なコミュニティーづくりを重ねることでもある。

他にないまちを目指してほしい

「従来型の地縁コミュニティーから、場を介在するネットワーク型コミュニティーへの変化です。それは地域に人を呼び込む力ともなり、祭事や地域行事などさまざまな取り組みの継承にもつながるでしょう」と三宅先生。

そして船戸先生は「祭りには、自分は地域の構成員だと自覚させる力がある。特に山田の祭りには、地域の底力を感じました。まちの内外を問わず、コミュニティーが広がっていくポテンシャルはあると思います。町もまた、そこを応援してほしいと思います」

また、まちづくり計画に携わってきた三宅先生は、「自分たちができること。それを考えて行かなければならない。各地区のまちづくりにおいて、さまざまな『下地』はできてきた。それを生かしていく自治力にこれから期待したい」と話す。

「山田町の復興は、派手さはないけれど、少しずつ確実に進んでいると思っています。山田湾は、やはり町のシンボルです。町全体のまとまりさえ感じさせます。大きく開発されることはなかった良さが山田の海にはある。他の町のようになりたい、ではなく、ぜひ『他にないまち』を創ってほしい。楽しみです」と二人からエールが送られた。

養殖いかだが並んだ「山田湾」

山田人の魂を揺さぶる「山田祭り」

船戸 義和（ふなと よしかず）さん

岩手大学　研究支援・産学連携センター／復興・地域創生ユニット　特任助教

三宅 諭（みやけ さとし）さん

岩手大学准教授　都市・地域デザイン研究室

台風19号の被害

令和元年（2019）10月12日から13日にかけて
三陸地方に豪雨をもたらした台風19号は、町内全域にわたり小河川を氾濫させた。
自然災害はときに想定を超える規模の被害をもたらす。
改めて防災について考えさせられる出来事であった。

流れた水により裂けた路面。田の浜地区のほか、大浦地区、織笠地区、豊間根地区でも河川の越水、道路の冠水・崩落が相次いだ

復興目前のまちを襲った「非情の大雨」
防ぎ得ない自然災害に対して
私たちはどう備えるべきか？

近年頻発する台風に伴う土砂災害

日本は、自然災害が発生しやすい国であり、国土の位置、気象、地形、地質など、その理由はいくつか挙げられる。

気象的には、高温多湿な気候地域に属し、季節風がもたらす「多雨」が農業にとって恵みとなる一方、しばしば洪水を発生させる。

国土南方の海は「台風」の北上ルートであり、毎秋、列島は台風に直撃され、狭い国土に丘陵や急峻な山岳、また雨によって急流となりやすい河川、加えて脆く崩れやすい花崗岩が風化した「まさ土」が多い。このため「土砂災害」の発生する危険性が高く、近年は、特に大雨によって引き起こされる土砂の流出や洪水被害が増えている。

過去10年を振り返ってみても、次のように大雨による被害が全国各地で発生している。

- ●平成23年台風12号（＝「紀伊半島豪雨」。9月3日、高知県に上陸／死者・行方不明者98人）
- ●平成26年8月豪雨による広島市の土砂災害（死者・行方不明者74人）
- ●平成28年台風7号（8月17日、北海道へ直接上陸し、全道で約8万戸が停電）
- ●平成28年台風10号（8月30日、大船渡市付近に上陸。岩泉町小本川が氾濫／死者・行方不明者29人）
- ●平成29年7月九州北部豪雨（7月5日～6日／死者・行方不明者42人）
- ●平成30年7月豪雨（＝「西日本豪雨」。7月5日～7日／死者・行方不明者271人）
- ●令和元年8月の前線に伴う大雨（8月27日～28日、九州北部に発生した集中豪雨／死者4人）
- ●令和元年台風19号（＝「東日本台風」。10月12日～13日／死者・行方不明者94人）
- ●令和2年7月豪雨（7月3日～31日、熊本県球磨川の氾濫・決壊など／死者・行方不明者86人）

東日本大震災から8年を経過した令和元年（2019）10月に、復興目前の町を襲った大型の台風19号は、田の浜地区をはじめ町内に大きな爪痕を残した。

「過去に例のない」または「数十年、数百年に一度」と言われる自然災害の発生頻度が高まっている近年、今後新たな災害が発生する可能性を広く想定し、脆弱箇所の安全性向上や河川の流下能力の向上、砂防ダムの建設といった改良工事の展開なども新たな課題となった。

台風19号が襲来した当日、発災後の数日間、町がどのように対応したのか、消防団や住民がどのように行動したか、そして今後、防災や減災への意識をどう高めるべきか。

台風被害を振り返り、他日への教訓としたい。

名称が付けられたほどの大型台風

台風19号は、令和元年10月6日午前3時、南鳥島近海において熱帯低気圧が台風へと発達したものだ。

田の浜地区の写真

7日午後6時には中心気圧915ヘクトパスカルという「猛烈な勢力（風速毎秒54メートル以上）」となり、その後、10日午後9時に「非常に強い勢力（風速毎秒44メートル以上）」に、12日午後6時には「強い勢力（風速毎秒33メートル以上）」となり、同日午後7時、静岡県伊豆半島へ上陸した。上陸直前の中心気圧は955ヘクトパスカルで、最大風速は毎秒40メートルであった。

台風上陸前日の11日、気象庁は記者会見を開き、台風19号は、その進路や勢力、進行速度が、昭和33年に死者1200人を出した「狩野川台風」と類似していることを挙げて広く警戒を呼び掛けた。

気象庁は、顕著な災害を起こした自然現象について名称を定め、記憶・記録することで災害発生後の応急・復旧活動の円滑化を図るとともに、その災害における、経験や教訓を後世に伝承することを期待するものだとしている。

かつて「狩野川台風」で甚大な被害を受けた伊豆地方の人々は、この名を聞かされたことで61年前の被害と教訓を思い出し、台風19号の接近に際しては迅速な避難を行い、一人の犠牲者も出さなかった。

気象庁は令和2年（2020）2月、台風19号を「令和元年東日本台風」と名付けた。ただし本稿では台風19号と呼称を統一する。

各地区消防団は警戒待機

台風19号の上陸を控えた10月11日夜、町内全

13分団ある消防団の分団長たちは、大型台風の接近に備え、各地区における避難の呼び掛けや誘導方法、そして町民の安全確保のために態勢と準備を万端にすべく、それぞれが受け持つ地域の危険箇所（道路冠水、河川、漁港、飛来物など）の確認にかかる。

本町に大きな河川は少ないが、後背地から駆け下ってくるような小さな沢筋などは数多い。しかし、過去の台風や大雨などで水があふれ出したり、多量の土砂が山麓へ押し流されるといった大規模な災害や事故はなかった。

山田町で災害といえば、第一に津波であり、次いで火災（建物、林野）である。後背地である山や河川に対する警戒度は、あまり高くなかった。

田の浜地区の警戒を受け持つ第2分団の糠盛祐一分団長によると「地区東側の山からは『女川』という細い小川が流れているが、今までに氾濫や土砂崩れが起きたということはなく、この川が暴れるなどということはまったく考えになかった。むしろ地区の北部を流れる小さな沢がときどき溢れるので、そちらを警戒していた」と語る。

第2分団分団長
糠盛祐一氏

田の浜地区の地形的特徴

田の浜地区は船越半島の西岸、船越湾に面する傾斜地にある。東日本大震災では、海岸にあった集落を10メートル超の津波が襲い、漁港付近の家屋のほとんどが流失した。津波被害に遭った人の中には、漁港から100メートルほど東側の山際にある標高約13メートルの高台に形成されていた住宅街へ引っ越した人も多い。

住宅街は、東側の山を後背地として、家並は南北に連なるような形をしている。

西側、つまり海側には、東日本大震災クラスの津波が防潮堤を越えた際に、盛土によって津波を減衰させ浸水被害の軽減や避難時間の確保を目的に防災緑地公園が整備された。

防災緑地公園の整備にともない女川の排水路は、新しく公園の下に整備された。

街の中心をバス通りが南北に貫く。船越小学校側から街へ入ると、街の中心付近へ向かって緩やかに下り、中心部にある十字路を越えると再び緩やかな上りとなり、ほぼ突き当りに瑞然寺という寺院がある。

十字路を山側へ上っていくと小谷鳥方面へと越える町道に続き、その道に沿って暗渠の女川が流れ、防災緑地公園をくぐって船越湾に注いでいる。街はすなわち東・南・北の三方向から防災緑地公園へ向かっていずれも下るような形状だ。

観測史に残る雨台風

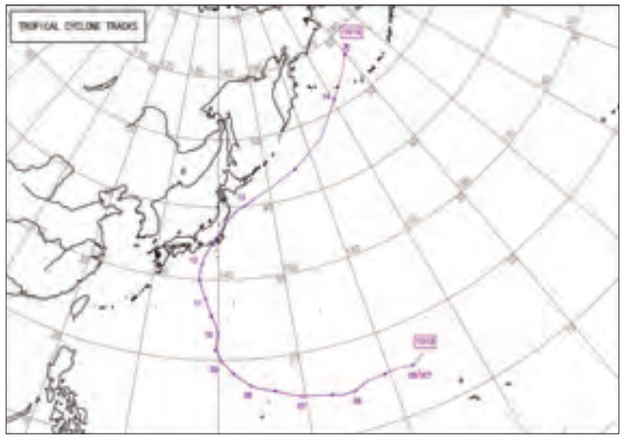
12日の天気は、早朝に雨がやや強く降り、以降は降ったり止んだりを繰り返していた。田の浜地区の第2分団員は24名。このうち20名が午後7時までに第2分団消防屯所に集まった。

第2分団は、12日午後4時から2時間おきに消防車で鐘を鳴らしながら、地区の巡回を繰り返した。不要不急の外出を控えてもらうこと、海岸付近における高潮や波浪への警戒、屋外に置いてあるものが風で飛ばされないようにといった注意を呼び掛けるものだった。

台風19号は、12日午後7時ごろ、静岡県伊豆半島に上陸し、その後、関東地方の平野部を北東へ進むように縦断し、13日未明には福島県沖の太平洋上に抜けた。

この間、台風の進路上の都県をはじめ、関東、東海、甲信越の各地では、後に「記録的豪雨」「観測史上第一位」と言われるほどの大雨に見舞われた。

そして、台風が福島県で海に抜けて宮城県金華山沖をかすめて三陸沖岸沖を北東に進んでいたころ、岩手県付近では、南側に停滞前線が位置していたことによって北東の風が強まりはじめ、大量の水蒸気が県土に流れ込み、かつてない大雨が降りはじめた。



2019年　台風19号の経路図（気象庁ホームページより）

防災緑地公園の住宅側にたまり始めた水

第2分団は、午後8時、10時、11時と消防車を走らせて地区の巡回を続けた。

町は、午後6時に避難勧告を発令し、厳重な準備と用心を呼びかけた。

風雨は次第に強さを増していた。風は夕方から非常に強い風となり、日付が変わった13日午前4時1分には花巻市で毎秒19・3メートルという、観測開始以来、第1位の最大風速を観測している。

午後11時20分、第2分団長は、大雨の中を車で巡回するのは危険と判断し、消防車を屯所の車庫へ入れ、その後は徒歩による巡回に切り替えて歩ける範囲で地区を見回ったが、この間も叩きつけるような雨が降り続いていた。

午後11時30分ごろ、裏山から流れ出す女川の水が、十字路から山側、小谷鳥方面へと続く道の上に溢れ出した。第2分団長が「まるで川のようだった」と語るほどの勢いであった。

平時の防災緑地公園の堤防上の写真

川はどんどん水量を増し、やがて防災緑地公園に行き当たるところでたまり始めた。防災緑地公園の盛り土が雨水の流れを遮っていた。

排水が追い付かない勢いの降雨量であったのか、あるいは流木などが排水路をふさいでしまったのか。水がたまっている理由を第2分団長はすぐには分からなかった。

水かさが増していく中、第2分団員は4人一組でチームを作り、水がたまり始めた付近の家を一軒ずつ訪ね歩き、避難を呼びかけようとした。しかし、激しい風雨の音は、呼びかける声をかき消してしまった。

第2分団員は、戸をドンドンと叩いたり、勝手口の方へ回ったりした。応答があった家もあったが、すでに就寝してしまっている家も多く、住民もまた「聞こえなかった」と語る人が多かった。

濁流が地区を分断した

住宅街を南北に貫くバス通りは、中心部にある十字路に向かって緩やかな下り坂になっている。

田の浜自治会長の佐々木善朗氏が見たところによると、午前0時頃、十字路より北側にある自宅から見たバス通り方面は、雨水が川のようになって通りの上を十字路の方へ向かって流れていた。地区は停電にはなっておらず、街路灯はついていた。流れは確認できたが、水が十字

田の浜自治会長
佐々木善朗氏

路の方にたまっていることには気付かなかった。

午前0時27分、町は防災行政無線を通じて避難指示を呼びかけた。しかし佐々木氏は、雨と風の音でその音声は聞こえず、放送があったことは後日になって知った。

防災緑地公園側の家並みが浸水していく様子を見た第2分団長は、地区南側の高台にある瑞然寺へ駆けて行き、ここを避難所としてもらえるように依頼。住職の了解は得られたものの、住宅街は十字路を境にして北と南で寸断されてしまい、十字路より南側の住民は瑞然寺に避難できたものの、北側の住民は、氾濫した女川を越えられず、約1200メートル離れた船越小学校への避難を開始する。十字路よりやや山側にあった第2分団屯所の2階も避難所に充てられた。

ゴムボートで住民救助

午前2時ごろ、第2分団長は山田消防署へ救助要請の電話を入れた。しかし、他の地区からの応援要請もあるため、直ちに向かうことは困難との返答だった。

同時刻には、たまった水は人間の背丈を超えていた。水没しはじめた家から避難できた人もいたが、住民の全てが避難できたかどうかを確認するすべはなかった。第2分団長の見たところでは、水がたまり切ったのは13日の午前4時ごろだった。

午前4時ごろ消防署員が駆けつけ、救出用のゴムボートで水没してしまった家屋の住民を助け出す活動を開始。さらに1時間後には船外機付きのボートも出動する。

防災緑地公園の盛り土近く、住宅街で一番低いところにあった家では、1階部分まで水に浸かってしまった家屋も多かった。2階建ての家が多かったため、避難が間に合わなかった住民は階上へ逃れていた。

午前5時過ぎ、夜が明けはじめると、泥水に浸かってしまった街の全容が見えてきた。十字路よりも下（西側）にある住宅の多くが浸水していた。後日の集計では、床上以上の浸水家屋は1186棟、81世帯という大規模な洪水被害であったことが確認された。

被災状況のCGイメージ

日の出とともに雨も風も止み、薄日が差し込んできた。救助活動を続けているうちに、家の中で首まで水に浸かって耐えていた人が発見された。家が水没していたために水圧でドアが開かない。消防士がガラスを割って屋内に入り、背負って脱出してゴムボートに乗せた。

風雨が止んだあと、自治会長が確認した避難者の人数は、船越小学校が130人、瑞然寺が30人であった。

10月17日、盛岡地方気象台が公表した「岩手県災害時気象資料／令和元年台風第19号による大雨と暴風・高波（令和元年10月12～13日）」によると、11日午後3時から13日午後3時までの「48時間降水量」は、岩手県内では三陸地方が特に多く、山田町では347・5ミリを記録。また普代村の467・0ミリをはじめ、岩泉町小本で450・0ミリ、宮古市で416・5ミリと、沿岸地方で400ミリを超える雨量を観測した。

復旧活動には自衛隊も出動

13日の午前中には、重機が現地入りし、防災緑地公園の盛り土を崩して排水路を確保、せき止められていた水の大部分はその日のうちに流れ出た。しかし、東側から十字路へと下って来る町道の上を川のように下ってくる水は、その後も約3日間流れ続けた。

さらに、水が引いた後も、そこには大量の泥土や流木が残され、足を踏み入れられる状態ではなかった。

復旧活動は、まず、重機が道の上の泥をかき寄せ、人や車の通り道を啓開した。山からの出水が止まったころには重機が進入できなかった住宅の庭や排水路にたまった泥を、住民たちがスコップで地道にかき出した。

国は、その被害の甚大さに鑑み、山田町に災害救助法を適用。14日からは陸上自衛隊青森駐屯地、八戸駐屯地、岩手駐屯地および航空自衛隊山田分屯基地の災害派遣部隊が山田町入りし、20日までに延べ1860人の隊員が田の浜地区をはじめ町内各地で重機やスコップを用いた土砂撤去など災害復旧活動に従事した。

また、山田町社会福祉協議会では、16日に山田町災害ボランティアセンターを立ち上げ、11月30日までに県内外から849名のボランティアを受け入れた。町内では、田の浜地区の住宅被害が大きかったが、山の内地区でも浸水被害が発生。大浦地区や豊間根地区などでも住宅裏手の崖の崩落や土砂の流出といった被害があり、山田町ボランティアセンターには98件のボランティアの依頼があった。

台風19号は13日正午、日本の東方海上で温帯低気圧に変わった。台風が通り過ぎたあとは全国的に天気も回復し気温も上昇した。しかしながら町内には台風19号の爪痕が残った。

自衛隊による手作業の復旧活動

重機を使って土砂を撤去する啓開作業

田の浜地区の復旧に駆けつけた自衛隊

第2分団消防屯所前。土砂が道をふさぎ建物へ迫る

泥土が重なった田の浜の街区で最も船越湾寄りの道

水が引いた後のボランティア活動

豊間根中学校の生徒たちも復旧を応援

町内各地の被害状況

台風19号による被害は、被災者数・被災家屋の多かった田の浜地区以外にも町内全域に及んだ。

地区別の被災家屋状況は、田の浜地区全壊が14棟、半壊が39棟であった。

その他の地区では、半壊が織笠9棟、船越山の内地区6棟、大浦9棟で、一部損壊が豊間根1棟だった。

床下浸水被害は、豊間根23棟、大沢3棟、山田5棟、織笠27棟、船越山の内地区19棟、田の浜28棟、大浦12棟。

町内の被害家屋数を合計すると、床下浸水以上が195棟で、そのうち一部損壊以上が78棟であった。

避難者数は、最大で311世帯635人（10月13日午前5時時点）、避難所数は13カ所。また、仮設住宅（旧タブの木荘跡地、関谷林業担い手センター、みなし避難所）の入居者は、最大で39世帯（98人）にも及んだ。

これら数字が、震災からの復興を目前にしていた町にもたらした台風19号による被害の大きさを物語っている。

予測困難だった豪雨被害

台風19号では、13日午前1時台に最大77・5ミリの観測史上最大雨量を記録。想定を超える未曾有の豪雨により大規模な土石流が発生し、高台住宅地に浸水被害をもたらした。

令和2年（2020）3月24日、台風19号水害を検証するため設置した有識者らで構成する第三者委員会がまとめた報告書では、防災緑地公園の排水施設は、関係基準に基づき設計されており妥当であると評価。平成2年（1990）の台風28号もまた豪雨をもたらした台風だったが、大規模な土砂災害は発生しておらず、また急傾斜地については崩壊対策事業が実施されており、事前の水害リスクを予測することは困難であったとした。

路盤が崩れてゆがんだレール（鯨と海の科学館裏手）

豪雨により陥没した道路

委員会は、「大規模な浸水被害発生の要因として、強さと量ともに想定を超えた豪雨による大規模な土石流の発生に伴い、準用河川女川の排水施設に閉塞（へいそく）が生じ雨水が溢れ出たこと、さらに上流域の町道を経由した流域外からの雨水流入により、大量の雨水が短時間に集約されたため浸水被害をもたらした」と結論付けている。

宙づり状態になった三鉄リアス線のレール（鯨と海の科学館裏手）

田の浜地区復旧整備計画を策定

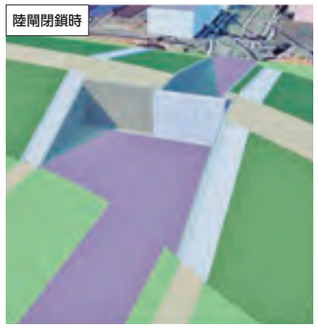
田の浜地区台風19号水害検証委員会の検証結果および復旧方針等に関する提言については、計3回住民説明会を開催して報告。その後、地区住民や町議会の意見・要望等を踏まえて検討を重ね、令和2年（2020）6月、田の浜地区復旧方針・復旧整備計画を策定した。

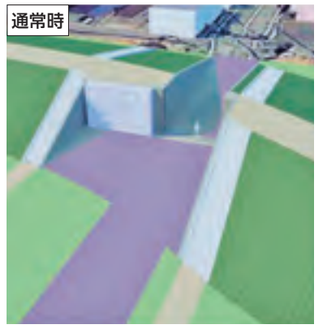
計画期間は令和2年度から令和5年度までのおおむね4年間で、復旧整備の概要は次の通りである。

①大規模な土石流の発生が懸念される沢部（2カ所）において砂防堰堤（えんてい）を整備し、土石流対策を強化する。（県事業）

②山間部道路の洗掘（せんくつ）を防止するため排水機能を強化する。

③防災緑地公園に陸閘（りっこう）を整備し、山側からの異常出水に対応するとともに、東日本大震災クラスの津波に対応した防御機能を維持する。





陸閘イメージ CG

④既往最大雨量に対応した流下能力を確保できるよう女川の排水機能を強化する。

⑤防災緑地公園の上流に位置する沢（4カ所）において排水施設への土砂等の流入対策を強化する。

「想定外」を乗り越えるために

台風19号による豪雨は、100年に一度の規模であったともいわれる。

近年「想定外」という言葉を耳にする機会が増えた。一方で、いざ災害が起きたときには「なぜもっと大きな数値を想定したり、事象への対応レベルを上げておかなかったのか」という異論もある。

町は、今後の災害復旧の考え方を機能強化に視点を置いた復旧に積極的に取り組み、災害に強いまちづくりを推進する考えを示した。また、台風19号災害を教訓として、町内11の自主防災組織と、台風19号の被害など自然災害への備えについて情報を再共有した。「自助」、「共助」、「公助」という、地域連携が今後さらに重要になってくる。

仮工事をして復旧工事を待つ田の浜地区

新たな観光拠点

「三陸復興国立公園」のほぼ中央に位置する本町には、海と山が織りなす風光明媚な海岸風景と四季の彩りがあり、海と大地が恵む多くの産品がある。町は今、三陸沿岸道路の全線開通を見据え、多くの観光客をもてなし、喜んでもらいまた来ていただく、そして地域の生産者・事業者も元気になる「新たな観光拠点」づくり計画を開始する。

たくさんの人を呼び込み町に関わる誰もが楽しみ、元気になれる新しい観光拠点の整備構想

新たな道の駅の整備方針。人々の目的となり、山田町観光の「窓口」となる道の駅を目指す

町の魅力を発信する新しい施設

震災後、多くの被災地では、従前からの課題であった「人口減少の加速化・住民の高齢化」が、より顕在化しつつある。これは被災地に限らず、多くの地方が抱える悩みであり、地方圏では地域づくりの担い手不足という課題に直面している。

しかし、その一方では、のどかさや自然美といった都市部にない価値に魅力を感じた若者が地方へ向かうという傾向も現れており、こうした人々は変化を生み出す人材として期待されている。交流人口を拡大することで、新たな観光資源を取り込み町全体が潤う仕組みを導入する考えである。

本町は、山田の強みである「海と山に囲まれて育まれる豊富な農林水産物」「豊富な一次産品を活用したさまざまな加工品」「豊かな自然を活かしたさまざまな体験アクティビティ」をより充実させ、三陸海岸の中心部に位置するという遠隔地のイメージを逆手に取ったディープな魅力を発信し、その特徴と個性をプロモーションすることを目指して、令和元年（２０１９）７月、新しい観光拠点施設として「（仮称）道の駅やまだ」を整備する方針を示した「山田町『新たな観光拠点』基本構想」を公表した。

「新たな観光拠点」基本構想

「山田町『新たな観光拠点』基本構想」は、今後、増加が見込まれる「観光客」や、たまたま立寄った「通過客」に感動を与えリピーターとなってもらうこと、地元の方も日常的に憩い・楽しめることができる拠点として整備する方針を示したものである。

具体整備方針イメージ

カキをはじめとした特産品を活用

東日本大震災によって大きな被害を受けたJR山田線は、「三陸鉄道リアス線」として復活し、岩手県三陸沿岸部を縦断する路線として平成31年（２０１９）３月に誕生した。また、「三陸沿岸道路」は令和３年中には、青森県八戸市から宮城県仙台市までの全長３５９キロメートルがおおむね全線開通する見通しが示されている。これら、鉄道と自動車専用道路の整備により多くの観光客等が山田町を訪れやすくなる。

変化の著しい交通インフラ環境に対応し、多くの人を町に呼び込み、楽しさと喜びを感じてもらい、また来てもらう、そして地域の生産者・事業者の方も元気になる、そのような良い環境を生むことのできる施設整備を目指す。

新たな観光拠点は、「道の駅」とし、三陸沿岸道路山田インターチェンジに近く、既設の国道45号からもアクセスが容易な前山田病院跡地を候補地に選定。観光客や通過客、地元利用客にも利便性の高い好条件の立地を最大限に活かした施設とする計画である。

山田町へ行きたいと思わせる場所づくりを目指して

令和２年（２０２０）３月には、町は基本構想から一歩進めた、「山田町『新たな観光拠点』基本計画 ～新・道の駅整備基本計画～」を公表した。

基本構想で定めた整備方針・コンセプトをより具体的に示したもので、その方針として、

①人びとの目的地となり、山田町観光の「窓口」となる道の駅を目指す。

②ＡＬＬ（オール）山田の積極的な関わりがある道の駅を目指す。

③発進する道の駅を目指す。

④非常時に防災拠点として機能する道の駅を目指す。

――の４項目を整備方針として掲げた。

具体的な整備コンセプトでは、町の生鮮食品や特産品を味わい・購入できる「物流・物産の拠点」、山田ならではの食べ方、遊び方などが気軽に楽しめる「体験の拠点」、町の若い人が新し

いことに挑戦でき、移住者を呼び込むことのできる「挑戦の拠点」、町の旬な情報、さまざまな観光資源や体験ツーリズムを紹介し、また来たいと思わせる「情報発信の拠点」を目指す施設整備を進める考えを掲げている。

復興後の山田町に活性化をもたらす新たな施設として、令和4年度中の開業を目指し進めていく。

道の駅 24 時間トイレ女性用内観イメージ

新道の駅　外観イメージ

支援から生まれた絆

未曾有の東日本大震災で、町は多くのものを失った。しかしその一方、復興への歩みの中で、町外の様々な団体・個人から、様々な形の支援・激励・パワーを得ることができた。結果、鉄道復旧、スクールバス運行、集会所建設、自治会形成、子どもたちの社会参加等々が実現し、今に至っている。町の復興は道半ばではあるものの、少なくともこれらの支援なくして現在の山田町はありえないのだ。ここではそうした支援活動の一部を紹介することで、支援していただいた方々にあらためて感謝の意を伝えるとともに、活動をきっかけに町民との間に生まれた縁や絆、現在まで継続している交流も記録する。

住民の安全・安心の確保のため見守り活動や自治会形成に尽力

岩手県警察本部 警備部長
石川（いしかわ） 康（やすし）さん

山田交番の所長として赴任した石川さんは、所員を率いて仮設住宅の見守り・訪問活動や自治会形成などに取り組み、治安維持に努めた。

「住民のもとに通い、話を聞く」を徹底

東日本大震災の津波は、国道沿いにあった宮古警察署山田交番も直撃した。そのため、震災直後は、役場の会議室が仮の交番となった。その後、役場のすぐ近くにプレハブ2階建ての交番が建てられ、開所となったのが平成23年（2011）6月1日。これに合わせ、5月中旬、岩手県警公安課から山田交番所長として赴任したのが石川康（いしかわやすし）さんだった。交番の開所と同時に所員も増強され、交番の体制強化に対する岩手県警の意気込みが感じられる。交番には他に、全国からの応援警察官も配属され、計10数人の体制となった。

町内では、交番開所直後の6月中旬から仮設住宅への入居が始まっていたことから、仮設世帯への見守り・訪問活動が、所員の重要な仕事だった。活動は、町職員や支援に入ったNPO法人スタッフと情報交換・協力しながら展開。訪問活動以外にも、夏までは毎日のように遺体が発見されたため、検視担当者への引き渡しに当たったほか、拾得物の届け出への対応なども行ったが、「新しい生活環境下にある住民の方々の不安をやわらげ、安全・安心を確保することが、私たちの最重要任務でした」と石川さんは当時を振り返る。

所長である石川さんが訪問・見守り活動を直接行うことはなかったが、所員からはその都度報告を受け、状況に応じて指示を出した。徹底させたのは、「町職員やNPO法人スタッフと訪問が重複してもかまわないので、とにかく何度でも通って話を聞く」ということ。その結果、所員からは、「何度も足を運ぶうちに、本音を話してもらえるようになった」「警察官のあなただから相談したい、と言ってもらえた」といった報告もあった。

現在の山田交番。高台に移転した

自治会形成を促し、「共助」の仕組みづくり

仮設住宅への入居が落ち着くと、次に町職員やNPO法人スタッフと一緒に取り組んだのが、仮設団地における新しい自治会の形成だった。具体的には、住民の中でリーダーとして活動してくれそうな人に交渉して役に就いてもらい、その人と協力しながら団地内で住民が集まる機会をつくり、住民主体で「共助」に取り組んでもらうのだ。石川さんたちは警察という立場から、団地内で防犯講話・交通安全講話・登下校の見守りなどを企画し、住民が部屋の外に出てコミュニケーションをとる機会を増やすことに心がけた。他の仮設団地にも「よその仮設団地ではこんなイベントをやっているんですよ」と知らせてきっかけを作り、取り組みを少しずつ広げていった。

このような自治会形成に奔走する中、石川さんは翌平成24年（2012）3月末に離任。4月からは警察庁の、災害を担当する部署に2年間出向した。ちょうど国では災害対策基本法の見直しが行われている時期で、山田町での活動・取り組みなどの経験を生かすことができた。さらに岩手に戻ってきてからも、災害対応を含む警備部門に配属されており、山田町での経験を今につなげている。

2011年12月1日、山田町役場屋上より撮影。仮設の交番は写真右側、2階建てで外階段が付いた建物（岩手日報2021年2月4日付）

写真中央に山田交番。手前は職員宿舎。背後に山田消防署があり、右奥には山田病院が見える

石川　康（いしかわ　やすし）｜プロフィール
1961年生まれ。奥州市出身。大学卒業後、岩手県警察官を拝命。盛岡西警察署警備課長、岩手県警公安課次長を経て、山田交番所長に。

復興事業を完了させたい と 応援職員から山田町職員へ

長崎県新上五島町から派遣された高山さんと、青森県南部町から派遣された市澤さんは、復興事業のさなかに山田町職員採用試験を受け、町職員となり事業を完了させた。

港湾整備技術者として各種整備事業を推進

他の被災地同様、震災後の山田町には全国各地の自治体から多くの応援職員が派遣された。震災後に町が抱えた膨大な復旧・復興事業は、彼らの存在無くして進まなかった。そうした応援職員の中に、派遣後に山田町の採用試験を受け、山田町職員になって定住した人がいる。

一人は、長崎県新上五島町から水産商工課に派遣された高山賢次さんだ。平成23年（２０１１）10月に災害対応派遣で来町し、同年暮れにいったん帰ったものの、4カ月後の平成24年（２０１２）４月に応援職員として赴任。漁港整備や漁業集落整備の専門技術者だった高山さんは、その豊富な経験を生かし、山田町で漁港の復旧や防潮堤の整備、漁業集落の整備を担当した。町には港湾整備の技術者がいなかったこともあり、高山さんの仕事量は多かったが、「やりがいがあり、忙しいと感じたことはなかった」と振り返る。

中でも忘れられない事業が、大浦地区の整備だ。住民の声をできるだけ反映させるため、ほぼ毎日通って聞き取りや話し合いを行った。

「ここは高台に民家が残り、当初はその下の防潮堤のそばに道路が整備される予定でした。でもそれでは高台に住む住民の方々が不便ですし、道路やその周辺では防潮堤による圧迫感が強い。そこで道路をかさ上げしたのです」。

次第に住民と親しくなり、山田町での暮らしになじんだ高山さんは、山田町の採用試験を受けて平成29年（２０１７）４月から同町職員になった。

「山田の人はやさしい。出張期間中に民宿で自炊していた時も、同僚の奥さんが毎晩夕食を持ってきてくれたんです。また、町民の皆さんは『町を復興させよう』という前向きな気持ちが強くて、感銘を受けました」と話す。

被災時の小谷鳥漁港の様子。津波に襲われた堤防が無残な姿になっている。左は完成間近の小谷鳥漁港。きれいな姿に生まれ変わった

昨年完了したオランダ島の整備事業にも携わった高山さん。ここを拠点に山田町の観光業が盛り上がることを期待している。

「機能性が高い道路づくり」を目指す

応援職員から山田町職員に転職したもう一人が、青森県南部町から派遣された市澤裕二さんだ。平成28年（２０１６）４月、２年間の予定で山田町建設課に赴任。主な仕事は道路工事の発注と施工管理だったが、「経験も浅く、しかも震災前の山田町を知らずに写真や資料もない中での道路整備だったので、課内の技術者に教えてもらいながら目の前の仕事を一つひとつやるので精一杯だった」と思い起こす。そんな中で目指したのが、「できるだけ低コストで、震災前よりも機能性が高い道路づくり」だった。

例えば、側溝を入れなくても水をうまく操れることができる仕組みなど、施工業者に相談しながら工夫を図ったという。

当時を振り返ると忙しい日々だったが、やりがいは大きかった。それだけに、手がけている事業を自分の手で完了させたいと、市澤さんは任期のある応援職員から山田町職員への転職を決意する。平成29年（２０１７）秋に山田町職員採用試験を受け、翌年４月から勤務。その後、道路整備を完了させることができた時には、達成感と、町に貢献できたことへのうれしさがこみ上げた。

市澤さんはまた、派遣を通じて人間として成長できたことを感謝している。町民とのやりとりの中で「助けてほしい」と言われた時、町民の思いに耳を傾けながらできるだけその希望をかなえることこそ、自治体職員の仕事の本質であると気付いた。今は、令和元年の台風19号で被災した道路の整備事業に取り組む日々だ。

市澤さんが担当した、国道45号から織笠漁港へ向かう町道。上は工事前、下は工事後。道路整備に併せて宅地造成も行った場所で、宅地のなかには個人所有地も含まれていたそう。仮設の事務所で営業している方に、やっと本来の形で仕事をしてもらえるという嬉しさと、小規模ではあったが更地から完成形にできた達成感でいっぱいだったという

＜右＞高山　賢次（たかやま　けんじ）｜プロフィール
1966年生まれ。長崎県新上五島町出身。2011年10～12月まで災害対応派遣で山田町水産商工課に赴任。いったん新上五島町に帰ったあと、2012年４月～2017年３月、応援職員として同課に赴任。同年４月から山田町職員として勤務。

＜左＞市澤　裕二（いちさわ　ゆうじ）｜プロフィール
1995年生まれ。青森県南部町出身。2016年４月～2018年３月まで、応援職員として山田町建設課に赴任。同年４月から山田町職員として勤務。

山田町水産商工課
高山賢次さん
山田町建設課
市澤裕二さん

「住民目線」で、防災無線業務や防災計画の更新などに携わる

静岡県経営管理部
行政経営局行政経営課
矢崎（やざき） 祐美（ゆみ）さん

矢崎さんは静岡県から派遣職員として1年間赴任。住民の意見を取り入れながら、防災行政無線の工事・管理・アナウンスや、防災計画の更新などに取り組んだ。

「クマ出没」のアナウンスに驚く

静岡市出身で静岡県職員の矢崎（やざき）祐美（ゆみ）さんは、人事異動の際の派遣職員募集に手を挙げ、平成25年（２０１３）４月から1年間、山田町に赴任した。東北地方の大学を卒業し、岩手県にも多くの知人がいたことから、復興支援に関わりたいと希望したのだった。

配属先は総務課危機管理室で、防災行政無線の工事・管理・アナウンスと、防災計画の更新を担当。無線工事とは、震災で被害を受けたスピーカーを復旧することで、他の部署や復興計画と調整しながら進めることが求められた。また、震災前と同じ場所に設置しても、集落の住民全員が聞き取ることができなければ意味がない。そこで、同僚と一緒に山との位置関係などを確認しながら場所を選ぶと同時に、スピーカーの方向も微調整しながら設置。それでも、「聞こえない」「聞こえにくい」といった声が寄せられることもあり、そのたびに現場に行って調整し、住民に確認をとったという。

一方、アナウンスの仕事も印象深いと話す。

「私の言葉のアクセントが山田町のものと違うので注意してくださいねと言われ、最初は戸惑いました。しかも、防災や行政に関する連絡だけでなく、クマ出没情報など、放送しなくてはいけない情報が幅広くて驚きました。また、漁協のウニの口開けなどのお知らせも全町に流れることに、漁業の町と感じました」と懐かしむ。

苦労したのは、防災計画の更新だ。例えば、船に乗っている時に津波がきたらどうするか、といった命に関わることを他の職員と相談しながら決めて、計画に反映させていかなければならない。しかも、同様の検討事項は他にもたくさんあった。

「自分の仕事が町の将来を決めていくことにもなるので、本当に自分が進めていって良いのかと悩んだこともありました」

そんな中で心がけたのが、住民たちがどう思うか、他の職員に相談し意見を聞くことだ。同時に、矢崎さんが所属する静岡県から防災計画に関する資料を取り寄せ、参考にした。長い間東海地震対策に取り組んでいる静岡県は全国でも「防災先進県」として知られていることから、何か山田町に取り入れられることがあるのではないかと考えたのだった。

経験を、静岡県の防災啓発事業に役立てる

こうして1年の赴任を終え、予定どおり静岡県に戻った矢崎さんは、『地震防災センター』に配属された。そこで取り組んだ防災啓発事業では、山田町の職員から聞いた「津波てんでんこの大切さ」「避難所でとるべき行動」などを活用することができたという。

ところで、矢崎さんには今でも忘れられない出来事がある。それは、通勤途中に車のタイヤがパンクして困っていた時、近くの生コン工場の社員さんたちが出てきて、すぐにスペアタイヤに交換してくれたことだ。静岡ではなかなか無いことに驚いた。

「山田町の人たちには本当に良くしていただきました。配属部署では派遣職員が私一人だったこともあり、皆さんが気遣って、私と年代が近い女性職員を紹介してくれたり、ウニなどの魚介類や山菜料理を持って来てくれたり。仕事面でも生活面でも支援していただきました」と感謝する。また、そうした職員との交流は現在も続き、岩手と静岡を互いに行き来するほどだ。そんな強いつながりができた山田町だからこそ、職員の本音も含めて震災の被害や復興までの歩みを記録し、後世に残しながら、「攻めの町」として発展してほしいと願っている。

オランダ島での復旧作業の様子。津波で崩れた斜面をハシゴを使って登る

静岡へ戻った後も、山田町の職員の皆さんとの交流は続いている

達増拓也岩手県知事との交流会にも参加した

派遣最終日に配属部署の皆さんと

矢崎　祐美（やざき　ゆみ）｜プロフィール
1986年生まれ。静岡県静岡市在住。大学で経営経済学を学び、2009年に静岡県の職員となる。2013年、派遣職員として１年間山田町に赴任。静岡県に戻った後は、危機管理部やラグビーワールドカップ2019の大会支援を担当するなど、活躍の場を広げている。

鉄道復旧のための地盤造成や陸中山田駅復旧をけん引

京阪電気鉄道から出向した長瀧さんは、鉄道土木技術者として鉄道の地盤造成事業や陸中山田駅復旧などに取り組み、「町民の足」の再生を果たした。

大組織との協議に対応しながら事業を推進

山田町民の「足」である鉄道。その復旧に不可欠な基礎地盤の造成事業のため、大阪に本社のある、当時勤務していた京阪電気鉄道株式会社から「復興庁岩手復興局　復興支援専門員」として出向・赴任したのが、長瀧元紀（ながたきもとのり）さんだ。同社の幹部が国土交通省幹部と意見交換した際、「被災地復興における土木技術者の必要性」を感じ、復興庁を通じて被災自治体へ社員を派遣することに。その一人が長瀧さんであった。

「岩手には縁が無く、思った以上に遠くて驚きました。でもそれ以上に驚いたのが、被災状況。赴任したのは平成25年（２０１３）４月で震災から2年経っていたにもかかわらず、建物基礎以外のがれきは撤去されていたものの、今だ何も無い状態。そんな中で商店などを営業している町民の皆さんから、復興への底力を感じました」。

建設課に配属された長瀧さんのミッションは、ＪＲ山田線の鉄道復旧のため、町の造成計画を調整すること。当時、鉄道の復旧自体はＪＲ東日本の、その鉄道を敷くための地盤造成は町の事業で、具体的には、かさ上げなどの設計や施工・事業管理が長瀧さんの担当だった。鉄道土木技術者として多くのプロジェクトを担当してきた長瀧さんは、その経験を生かし、ＪＲ東日本やＵＲ都市機構、施工業者と協議をしながら積極的に事業を推進。その中で最初にぶつかった壁が、「そもそも鉄道の復旧をどう判断するか」という点だった。

「ＪＲ東日本では、乗客が少なく採算が採れないので、鉄道ではなくＢＲＴ（バス高速輸送システム）を提案しており、鉄道会社社員であっても、それは妥当な内容でした。でも私にとっても、それは鉄道を求めており、第三セクターの三陸鉄道で運行を担うこともあって、町長以下、町の幹部の皆さんに高台防災拠点の造成工事進捗状況を説明

「当時は派遣者の帰任のたびに集合写真を撮っていました。小職の派遣解除の際の建設課集合写真です」（長瀧さんは最前列、左から2番目）

鉄道での復旧が決まったのです。私も最終的に、町にとって良い結果だったと思いました」。

住民の要望に応えて完成させた陸中山田駅

もう一つ、陸中山田駅の復旧に関しても苦労があった。被災前、同駅の入口は東側のみで、西側からのアクセスが悪かったことから、長瀧さんたちは復旧するにあたり、西側入口の新設を提案。東西ホームの行き来のためのこ線橋の復旧も行う場合、バリアフリーに関して課題があり、決定まで難航したが、国やＪＲ東日本と度重なる協議を経て、西側入口、こ線橋ともに実現させた。

このような鉄道復旧関連業務以外にも、土木技術者として、津波復興拠点である駅前付近の中心市街地や、防災拠点となる高台の復興事業を担当。一方で、山田町の職員として選挙事務の手伝いをしたことも思い出深い。長瀧さんの赴任期間は平成27年（２０１５）６月末までの約2年だったが、こうした経験は「その後の仕事に大いに役立った」と振り返る。

「特に、鉄道復旧の判断の際に、事業者が収支だけでなく、住民目線・利用者目線で判断することも大切だと学びました。私たちも鉄道工事の提案の際に、地元住民の方々に説明する機会があるので、『住民目線』のスタンスを忘れてはいけないと肝に銘じています」。

着任中、プライベートで同僚と釣りやバーベキュー、自然散策などを楽しんだ長瀧さんは、山田町の山海の幸や豊かな自然を称賛する。これを武器に観光分野で「外貨」を稼ぎつつ、町民が鉄道を利用しながら暮らしを楽しみ、町全体が発展していくことを期待している。

陸中山田駅に新設された西側（山側）の出入り口（スロープ）

復興庁岩手復興局から山田町への派遣メンバー。小泉復興大臣政務官（当時岩手担当）と一緒に

山田町にある霞露ヶ岳山頂にて。海岸から登れるので正味海抜分を制覇した感が味わえる。海岸側からの登山ルートは、なかなかにハード（写真提供：伊藤洋平氏）

長瀧　元紀（ながたき　もとのり）｜**プロフィール**
1962年生まれ。兵庫県神戸市出身。1986年に関西の大学の土木系学科を卒業し、京阪電気鉄道株式会社に入社。鉄道土木技術者として、主に鉄道新線建設や連続立体交差化などのプロジェクトを担当。

京阪ホールディングス株式会社
長瀧（ながたき）　元紀（もとのり）さん

約800キロメートル離れた地で震災直後からの多岐にわたる支援を継続

北海道池田町・北海道池田高等学校吹奏楽部（ほっかいどういけだちょう・ほっかいどういけだこうとうがっこうすいそうがくぶ）

北海道の池田町と池田高校吹奏楽部は、震災直後から、さまざまな形で物心両面で山田町を支援してきた。それは現在も続き、両町の絆は強まっている。

職員派遣の行政支援は10年経った現在も

山田町と北海道池田町の距離は約800キロメートル。しかし東日本大震災以降、両町の町民の心の距離はどんどん縮まっている。

両町の交流は、震災以前からあった。池田町営で取り組んでいるワイン事業は「十勝ワイン」として広く全国に知られている。その応援組織として全国8カ所に「十勝ワイン友の会」があり、その一つが「陸中山田十勝ワイン友の会」であったことから、交流が続いていた。

東日本大震災直後には、池田町が、山田町に物資や義援金を届けたり、町職員を派遣するなど支援活動を展開。半年後の10月には池田町商工会青年部などの有志が山田町を訪れ、牛の丸焼きをはじめ池田町の特産品を振る舞って町民を励ました。こうした復興支援を受けて、平成24（2012）年3月に当時の沼崎喜一山田町長が池田町を訪れ、両町は「災害時における相互応援に関する協定」を締結。池田町では現在も山田町へ職員の派遣を継続しており、令和2年（2020）8月には、佐藤信逸山田町長が支援のお礼と復興状況の報告のために池田町を訪れるなど、両町の絆は年々強まっている。

「ダンプレ」で義援金と元気を届ける

池田町民の支援活動は、別の形でも行われている。踊りながら演奏する「ダンプレ（ダンス&プレー）」スタイルで人気の池田高校吹奏楽部が、震災の3カ月後から道内各地でチャリティー公演を実施。集めた義援金を山田町に贈っている。現地に行くことができない高校生でも、復興支援ができないだろうか、と考えていた部員に、震災直後、山田町でボランティア活動を行った「十勝まきばの家」のスタッフから、チャリティー公演の提案があったことがきっかけだという。

2012年9月、山田町での公演の様子（十勝毎日新聞　2012年9月29日掲載）

2020年8月、佐藤信逸山田町長訪問時のダンプレ（十勝毎日新聞　2020年8月27日掲載）

この活動に感銘を受けた池田町は、同部に山田町での公演を打診。昭和26（1951）年発足の同部にとって初の道外公演で、部員たちは喜んだが、一方で「震災で肉親や住居を失った人たちに演奏を楽しんでもらえるのだろうか」「自分たちのオリジナルのダンプレを、未知の土地で受け入れてもらえるのか」と不安も感じたようだ。しかし、当時顧問だった小出學（こいでまなぶ）先生の導きもあり、「いつもの演奏を精一杯やろう」と気持ちを切り替えたという。

平成24年（2012）9月、同部は池田町の「子ども夢基金」の助成を受け、山田町で1泊2日の公演を行った。期間中は、仮設住宅や商店街跡地など9カ所で演奏。当初は、県立山田高校吹奏楽部の定期演奏会で演奏する案もあったが、部員から「一人でも多くの人に楽しんでもらいたい」と、分散公演の希望があったのだという。2日間の来場者数は約1300人で、町民からは「良い公演だった」「若い頃を思い出し、元気をもらった」などと喜びの声が上がった。一方の部員たちも、「町民の皆さんと一緒に音楽を楽しむことができた」「自分たちも元気をもらった」と、貴重な経験ができたことに感謝した。翌年の2月には、山田町から「ご支援に対し心から感謝申し上げます。私たちは必ず復興します！」と書かれた横断幕が贈られている。

その後も同部のチャリティー公演は続く。令和2年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で制限されたものの、令和3年（2021）2月までに実施した公演は300回以上、集めた義援金の総額は700万円を超え、今後も活動の継続を誓っている。

また、山田町での公演もこれまでに3回を数え、令和3年に4回目の公演の予定があるという。部員たちは、無事に開催されることを願って、日々練習に励んでいる。

2018年8月、山田町での公演の様子（十勝毎日新聞　2020年12月31日掲載）

岩手県山田町に牛の丸焼きを届け隊出発式（十勝毎日新聞　2011年10月21日掲載）

北海道池田町（ほっかいどういけだちょう）｜**プロフィール**
十勝平野の中央からやや東寄りに位置する、人口6431人（令和3年1月末現在）の町。高い山でも海抜100～200mを超える程度という平たんな土地が広がる。町営でブドウ栽培とワインの醸造を行う「ワインのまち」で、「十勝ワイン」ブランドで知られる。

北海道池田高等学校
（ほっかいどういけだこうとうがっこう）｜**プロフィール**
2018（平成30）年に創立100周年を迎えた。北海道で7番目に総合学科へ転換した高校で、「創造　実践」を校訓とし、多くの卒業生を輩出。陸上競技やスピードスケート、吹奏楽など部活動も積極的に行っている。

合唱・文化体験・草取りなど 復興交流活動を5年間継続

不来方高校では音楽部の祈りの合唱をきっかけに、文化部による文化体験交流や、運動部による清掃ボランティアなど、学校ぐるみの復興交流活動を5年間続けた。

岩手県立
不来方高等学校

避難所で、深い祈りを込めて歌う

岩手県立不来方高等学校音楽部が震災後の山田町を最初に訪ねたのは、平成23年（２０１１）4月1日。支援物資や義援金を届けるとともに、避難所で歌わせてもらうことが目的で、以前山田町の教育長だった木村悌郎さんが、同部顧問の村松玲子先生の恩師という縁がきっかけだった。

「でも、町にはまだたくさんのがれきが残っており、避難所だった山田高校の体育館では被災者の皆さんが3食とれない状況。体育館のステージは支援物資の置き場所となっていたようで、それらを端に寄せて、私たちが歌うスペースをつくってくださっていました。本当にここで歌っていいのか、と全員いたたまれない気持ちでした」と村松先生は打ち明ける。

それでも、『北国の春』『ふるさと』などを歌っていくうちに、「がれき色にしか見えなかったところに色が着いた」「今まで涙が出なかったのに、今日はいっぱい涙が流れた。これで明日から頑張ることができる」と言われた。そして最後には手をつなぎ、一緒に涙を流しながら歌ったという。村松先生は、「誰かのために深い祈りを込めて歌うというこの経験は、その後の私たちの音楽を変えました」と振り返る。また、その後この時の町民から「もう一度聴きたい」との声が上がり、音楽部はこの年、何度も山田町内の避難所や近隣の町村の避難所を訪問して、歌声による交流を行った。

交流を目的としたイベントを実施

その後も音楽部の山田町への訪問は続いていたが、一方で、次第に被災地に関する報道や全国各地からのボランティアは減り、「風化」を危惧する声が聞こえるようになる。そこで平成25年（２０１３）、同校では「今こそ自分たちにできることをやろう」と、校内に「復興教育」という部署を立ち上げ、さまざまな支援活動を実施。その中で、被災地に行って交流することを目指し、山田町との共催で開催したのが『山田町復興交流イベント』だった。「交流」のためには受け入れてくれる被災地の協力がなければ成り立たないだけに、「快く受け入れてくださった山田町の人たちには本当に感謝しています」と村松先生は話す。

イベントには音楽部員と生徒有志の約１３０人が参加することになり、生徒たちは、費用を捻出するため体育祭で募金活動に取り組んだり、当日町民に配るメッセージカードを作成するなど、準備段階から精力的に動いた。当日は、音楽部が仮設住宅集会場と公民館でコンサートを、茶道部や書道部などの文化部が公民館で体験型交流活動を、運動部が仮設住宅の草取りを実施。公民館でのコンサートでは、地元の女声合唱団「コーラス泉の会」との合同合唱も行い、それぞれの活動を終えた生徒たちも手話で参加するなど、会場は一体感に包まれた。

イベントの報告書には、参加した生徒全員の感想が掲載されている。「草取りができたのは山田町の人たちのサポートがあったから。ボランティアは『やってあげる』のではなく『やらせてもらう』ものだと知った」「音楽部の歌を聴きながら涙を流している町民の方を見て、音楽の力のすばらしさを実感した」など、イベントは生徒たちにとって、今後の生き方や自らの在り方に深い示唆を与える機会となった。このイベントは形を変えながら、同校の復興支援事業終了の平成29年度まで続けられた。その後は再び音楽部単独で、毎年8月に復興交流コンサートを開催し、「コーラス泉の会」との歌声による交流も続いている。村松先生は、「泉のように、交流が枯れることがないよう続けていきたい」と引き続き町に想いを寄せる。

「山田町民歌」を「コーラス泉の会」の皆さんと一緒に歌った

「ふるさと」を山田町の皆さんと。音楽部の生徒が会場を回り、手を取りながら一緒に歌う

「くちびるに歌を」を歌う。ステージ上のスクリーンには、震災当時の避難所の様子が映し出された

復興支援活動報告書の編集後記には、村松玲子先生の言葉が記されている。

『3年前のあの日から、内陸の私達は「何かしたい。何かせずにはいられない。」と思いながら、何もできない自分を、そしてあの日のことを次第に忘れていく自分を、どうにもできずにいました。「山田へ行こう」と被災地へのボランティアを募集した時、思いがけずたくさんの参加希望があり、不来方生もみなそう思っていたのだと感じました。

〈山田へ行って変わった自分〉を、ささやかな報告集にまとめました。復興はまだまだ道半ばですが、未来ある高校生達がふるさとの復興を推進する力になってくれればと願っています。

傍らにいよう
寄り添っていよう
立ち去らないでいよう
思いを馳せていよう
復興教育担当　村松玲子』

不来方高等学校（こずかたこうとうがっこう）｜プロフィール
1988年4月1日開校。社会の変化に対応し、生徒の個性を伸ばす教育を推進するため、普通科に学系（人文学系、理数学系、芸術学系、外国語学系、体育学系）を導入。音楽部は2019年までに、全日本合唱コンクール全国大会で金賞を通算19回、最高賞の文部科学大臣賞を通算7回受賞。

イベントや桜の植樹などでモノとともに「元気」を届ける

震災直後からのイベント開催や物資配付、その後も、桜の植樹や経営する飲食店での町産品使用など、瀬川さんの支援は途切れることなく続いている。

町民を巻き込んでイベントを開催

震災から約3カ月後の平成23年（2011）6月15日、山田町内の御蔵山公園で、ライブや古着市・陶器市・古本市などのイベント「I LOVE やまだ」が開催され、1200人以上の町民や近隣市町村住民でにぎわった。ライブには東京で活躍するミュージシャンたちが多数参加し、彼らの呼びかけにより全国から4トントラック1台分の支援物資も到着。当日だけでは配り切れず、主催者の「I LOVE 実行委員会」はその後も町内の船越地区や野田村などでイベントを開催し、被災者の元に届けた。

イベント開催のきっかけは、盛岡市の瀬川弘勝さんが、交流のある東京在住のミュージシャン高野哲さんから「被災地のために何かできないか」と声をかけられたことだ。飲食店に勤務していた瀬川さんは、同僚や常連客が山田町出身だった縁で、毎年オランダ島に海水浴に出かけ、町在住の仲間たちと交流していた。そのため震災直後からほぼ毎日山田町に通い、必要な物資を届けて回ったりするなど支援。ミュージシャンにその話をしたところ、「山田町でお手伝いしたい」と言ってくれたのだ。

瀬川さんたちは約1カ月後の開催を目指し、同委員会を立ち上げて準備。当日は、約20人の町民もボランティアスタッフとして参加した。

「物資だけでなく、『元気』も届けたかった。ですから町民の方たちと一緒にやることにもこだわり、炊き出しなどに携わってもらいました」と瀬川さんは当時を振り返る。その後、平成25年（2013）3月3日には、弘前市の有志団体「エコッコプロジェクト」と「春のやまだ祭り」を共催した。

支援ではなく「会いに行く」

もう一つ、届けたい「元気」があった。桜の樹だ。震災直後に仲間のお母さんが、津波がかぶった桜の樹を見て「もう咲くことはないだろうなあ」とつぶやいたことが忘れられず、「いつか町内に桜を植えよう」と心に決めていた。同年11月、盛岡市内で「Diningわかんたんか」を開業した瀬川さんは、2013～14年にかけて3回、常連客や仲間を誘い、運動会・球技大会を開催。自分たちがそれらを楽しみながら、その参加費の一部を桜植樹の資金にすることを思いついたのだ。

平成29年（2017）10月、瀬川さんたち実行委員会は、町内の造園家の指導のもと、同町北浜の復興住宅隣りの私有地に、ソメイヨシノ5本、ヤエザクラ5本、白ツツジ12株を植えた。土地の所有者の、「復興住宅の皆さんがお花見を楽しめるように」との願いに応えたものだった。植樹当日は、実行委員のほか町民や運動会の参加者など約60人が集まった。多くの人たちの思いが詰まった桜の樹は、翌年から少しずつ花を咲かせている。

「震災直後も今も、『支援活動をしている』という感覚はない。仲間やその家族の方たちに会いたいから、ちょっとお土産を持って会いに行っている、という感じです」と瀬川さん。

平成30年（2018）10月には、7年ぶりの「I LOVE やまだ」を開催。活動を通じてつながった人たちの再会・交流を目指したもので、紅葉を植樹したほか、魚介類のバーベキューやオランダ島の遊覧など、町の魅力を満喫するイベントとなった。

一方、店では山田町産の魚介類や「山田の味」を伝える役割も果たしている。その店が開業10周年を迎える今年は、「I LOVE」のイベント、運動会などを計画し、いっそうの交流を楽しみたいと考えている。さらに今後は、山田町の若者の活動をバックアップしていく予定だ。

「I LOVE やまだ」には本当にたくさんの物資が寄せられ、山田町をはじめ近隣市町村の皆さんでにぎわった

「春のやまだ祭り」スタッフで記念撮影。天候にも恵まれ、町民の皆さんも巻き込み、一緒にイベントを盛り上げた

運動会といえば綱引き!

花が咲く日を楽しみにしながら、桜の木を植樹する

みんなで植えた八重桜が咲いた。樹のお世話は町在住の造園家さんにお願いしている

瀬川　弘勝（せがわ　ひろかつ）｜プロフィール
1976年生まれ。盛岡市出身。東日本大震災発生時には市内の飲食店に勤務していたが、3月下旬に辞める予定だったため、震災後は勤務せず、4月中旬まで毎日、その後も毎週山田町に通って支援活動を行う。山田町出身の元同僚を雇用し、2011年11月に盛岡市内に飲食店「Diningわかんたんか」を開業。

「Diningわかんたんか」店主
瀬川　弘勝さん

スクールバスや物品の寄贈で子どもたちの学校生活・活動を支援

認定NPO法人国境なき子どもたち（KnK）マネージングコミッティ
清水（しみず） 匡（きょう）さん

認定NPO法人国境なき子どもたち（KnK）は、子どもたちの登下校の「足」となるスクールバス6台のほか、小中高校などに多くの物品を寄贈し、子どもたちが日常の学校生活を取り戻すことに貢献した。

スクールバス支援要請にその場で即答

KnKは、開発途上国の困難な状況にある青少年を支援する団体である。スタッフの清水（しみずきょう）匡さんは震災から間もない3月下旬、初動調査・支援のチームメンバーとして岩手県沿岸部に入り、各市町村の教育委員会を中心にヒアリングを行った。同団体としては初の国内緊急支援であったが、津波被害のスマトラ島の支援経験から、当初は、避難所や公民館に子どもたちの居場所を設置することを想定していた。ところが、この頃に清水さんたちが訪れた避難所には支援関係の車両が、そして公民館にはまとまった数の子どもたちはいなかった。また、震災直後とあって、被災地でもどんな支援が必要なのか情報が整理されていなかったため、清水さんたちは持参した紙おむつや粉ミルクなどを配りながら、直接被災した方の話を聞いて回ったという。

その後、山田町を訪れた際、教育委員会から「スクールバスを支援してもらいたい」と依頼された。

「その場で我々が『はい』と返事をした時の、教育委員会の方の『信じられない』という顔が今でも忘れられません。あとで聞くと、断られることを覚悟していたので、私たちがその場で承諾したことにとても驚いたようです」

とはいうものの、バス支援の経験がないKnKは、どこでバスを購入したら良いのかわからない。そんなある日、国道45号を車で走っていると、バスが停まっている車庫を見かけた。地元の運送会社だった。「何か情報を得られるかも」と直感した清水さんたちは、藁（わら）にもすがる思いで事務所に入り、たまたまいた同社の会長（当時社長）もしくは、社長（現会長）に自己紹介をして事情を説明したところ、すぐに自動車販売会社を紹介してくれたという。こうして4月23日には、スクールバス6台を町に寄贈できたのだった。

スクールバスの支援は山田町が第一号となった（2011年4月23日）

担当を外れたあとも支援要望に対応

その後もKnKでは、体操着や水着、制服、職員用パソコン、倉庫など、学校ごとにニーズを吸い上げて寄贈。職員住宅4棟の改修や、山田北小学校校庭の整備なども行った。6月には県内沿岸部支援を目的に、盛岡市内にKnK岩手事務所を開設（同年10月釜石市に移転）。翌平成24年（2012）には山田高校ボート部へボートやトレーラーを寄贈、平成25年（2013）には田の浜コミュニティセンターの再建など、同事務所を拠点に継続的な支援を行った。

清水さんは当初、1週間おきに東京から来県し、花巻市内の宿に滞在しながら山田町など沿岸部に通っていたが、岩手事務所開設後はいったん震災支援事業から外れる。しかし、その後も山田町の教育委員会から直接支援の相談があり、そのたびに岩手事務所に連絡。前述の支援につながったのだった。また、清水さん自身も山田町の復興状況が気になり、2カ月に1回ほど訪れていたという。

「山田町の皆さんはあたたかい人柄で、大変な状況下でも私たちを快く迎え入れてくれました。特に教育委員会の皆さんは、自身が被災者であるにもかかわらず子どもたちのために尽力していて、頭が下がりました」と清水さん。以来、教育委員会や学校と関わりを強く持ちたいと考えるようになり、自分の子どもが通う小学校でPTAの役員を務めるようになったほどだ。

平成23年（2011）6月に開設されたKnK岩手事務所は、陸前高田市への支援終了を機に平成28年（2016）に閉鎖されたが、同時に、清水さんは東北担当に就任し、山田町とも再び関わるようになっている。

田の浜コミュニティセンター開所式でのテープカット

黒板など教育資機材を支援した陸中海岸青少年の家で勉強する船越小学校の児童（2011年5月24日）

山田高校のコンピュータ部の生徒によるビデオワークショップ。山田町の復興をテーマに生徒主導でビデオ作品が作られた
https://www.youtube.com/watch?v=cEhO_Jzy6hA

田の浜コミュニティセンターの開所式。地元の子どもたちによる踊りが披露された（2013年4月18日）

田の浜コミュニティセンターの婦人会では場が笑顔であふれた（2013年4月21日）

清水　匡（しみず　きょう）｜プロフィール
1970年生まれ。千葉県船橋市在住。1994年に神田外語大学の英米語学科を卒業し、ネイチャーシネプロに入社し自然科学番組の制作に携わる。その後、国境なき医師団日本を経てKnKには2003年より勤務。
国境なき子どもたちHP　https://knk.or.jp

民間ならではの視点で、物資寄贈から ハード面・ソフト面と多角的に支援

公益財団法人国際開発救援財団（FIDR）
ネパール事務所所長
前田（まえだ） 桂子（けいこ）さん

震災直後から物資支援などに取り組んだ公益財団法人国際開発救援財団（ファイダー）（FIDR）は、平成23年（2011）秋に現地事務所を開設し、8年にわたり集会所建設や住民活動のサポートなど多角的な支援活動を展開した。

町民スタッフによる現地事務所を開設

国際協力援助や自然災害被災者への緊急援助、広報啓発事業などを行っている公益財団法人国際開発救援財団（ファイダー）（FIDR）が、「支援が届いていない」という情報をもとに山田町に入ったのは、震災直後の4月上旬だった。すぐに避難所に食料品、衛生用品、日用品、冷蔵庫、洗濯機などを、7月から11月にかけて仮設住宅と在宅避難者の約3100戸にストーブ・掃除機などを寄贈。8月からは中学・高校を対象に用具の購入や施設の修復、大会参加などを支援する「部活動サポートプログラム」を立ち上げた。

「誰も経験したことがない大きな震災で、現地の状況が刻々と変化する中、私たちはどんな支援ができるのかを常に考え続けました」と話すのは、当時、同財団の東日本大震災復興支援チームリーダーだった前田桂子（まえだけいこ）さん。被害が甚大だった山田町で、必要な支援を迅速に、そして継続して行うためには現地に拠点を置くことが重要だと判断し、同年秋には町内に事務所を開設。スタッフには町民を雇用し、地元住民の状況や心情に寄り添った活動を目指した。

同財団では他の支援団体同様、当初はモノの支援が中心だったが、時間とともに町民の支援ニーズは変化。住民の気持ちが発災当時より少し前向きになると同時に、町全体の復興や発展につながる支援にシフトした。例えば、ハード面では、買い物支援バスの寄贈、バス停留所待合室の設置、住民の新しい集会施設として2カ所のコミュニティセンターの建設などを支援。そのうちコミュニティセンター建設については、国の補助金事業の活用は難しかったため、同財団の支援は住民にとって大きな価値があった。

「私たちが心がけたことの一つに、『公的支援と重複しない、民間ならではの支援』というものがありました」と前田さんは説明する。

利用者の使いやすさの工夫を取り入れた大沢川向コミュニティセンター（2016年11月竣工）

コミュニティーの再構築につなげる

一方ソフト面では、自治会形成のための懇談会や、子ども向けのイベントや復興支援ライブなどを開催。また、カラオケ機器の無償貸し出しによるカラオケ大会の実施支援、足湯カフェなど交流会の開催、郷土食づくりといった町民のグループ活動のサポートなどにより、町民が自ら企画したり町民同士が顔を合わせる機会をつくり、コミュニティーの再構築にも貢献した。また、前田さん自身は、「イベント終了後、町民の方々が『ああ、いっぱい笑った』と言って帰られました。そんなふうに笑顔になるきっかけをつくることができたのがうれしかったですね」と話す。さらにこれらの経験から、コミュニティーのつながりや、そこに暮らす人々の主体性が大事であることを再認識したという。

このように町民の日常生活が次第に戻ってくると、次の段階として、子どもの環境の回復に努めた。町内4カ所の放課後児童クラブへのエアコン設置、11校の小中学校への学校図書寄贈、レスリング・サッカー・ミニバスのスポーツ少年団の支援などである。背景には、長年にわたる開発途上国支援の経験に裏打ちされた、「子どもたちが元気に成長できれば、コミュニティーや町の将来は明るい」という考え方がある。

同財団では平成29年（2017）3月に事務所を閉鎖し、令和元年（2019）に8年間の支援にひと区切りをつけたが、バザーでの山田町産商品の販売などで町への支援を継続。震災や山田町を忘れないでほしいというメッセージを発信し続けている。

『広げよう　友だちの**輪**、つなげよう　伝統の**環**、愉しもう　やまだの**和**』を掲げて、町民と一緒に企画・実施した『**わわわ**』活動。様々な活動を通して町の多くの名所や人材に出会うことができた

仮設住宅や災害公営住宅団地等で開催した足湯カフェ。老若男女が集まり、足湯につかりながらおしゃべりに花を咲かせた

「カラオケは気持ちが明るくなる！」と、機器の利用者はのべ1万6千人に上った

社協バス『まぢづけぇ号』を寄贈（2012年3月）。当初は町内の買い物、その後は日帰り旅行の足として特にご高齢の方々に利用していただいた

前田　桂子（まえだ　けいこ）｜**プロフィール**
東京都出身。青年海外協力隊を経て、1999（平成11）年に同財団に入団。ベトナムやカンボジアで地域開発支援事業に携わり、東日本大震災発生直後から復興支援に従事。復興支援チームリーダーとして、2013年3月から現地事務所閉鎖の2017年3月まで山田町にて活動した。

地域振興に向けた事業を展開し子どもたちの自主性尊重と社会参加を実現

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの「こどもひろば」「子どもまちづくりクラブ」の活動により、子どもたちは自分の考えを言葉にし、社会参加の機会を獲得。子どもたちの企画・デザインによる施設誕生にもつながった。

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　国内事業部
山田（やまだ）　心健（むねたけ）さん

子どもたち自身が運営する「子どもの居場所」を提供

国内外で子どもたちへの支援を行い、災害などの現場でも緊急支援活動に取り組んでいる公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン。平成23年（２０１１）３月末に岩手県にスタッフが調査に訪れた際、支援団体が入っていないことを聞き、山田町を訪れた。山田町の役場や避難所でのヒアリングで、避難している子どもたちの遊び場がないと知り、避難所となっていた山田南小学校と山田高校の2カ所（のちに船越保育園を加えた3カ所）で「こどもひろば」の活動を行い、スタッフの山田さんも4月6日から活動に参加した。

「こどもひろば」とは、主に幼児から小学生までを対象にした、避難所などでの「子どもの居場所」。子どもたちの自主性を尊重するため、山田町では特に、子どもたちが運営にも関わった。

「被災直後は、喪失感の大きさからか自分の考えを率直に話す子どもが少なかったのですが、子どもたち同士で話し合いをしたり、それがうまくいかない時に私たちが関わったりすることで、子どもたちは自分の考えを言葉にするようになりました」と山田さんは振り返る。

やがてこうした活動や調査の中で、子どもたちから、「町の復興のために何かしたいけれど、何をしてよいかわからない」という声が上がる。ちょうど避難所が解消され、仮設住宅に移行していった頃でもあった。そこで山田さんたちは同年7月、子どもたちが定期的に集まり、まちづくりのためのアイデアを話し合う「山田町子どもまちづくりクラブ」の活動を開始。当初3～4人でスタートしたメンバーも、登録人数が20人まで増えた。復興した町のプランやゆるキャラの提案、町の歴史や特産品などを素材にした「山田町カルタ」の作成、復興に関する町民の意見の聞き取り・動画発信と活動の幅は広がり、子どもたちの社会参加につながっていった。

山田町ふれあいセンター前での集合写真

子どもたちが企画した施設が誕生

その結果、こうした活動に理解・共感を示した町が、同クラブに、「新しい陸中山田駅の周辺に、子どもたちが企画・デザインする施設を建設したい」と提案。小学生から高校生までのメンバーは約2年がかりで企画を練り、平成28年（２０１６）7月、図書館機能を持ち、小中高生世代を中心に、町民が交流できるスペースを有する「山田町ふれあいセンター」が誕生した。同センターには、おしゃべりできるゾーンと静かに新聞などを読めるゾーンに分ける、乳幼児コーナーと隣接し子連れの親が利用できる食事コーナーを設ける、陽光を取り入れるために中庭を2つ設置する、といったメンバーのアイデアが反映されていた。

「7月2日の開所式では、『まちづくりクラブ』のメンバーが進行役を担い、ダンスや読み聞かせなどのイベントを、町の子どもや大人の方が実施していました。その様子を目の当たりにした時、町民の方々のための居場所が機能し始めたと感じてとても感慨深かったことを、今でも忘れられません」

同センターの開設とその運営サポートで、山田さんたちの活動はひと区切りついたが、前述以外でも学用品・学校備品・防災用品などの配布、放課後児童クラブへの出前講座などの実施、スポーツ少年団・クラブ活動への備品配付・遠征費用助成、山田幼稚園の建設支援など、子どもたちへのさまざまな支援活動を展開。また、現在も、町や社会福祉協議会と連絡をとりながら経済的な支援事業を進めている。一方、開設に関わったふれあいセンターへの愛着も深く、「今後も、子どもたちを中心に幅広い世代の町民の方が集まり交流する場として、その機能を拡大してほしい」と望んでいる。

ワークショップの様子

子どもたちと一緒に作成した山田町カルタ

山田町ふれあいセンター開所式の１コマ

山田　心健（やまだ　むねたけ）｜プロフィール
1981年生まれ。埼玉県児玉郡美里町出身。神奈川県の大学を卒業後、複数の国際協力団体の活動に携わり、2011年に現在の団体に入局。プログラムオフィサーとして、東日本大震災緊急・復興支援事業に従事。現在は国内緊急対応チームとして活動。

町とのスムーズな連携のもと子どもたちの心身の健康を目指す

国連児童基金（ユニセフ）
ジンバブエ事務所教育部
近藤 智春（こんどう ちはる）さん

ユニセフは、町や他団体と連携しながら、子どもたちの心身の健やかな成長を目指して様々な支援を行った。

町は提案をすぐに取り入れてくれた

東日本大震災の発生時、近藤智春（こんどう ちはる）さんはアメリカ・ペンシルバニア州のピッツバーグ大学博士課程に在籍していた。それ以前の平成13年（2001）から7年間、国連児童基金（ユニセフ）の職員として各種支援に携わっていたことから、発災直後からユニセフ本部と連携して東北三県で緊急支援活動を展開していた東京の日本ユニセフ協会に協力を申し出て4月中旬に帰国。同協会が臨時に開設した盛岡事務所に、フィールドマネージャーとして赴任した。

「岩手県の沿岸地域一帯の支援活動を行いましたが、特に被害が大きかった山田町、大槌町、陸前高田市に通うことが多かったですね。山田町の職員の方たちとは当初から連携がスムーズで、保育士などを対象にした子どもの心理ケアのワークショップ開催など、私たちの提案をすぐに取り入れていただいたことを覚えています」と近藤さんは回想する。

ユニセフでは緊急・復興支援において、「緊急支援物資の提供」「保健・栄養」「教育」「心理社会的ケア（心のケア）」「子どもの保護」「子どもにやさしい復興計画」の6つの分野の取り組みを行っている。町でも震災直後は、避難所への支援物資の提供、子どもたちへの栄養支援・補食支援、保育園・幼稚園・学校の再開支援、日本プレイセラピー協会との連携による「心のケア支援」などを展開。特に、青年海外協力協会から栄養士を派遣してもらって行った栄養指導・食育支援や、保育園・幼稚園を通して行った補食支援は、近藤さんにとって印象深い。

「一連の支援活動を通して、町の職員の方たちが、子どもたちを大切に思っていることを強く感じました。私たちユニセフが、子どもたちのためにできることは限られており、地域が継続して守り育てていくことが基本です。そのためにユニセフがお手伝いをさせていただく、というスタンスなのです。その点で、山田町がさまざまな側面から、子どもたちや子どもたちに関わる大人たちにまで目を配り、支援していることを実感しました」

虐待・暴力防止に精力的に取り組む

もう一つ、近藤さんたちが山田町とともに力を入れて取り組んだのが、虐待・暴力防止の支援である。日本ユニセフ協会は、平成23年（2011）10月から平成28年（2016）、12月にかけて、一般社団法人J-CAPTAやNPO法人CAP岩手と連携して、CAPのワークショップやシンポジウムを開催。CAPとは「Child Assault Prevention（子どもへの暴力防止）」の略で、一連の活動には、町の児童相談員が中心となってワークショップを企画したり、町が日本ユニセフ協会と共同で「子育て支援相談窓口の案内」の冊子を作成するなど、町や町民が主体的に携わった。近藤さんはこうした町の姿勢に感銘を受け、同冊子を今も大切に保管している。

近藤さんの岩手県内での勤務は1年ほどで、その後ピッツバーグ大学に戻り、博士号を取得したあと、再びユニセフに復帰し、トルコ、そして現在はジンバブエで教育支援事業に関わっている。こうした活動の中で、「子どもたちが安全な環境下で健康に成長できること」を目指してきたことは、世界中の国々に共通であると感じるのだとか。

「これからも子どもたちにやさしい山田町であり続けてほしい」とメッセージを送っている。

© 日本ユニセフ協会

2011年12月4日に豊間根保育園で開催した「祈りのツリー」の模様です。ボランティアの方が沿岸部の保育所保育園を回って、子どもたちとオーナメント作りを行い、ツリーを飾って交流しました

© 日本ユニセフ協会

© 日本ユニセフ協会

2012年3月31日開催「山田町おやこクッキングカフェ」の様子。青年海外協力協会から派遣されていた、栄養士ボランティアの方が運営に協力しました。山田町健康福祉課が主催したイベントです

© 日本ユニセフ協会

想定を超える大災害にも関わらず、保育中の乳幼児から1人の犠牲者も出さなかった岩手県。保育現場は、どのように子どもたちを守ったのか。日本全国の保育現場も「万が一」に備えられるよう、近藤さんは、岩手県保健福祉部児童家庭課とともに山田町はじめ県内の各保育所が行った避難行動等を調査。その結果を報告書にまとめました。
『東日本大震災津波　岩手県保育所避難状況記録～子どもたちはどう守られたのか』は、日本ユニセフ協会ホームページで公開中

近藤　智春（こんどう　ちはる）｜プロフィール
1972年生まれ。大阪府出身。2014年ピッツバーグ大学で教育学博士号取得。2001年からの7年間、2014年から現在までユニセフで教育専門官としてネパール、パキスタン、インドネシア、ウガンダ、トルコ、ジンバブエなどで勤務。2018年に現職のジンバブエ事務所教育マネージャーとして就任。

東日本大震災　山田町での支援活動内容

国境なき子どもたち（KnK）／国際開発救援団体（FIDR）／セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン／日本ユニセフ協会

認定NPO法人 国境なき子どもたち（KnK）

2011年	●小・中学校スクールバス6台の寄贈（バス3台、バン3台） ●職員住宅4棟の改修 ●山田体育館へカーテンの寄贈 ●教育委員会へ軽ワゴン2台の寄贈 ●小・中学校へ体操着,水着の寄贈 ●被災した船越小学校（青少年の家）へ校務用パソコンの寄贈 ●被災した山田北小学校校庭の整備
2012年	●山田高校ボート部へボート6艇、トレーラー1台寄贈 ●山田高校へ懐中電灯80個の寄贈 ●山田幼稚園へトイピアノ32個の寄贈
2013年	●田の浜コミュニティセンターの建設 ●教育委員会へ車両2台の寄贈 ●山田高校へビデオ機材3セットの寄贈
2014年	●船越小学校へ屋外倉庫の寄贈

公益社団法人　セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）

2011年	●こどもひろばを設置し、安全安心に遊べる場所を確保 ●震災で流されたランドセル、文房具を子どもたちに配布 ●避難場所に生活する方たちにタオル、歯ブラシ、石鹸などを配布 ●スポーツ少年団、部活動の父母会や郷土芸能団体などへ助成金を交付 ●学校、子どもたちに備品、学用品を配布 ●放課後児童クラブに対し、備品などを配布 ●「子どもまちづくりクラブ」を結成し、夢のまちプランを作成。アンケートや聞き取り調査を通じて子どもたちの声を発信、町に復興計画に対する意見書を提出 ●「子どもまちづくりクラブ」で地域報告会、東北こどもづくりサミットに参加
2012年	●「子どもまちづくりクラブ」では町長や、地域住民に復興に関する意見を聞き、動画などで発信
2013年	●学童保育施設・児童館へ非常用持ち出し袋と防災ずきんを支援 ●「子どもまちづくりクラブ」で町の進める「コンパクトシティ構想」に対し子どもたちのアイディアを町長に提案した。
2014年	●「子どもまちづくりクラブ」では、町の魅力を発信する「山田町カルタ」を作成
2016年	●「子どもまちづくりクラブ」の子どもたちが企画・デザインした「山田町ふれあいセンター」を建設（復興支援フォローアップ事業）

公益財団法人　国際開発救援財団（FIDR）

2011年	●町内の避難所に冷蔵庫、空調機、衛生用品・日用品・食料品などを支援 ●町内の仮設住宅に家電類（扇風機・掃除機・石油ストーブ等）を支援 ●町内の中学校・高校の部活動サポート・ボランティア活動支援（2014年度まで継続） ●仮設住宅団地自治会形成の支援 ●仮設住宅団地の買い物支援（巡回バスの寄贈など、2013年度まで継続） ●各種イベントの開催支援（子ども向けイベント・復興支援ライブ等、2014年度まで継続） ●仮設住宅居住世帯へ年末ボランティア派遣（年越しそば配布、掃除手伝い、正月飾り作りなど、2013年まで）
2012年	●バス停留所・待合室の設置を支援 ●カラオケ機器等の貸し出し（2016年度まで継続） ●仮設住宅団地における簡易消火栓の設置支援 ●山田町情報誌発行支援（2013年度まで継続）
2013年	●山田町写真集刊行支援 ●写真展「私たちの山田～あの頃を忘れない～」開催 ●住民と協働して企画・実施する交流イベント（山田わわわ計画、体験会、街かど探訪など）を開催（2015年度まで継続）
2014年	●災害公営住宅入居者を対象とした交流会（足湯カフェ、オープンカフェなど）の開催（2016年度まで継続）
2015年	●大沢川向コミュニティセンターの建設支援（2017年４月完成）
2016年	●放課後児童クラブのエアコン設置支援、小中学校への学校図書寄贈 ●国体文化プログラム：復興やまだ写真展「再生～さいせい」の開催
2018年	●飯岡コミュニティセンターの建設支援（2019年４月完成）

日本ユニセフ協会

1.救援物資の提供

実施時期	内容	概要	支援先
2011年3月	救援物資の提供	町役場を通じ、飲料水、子ども用下着、衛生用品、靴等を提供	町内各避難所

2.保健・栄養分野での支援

実施時期	内容	概要	支援先
2011年3月～10月	母子保健サービス再開支援	山田町と連携し、乳幼児健診、定期予防接種等の母子保健サービスの再開を目的とした保健衛生関連設備・備品や車両（一部リース品を含む）、母子手帳や育児支援冊子を提供。NPO法人HANDS、博報堂等と連携。	町内全域
2011年4月～2012年3月	栄養支援	バランスの取れた栄養摂取が難しい避難所生活者を対象にした炊き出し用栄養強化米の提供、栄養士の派遣を通じた食育支援など。日本栄養士会等と連携。	山田南小（避難所）など
2011年6月～9月	補食支援	幼稚園・保育園児約400名に補食を提供。就学前児童の食生活調査を実施し食育支援情報を提供。山田町、青森県立保健大学、岩手県生活協同組合等と連携。	大浦保、大沢保、織笠保、船越保、豊間根保、山田第一保、山田第二保、山田中央保、わかき保、山田幼、わかば幼
2011年10月～12月	インフルエンザ予防接種費用助成	生後6か月～中学3年生の全幼児・児童のインフルエンザ予防接種費用（1本につき2000円）を助成。山田町等と連携。	町内全域
2011年10月～12月	インフルエンザ予防接種費用助成	生後6か月～中学3年生の全幼児・児童のインフルエンザ予防接種費用（1本につき2000円）を助成。山田町等と連携。	町内全域

3.未就学児保育分野での支援

実施時期	内容	概要	支援先
2011年3月～4月	保育園再開支援	保育活動再開に必要な備品・遊具などを、各園のニーズに合わせて提供。	わかき保、大沢保、山田第二保
2011年8月～2012年3月	保育活動維持支援①（保育ボランティア派遣）	短期保育ボランティアを派遣（のべ66人、246日間）。東京都社会福祉協議会、岩手県保育協議会と連携。	山田中央保、豊間根保、わかき保、山田第一保、山田第二保
2011年11月～2012年3月	保育活動維持支援②（保育士派遣）	保育士2名を長期派遣。青年海外協力隊と連携。	山田町地域子育て支援センター
2011年9月～12月	保育活動維持支援③（行事支援）	遠足費用（バスチャーター代など）を支援。電通、博報堂等協力『折りのツリープロジェクト』クリスマス会の実施。	山田中央保、山田第一保、豊間根保、船越保

4.小中高教育分野での支援

実施時期	内容	概要	支援先
2011年3月～8月	学校再開支援①（備品提供）	被災校、教育委員会等への職員用オフィス家具等の提供。夏季に全小中学校での天井掛け扇風機設置を支援。	全小中学校、教育委員会
2011年4月	学校再開支援②（清掃支援）	ボランティアの派遣（のべ31名）を通じた被災校舎の泥出し等の清掃、備品運搬作業支援。教育委員会と連携。	全小中学校
2011年4月～8月	学校再開支援③（文具・学用品支援）	各学年別の文房具セット（ノート、鉛筆等）と学用品セット（体操着、リコーダー、習字道具等）を提供。教育委員会、教職員組合、学校生協等と連携。	内陸へ避難（転出）した児童を含む全小中学生（約1200名）
2011年5月～12月	中高総体参加支援	県教育委員会を通じ、参加生徒の交通宿泊費等を支援。	該当中高生
2011年8月	通学支援（安全確保）	日照時間が短くなる冬季に備え、携帯懐中電灯を配布。	全中学生
2011年9月～2012年12月	中学生補食支援	宿題・家庭学習支援施設利用者約50名への補食提供支援。	山田ゾンタハウス利用中学生

5.心理社会的分野での支援（子どもの心のケア支援）

実施時期	内容	概要	支援先
2011年4月	「子どもにやさしい空間」	ユニセフ支援物資「箱の中の幼稚園」「レクリエーションキット」（国内調達の同等品を含む）を用いた、専門家とボランティアによる安心・安全な場所での遊びをベースにした心のケア支援。	山田南小（避難所）、豊間根保、船越保、山田第一保、山田第二保、織笠保、大沢保、山田中央保
2011年4月	「ちっちゃな図書館」	全国から寄付された絵本・児童書のセット。避難所等での心のケア支援。	山田南小（避難所）
2011年4月～7月	未就学児の心のケア①（保育士・保護者研修）	日本プレイセラピー協会と連携し、保育士・保護者等を対象にした『プレイセラピー的子どもとの関わり方の研修』を実施。	保育園、幼稚園の保育士、園長ら
2011年4月～※	岩手県主催心のケア会合への参加	県教育委員会・児童家庭課主催の月例会合にオブザーバー参加。山田町を含む現場情報を共有し、県の啓発ツール作成に協力。（※後述「未就学児の心のケア②」などで活動を継承）	
2011年5月～6月	「外遊び（遠足）」支援	「遊び場」の流失などで外遊びの機会を失った子どもたちに、内陸行楽地への遠足機会を提供（のべ7日間）。	保護者を含む1,323名が参加
2011年10月～2016年12月※	未就学児の心のケア②（個別相談）	日本プレイセラピー協会等と協力し、保育園・幼稚園の要請に基づき、臨床心理士を派遣し心理相談を実施。	保護者、保育士
2011年10月～	岩手県「沿岸三地区こどもの心のケア推進」事業への協力	全国児童家庭支援センター協議会などと協力し、左記事業に協力。宮古市（沿岸児童相談所）、大船渡市（太陽学園）を拠点とする児童精神科医の活動を支援。	

6.子どもの保護の分野での支援

実施時期	内容	概要	支援先
2011年3月～※	災害孤児の代替的養護に関するアドボカシー	震災直後に一部政治家や報道機関などから孤児院建設の必要性を求める声が上がったことを受け、国際スタンダードに基づく震災個人に対する代替養護を通じた支援を訴えるアドボカシー（政策提言）を実施。国会議員らとの意見交換やシンポジウムを通じた世論啓発などを実施（※後述の「父子家庭支援」で活動を継承）。	
2011年6月	災害ボランティア行動規範の普及	全国社会福祉協議会及び各被災市町村社会福祉協議会と協力し、災害ボランティアを対象に、支援従事者の行動規範に関わる国際スタンダードに準じてまとめた「子どもの保護と安全確保のための行動規範」を周知。	社会福祉協議会／ボランティアセンター
2011年7月～※	虐待防止	県児童家庭課による児童虐待とDV防止の周知啓発活動に協力。啓発チラシやラジオメッセージを制作。山田町には、啓発メッセージが入ったクリアファイルを提供（※後述の「子どもの暴力防止」で活動を継承）。	クリアファイルは町内全戸に配布
2011年7月	支援情報の周知	県児童家庭課による被災孤児養育家庭等向け支援制度周知活動に協力（チラシ作成など）。	
2011年10月～2016年12月	子どもの暴力防止	J-CAPTA、CAP岩手との連携事業。子どもたちが暴力から身を守るために必要な知識や技術の研修機会を提供するワークショップスペシャリストの養成やシンポジウムの開催、幼稚園、保育園、小学校等でのワークショップの実施を支援。	町内各所
2012年4月～2016年12月	父子家庭支援	子どもや家族に関わる専門家、自治体担当者、民生委員等の被災者支援従事者を対象に、父子家庭・父親育児に関する支援技術・知識・情報・思考力を身につける「お父さん支援員」研修を実施。NPO法人新座子育てネットワーク、岩手県保健福祉部児童家庭課と連携。	

「”やまだまち“との出会い」

絵本作家　山田（やまだ）　マチ

私の名前は「山田マチ」といいます。「山田」は本名、「マチ」はペンネーム。

架空の「山田町」で巻き起こる、クスリと笑える少し不思議な物語を書いていきたいと、この名前にしました。２００９年に短編集「山田商店街」を出版。本のなかの「山田町」は、ダルマを食べる食堂があったり、ハトやヤギが郵便配達をしていたり、「ヤマダ伝記」が映画化されていたりするファンタジーな町。

そんなお話をつくるなかで、実在する「山田町」についても調べました。全国あまたある「山田町」のなかで特に興味をそそられたのが、岩手県の山田町。山田線、山田湾、山田道路、山田せんべい……山田だらけの町にいつか行ってみたい。そう思っていた矢先の、２０１１年3月、テレビやラジオから「やまだまち」という言葉が連呼されるようになります。

東京にも被害の深刻さは伝わってきました。私は山田町関連のニュースにかじりつき、ネットで情報をあさりました。震災発生から10日たったころ、山田町観光協会のブログが更新されました。その内容に、私はド肝を抜かれ、感動の涙を流し、笑いました。

案内所も、かき小屋も、養殖いかだも全部なくなったというのに、絵文字いっぱいのポップなテイストで「元の町に戻るまで時間はかかりますが待っててくださいね～」と元気いっぱい。

それから日々綴られてゆく、被害の深刻さとはウラハラの能天気な文体のブログを追いかけながら、山田町を応援したいと強く思いました。夏になり「スマイルガーデン山田商店街」誕生というニュースをキャッチ。９月、私はひとり、山田町に向かいました。

復興もままならないなか、ボランティアでもビジネスでもないのにおじゃましていいのだろうかと不安でした。町に足を踏み入れ、ガレキの積み上がる惨状（ざんじょう）を目の当たりにして、不安はさらに増しました。しかし町のみなさんは、そんな私を受け入れてくださいました。

「なんで山田に来たの？」

「名前が『山田マチ』っていうんです。だから来ました！」

このＱ＆Ａはすべり知らずで、老若男女問わず、大いに笑ってくださいました。名前のおかげで、たくさんの方に出会い、お話を伺うことができました。町のみなさんのたくましさ、ほがらかさ、前を向く底力に心を打たれ、海の美しさに魅了され、食べ物のおいしさのとりこになり、私はすっかり山田町のファンになりました。

それからも、幾度となくおじゃましています。”山田“という看板の写真を集めて「山田だらけの山田町ＭＡＰ」をつくったり、読者の方を集めて「山田町ツアー」をしたり、展覧会をしたり、ただ遊びにいったり。

訪れるたびに町は変化していきます。でも私が最初に好きになった、人と海は、ずっと変わりません。

ここ数年、児童向けの『山田県立山田小学校』という本を執筆しています。架空の「山田県」で暮らす小学生たちを主人公にした物語は、おかげさまで８巻続く人気シリーズとなり、全国のこどもたちに読まれています。

モデルはもちろん、山田町。山田県は、学校の勉強をちゃんとやっていれば、こどもも働くことができます。こどもだけで運営する商店街や観光協会やペンションもあるんですよ。

震災直後に出会った、明るくてたのもしかったこどもたちの顔を思い浮かべながら書いています。彼らは大人になり、山田町を支えていることでしょう。

私の夢は、全国の「山田さん」を集めて、山田町ツアーをすること。みんなで山田の名所をめぐりたい。「山田町に山田さんはあんまりいない」という衝撃の事実を共有したい。

ひとたび山田町を知れば、きっとまた訪れることになるでしょう。山田町は、２度目で「ただいま」と言いたくなるような魅力があると思うのです。山田町を、全国80万人の「山田さん」の心のふるさとに。

私は山田町に出会うことができて、この名前にしてよかったと、つくづく思っています。

A 復興したオランダ島からの風景。山田湾内に浮かぶ養殖いかだと、海の向こうには山田の町並みが見える。

B 山田マチさん著作の「山田県立山田小学校」。読めばクスッと楽しくなる人気の児童文学シリーズ。

C 2011年夏にできた「スマイルガーデン山田商店街」。山田マチさん訪問のきっかけになりました。

D 空想のお知らせをする架空の「山田町掲示板」という山田マチさんの作品です。掲示チラシは、実際に山田町で開催した展覧会の案内です。

Profile

愛知県出身。絵本作家。同じ名前であることから山田町を知り、震災後に町を訪問。デビュー作の「山田商店街」(幻冬舎)は、架空の山田町で巻き起こる少し不思議な物語を収録した短編集。絵本「てのりにんじゃ」「どこどこここけし」「しかしか」などを出版。架空の「山田県」を舞台にした児童書『山田県立山田小学校』は8冊続く人気シリーズとなる。

心に夢と希望と誇りを灯し

クローズアップ山田人

「あの日」があったことで出会えた新しい未来があった。誰もが支えあって拓いてきた明日。
生まれ変わっていくふるさと。そこには未来からの風を受けて立つ新しい自分の姿もあった。
ひとりの思いや力はたとえ小さくても、踏み出す一歩はきっと風を呼ぶ。大好きなまちを輝かせたい。
その光は必ず自分をも輝かせる。夢と目標に向かって歩き続けてきた「山田人」たちがいた。
思いは重なる。「三陸の海辺のまちに、この山田町に暮らすことが誇り」。
ひとつの灯火は小さくても、その連なりが今、リアスの山海を明るく照らし出している。

Photo essay
わたしの一枚
～私が見つめた復興の十年～

船越公園グラウンドゴルフ場

船越公園、北側の緑地にグラウンドゴルフ場がある。
令和２年５月８日に出来た手作りのグラウンドゴルフ場である。
１コース８ホールだけの狭い場所だが、毎週、火・金曜日の午前中に交流会を行っている。
会の名前は「船越クラブ」。会員は15名。場所が狭いだけに会員の数は限られている。
草が伸びれば会員たちで草刈り。
高齢者にはきつい作業だが、汗を流しながらも楽しんでいる。

加藤　誠一（山田町船越　80代）

撮影日　2020年6月2日
場　所　船越公園

教育の十年

子どもたちの心に寄り添いながら もう一度、海と郷土の美しさを教える 山田人はこれからも海と生きていく

日常が激変したあの日から10年。教育の現場では「心のサポート・ケア」を最大テーマに子どもたちに寄り添い続けてきた。そして今、津波の記憶を次代へ伝える学習も始まった。海を正しく畏れるために。なによりも「海のまち・山田」で強く生きていくために。

医療チームの最前線基地となった旧山田南小学校（現 山田小学校）

クローズアップ 山田人 ①
Close-up YAMADA-JIN

混乱の中から復興を目指して

平成23年（２０１１）の春、三陸沿岸の学校は、いつものように卒業生を送り出し、在校生は進級し、そして新入生がやってくるいつもの春を迎えるはずだった。

しかし思ってもいなかった事態が起き、経験したことがない状況への対応に、誰もが追われることとなった。

津波――。「町が壊れる」「家を失う」「身近な人を亡くす」「父母が仕事を失う」「繰り返し流される津波の映像」――。一瞬にして日常を奪われ、生活が一変した。

大人たちでさえ過酷だった状況の中、子どもたちが抱えていた不安やストレスがいかに大きなものだったかは想像に難くない。

学校も混乱していた。町内９校の小学校のうち、船越小学校（以下、船越小）は校舎２階まで津波が浸水。避難所となった小学校も多く、５月まで被災者を受け入れ、その後は、山田南、織笠、大沢の各小学校の校庭には応急仮設住宅が建設された。

保護者たちも疲労していた、しかし、子どもたちが心に負ってしまった傷を癒やし、心に落ち着きを与えることができるのは、やはり大人たちだ。

津波の夢を繰り返し見る、もう海は見たくないという子どももいた。学校へ来ない、または来られない子どももいた。周囲に心配を掛けまいと健気に振る舞う子、いつも以上に気持ちがたかぶっている子もいた。

学校教育の現場では、そんな震災後の環境下で子どもたちと向き合っていくことになった。

もう一度「海の子らしさ」を取り戻したい。辛い災禍さえ次代へと伝えていける日が訪れることを願い、教員をはじめ現場関係者たちの協働による教育の復興を目指す取り組みが始められていった。

「心のサポート・ケア」がスタート

３月11日からの数日間、学校の状況はどうだったか。

「被災直後の学校は、まるで野戦病院のようでした」

そう語るのは、山田南小学校（以下、山田南小）の元校長・佐賀敏子さんだ。

「学校は、一時、１１４７人もの方が避難されていました。そればかりではなく消防本部、病院、入院病棟、薬局も兼ねるような状況でした」

学校近くにあった後藤医院の後藤尚院長は、迫りくる津波を見て、病院スタッフと患者さんを連れて山田南小へ逃げ込んだ。幸い津波は医院に到達しなかったが、町職員の懇請を受けて同校の保健室で避難者の診察を開始。翌日には町内の近藤医院院長近藤晃弘氏（整形外科）近藤勝則氏（内科）も活動に加わったほか、４日目ごろからは日本医師会災害医療チーム（ＪＭＡＴ）や岩手医大、昭和大学、国立病院機構などの医師団が駐留し、小学校は避難所兼総合病院でもあった。

「励ましに訪れる方や報道関係者への対応もありました。保護者へ引き渡しができない児童もいて、余震におびえるのを励ましたり。そんな中、発電機や反射式ストーブを貸してくださったり児童のための食糧を支給していただいたりした保護者や地域の方々、食料の分配やトイレを流すための水汲みや清掃、多くの転出手続きなどに懸命に当たってくれた教職員の皆さんには頭が下がります」

ご家族を複数亡くして自身と子どもだけが毎晩のように学校を訪ねてきた保護者もいた。

「教職員24名の中にも、家族を亡くされた方が2名、家が被災した方が7名もおりましたが、心を一つに子どもたちへの対応や避難所運営に当たってくれたのでした」

やがて学校再開のための段取りや学校運営計画、行事の作り直しも迫られる。臨時職員会議で職員同士が心を開いて話し合った結果、佐賀校長は「いちばん大切なことは子どもたちの心のサポート・ケアだ」と確信した。

山田南小では、長期計画「山田南小学校の取り組みとこれから」を提案。被災規模に鑑みて1～2年での復興はありえないと考え、1年生が卒業するまでの平成23年から29年までの「長期プラン」として第1期（平成23～25年）を復旧・復興期、第2期（平成26～27年）を復興期2、第3期（平成28～29年）を復興期3と、3期に分けて設定。「心のサポート・ケア」を中心に据え、教育活動をも重点化しながら総合的に質を上げていこうとの考えだった。

寄り添い、支える

町内の小学校の再開は4月20日、入学式は21日に行われた。

陸前高田市の前教育長で、発災当時、大沢小学校（以下、大沢小）の校長だった大久保裕明さんは「再開を視野に入れた準備を始めたのが4月1日でした。けれども学校に置かれた避難所も継続しなければいけない。私には、どちらかと言えば避難所運営の方が中心でした」と話す。

大沢小には別棟のカーペット敷き多目的教室があり、そちらが避難所に充てられていた。当時、教室が避難所となっていた学校もあった中、同校では再開に際しての動きはスムーズに進んだという。

「新年度には、親の引っ越しなどの都合で、児童約20名が転校するなどしました。もしかしたら、気付かないうちに友だちがいなくなっていたというケースもあったかもしれません」

子どもたちが知り得る情報は大人より少ない。知ったとしても理解や納得には時間もかかる。周辺で次々に起こる変化は、子どもたちに

とっても大きなストレスだった。

「そんな状況の中でも、ひとつだけいいことがありました」と大久保さん。

「3月11日の夜から3日間は、子どもたちと先生方が学校で一緒に寝泊まりしました。大人たちとは別に学校は学校でまとまることにして、1年生から3年生までは音楽室、4年生から6年生は図書室でした。実際、帰りたくても帰れない。学校は高台にありましたが、道はがれきなどに埋もれてしまっていた。道ができたのが4日後。でも、先生が夜も一緒に寄り添ってくれたということは、子どもたちの精神的な支えになったと思います」

避難所は8月7日まで開設されていた。そうした中、大久保校長が掲げたテーマは「学校生活の充実」だった。

「家屋の6~7割が全半壊するという地区でした。お父さんや祖父母を亡くした児童もいました。教材や食事もままならない状況下で、それでもせめて学校では友だちや先生方と一緒に過ごす。学べる日常を整えていく。学校の時間と空間を平常時に戻すための環境づくりを目指しました」

▼「生かされて 明日へ」

津波襲来から1カ月が過ぎた4月11日、当時、山田町教育長だった岩船敏行（いわふねとしゆき）さんは、発災時のこと、避難所でのことなど、当時の心境を「生かされて 明日へ」という詩文にまとめた。

宮古地区小学校陸上記録会では本町の児童が大活躍

避難所には、不自由な暮らしを知恵と工夫と組織の力で乗り越えようとしている人たちがいた。津波跡地から流木を集めてたき木とし、壊れかけの雨どいをつないで集めた沢水で洗濯場を作り、ドラム缶で風呂を沸かしていた。協働のたくましさと誰かを思うやさしさに「生きる力を見た」という。

「今は辛くとも、前を向いて進もう。それが生かされているものの務めかな／まもなく新学期。子どもの元気な声が後押ししてくれるはずだ／子どもたちに明るい笑顔を届けよう。がんばろう先生方。がんばりましょうみんなで／生かされて明日へ」

6月、町教育委員会が復興に向けての全体図をまとめた際も、この「生かされて 明日へ」に込められた思いは、その未来地図の柱の一つとなった。

翌年9月、町教育委員会では『教育振興運動の立て直しに向けて』という提言を作成。これは県独自の運動だったが、各地域の特性や特徴により課題やテーマは少しずつ違った。

「私が山田町について感じるのは、子どもたちも保護者の皆さんも、学校行事や地域活動にとても積極的・協力的だということです。山田はお祭りや伝承されてきた芸能も多い。中学生にも高校生にも、それぞれの年代にしっかり受け継がれています」

地域の大人が指導者となり、子どもたちは地域みんなで育てようという意識の強さが山田町のよいところだという。

山田町教育振興運動では「仮設住宅入居者との交流活動としての花壇整備（大浦小・山田北小）」「地域住民との共同作業によるプール清掃、盆踊り大会の実施（山田北小）」「サケの稚魚放流（織笠小）」「学校新聞『海よ光れ』の発行と避難所などへの配布（大沢小）」といった活動実績が報告された。

山田っ子はたくましい、と岩船元教育長は語る。

「例えば宮古市内の高校で運動部を引っ張るのは山田の子が多いんです。元気だし、みんなでやろう、というチーム作りが上手。避難所でも山田高校の生徒たちは掃除やお年寄りのお世話などを積極的に行っていました。誰かの役に立てたなら、という気持ちが自然でやさしい。このよさをずっと守り、延ばしていけたらと思います」

▼経年で変わりゆく対応

「発災の直後から大事にしてきたのは心のサポート・ケアです」

学校教育課教育次長の箱山智美（はこやまともみ）さんも心のサポート・ケアの大切さを話す。

「心のサポート・ケアでは、県から山田町に1名カウンセラーを派遣していただき、各学校を巡回し、指導主事を中心に子どもたちの様子を取りまとめ、対応に当たってきました。これが核になる部分で、現在も続いています」

発災直後は子どもたちへの関わりを主に、やがて10年の中では保護者への関わり、取り組みも増えて行く。家庭環境をも含みながらの対応である。

「仮設住宅に住む子どもたちが相当数いました。令和2年度で仮設住宅はゼロになりますが、中には生まれたときから仮設住宅で、そこから学校へ通う子もいました。そして仮設住宅からはどんどん人が減って行く――。生活環境がめまぐるしく変わってきたのが、山田の子どもたちです」

避難所や仮設住宅など慣れない環境下で発生するストレスへの対応、本設住宅へ移った際の環境変化への対応、それに合わせた保護者への対応。心のサポート・ケアの方法もまた、時間の経過と機に応じて短いスパンで変化してきた。

「もうひとつ、発災直後から言われていたことは『生活環境の変化に起因するであろう不登校や、問題行動による学校の荒れなどは5年後にピークを迎える』ということでした。これは阪神淡路大震災の経験からそう語られていたことです」

実際、山田町でも5年後には不登校の出現

混乱の中でも入学式には笑顔が（旧山田北小学校　平成23年4月）

地元漁業への理解を深める「定置網漁」見学（山田小学校／令和２年10月）

自衛隊員と音楽で交流する子どもたち（旧山田南小学校 平成23年4月）

率が５・８％になった。中学校でも落ち着きのない生徒が目立つようになった。阪神淡路大震災後に現れた状況が、山田町でもやはり起きた。

その理由については「データはあるが、詳細は分からない」と箱山次長。「考えられるのは、避難所から仮設住宅、そして本設の家へと幾度も変わってきた生活環境の中で自分の居場所が見つけられなかったからではないか、と思っています」

発災直後は不登校になる子どもは少なく、テンションも高めだったという。

「どの子もがんばっていたのだと思います。保護者も、周りの大人たちも。ところが、だんだん力が抜けて行くなかで、そういう変化が現れてきた。科学的な分析はありませんが、示したデータは阪神淡路と同じような曲線でした」

発災から３年目ぐらいまでは震災という実体験と記憶へのケアだった。しかし５年目ごろからは生活環境の変化から生じるストレスへのケアに変わった。

「復興教育は、ずっと子どもたちの心に寄り添うこと。それはずっと、そして今も変わっていません」

▼心の復興にチームで対応

心のサポート・ケアが令和２年度まで続けられていることは前述した。佐賀敏子校長は、７年間の長期的な目標を設定し、そのための短期的な目標を立てながら日々の教育活動を創造し、工夫してきた。

長期的な目標とはもちろん「心の復興」。短期的な目標とは、その道程で現れるいくつもの課題に、ひとつずつ丁寧な手当てを行うこと。

「子どもたちが元気を取り戻すことで教職員も元気になっていく。子どもたちの心のサポートは、教職員の心のサポートにもなっていました。学校の取り組みには多くのご協力があり、すべての力が掛け算されて面となり、元気を取り戻す素地ができたように思います」と佐賀さんは振り返る。

平成24年（２０１２）４月、２年ぶりの人事異動があった。内陸から転勤してきた教職員の中には被災地の子どもの気持ちが理解できていないのではと悩む先生もいた。また、被災体験がトラウマになっている先生もいた。そのため教職員の心のサポート・ケアが必要になった時期もあったという。

それでも全員の目標は「教育の復興」「子どもたちのケアのために」だった。明日へ向かう力をキーワードに据え、チームとして取り組むことで、やがて連携はひとつにまとまっていく。

▼「海とともに生きていってほしい」

心のサポート・ケアはまた、子どもたちの「心の記録」ともなった。はじまりは津波という出来事だったが、子どもたちを取り巻く状況はさまざまだ。一つひとつを検証しながら、類似ケースを解決する手がかりを探すこともあった。

この膨大なデータの集積もまた、復興の記録である。

心のサポート・ケアを継続しながら、一方では、山田町に起きたことも伝えて行かなければならない。

避けては通れないテーマが「津波伝承教育」だ。

発災直後には「海が怖い」「津波の夢を見る」と話す子どもたちも少なくなかった。大人たちもまた、子どもたちの心中を推し量り、海での体験学習を言い出せずにいた。

しかし、彼らのふるさと・山田町の目の前には、先人たちが生活の場としてきた海が変わらず広がっている。これからもずっと。

「海とともに生きていってほしい」――。山田人なら誰もが子どもたちに伝えたい思いだ。

平成25年（２０１３）、船越小では、震災前から実施されていた「網おこし体験」という漁業体験学習を再開した。沖合に設置している磯立て網（小型の定置網）を「おこす（引き上げる）」漁法を学ぶ校外学習のひとつである。

その前年、体験学習の再開に際し、船越小では、保護者へのアンケートを実施。数名から心配との旨の回答があり、その年は見送られた。しかし翌年には反対する声はなく、再開されることとなった。

船に乗って沖合へ向かう子どもたちもまた喜んでいた。潮風に顔をほころばせながら、元気に網を引く子どもたちの様子に、同行した教職

自然環境への理解や学習意欲を高める目的で行われる「海の生き物学習」

船越小学校の漁業体験。海の仕事の楽しさを学ぶ（令和２年６月）

農村地帯の豊間根小学校の児童は田植え体験で郷土の産業を学ぶ

員もまた、ほっとしながらも喜んだ。

▼「海よ光れ」

大沢小には、昭和63年（１９８８）以来、毎年秋の学習発表会で全校児童が演じる「海よ光れ」という伝統の表現劇があった。

漁師・辰治郎とその孫・正人の対話を展開の軸とし、明治時代から現代に至るまで、大沢の人たちが津波の惨禍を乗り越えながら海と関わって生きてきた暮らしの風景を演じ上げるものだ。

児童たちは、背景に大漁旗が掲げられた舞台で、劇中歌や身体表現、方言を交えたセリフなどで大沢の漁労文化、海とともにある日常、津波の脅威などを描き出す。同時に、地域文化を自覚させ、伝承し、郷土愛を育む。

震災から2年後の平成25年（２０１３）には再び上演されたが、津波の記憶が生々しいとの理由から6年生だけで演じ、その後も津波の場面はソフトな表現に抑えながら発表されてきた。

しかし、町内の小学校の統合を控え、最後の公演となる令和元年（２０１９）の発表会では、津波のシーンを従来のシナリオ通り演じるかの判断を児童たちに任せた。津波をどう捉えるのか。彼ら自身に考えさせたのである。

子どもたちの答えは「そのまま上演する」だった。最後の公演で、子どもたちは「津波だーっ！」「逃げろーっ！」というセリフをそのまま叫んだ。

大沢小学校のオリジナル全校表現劇「海よ光れ」の一場面

平成23年4月19日発行の大沢小学校学校新聞『海よ光れ』。第一面には「負けるなよみがえれ 大沢の海よ光れ！」と力強い大見出しが躍る

劇中、乱獲で魚影が減った海の再生を願って「オレたちの海！ 生き返れ！」と呼びかけ役が叫ぶと、全校児童が呼応して「海よ光れーっ！」と叫ぶシーンがある。

発表会には地域の大人たちも見に来ていた。子どもたちが海に叫ぶ場面に、山田人のたくましさを感じていた。

▼「いきる かかわる そなえる」

現在、県内の小中学校では、県の復興教育プログラム「いきる かかわる そなえる」に沿って震災・防災教育、復興教育が行われている。各市町村独自の取り組みもあるが、震災以降の基本的な教育復興計画は全県的にこのプログラムに従っている。

「津波てんでんこ」という言葉についても教え、他者や地域の人たちとの関わり方、関わることの大切さを指導しながら、復興教育の充実を図っている。小学校低学年、高学年、中学生に向けた同名の復興副読本もある。

例えば高学年向けのページでは、以下のような内容が64ページに渡って掲載されている。

・**いきる**…三陸鉄道の復活、もっこ（背負い籠）でお弁当配達した宮古市の姉妹、原発事故被災から救われ飼い主と再会した猫の逸話など。

・**かかわる**…山田北小学校を助けてくれたＮＰＯ法人『国境なき子どもたち』、釜石でコンサートを開いた不来方高校音楽部、地元水産品で加工品を開発する宮古水産高校。

・**そなえる**…東日本大震災について、地震や台風や大雨など自然災害が発生する仕組み、防災や避難の考え方。

佐々木茂人（ささきしげと）教育長は「自分の命は自分で守るということを、しっかりと理解してほしい」と話す。

「指示を待っているばかりではなく、自分で考え、行動するということ。地震は、ひとりでいるときにも起こるかもしれない。津波から命を守るのは『てんでんこ』です」

佐々木教育長は船越小の校長時代に「小学校卒業までに全員が25メートルを泳げるようになろう」という目標を揚げ、教育活動にあたってきた。

「山田は海のまち。海とともに生きていく技術や力も身に付けてほしい。心と身体全体で、山田というまちを好きになってほしいのです」

▼胸を張って次代へ伝えるために

「子どもたちに寄り添いながらも、時を経て『３・11』のことは意図的に仕掛けていくことも必要」と箱山次長。

発災のとき、現在の児童たちの「先輩」は何を思って、どう行動したのか。避難所では、高校生たちが積極的に運営に関わっていた。子どもにできたこともたくさんあった。そんな当時のことも今はもう教材になる。

津波の「伝承教育」は、ある年度の区切りから始められたものではない。子どもたちの心を測り、確かめ、ゆっくりと「津波」の脅威を学ばせるような指導が行われてきた。それは、海とともに生きてきた山田町の日常を、子どもたちの手に取り戻させることでもある。

「このまちに伝えられてきたことの美しさを理解できる子どもたちであってほしい。海は、怖いだけじゃない。立ち向かうこともできる。今、このまちで進む復興。現在の、それこそが立ち向かっている姿なのです」

学力や体力もだが、子どもたちの持つ可能性と力を上げていけるように努めている。それは、まさに「生きる力」を身に付けることだ。

今、あれほどの大規模災害でさえ風化という言葉がささやかれている。津波の衝撃が、あの悲しみや苦しみが、たちまち忘れられてしまうことはないだろう。しかし、関心が薄れることで、いつかまた同じ悲しみを繰り返してしまうのではないか。

被災地が恐れていることは、自分たちへの関心が薄れることではない。被災地の人々が願うことは、もしもいつか、どこかのまちへ津波が襲いかかったとき、自分たちと同じ悲しみを味わってほしくない、あの辛さや苦しみに二度と遭ってほしくないということだ。

風化とは、再発防止の努力が薄れてしまうことだ。「忘れない」ではなく「忘れさせないという文化」を創っていくこと。それが伝承である。

子どもたちには、自分たちが津波の惨禍から立ち上がって生きてきたことを、胸を張って次代へ伝えてほしい。さらに次代へとつなぎ続けていくことで、同じ悲しみが繰り返されることのないように願うのである。

岩船 敏行（いわふね としゆき）さん

元宮古市立山口小学校校長。退職後は山田町教育長に就任し、2012年に退任

佐賀 敏子（さが としこ）さん

2010年～2014年、山田南小学校校長。盛岡市立杜陵小学校校長を退職後、盛岡市教育委員会に社会教育指導員として勤務（～2020年3月）

大久保 裕明（おおくぼ ひろあき）さん

発災時は大沢小学校校長。退職後は陸前高田市立博物館長を経て2019年同市教育長に就任

鉄路のチカラ

再びつながった三陸の鉄路
みんなのチカラで走る
情熱のマイレール

大津波で寸断されたJR山田線。廃線かとも噂されたが、復活を願う熱意は人びとをつなげ、その鉄路は三陸鉄道リアス線として復活した。路線名は変わろうとも、これからも旅人の、そしてみんなの思いを乗せて、列車は今日も三陸の海へ汽笛を響かせて走る。

2019年3月26日、織笠駅に到着した三陸鉄道

クローズアップ
山田人 ②
Close-up YAMADA-JIN

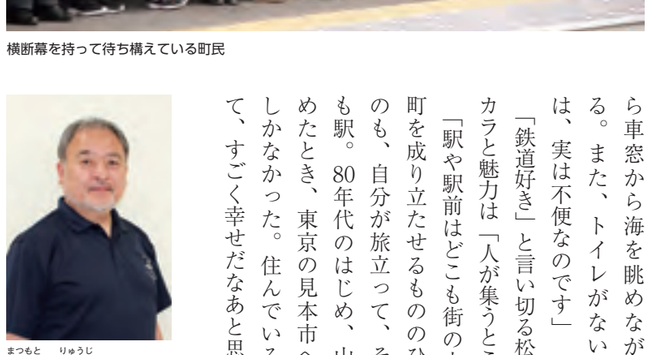
8年ぶりの鉄路再開

平成31年（2019）3月23日、震災以降不通となっていた山田町の鉄道路線が、8年ぶりに運行を再開した。

鉄道事業者は「JR東日本」から「三陸鉄道」へ、そして路線名も「JR山田線」から「三陸鉄道リアス線」へと変わり、車両も、白色にライムグリーンのJR東日本カラーから、青・赤・白の三陸鉄道カラーの車両となった。

山田の海と山に警笛のこだまが戻ってきた。町民たちが待ちに待った運行再開の当日、午後は雪が降る悪天候ではあったが、鉄道沿線の各駅では開通記念イベントが開催された。陸中山田駅前の広場では、山田町の「ふるさと大使」であるSKE48（当時）の松村香織（まつむらかおり）さんをはじめAKB48、HKT48のメンバーら7人による音楽ステージのほか、沿線では町民たちが大漁旗を振って開通を祝った。

かつてのオランダとの縁にちなんで風車をモチーフにした陸中山田駅に、釜石駅から発車した4両編成の記念列車が到着したとき、乗り込んでいた佐藤信逸町長は、多くの人たちが手を振って迎える姿を見て「見てください。こんなに多くの人が…」と、車内にいた関係者に胸を張った。町長自身も後日「鼻が高かった」と述懐している。



横断幕を持って待ち構えている町民

鉄道はまちを成り立たせる

山田町にもう一度列車を走らせようと、奔走した山田人がいる。

「記念列車が走ってきたとき『震災前の景色が帰ってきた』と思いました。歓迎のシーンの盛り上がりも、警笛の音も、踏み切りのカンカンという音も懐かしく…。うなりを上げるディーゼルエンジンの音に大きなチカラを感じました」

そう話すのは、陸中山田駅の近くで文房具店を営む松本龍児（まつもとりゅうじ）さんだ。

「大きな津波被害を受けたJR山田線は廃線の噂もありました。町の人たちの間からも『もう復活しないだろう』という声も。でも、鉄道がなくなることは、人の動きを大きく変えてしまう。鉄道は、山田町に必要なものなのです」

運休期間は代行バスもあった。しかし通学で宮古市や釜石市へ向かう高校生の中には積み残される子もいた。観光客からも不便がられた。

「列車なら車内で勉強もしやすい。旅行者なら車窓から海を眺めながら駅弁も広げられる。また、トイレがないバスはお年寄りには、実は不便なのです」

「鉄道好き」と言い切る松本さんは、鉄道のチカラと魅力は「人が集うところ」だと語る。

「駅や駅前はどこも街の中心です。鉄道は、町を成り立たせるもののひとつ。旅人が来るのも、自分が旅立って、そして帰ってくるのも駅。80年代のはじめ、山田の街で商売を始めたとき、東京の見本市へ向かうときも列車しかなかった。住んでいる町に鉄道があるって、すごく幸せだなあと思っていました」

松本 龍児（まつもとりゅうじ）さん

陸中山田駅前で文房具店経営。「地方ローカル線を守る市町民の会」の事務局長を務め鉄道の利用促進策を推進する

リアス線誕生記念に集まった町民の方々

子どもたちをはじめとした歓迎のイベント

▼バスではない 鉄路での復旧を熱望

旧国鉄山田線は、大正年間、盛岡から山田町を目指して建設が始められた。

大正12年（１９２３）、まず盛岡・上米内間が開業。順次延伸開業し、昭和９年（１９３４）には宮古まで、そして翌年・昭和10年（１９３５）には山田まで開通した。

釜石までの延伸は、昭和14年（１９３９）。昭和25年（１９５０）の釜石線（花巻・釜石間）全通よりも15年も早い。

しかし、山田町に鉄路の響きが伝わって76年目の平成23年（２０１１）、東日本大震災による大津波は、山田線の宮古・釜石間のレールを数カ所にわたって寸断した。

同区間55・４キロメートルのうち21・７キロメートルが浸水。線路の10％、13駅中、陸中山田、織笠など４駅のほか、第１・第２織笠川橋梁など橋梁７カ所、盛り土10カ所が破壊された。おりしも平成22年（２０１０）、岩泉線の土砂崩れ脱線事故が発生。赤字路線でもあった岩泉線は「復旧断念か」と、しきりに噂されていた（平成26年＝２０１４年廃止）。

山田線もまたＪＲ東日本管内では屈指の赤字路線だった。復旧しても利用者増は見込めない。ＪＲ側には、鉄路での復旧に対してためいがあった。

当初、ＪＲ側は「バス高速輸送システム（ＢＲＴ）での仮復旧」を繰り返し提案した。ＢＲＴは、バス専用道路の整備により鉄道並みの定時制確保や、鉄道より低コストであることが強みで、停車駅や運行本数を増やすことも容易だ。

しかし、宮古～釜石間は、路線バスがすでに１日11往復走っていた。沿線の宮古、釜石、山田、大槌の４市町は「あくまで鉄道による復旧」を要望した。

「ＢＲＴになったら鉄道はそのまま廃止される」――。危機感を抱いた松本さんは、山田線沿線の４市町の有志で「地方ローカル線を守る会」を立ち上げ「あくまでもＪＲの鉄道での復旧を」と訴えた。熱意は行政にも伝わり、平成24年（２０１２）10月には、釜石市が主催者となって「ＪＲ山田線の早期復旧を求める会」というフォーラムも開催された。

「山田線が消えることは、南北の三陸鉄道沿線の人にも申し訳ないな、と。やはり三陸は一本のレールで結ばれているべきと思いました」

「地方ローカル線を守る会」は、２カ月に一度、情報交換を行い、その間、行政との連絡、現状の把握、また住民の声を集めたり、４市町ごとの会で住民アンケートを行うなどの活動を続けた。

「三陸地方の鉄路を守りたい」――その思いがつながれていった。

▼三陸鉄道への移管決定

平成26年（２０１４）１月31日、「第７回山田線復興調整会議」の席上、ＪＲ側は、２１０億円と試算された復旧費用のうち、線路や設備などの原状回復に伴う１４０億円を自社で負担するとし（残り70億円は公的資金を活用して自治体などが負担）、当区間の運行事業を三陸鉄道に、線路などの鉄道施設を三陸鉄道と沿線４市町にそれぞれ無償で譲渡、経営移管する案を示した。

ＪＲ側は、三鉄への移譲について「山田線は昭和62年（１９８７）のＪＲ東日本発足後から震災前までに輸送人員が６割減っている。三陸鉄道の一体運営により利用促進につながる」と説明した。

しかし「赤字路線の山田線を引き継ぐことは、新たな財政負担を抱えることになる」と慎重な態度をとった。

そして同年11月25日、盛岡市で開いた首長会議において、県は沿岸12市町村長らに対して「①一時金を上積みして30億円を負担　②車両の無償譲渡　③軌道強化（被災を免れた約46㎞の区間についてもコンクリート製枕木や三鉄同様の太い高規格レールへの交換、橋の塗装、トンネル修繕など）　④検修庫・施設管理拠点の整備　⑤人的支援　⑥観光客誘致などでの協力」などの提案がＪＲ側からあったことを報告した。

これを受けて、12月24日、達増拓也岩手県知事、沿岸12市町村長、望月正彦三陸鉄道社長（当時）らは盛岡市で会議を行い、移管の受け入れについて合意（移管協力金30億円の使途については継続協議）。12月26日、達増知事と山本正徳宮古市長は、都内で冨田哲郎ＪＲ東日本社長（当時）と会談し、上記案を受け入れる方針を伝えた。

「鉄路はつながった。正直ほっとしました」と松本さん。

「でも、同時に、住民たちが利用しなければ何のための復旧だったのかと言われる。鉄路を残そうと言い続けてきたからこそ、これからの利用促進についても考えていかなければ……。そう思いはじめていました」

2014年4月19日　「三陸沿岸を鉄路でつなぐ市民の集い」で発表する松本さん

2013年11月9日　宮古市で開かれたシンポジウム「みんなで考えるJR山田線の復旧」

青・赤・白の三色のラインが映えるリアス線三陸鉄道

山田湾をバックに走る JR 山田線時代の車両

こたつ列車などさまざまな企画列車も走る

観光客や学生へ向けた震災学習列車

▼三陸を貫く「マイレール意識」

「山田線がリアス線として復活できたのは、住民の皆さんの熱意があったからこそです」と語るのは、三陸鉄道の中村一郎（なかむらいちろう）社長。

「三鉄は昭和59年（1984）の開業以来、地域の皆さんの『マイレール意識』に支えられてきました。今では三陸沿岸道路も伸び、自家用車で移動される方も多い。でも『三鉄に乗りたい』という方も多いのです。三鉄が走る風景が三陸という地域の魅力だと言ってくださる方もいらっしゃいます」

今回の経営移管に伴い、山田線の宮古・釜石間は、それまでの三陸鉄道「南リアス線」「北リアス線」と統合。「三陸鉄道リアス線」として、163キロメートルを一貫運行する日本最長の第三セクター鉄道となった。

「車両基地も宮古に集約できて一元的な管理が可能になるなどのメリットもあります。一方でコストが増えた、というのも正直なところではありますが」

東日本大震災では、三鉄も甚大な被害を受けた。駅舎やレール、路盤などが各所で流失し、車両も3両が使用不能となった。しかし、地震発生からわずか5日後の3月16日には、久慈・陸中野田間で運行を再開し、また、被害が少なかった他区間でも3月末までには運転を再開。鉄路の響きは被災地を大きく勇気づけた。平成26年（2014）4月6日には全線が復旧。三陸地方は沸いた。

三鉄では「震災学習列車」という企画列車も運行している。車内には被災した地域を紹介するパネルが掲示され、そして車窓からは復興が続く「今の三陸」が見られる。

「三陸地方を貫く鉄路は、多くの方の思いや応援があって残された鉄道なのです。そのことを知っていただけたらと思います。鉄道のことも、津波への教訓も、命を守るためにはどう行動すればいいのかも伝えていく。それが私たちの恩返しです」と中村社長。

そして、これからの三鉄をもっと盛り上げたい――という思いは松本さんも同じだ。

「三鉄は、企画の持ち込みにも柔軟に対応してくれるし、フットワークも軽い（笑）。『一緒につくって、一緒に走る』仲間でもあります」（松本さん）

▼情熱と笑顔を乗せて走る

山田町をはじめ、沿線12市町村では今、多くの名物や観光プラン、アクティビティなどが創造されている。自治体もこれをバックアップし、住民たちも駅舎内外の清掃や花の植栽といった周辺の美化活動を行っている。

「乗って残そう」「私たちの三鉄」「地域の足」「より便利に楽しく」「山田へ、三陸へおでんせ」――住民たちと行政と鉄道会社の、地域を盛り上げていこうとするたくさんの情熱と笑顔が物語を創り出していく。それこそが「鉄路のチカラ」だ。

三鉄の車両を彩る「青・赤・白」の三色は、それぞれ「三陸の海」「鉄道に対する情熱」「誠実」を表す。

復興のシンボルであるとともに、これからも海の魅力や地域の情熱をも伝えていく力強い鉄路なのだ。

たくさんの大漁旗に迎え入れられる三陸鉄道（2019年3月23日／織笠駅）

中村（なかむら） 一郎（いちろう）さん

三陸鉄道株式会社代表取締役社長。沿岸広域振興局長、復興局長などを歴任し2016年より現職

令和元年（2019）10月に襲来した「台風19号」は、その半年前に全線開通したばかりのリアス線に再び大きな傷を残し、路線は約半年間の運休を強いられた。しかし令和2年（2020）3月、リアス線は復旧工事を完了。鉄路の響きがもう一度、三陸に戻ってきた

斉藤さんが役場屋上から撮影した写真（2012年4月15日撮影）

クローズアップ 山田人 ③
Close-up YAMADA-JIN

定点観測写真

「まちはこれからどう変わる？」淡々と、しかし熱く見つめ続けた若き山田人のふるさとへの視線

山田の街に復興の槌音が響き始めたころ、役場の屋上から、ふるさとの姿を見つめる高校生の視線があった。仕事でも義務でもなく淡々と捉え続けた画像。そしてそこには誰もがもう一度立ち上がろうとしていた、あの日々からの記憶が焼き付けられている。

「撮っておこうかな」という軽い気持ちで

「明治三陸地震津波（明治29年6月15日）」「昭和三陸地震津波（昭和8年3月3日）」。さらにさかのぼれば、三陸地方は数百年から数十年ごとに大津波に襲われてきた。

その惨禍は古くは絵にも残され、明治以降は写真にも撮影された。しかし、現代ほど写真が身近なメディアでなかった時代のこと。多くは新聞記者やプロカメラマンが撮影したものだ。

平成23年（2011）3月11日。またしても大津波が三陸地方を襲った。昔と違い、デジタルカメラやカメラ付きの携帯電話が普及していた。多くの人が、たくさんの写真を撮り、津波が押し寄せる瞬間だけでも膨大なデータが残された。

「見るのは辛い」という声もあった。しかし「ふるさとが、これからどう変わって行くのか。その様子を残したい」という人も多かった。

発災当時、高校2年生だった斉藤潤（さいとうじゅん）さんもその一人だ。翌年、大学進学のため山田町を離れるまでの1年間、父親に買ってもらったカメラで、復旧から復興へと歩み出した街の姿を撮影し続けた。

「なにか切実な思いがあったわけではありません。山田の街がこれからどう変わって行くのか。撮っておこうかな、という軽い気持ちでした」

自宅は大沢地区の、海から１００ｍほどの場所にあった。津波が押し寄せる瞬間は避難した大沢小学校から見ていた。自宅が流されるところも見た。

撮り続けたから気付いたこともある

「その時、特別な感情はなく……。ただ、これからどうなるんだろうという気持ちでした」

避難生活は豊間根中学校で過ごした。眠れない日が続いた。そして4月初め、友人と山田の街まで「自転車で見に来た」。

「街にはごみの臭いや火事のあとの焦げ臭さが立ち込めていました。なんてひどいことになったんだろうと。でも、こんなに変わってしまった街が、このあとどんなふうに復旧して行くのかなと思ったとき、その様子を残しておきたいと思ったのです」

斉藤さんの写真には、例えばメディアの関係者が「何かへの掲載」を目的として撮影した写真とは違う、住民が撮影した淡々とした視線がある。気負いなくふるさとの様子を冷静に捉えながら変化を見逃したくないという愛情が浮かんでくる。

5月の連休を過ぎたころから、大沢の自宅跡地などいろいろな場所から撮影を開始し、やがて「見晴らしがいい」ということで山田町役場の屋上からの定点観測が恒例となった。

「家族と一緒に役場近くの被災しなかった家を借りて住んでいました。撮影は高校の行き帰り。月に一度ぐらいのペース。撮る日は毎月11日と決めていました」

続けるうちに友だちも付き合ってくれるようになった。役場職員とも顔見知りになった。

がれきがだんだん片づけられ、ダンプカーの往来や重機も増えていく街。「建物が消えた山田の街はこんなに小さな狭い街だったんだな」と思った。

「自分が撮り続けたのは1年間でした。正直、あまり変わらないなと思ってたけど、それでも小さな変化が見えると、撮り続けてよかったなと。続けていたから気付くこともいろいろありました」

これからも三陸の海辺で暮らしたい

翌春、大学進学のために山田を離れるとき、入れ替わるように帰郷してきた姉に続きを依頼した。

「軽い気持ちで続けてねと。でも、姉は早々に止めちゃったみたいです」

大学を卒業後は普代村役場の職員となった。

「山田町役場も考えたのですが、姉が先に勤めていたので何となく避けました。でも〝沿岸のまち〟で仕事がしたいと思っていました」

10年が過ぎて思うことは「駅の周辺に建物も家も増え、にぎわいが戻ってきた。震災前の街も好きでしたが、今の街も好きです。10年前の写真と見比べると、やっぱりすごく変わっていて、撮っていてよかったって思えます。自分は、これからもずっと三陸で生きていく。海のそばにいたいと思う。やっぱり海が大好きなんです」

人が生まれて初めて吸いこんだ空気は、そのまま吐き出されずに胸の奥底にとどまり、その人の生き方にずっと影響を与え続けるという。

山田湾の潮の香を吸い、波音を聞いて育った山田人・斉藤さん。海の風は、ずっと斉藤さんのそばにある。変わるものと変わらないものを知る視線が捉えた画像は、未来への語り部として残されていくだろう。

斉藤（さいとう） 潤（じゅん）さん

山田町生まれ。高校生のとき大沢地区の自宅で震災に遭遇。大学卒業後、普代村役場に勤務

見晴らしがいい役場屋上から撮影

宮古消防署に勤務する山崎さん

クローズアップ
山田人 ④
Close-up YAMADA-JIN

消防士を志して
強くやさしい勇敢な心が誰かの命を守り、支える大きな使命と責任を担う消防士

「危険でも誰かがやらなければいけない」――それが消防士の仕事だ。東日本大震災では助けられた側から、今度は誰かを助ける側へ。危険な現場へ真っ先に駆けつける、強くやさしく、たくましい心で、消防士・山崎竜輔（やまざきりゅうすけ）さんは今日も訓練を続けている。

志望のきっかけは担任の先生

平成30年（2018）4月1日時点では、全国に16万4973人の消防職員がいる。

「消防士」は、火災はもちろん、台風や洪水の危機が迫ったとき、あるいは津波警報が発令され、誰もが海に背を向けて逃げようとしているときでも、人々の動きとは逆に危機が迫る方向へ真っ先に飛び出して行き、避難を助け、避難行動のしんがりを務める。

消防士の業務は消防士にしかできない。任務は特殊であり、危険だ。担っている責任も重く、使命も大きい。しかし、大規模な自然災害が頻発する昨今、消防士の活躍がクローズアップされる機会も増え、消防士を目指そうという若者も多いという。

宮古地区広域行政組合宮古消防署に勤務する山崎竜輔さんは、大浦小学校6年生のとき、東日本大震災に遭遇した。小谷鳥地区にあった自宅は全壊したという。

避難所生活を経て大浦地区の仮設住宅に入居。そして山田中学校から宮古商業高校へ進学。高2の途中からは長崎地区の新しい家から通った。

「高校は会計科で、部活はバスケ部でした。部活を引退した高3の夏、進路を決めなきゃと思っていたとき、先生から勧められたのが消防士でした。理由ですか？　たぶん体力がある、とかじゃないかと」

支える側の人間になりたいと思った

それまでは学んだ勉強に関連する職業へ進もう、と漠然と考えていたが「先生の話を聞いてそれもいいなと思ったのです。体力にも自信もありました」

そのとき山崎さんの脳裏には、避難所生活をしていた時期の映像がよみがえった。

「あるとき、避難所の裏山で火事があったとき、消防団の人が『よし、消してくっから』と出動する姿を見て単純にカッコいいと思いました」

また「避難所では、地区の皆さんにとてもよくしてもらい、多くの人に支えられていました。だから自分もそんなふうに支える側になれたらって思ったんです」

部活引退後は毎日3時間、週末は6時間以上勉強し、40名ほど受験した中から2次試験も突破して7名の合格者に名を連ねた。

高校卒業後は、矢巾町の消防学校で半年間、50名の同期生とともに基礎を学び、筋トレなどもみっちり鍛えられた。

そして平成29年（2017）10月1日、山田消防署に配属となった。

1年目の思い出を訊ねると「あるとき、心肺停止状態の方に心臓マッサージをしたのですが、怖くて力を入れられませんでした。先輩が代わってくれたのですが、自分の身体がこわばって動けなくなったことは、すごく悔しい記憶として残っています」

常に命を守る行動を　それは消防士も同じ

令和元年（2019）には、台風19号の被害が発生し、署員は全員、田の浜地区で要救助者の救助に当たった。

「大雨の中での活動。がんばりどころだと思いました。『ありがとう』って言ってもらえた時は、自分がうれしいというより、相手の方が、そういう言葉が言える気持ちになってもらえたことの方がうれしかったです」

消防士になったとき、両親も「よかったな」と喜んでくれた。妹と弟は消防士の絵を描いてくれたという。

誰かを守るという立場になった山崎さん。その勇敢な心は、家族も頼もしく誇らしいと感じたはずだ。

消防士魂を、山崎さんはこう言う。

「辛くてもやらなければならない業務。チーム全体で解決し、全員が無事に帰ってくることが何より大事です。また、ときには見たくないものも見てしまいますし、訓練も楽ではありません。でも、誰かを助ける、支えるという立場になって初めて得る達成感もあります」

消防士は、事故や火災などの現場へ真っ先に駆けつけ、まさに今、苦しんでいる人、悲しんでいる人たちと最初に出会わなければいけない仕事でもある。

「災害が発生したとき、誰かが亡くなってしまうようなことは絶対にあってはなりません。命を守る行動を常に考えておかなければ」と山崎さん。

消防士は、自らの命を懸けて誰かの命を救う。しかし、決してヒーローではない。消防士にも家族がいる。だから無事に帰らなければならない。

山崎さんたち消防士の出番がない、ということが、本当はいちばんなのだ。

山崎（やまざき）　竜輔（りゅうすけ）さん

宮古商業高校を卒業後、岩手県消防学校を経て 2020 年現在は宮古消防署に勤務

卒業式に父親と

鯨と海の科学館
災害の波を二度もくぐり抜けた山田の鯨
雄々しき〝海の王者〟とともに
まちも人も海の未来を目指す

大津波に襲われ6年余の閉館。そして再開。さらに台風による2度目の被災からもよみがえった「町立鯨と海の科学館」は、山田町復興のシンボルのひとつだ。大津波そして台風をも泳ぎ切ったマッコウクジラの骨格標本が、負けない山田を見守り続けている。

津波の傷痕も消え、公園も再整備された「鯨と海の科学館」（2020年9月）

クローズアップ
山田人 ⑤
Close-up YAMADA-JIN

「鯨」を通じて「海」を学ぶ科学館

「山田町立鯨と海の科学館」（以下、鯨館）は、平成4年（1992）、釜石市を主会場として開催された「三陸海の博覧会」のパビリオンのひとつとしてオープンした。鯨館は、かつて大沢地区に捕鯨基地があり、山田町の沖合が捕鯨の好漁場であったことに由来する。

鯨をメインテーマとする科学館は全国的にも多くない。ここでは、鯨の生態や種類についての詳しい紹介のほか、捕鯨をはじめ町の漁業の歴史と技術、海の不思議や海と人との関わりについて学ぶことができる。全国的にも注目度は高い。

山田町で捕鯨の対象となっていたのは、イワシクジラ、ナガスクジラ、そしてマッコウクジラなどだ。現在、館内には鯨館のシンボルとしてマッコウクジラの骨格標本が展示されているが、これは昭和62年（1987）、商業捕鯨が世界的に禁止となる前年、山田船籍の捕鯨船が釜石沖で捕らえたものだ。

全長は17・6メートル。マッコウクジラの骨格標本としては世界最大級とも言われている。展示に際しては前須賀海岸の砂浜に約3年間埋めて脂分を取り除き、掘り起こしは町の子ども

発災直後の「鯨と海の科学館」周辺。左手は山田湾と浦の浜

や大人たち約200人と一緒に行なった。

「昔、山田町では捕鯨が行われていたんだよ、鯨を捕らえて海の恩恵を受けてきたんだよ、という町の歴史を子どもたちに伝えて行きたい。ここには町の歴史が詰まっています。海の素晴らしさや海との関わりを、鯨という生物を通じて知ってほしい。だから当館は『鯨』と『海』の科学館なのです」と、館長の湊敏（みなとさとし）さんは、天井からつり下げられた骨格標本を誇らしげに見上げる。

津波を泳いだマッコウクジラに励まされて

東日本大震災の大津波は、はじめ船越湾側から、次いで山田湾側から押し寄せて合流し、船越半島を孤立させる「水合（みずあい）」（平野部が左右から

津波のあとゴミが付着したマッコウクジラの骨格標本。津波を泳ぎ切った雄々しい姿にスタッフや関係者は勇気づけられた

津波で挟撃をうけて水中に没すること）」と呼ばれる現象が起きた。船越半島の付け根に建つ鯨館は、両側から襲ってきた津波に飲み込まれた。

「流されてきた船や家屋などもぶつかり、一階の入り口は破壊され、津波は館内を通り抜けていきました。建物自体は円筒形だったのが幸いしたのか構造的なダメージはほとんどなく、スタッフも全員無事でした。ただ、館内には泥がうずたかくたまり、散乱した展示物が泥の下に埋まってしまいました」

湊館長は「地獄絵図のようだった。これで終わったと思った」と述懐（じゅっかい）する。それでも、館内に立ち入った湊館長の目に飛び込んできたのは、泥や海藻などをかぶりながらも、ワイヤーにつるされたまま宙を泳ぐマッコウクジラの骨格標本だった。

「隣にあったミンククジラの標本も無事でした。あの津波を泳ぎ切ったんだなって思うと胸がいっぱいになりました」

建物と鯨は残った。特に骨格標本は学術的に貴重な資料でもある。「復旧は無理だろう」と考えていた町の関係者たちも骨格標本を見て励まされた。

「これは大切な町の財産だ」「山田の歴史を残さなければ」――。

町は施設の復旧を決断する。

鯨館スタッフとボランティア学生の協働で作業が進められた

泥土が残る館内に散らばった資料を回収

救出された資料の安定化処理作業

資料は仮設収蔵庫でひとつずつ水洗いし、脱塩する

▼たくさんのつながりに支えられて再開

再開を目指してスタッフたちの復旧作業が始まった。それは、まさに闘いだった。

館内に流入した泥はひざ丈ほどあり、さまざまな破片やごみも大小問わず混ざっていた。それらを全て片付けながら、展示物を探し出し、救い出していった。

「入り口から少しずつ片づけていきましたが、もう、気が遠くなるような作業でした。資料らしいものは片寄せ、泥を洗い、資料台帳と突き合せます。単に撤去だけだったら、こんな苦労はなかったはず」

支援や応援も全国から寄せられた。回収された資料の保存や洗浄、整理といった修復を支援してくれた機関や団体は、国立科学博物館、岩手県立博物館、文化財レスキュー、東京海洋大学、筑波大学、弘前大学、神奈川大学などで、館内で救援作業に当たったボランティアは延べ800余名を数えた。

「多い日には50人以上のボランティアが黙々と作業してくださいました。そして5カ月ほどすると、目に見えるがれきはほぼ片付けられました」

東京海洋大学は、鯨館の再開に向けた資料の再展示の監修も引き受けてくれた。

「学生さんたちが『勉強になりました』と言ってくださったのがうれしかったです。再開するまで6年4カ月かかりましたが、でもこれは私たちにとっても勉強の時間でした。この作業があって資料の一つひとつがとても大切なものになり、解説の仕方も上達したかもしれません。人と人とのつながりもうれしく温かかった。震災なんて、もちろんなければよかった出来事でしたが、でも、震災がなければできなかった体験もたくさんあります」

▼台風に襲われて二度目の休館

平成29年（２０１７）７月15日、鯨館は２３１８日ぶりに再開した。湊館長は「10年はかかる」と予想していたという。

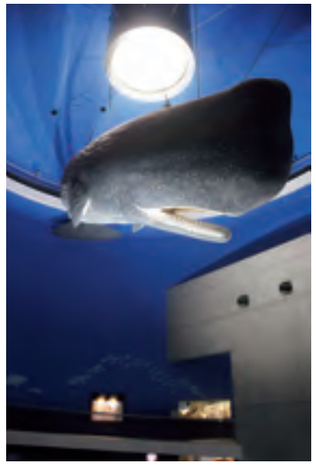
「いろんな人たちの思いが重なった再開であり再会。でも肩の力を抜いて、町の人たちみんなで一緒に楽しみたい、みんなで喜びたいと思いました」

開館を待ちわびた子どもたちや、前須賀海岸で鯨の骨の掘り起こしを手伝った、かつて子どもだった40代の方々も大勢来館した。

そして、掘り起こしの様子を写した写真やビデオを見ながら「これがパパだよ。みんなで掘ったんだ」と子どもたちに誇らしげに教えたりする姿もあった。

ところが、令和元年（２０１９）10月13日、またしても自然災害が鯨館を襲った。

前日深夜、三陸沿岸に接近した台風19号は町内に大雨を降らせ、鯨館裏手の森から流れ来る沢水を氾濫させた。裏の三陸鉄道の路盤は崩落。あふれた泥水が鯨館の扉の隙間から館内に



館内でひときわ目を引くマッコウクジラの模型

平成 29 年（2017）７月 15 日、津波襲来の日から 2318 日ぶりに再開した日の再開記念式典

流入し、一階部分を再び泥土で埋めてしまった。

「そこは深海の砂地をイメージしたフロアでした。掃除では追い付かず、結局、床のカーペットは交換しました。当初は令和２年（２０２０）３月１日に一部開館する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響もありしたのは、台風から９カ月後の７月15日でした」

▼「王者」が棲む山田の海を知ってほしい

マッコウクジラは海洋系生物の頂点に君臨するとも言われるほど強く大きな生き物だ。サメやトドやシロクマなども襲う〝海のギャング・シャチ〟さえ寄せ付けない。

津波に襲われても、台風に見舞われても立ち上がってきた「鯨と海の科学館」。スタッフたちの「負けない気持ち」の真ん中には、いつもマッコウクジラの骨格標本があった。

「約８メートルの津波に襲われても、マッコウクジラの骨格標本は残りました。山田町の復興のシンボルのひとつです。負けない。諦めない。そんな思いと姿を皆さんに伝えていくのも恩返しです」と湊館長。

今、鯨館では、子どもたち向けに、海や磯を体験してもらう学習プログラムも企画中だ。

「防潮堤の工事が進み、海が見える場所も減りました。でも、山田はやっぱり海の町。海での生き方、海辺での暮らし方、海との関わりを、いろんな体験を通じて伝えたい」

磯には小さな生き物たちもたくさんいる。見て、触れて、観察力と考える力も身につけてほしいという。

「私たちは、次の世代へ渡していく海を守らなければいけません。なぜ守らなければいけないのか？　そういったことも一緒に考えて行きたいと思っています」

鯨を捕まえることはもうなくなったけれど、船越半島の沖合には、今も「海の王者」が棲んでいる。「鯨と海の科学館」は、そんな雄大な海のそばに、これからも暮らしていく「山田人らしさ」を教え育んでくれる施設でもある。

湊 敏（みなと さとし）さん

山田町立鯨と海の科学館長。織笠漁協協同組合参事、山田町観光協会事務局長などを経て、2011 年より現職

クローズアップ
山田人 ⑥
Close-up YAMADA-JIN

役場職員の十年
座談会
《復興とともに歩んできた〝新人職員〟の十年》

東日本大震災が発生した平成23年（2011）春、山田町役場には9人の新人職員が入庁しました。大津波の直後のこと。町民たちは悲嘆と混乱の中にあり、先輩職員たちは震災対応に追われていました。そうした中で行政職員となった〝新人〟たちは、何を思い、どう行動してきたのでしょうか。復旧から再生へ。町の復興とともに歩んできた若手職員に、山田町の十年と、そして願う山田町のこれからについて語ってもらいました。

開催日　令和2年6月29日

出席者
阿部（あべ） 栄美（ひろみ）（健康福祉課）
尾形（おがた） 晶子（しょうこ）（税務課）
甲斐谷（かいたに） 和樹（かずき）（企画財政課）
菅野（かんの） 遼（りょう）（国保介護課）
佐藤（さとう） 俊輔（しゅんすけ）（生涯学習課）
齋藤（さいとう） 絢介（けんすけ）（建設課）
鈴木（すずき） 卓郎（たくろう）（水産商工課）
芳賀（はが） 裕将（ひろゆき）（上下水道課）
菅野（かんの） 麗奈（れいな）（町民課 ※後日取材）
※（　）内は辞令交付後の最初の配属先

聞き手：石田（いしだ） 治（おさむ）（フリーライター）

――皆さんは、東日本大震災が発災した年の春、町の震災対応が続く真っ最中に役場職員として入庁されました。4月からの新しい職場での活動や活躍を期しておられたはず。しかし、今日明日のことを思うだけで精いっぱいという方が町にはたくさんいらっしゃいました。

4月1日よりも前に役場へ集合し、支援物資の仕分けなどを行われたことが役場職員としての最初の仕事と伺っています。そこで感じられたことなどをお聞かせください。

菅野　遼さん

志望の動機
山田町は母のふるさと。幼いころから親しみがあったし、山田町に関わる仕事がしたいと思った

菅野　自分は釜石の自宅にいました。釜石も津波被害はひどく、国道はじめ道は寸断され、どこにも行けない、動けない状態でした。一週間ぐらいして、知人に「道が通じたぞ」と言われ、その人の車で山田へ連れてきてもらいました。

震災2週間後の町役場周辺

芳賀　裕将さん

志望の動機
地域の皆さんの役に立てる仕事に就きたいと思った

芳賀　大槌町の臨時職員でした。発災直後、吉里吉里中学校には、山火事のためにヘリで移動した田の浜地区の方々が避難されていて、数日後、山田町の沼崎町長（当時）がその方々を迎えに来られたとき「4月から入庁予定の芳賀です」とあいさつをしたら「じゃあ、明日から山田の役場に来てくれ」と。

佐藤　当時は青森県にいて、山田町への引っ越しもまだでしたし、交通機関がストップしていて身動きも取れない。10日ぐらい経ってから、役場職員だった親戚から「新人職員が集まっているぞ」と聞かされ、とりあえず着替えだけ持って、どうにかしたら駆けつけました。でも、仕事のことも、何をすればいいのかも分からず。ボランティアの方々に交じって5月中旬ごろまでは支援物資の仕分けや運搬をしていました。先輩の職員の方々がひどく疲れている様子が見えて、自分も早く戦力になりたい、そう思っていました。

町中央公民館に運び込まれる支援物資

佐藤　俊輔さん

志望の動機
平成の大合併で再編されていく地方のまちを見て、ふるさとである「山田」を残し、活気ある町にしたい

尾形　私はすでに臨時職員として役場にいました。4月以降は役場一階ロビーで「誰々さんはどこにいますか？」と安否確認を求めて来られる町民の方々の対応をしていました。当時はまだ電気もきていなくて、避難所から提出された名簿も手書きで未整理。お名前を探すのはたいへんでした。亡くなられた方のことをお伝えすることはつらかったです。でも、一方では再会にうれし泣きをされる方もいて、そういう時はこちらもうれしかったですね。

役場のロビーに張り出された親しい人の安否を尋ねる掲示板

尾形　晶子さん

志望の動機
臨時職員として勤務し、町の仕事に興味を持った。正職員として町政に深く関わっていきたい

――仕分け作業の際は、何をしましたか？

鈴木　物資はトラックで運ばれてきました。箱の表書きを頼りに、それらを担ぎ下ろしていました。

菅野　それを大まかに仕分けして、そのあと自衛隊の方が各避難所へ運んでいましたね。避難所からも必要なものについてリクエストが来ます。企画財政課が、その数を把握して仕分けしたり、また、食事などについては栄養士の方が避難所ごとに栄養計算をしていたようでした。

――先輩職員の懸命な様子を見て、感じられたことなどありますか？

鈴木　寝袋を持ち込んで庁舎内で寝泊まりされている先輩職員もたくさんいました。自分は自宅へ帰ることができたので、なんだか申し訳ないな、という気持ちもありました。

鈴木　卓郎さん

志望の動機
人のためになる仕事に就きたいと考えたため

――通常であれば4月1日に辞令交付式があったはずですが、この年はバラバラだったとうかがっています。

齋藤　交付式というか辞令書は、4月に町長室で受け取りました。全員だったかどうかは覚えていませんが、出席者は作業服姿でした。それぞれの配属が決まったのはゴールデンウイーク明けだったと思います。それまでは災害対策本部付けの新人職員ということで、物資の仕分けなどを行なっていたので配属先の業務内容などはまったく分からなかったです。そして町もたいへんな状況にあるのか分からずに不安でした。ちなみに最初の仕事は建設課での仮設住宅申し込みの受付でした。

発災からの出来事が時系列で書き記された町災害対策本部のホワイトボード

菅野　私の配属先の国保介護課では、被災した方が福祉サービスを受ける際の利用料を免除するとかそういう業務でした。施設の復旧などは、まだまだという段階でした。

甲斐谷　生まれた町のために働きたいという思いで入庁しましたが、震災からの復旧の中では、そういう気持ちを持つ余裕がなかったというか……。企画財政課で職員が使うパソコン管理が最初の仕事でした。町の人たちのためというか、庁内を向いた仕事でもありましたし。

甲斐谷　和樹さん

志望の動機
地元のために働きたいと思ったため

――この町は、これからどうなって行くのだろうか？　復旧、復興の行く末、未来などはどう思われていましたか？

阿部　未来のことなどは想像しづらい状況でした。現状を見て気持ちがいっぱいになって考える余裕なんてなかったです。今日、復興が進んだ様子を見て、こんな風に変わったんだなとは感じるところもありますが、あのころはまったく思いもしませんでした。

齋藤　絢介さん

志望の動機
生まれ育った地域の役に立つ仕事がしたい

上空から見た山田湾（震災から17日後の3月28日のもの）

――復旧が始まった、進んだかなと実感した瞬間ってありましたか？

菅野　仮設住宅ができて、避難所がだんだん解消されていったのが夏ごろでした。復旧が進んだというか、スタートラインに立てたかなという気持ちですね。少しずつ進んでいるのかなと。

――新人研修も、通常の年とは違っていたかと思いますが？

齋藤　通常であれば、庁舎内で半日ぐらいかけて、総務課長などが行政の仕事について話すのですが、当時はなかった。というよりも、できなかったというのが現状だったと思います。会議室なども災害対応のミーティングに使われていたり、物資もあちらこちらに積まれていましたし。

――研修の一環として自衛隊のヘリで上空から町の様子を視察したと伺っています。その時の感想をお聞かせください。

齋藤 町の上空を飛ぶこと自体、思ってもいなかったことですが、改めて見渡すと本当にひどいことが起きたんだなと。あるべき場所にあるべきものがない。言葉にならないというのはこういうことなんだと思いました。

甲斐谷 見慣れていたはずの街ががれきに埋もれてしまっていて、津波のすごさを知るのと同時に、この町の暮らしが奪われたということが、ほんとうに悔しかった。

佐藤 鯨と海の科学館の周辺に集められていた廃棄物や残骸のあまりの量に驚きました。また、印象的だったことは、ぼろぼろになってしまった町の景色とは裏腹に「海がきれいだな」と感じたことです。皮肉なものだなって思いました。

芳賀 自分も同じように、津波の悲惨さと、港町・山田の目の前に広がっている山田湾の美しさを同時に感じました。

――海が美しかった……。皆さん同じ日の飛行だったのでしょうか?

芳賀 たぶん6月ごろだったと記憶しています。皆、半袖の作業服を着ていたような。自分の部署のパソコンで復命書を書いたことを覚えていますので、5月以降であったことは確かです。

鈴木 自分はあまり覚えていません。それよりも、早く戻って仕事をしたいって思っていました。新人でしたし、目の前のやらなければいけないことは山積みでしたので、ヘリで飛んでいるなんてそんな悠長なことをというか、大変なことはもう分かってるというか。

菅野 自分は釜石市の出身なので、もともとそこに何があったのかなどは分からないで乗っていました。でも、あとで地図を見て、あったはずのものが消えていたり、小谷鳥地区の土地がえぐれたことを知り、ああ、やはり津波の威力はすごいものなのだと感じました。

阿部 海岸線や、ぐちゃぐちゃになってしまった堤防や岸壁などを上空から見て、復旧・復興ってどこまで本当にできるのかなと感じていたかもしれません。養殖いかだが消えてしまった海も、なんて殺風景なんだろうって感じました。

尾形 私の自宅は海からだいぶ離れていました。海は、役場の窓から毎日見慣れていたはずなのに、津波のあとの景色を改めて見たときは、海というものをなんだか認識しきれていなかったんだと感じました。小谷鳥地区の様子などは、やっぱり実際に行ってみないと分からない。津波で家が流されるなんて考えたことのない地区に住んでいた私にとって、空からの景色は想像を超えていました。

――海がきれいだったというお話もありました。津波被害は凄惨だったけれど、それでも「海の十和田湖」とも呼ばれる山田湾を抱いたこのまちの「良さ」のようなものを見つけられた、見てよかったと感じられたことはありますか?

鈴木 ヘリからの印象ではありませんが、養殖施設がなくなった海に、もう一度、養殖施設の黄色い浮き球が浮かび始めたときは、やっぱりきれいだなと思いました。秋から冬になりかけていたころかな? 海がきれいな季節でもあります。再び歩みはじめたという心強さも感じました。

――町の復興は、復興計画に沿って進められてきました。山田町の復興の手応えや印象はいかがでしょう?

芳賀 他の市町村の数字と見比べると、やや遅れているような印象は少しあります。でも、役場の部署は足並みがそろっていると思います。

郷土愛が爆発する秋の大祭「山田祭り」

花火大会

佐藤 用地課に配属になってからは被災者の方と直接やり取りする機会もありました。要望に応えきれないという歯がゆさも感じましたが、最善を目指してやってきたという自負はあります。

――うれしかったことなどはありますか?

甲斐谷 山田といえば秋祭りが大きなイベントです。県外からこのために帰って来られる方も多い。その祭りが復活したときは、復興のひとつの象徴に思えてうれしかったですね。

齋藤 震災の年だったか、次の年だったか、ライトアップニッポン実行委員会主催の花火大会を役場から見たことがあります。職員はみんな残業していたのですが、そのときばかりは少し手を休めて見ていました。すごくきれいだったことを覚えています。

鈴木 自分は、その花火大会の運営を手伝っていました。ステージではカラオケ大会も開かれたのですが、出る人が少なくて自分も歌いました。日常が少し戻ってきたかなという印象でした。歌った曲ですか? 確かAKB48だったような。

阿部 JR山田線が三陸鉄道として復活した日は駅にいました。みんなが大漁旗をたくさん振って一番列車を歓迎している様子を見たときは、やっぱり山田はすごいと感じました。お祭りもそうですが、何よりもまちの人たちが一生懸命頑張ってきたんだなと思って感激しました。うれしかったことは、もう……たくさんたくさんあり過ぎます。

菅野 仮設住宅担当の部署に配属された時期もあります。そのとき町内には仮設住宅が1940戸もあったのですが、27年度以降は宅地造成や災害公営住宅も完成し、入居者がどんどん退去されて行きました。そして学校の校庭にあった仮設住宅が撤去されて元のグラウンドに戻って、子どもたちが駆けまわっている様子を見たときは、ああ、復興が進んでいるんだなという思いを抱きました。

尾形 自分の中でも三陸鉄道と三陸沿岸道路の開通は大きな出来事です。私は2番目の配属先が町民課でした。住民票を山田に置いたまま他県や他市町へ避難されている方も多くいらっしゃいました。うれしかったことではないのですが、印象的だったのは、お子さんがお住まいの関東地方へ避難されていた高齢女性の方が「山田はふるさと。人生の最後はやっぱり山田へ戻りたい。でも、関東で暮らすことになった」とお話をされたときのことです。伺っていた私も、寂しさ、悔し

さ、やるせなさが入り交じったような気持ちでした。また、復興十年を目前にして台風19号に襲われたことも忘れられない出来事です。津波と台風と、どちらも被災されてしまった方もいらっしゃるので、そういう意味では苦しい思い出です。

――感謝を伝えたい方はいらっしゃいますか？

佐藤　それはもうたくさんの方に伝えたいです。応援職員として山田町に派遣されていた方で、地元に帰られた後も、ふるさと納税をしてくださっている方もたくさんおられます。山田を忘れないでいてくれるということに感謝ですし、うれしいです。

三鉄開通の日。ホームは多くの人であふれ、一番列車を出迎えた

鈴木　九州のご出身で、派遣で山田町に来られた方の中に、町の職員になられた方もいます。

齋藤　ボランティアでやってきて、その後、山田町の職員になったという埼玉県の方もいます。また山田町は静岡県からたくさんの応援をいただいたのですが、静岡市役所には、山田に派遣で来られた方々で結成された「山田会」という集いがあります。

沿岸の市町村を結ぶ三沿道の開通効果の大きさは計り知れない

――東日本大震災から10年が経とうとしています。これからの山田町をこうしていきたい、あるいは山田のこんな魅力を発信したい、子どもたちに伝えたいことなど「未来」についてお話しください。

齋藤　波静かな山田湾に浮かぶオランダ島は魅力のひとつだと思います。海水浴もできる無人島を抱えている自治体はなかなかありません。養殖いかだが浮かぶ湾の風景も、海産物なども、もっともっとPRして、より注目度の高い町にしていけたらと思います。

甲斐谷　山田町だけのことではありませんが、少子高齢化が進む中、子どもたちへの医療費無償化などは実現できているので、高齢者に対する行政サービスも、もっと充実させていけたら、もっともっといい町になるって思います。

佐藤　町は、全国からたくさんのご支援や応援を頂きました。それに対する恩返しとして、復興を遂げた姿を発信するとともに、頂いた支援のことも後世に伝えていきたいと思っています。

芳賀　人口が減少していることは大きな課題です。復興計画で目指してきたコンパクトなまちづくりと子育てしやすい町ということをしっかり実現したいと思います。また三陸鉄道や三陸沿岸道路でつながった三陸地方全体で、交流人口や関係人口を呼び込めるようなプロモーション活動などもできたらいいなと思います。

鈴木　特別なことではありませんが、子どもたちが「山田町がふるさとでよかった」と思えるまちにしていきたいです。海や山や自然はいっぱいあるし、ここでしか見られないもの、できないことをもっと教えてあげたいと思っています。また漁業の話をすれば後継者不足という課題もあります。でも、将来、水産関係の仕事に従事するしないに関わらず、いつも心に海を感じていてほしいです。

菅野　人口減少は、なかなか止めがたいことです。若い人が利便性やにぎわいを求めて都会へ出て行ってしまうのも仕方がないかなと。でも、山田祭りには多くの人たちが帰って来ます。やっぱり山田のことが好きなんですよね。対外的なまちのPRも必要だけど、町民が感じているこのまちの魅力をずっと守って行きたいし、次世代にもしっかり根付かせたいと思っています。

阿部　大震災という出来事は、子どもたちにしっかりと伝え、同じ災害、同じ悲しみを繰り返さないということが何よりも大切です。そして山田町は、大津波被害から何度も立ち上がって復興してきた町なんだ、みんなで再生し、つくってきた町なんだということを教え伝えて、山田町を誇りに思ってもらえたらと願っています。

尾形　自然災害は防ぎようがありません。でも、災害に強い町をつくることはできます。防災をしっかりと固め、もしもまた大きな災害が起きてしまっても、被害は最小限に食い止め、町に住む人たちに頼られる町でなければいけないと思っています。

――東日本大震災が発生した翌月の4月、山田町の職員として採用されました。これまで、町の復興とともに歩んできた10年間、通常の仕事では得ることのない、業務や体験を経験してきました。

震災直後の混沌（こんとん）とした状況から、山田町が復興を成し遂げるまでのプロセスを、経験したことはかけがえのない財産となったことと思います。

町の未来を担う確かな力を身に付け、貴重な経験を活かした姿を後輩職員に示し、町民に寄り添うことができる職員になってほしいと思います。

（石田）

全国から寄せられた応援メッセージは今も町の宝物だ

後日、同期の新人とともに震災対応を行った菅野さんに語ってもらいました。

――4月1日よりも前に役場へ集合し、役場職員として最初の仕事をしたときのことをお聞かせください。

菅野　当時は花巻市の自宅にいました。内陸でも混乱していてガソリンを給油するのに苦労した記憶があります。やっと給油ができて役場に来てからは防災無線で物資配布や炊き出しのお知らせなどを行いました。緊張はしていましたがとにかくせっかくの物資や炊き出しがきちんと必要な方に届くようにという思いで、放送するときの間の取り方や、声のトーンなどを調べながらやっていました。

――これからの山田町をこうしていきたい、魅力を発信したい、子どもたちに伝えたいことをお話しください。

菅野　月並みですが、震災から10年経とうと50年経とうと震災当時のことや復興に係る出来事を町として忘れてはいけないと思います。そしてそれは〝あの時はあんなに大変で…〟と思い出話をすることだけではなく、今行なっている業務に昇華し次に来る災害に備えることで遺していきたいと思います。未来のビジョンとしては地味かもしれませんが、いつでも町に住む方の命や生活を守ることを一番に考えた町でありたいです。

菅野　麗奈さん

志望の動機
山田町は父の実家で毎年夏と冬に帰省しており、いい思い出がたくさんある山田町で働いて見たいと思った

地域の「先生」から学び、タブレットにすぐ記録する

3

2

1

1町内に残る４つの石碑を調査・撮影し、その教訓を学ぶ（船越地区）
2三陸鉄道の列車に乗って、鉄道が受けた被害についても学んだ
3地域のお年寄りからは、かつての津波体験なども伺った

クローズアップ
山田人 ⑦
Close-up YAMADA-JIN

県立山田高等学校の取り組み
津波碑に刻まれた「いのち」の大切さ
忘れかけられていた先人の教訓を
次代へとつないでいく高校生たちの活動

かつて郷土の先人たちが石碑（せきひ）に刻み残した大津波の脅威と教訓。その「碑（いしぶみ）」が語る意味は何か。そこから私たちは何を学び、何を伝えて行かなければいけないのか。高校生たちが紡いだ「いのちを守る約束と絆」。

岩手日報社の企画を学習材に

県立山田高等学校（以下、山田高校）では、令和元年（2019）、岩手日報社の連載企画「碑（いしぶみ）の記憶」を学習材として、1年生31名による復興と防災学習の取り組みを行った。

これは、同校が同年に設定した「総合的な探究の時間」で、地域の災害史と防災について学ぶことを目的としてスタートしたもの。単元は、同年9月19日から10月25日までの17時間で実施された。

三陸地方には、明治29年（1896）の「明治三陸地震津波」や昭和8年（1933）の「昭和三陸地震津波」など、沿岸部を繰り返し襲った津波惨禍の事実や教訓を刻んだ200基以上もの石碑が残されている。

「碑（いしぶみ）の記憶」は、先人たちが残し伝えて来た石碑や遺構などに込めた教訓をいま一度掘り起こし、安全な地域づくりへの指針を探究するという企画だ。

郷土を知り、先人の思いから学ぶ防災

山田高校がこの取り組みを実施した背景には、東日本大震災の発生から8年の経過による、復興や防災に対する関心の低下があった。

高校1年生は15歳から16歳。発災時の年齢は7歳から8歳である。大震災は幼いころの記憶でもあり、日々新しい時間の中に生き、学ぶことも覚えることも多い高校生の記憶は淡いものになっていきやすい。

また、山田町に生まれ育った彼らだが、郷土の歴史や風土を正面から学ぶ機会は案外少なかった。彼らにとって震災からの8年は、自身の年齢の半分にあたり、その時間のなかで復興工事が進められ、町の姿はどんどん変わっていった。昨日までの通学路が今日には付け替えられて変わっていることもある。

自身が生まれ、育ってきた郷土の姿と暮らしの歴史を知り、防災への先人の思いや知見をどのように未来へつないでいくのか。生徒たちは、そのテーマに改めて向き合った。

石碑に刻まれた文字を読み取り現代の言葉に解説（船越地区）

教訓を伝える新聞と石碑を紹介する地図を作成

授業初日は、岩手日報社報道部の太田代剛（おおたしろたけし）専任部長と、IBC岩手放送クロスメディア部の相原（あいはら）優一（ゆういち）部長が、繰り返し襲ってきた過去の三陸大津波のことや、石碑に学ぶ災害史の意味など、企画の意図を説いた。

太田代専任部長は、明治、昭和、チリ地震の大津波が寄せてきた当時の様子を、新聞記事を使って解説しながら「碑は、何度も繰り返された津波の惨禍を後世に伝えようと建てられたもの。そこに込められた意味や思いを知ることが大事」と強調した。また、仮想現実（VR）技術を活用した「碑の記憶」コンテンツの制作も行っているIBCの相原部長は「VRはデジタル時代の碑となる」と説明し、現代の技術が未来へ伝えるメディアとなることを解説した。

フィールドワークでは生徒は8班に分かれ、大沢、織笠、船越、田の浜の4地区に残る「明治三陸」「昭和三陸」の三陸大津波の石碑などを訪ねて、碑文を読み取ったり、周辺の被災状況などを確認したりした。

復興事業が進む中でも、山田湾の風光や、湾を取り囲む山並みの景色はかつてのころと変わっていない。湾口から寄せた津波がどのように陸地へ乗り上げたのか、人々はどう行動したのか。安全な場所とはどういうところか。想像を膨らませた。

また「碑の記憶」に登場した町民らへのインタビューも実施。田の浜地区では「昭和三陸地震津波」と昭和35年（1960）の「チリ地震津波」、そして「東日

釜石市鵜住居町「いのちをつなぐ未来館」で防災について学ぶ

本大震災」の3度の津波を経験した中村トキ（なかむら）さん（現在101歳）が経験を語ってくれた。

「昭和の津波の後、一度はみんな高台に移転した。だけどいつの間にか低地へ戻ってしまっていた。命を守るための教訓を忘れてはいけない」と、生徒たちに語り、生徒たちは通信会社より貸与されたタブレット端末「iPad」で証言を記録。貴重な体験談に熱心に聞き入った。

▼私たちが語り部となって伝えていきたい

授業では、タブレットの活用のほか、「質問づくり（QFT）」の手法を活用した双方向型の学習を実施した。例えば語り部に対して「石碑をどのように活用していくのか？」「どのように未来へつなげていくのか？」「なぜ石碑で残したのか？」「石碑の教訓とは？」といった質問を準備する。

「質問づくり」とは、「多くの良い問いができることは、多くの良い探究と学びにつながる。生徒自身が、学習を自分のものとして取り戻す」との考え方である。たくさん問うことでたくさんの答えが得られ、主体的・対話的で深い学びが得られるという手法だ。

そうした探究とフィールドワークを行いながら、地域の地勢や災害の歴史に理解を深めた生徒たちは、学習の成果として新聞づくりを行い、また、町内の津波の石碑周辺のポイントを紹介するグーグルマップを作成。そこには東日本大震災の際に避難した地点などが地図上に書き出されている。

そして10月29日、生徒たちは関係者や教員ら約50人が見守るなか、1カ月余りの間に町内に残る4カ所の石碑を巡り、そして地域住民らから学んだ歴史を基にまとめ上げた復興・防災教育の成果発表会を同校で開催した。

生徒4人で地区を巡った「記憶班」は、織笠地区に残る「明治三陸」「昭和三陸」の両大津波の石碑が忘れかけられている現状を指摘。碑に記された内容が、今では地域に伝わっていない現状を分析した。

「石碑は100年以上たっても読めなければならない。文字が風雨に汚されたり、文章表現が古くなったりしないよう、木製の碑にして定期的に更新したり、デジタル化するなどの工夫が必要だ」とまとめた。

質疑応答では、「今後も道路整備などで石碑がなくなり、忘れられてしまうのではないか」という質問に対し「私たちのように石碑を学ぶ機会を増やし、大勢の記憶に残していく必要がある」「石碑を残すだけでは教訓は忘れられてしまう。私たちが語り部となって伝えていきたい」と考えを語った。

先人たちが私たちに「伝えたかったこと」の真実に触れ、そしてまた次代へ「伝えていくこと」の大切さを学んだ生徒たち。

「もう同じ悲しみを繰り返さない。味わわせない」「命を守る教訓」のバトンが新たな世代へと渡された。

YAMADA

わたしの一枚

私が見つめてきた復興の中の山田

これからも碧い海とともに

発災から10年。小学校低学年だった子どもたちも高校生となり、
自ら航路を拓いて行こうとする年代となった。
いつだって未来圏からの光を感じて生きている彼ら、彼女たち。
やがて翼は、ふるさとの海を渡る風を切って羽ばたく。
その風の中に見つけて写し撮った、みんなの夢、希望、青春の光——。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**田中 春樹**(たなか はるき)
「**ひと夏の青春**」
海が怖かった。でも高2の夏部員全員で行った海は楽しくて高校生活いちばんの思い出。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**渋梨子 大生**(しぶなし だいき)
「**きれいな海の怖さ**」
この海が牙をむくとは。避難誘導してくださった校務員の田代先生は命の恩人です。

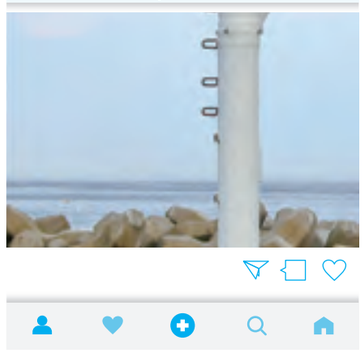
Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 莉那**(ささき りな)
「**思い出の桜の木**」
子ども時代を思い出す山田小前の桜。震災後の春も皆を明るい気持ちにしてくれました。

Scenery of Yamada Town

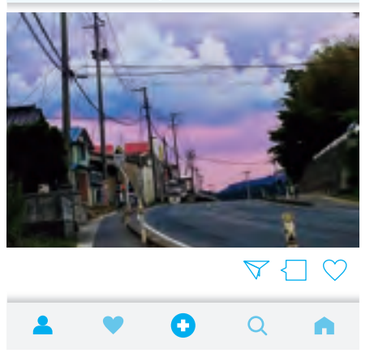
My piece



●**西川 直哉**(にしかわ なおや)
「**思い出**」
小さいころから海には思い出いっぱい。復興を兆(きざ)した海が、一段と輝いています。

Scenery of Yamada Town

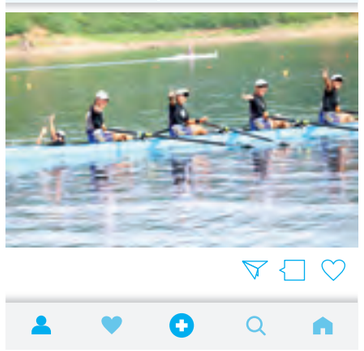
My piece



●**鳥居　旭**(とりい あさひ)
「**10年**」
一緒に苦難を乗り越えてきた仲間。一緒の部活。もうすぐ終わるとなると少し寂しいです。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**鳥居 亜紀**(とりい あき)
「**阿吽の呼吸**」
ボート競技で夢だったインターハイにも出場。先生、地域の人々、山田湾に感謝です。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**福浦 真穂**(ふくうら まほ)
「**山田の海**」
中学の美術の授業で撮った「光」の写真。ずっと変わらず静かできれいな海でいてほしいな。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**沼﨑　響**(ぬまざき きょう)
「**山田町のお祭り**」
様々な思い出いっぱいの山田の祭り。復興して、この祭りもずっと盛り上げていきたい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**西村 美海**(にしむら みみ)
「**桜**」
毎春、小学校の階段に咲く桜が好きでした。これからもこの桜に見守られていきたい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**小川 留以**(おがわ るい)
「**私と鯨と海の科学館**」
鯨を通じて海と自然が学べる科学館。マッコウクジラの骨格標本は無事でした。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**尾形 ヒカル**(おがた ひかる)
「**やまだの海**」
これからもきれいな山田の海がずっと続いていくといいです。

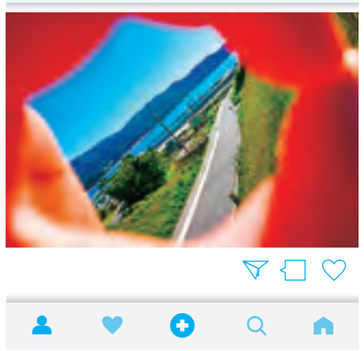
Scenery of Yamada Town

My piece

●**内沢 水緒**(うちざわ みお)
「**山田の良いところ**」
町民に元気を与えてくれる山田祭りが大好き。見どころ多い山田は魅力的。

Scenery of Yamada Town

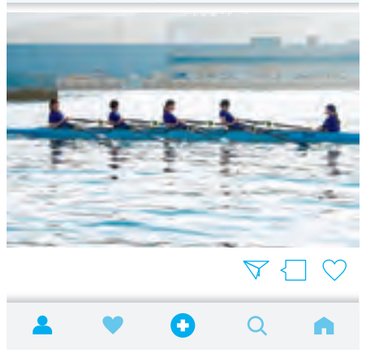
My piece



●**川野 愛美**(かわの あみ)
「**山田の全部**」
たまに通る通学路の景色。踏切と海と山。どこかのアニメのワンシーンのよう。

Scenery of Yamada Town

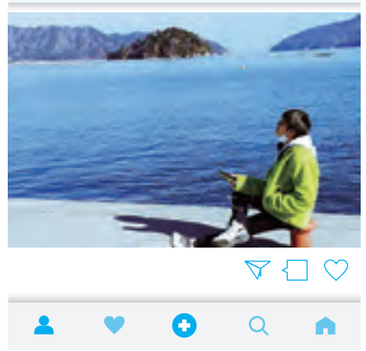
My piece



●**甲斐谷 こいき**(かいたに こいき)
「**海**」
山高ではボート部でした。山田のきれいな海で部活動ができて良かったです。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**小野 堅斗**(おの けんと)
「**美しい山田の海**」
何度見ても山田の海はきれいだなぁって思う。他県の人にも一度は見て欲しい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 唯斗**(ささき ゆいと)
「**祖母との思い出の場所**」
震災後、大浦の祖母と海を見ながらたくさんお話をしました。思い出の場所です。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 未衣菜**(ささき みいな)
「**思い出の階段**」
母校・織笠小の階段。桜散る春、皆で遊んだ階段は私の大切な思い出の場所。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 修登**(ささき なおと)
「**大沢の海**」
久しぶりの海で思うこと。あの震災を皆で乗り越えて今があることに感謝したい。

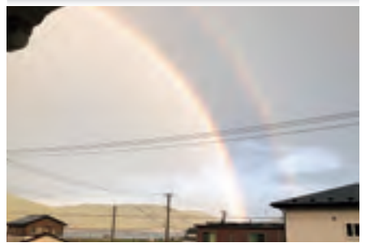
Scenery of Yamada Town

My piece

●**小林 未空**（こばやし みく）
「山田の今」
震災後、幼いころ暮らしていた山田に戻ってきて驚いたけれど、活気が戻ってきて嬉しく思います。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**熊谷 恵利**（くまがい えり）
「未来を照らす二つの虹」
「卒業」「祝福」の意味を持つ二重の虹。仮設から新しい自宅へ移ったある日、見かけました。

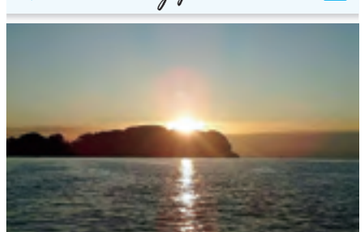
Scenery of Yamada Town

My piece

●**梶山 直人**（かじやま なおと）
「新店舗」
震災で流された新聞屋さんも新店舗に。みんな頑張っているという思いを表す一枚です。

Scenery of Yamada Town

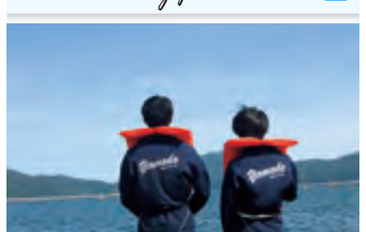
My piece



●**佐々木 友花**（ささき ともか）
「船越の海」
よく釣りをしていた船越の海。津波はショックだったけれど海は今でもきれいで大好き。

Scenery of Yamada Town

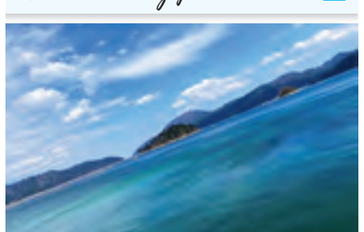
My piece



●**佐々木 駿**（ささき しゅん）
「忠次郎さんの孫と」
大好きな忠次郎さんの孫と2ショット。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**斎藤 優菜**（さいとう ゆうな）
「東日本大震災からの復興」
海が私たちを襲った大震災。まだ元の山田ではないけれど、あふれる活気に復興を感じます。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 美羽**（ささき みう）
「夏を感じた」
夏休みのバイトのあとに見た花火。夏の疲れなんて忘れてしまうほどきれいな花火でした。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 麻里**（ささき まり）
「海と共に」
山田町は自然に恵まれた町。これからもみんなが海と共に歩み、光り輝く町であってほしい。

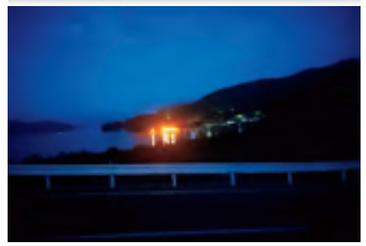
Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 永愛**（ささき のぶあき）
「綺麗な山田湾」
復興も進み、山田湾もきれいになり町もにぎやかになった。もうあんな災害がないことを祈ります。

Scenery of Yamada Town

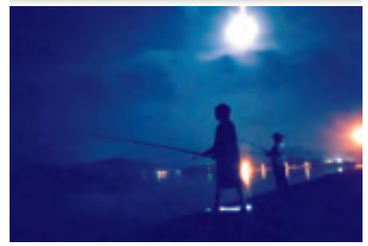
My piece



●**山口 南斗**（やまぐち なんと）
「復興と願い」
あの日の光景は頭から離れないけれど、復興に尽力された方々には感謝しかありません。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**山内 博仁**（やまうち ひろと）
「静かな海ときれいな月」
耳にはさざなみの音だけ。目には月と星空だけ。そんな落ち着いた山田町の岸壁に家族と夜釣りへ行った時の一枚。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**松崎 寧緒**（まつざき ねお）
「山田の楽しいイベント」
みんなが山田祭りで笑顔になってほしい。これからも町を秋祭りで盛り上げてほしいな。

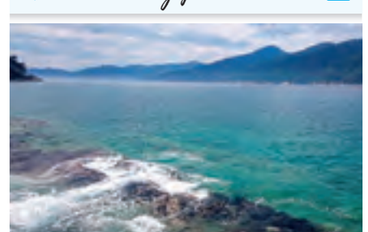
Scenery of Yamada Town

My piece

●**小原 慎ノ介**（おばら しんのすけ）
「私と海と山田」
学校からの帰路に見る山田湾の風景と海風と、ときどき出会う猫の姿に癒やされています。

Scenery of Yamada Town

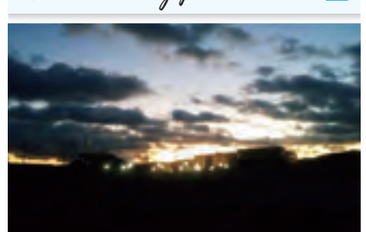
My piece



●**山嵜 理沙**（やまざき りさ）
「山田の海」
山田の海は心穏やかになる。ずっときれいな海であるように私にできることを頑張りたい。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**山崎 北斗**（やまざき ほくと）
「輝く山田町」
輝く復興住宅の上の空。こんなふうに山田町は輝き前へ進んでいくんだなぁと思います。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**山崎 レミ**（やまざき れみ）
「山田の綺麗な海」
きれいな海に戻った荒神海水浴場。透き通った海で友だちと遊ぶのが毎夏の恒例です。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**板橋 みなみ**（いたばし みなみ）
「虹が見えました」
放課後、部活で艇庫に行く途中に見えた虹。町の未来も雨上がりのように輝いてほしい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**横田 理紗**（よこた りさ）
「大好きな山田祭り」
山田祭りのにぎわいに町の良さを感じます。たとえ町を離れても祭りにはきっと帰って来たい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**道又 凛**(みちまた りん)
「**大沢にて**」
自撮り写真。何気ない日常も復興に携わってきた人々の力があってこそ。感謝を忘れず生きていきたい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**堀合 明香莉**(ほりあい あかり)
「**山田湾は私達の輝く青春の1ページ**」
attention go！加速する艇。仲間と夢を追いかけた山田の海は忘れられない青春の1ページだ。

Scenery of Yamada Town

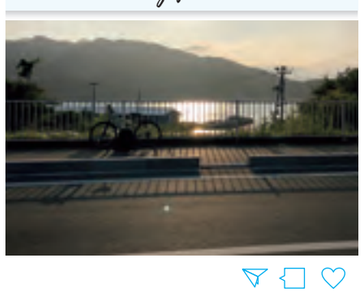
My piece

●**武藤 さやか**(ぶとう さやか)
「**オランダ島と海水浴**」
小さい頃オランダ島で家族と海水浴を楽しんだ。町には活気が戻りつつあり、また島にもいけるかな。

どこへ行っても
山田祭りには きっと帰ってくる

Scenery of Yamada Town

My piece



●**山﨑 賢斗**(やまざき けんと)
「**私の住む町**」
自転車通学の毎日。帰り道の夕日は癒しです。卒業して町を離れてもこの景色は忘れません。

震災があっても、
やっぱり海はきれい。
大好き♡

この町が
もっと居心地が良い場所になるために
私も頑張る。

「部活で頑張れたのは 仲間のおかげ。
私の青春の場こそが山田湾」

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐藤 摩南**(さとう まな)
「**海が知らせる町の景色**」
黒い波に奪われた町。でも今では山田の海もみんなの笑顔も輝いていると感じています。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 結花**(ささき ゆか)
「**私の友人**」
山高に入学してであったいちばんの友人。大切な友人とたくさん思い出をつくりたい。

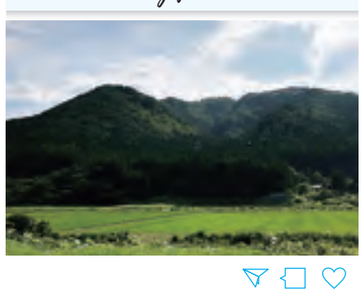
Scenery of Yamada Town

My piece

●**佐々木 優依**(ささき ゆい)
「**私が好きだった場所**」
閉店してしまったレストランの窓から。この海を見ながらの食事は私の大事な思い出です。

Scenery of Yamada Town

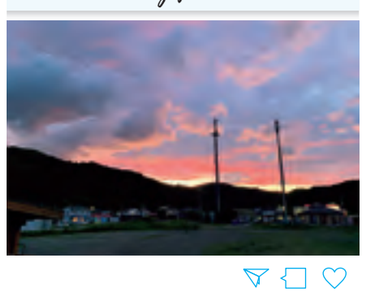
My piece



●**関口　諒**(せきぐち りょう)
「**初夏**」
津波のあと漁船が横たわっていた田んぼ。風に育つ元気な稲穂のように町も復興を遂げてほしい。

Scenery of Yamada Town

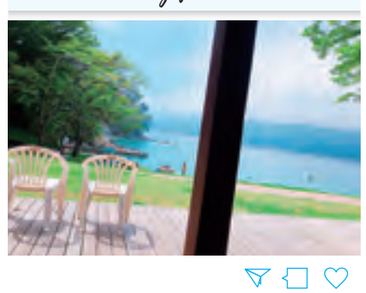
My piece



●**鈴木 陸翔**(すずき りくと)
「**家から見える空**」
部活後の帰路、大沢のきれいな夕空。懐かしさもあるし改めていい場所だなぁと思う。

Scenery of Yamada Town

My piece



●**沢田 里奈**(さわだ りな)
「**普通の生活**」
部活のあと海で遊ぶのが好き。山田の海はみんなと私の大切な思い出の場所。ずっとここにいたい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**橋田 隆輝**(はしだ りゅうき)
「**大浦から山田をみて**」
大浦から見る山田の自然は穏やか。みんなが大切にしている山田に感謝を忘れず過ごしたい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**中山 那菜歩**(なかやま ななほ)
「**マリンスポーツの思い出**」
弟の子供会で行ったオランダ島。透明な海でした。また行きたいし多くの人に行ってほしい。

Scenery of Yamada Town

My piece

●**鳥居 亜美**(とりい あみ)
「**霞露**」
私たち山高ボート部が苦楽を共にした大切な海。私を成長させてくれた山田湾が大好き!

カキやホタテがどのように育てられているのかが学べる「養殖いかだ見学」

やまだワンダフル体験ビューロー
体験観光で「山田らしさ」を発信
地元住民と訪問者の交流機会の拡大から
地域活性をめざす山田町の戦略

山田では、恵まれた自然景観と豊かな山海の幸を強くPRしながら、多彩な観光政策をスタートさせている。〝移住者〟であるコーディネーターと行政と住民が創造する「山田らしい、山田ならでは」のプログラムで、まちづくりの仲間の獲得を目指す。

山田町を知ってもらう機会の創出

東日本太平洋沿岸の市町村では人口の減少が続いている。

震災から9年目の令和2年（2020）2月1日の人口統計によると、青森県から茨城県までの太平洋沿岸地方39市町村の中で前年より人口減少率が改善したのは11市町村にとどまり、20市町村で減少率が拡大している。

人口の減少、住民の高齢化は、地方自治体にとって地域づくりの担い手が不足するという課題を生む。

地域に暮らす人が減ることで農地では耕作が放棄されて草藪のゾーンが広がり、住民のいなくなった家屋は傷み、地区のにぎわいも消え、町全体の生産活動や消費行動も薄れ、地域の活力が失われていく。

一方では、若者を中心に、人材が地方へ入り始めるという傾向も見られる。人と地域の関わりは、近年「交流人口」「関係人口」「定住人口」という言葉で言い表される。

「交流人口」は、通勤や通学、買い物、観光、レジャーなどを目的として地域へやってくる人だ。

「関係人口」は、例えば観光が契機となって地域や地域の人々と関係を結び、何度も足を運びながらより深くかかわってくれる人をいう。過去に勤務や居住の経験がある、親類やルーツが地域内にあるという人もこれに含まれる。

そして「定住人口」は、文字通り地域に住んでいる人だ。もともとの居住者はもちろん「交流」から生まれた「関係」が発展して地域に移住して「定住者」となることもある。

例えば被災地ボランティアでやってきた人が地域の人々と交流を重ねる中で、その街や人を好きになり、継続的に交流を深めているケースも少なくない。

被災地に限らず、今、地方では交流を増やし、関係を深めてもらおうという様々な施策や試みが行われている。

本町でも「移住定住コーディネート」や「空き家バンク」といった事業を展開し、町の生活環境を確かめてもらうための数日間のお試し滞在も実施している。

入り口となるのは、まず山田町を知ってもらうこと。

その施策のひとつとして、平成25年（2013）、町では山田町復興コーディネーター（やまだ復興応援隊）という外部からの人材募集を開始した。

まちに活気を創り出す人がたくさん訪れ、まちの人々が明るく元気に安心して暮らしていくための復興事業のひとつだった。

一年間のヒアリングで課題を見つける

「私は、宮城県在住の友人が東日本大震災で被災したことと、また仕事関係のつながりで、発災直後から2年間ぐらい、東北と東京を行ったり来たりしていました」

山田町復興コーディネーターの第一回目の募集に応募し、現在「やまだワンダフル体験ビューロー」の体験観光コーディネーターとして働く服部真理（はっとりまり）さんは、被災地との関わりをそう話す。もともとは東京の出身だ。

「復興コーディネーターの説明会が都内であったとき、お話を聞きに行ったのです。被災地で役に立てることがあればと思ってダメもとで応募したのですが、採用していただきました」

山田町へやってきたのは震災から3年目の平成26年（2014）だった。コーディネーターの任期は5年である。

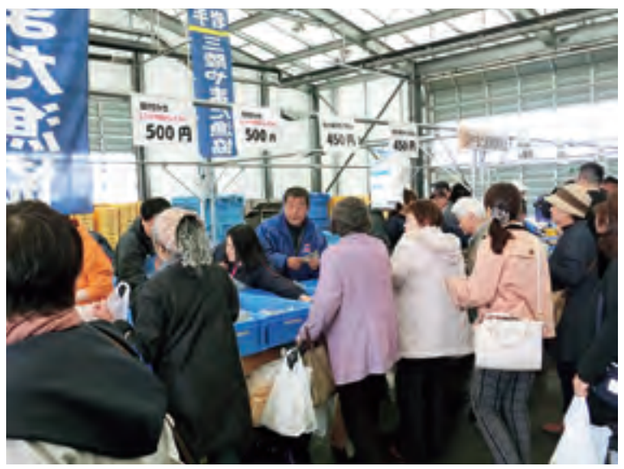
町役場に顔を出すと、当時の水産商工課長は「復興業務のための人材補給ではありません。この町でやることを考え、探し出してほしい」と言った。作業員ではない。復興の次のステージで町が展開する事業を創り出すことが使命だ。

「まず、町や人のことを知らなければということで、最初の一年間はできるだけ多くの人と会い、ヒアリングを重ねました。たくさんの人と仲良くなっていく中で、町や人が抱えている課題が見えてきました。なりわいの再生、交流人口の拡大、農水産品の加工や販路拡大……。それらの課題に解決策を見つけていくのが仕事でした」

まずは交流人口の獲得が先決

町は、環境省が平成20年（2008）から普及と推進と定着を目指して事業をスタートさせた「エコツーリズム」に手を挙げていた。

エコツーリズムとは、地域の自然環境や歴史文化など、固有の魅力を観光客に伝えること


毎春開催される「山田カキまつり」

浦の浜海水浴場でのシーカヤック体験

山田町で「体験できること」を探る

町の魅力と可能性を、いま一度探し出した。

まず海がある。しかも三陸地方では珍しく波穏やかで、いくつもの養殖いかだと町のシンボル・大島（オランダ島）と小島が浮かぶ景観から海の十和田湖とも言われる「山田湾」と、断崖絶壁や岩礁に荒波が砕けるダイナミックな風景が広がる「船越湾」という趣を違えるふたつの湾に面している。海岸性原生自然の景観は学術的にも価値が高い。

山田湾ではシーカヤック、漁船クルーズ、オランダ島上陸、養殖いかだ見学、漁業体験などのプログラムの体験が可能だ。また、船越湾には「三陸一透明度が高い」と言われる荒神海水浴場や、船越半島には山と海の魅力を同時に訪ねられる遊歩道もある。

里山には多彩な農林産物があり、それらの収穫体験や加工品の手づくり体験もできる。街では震災語り部とともに街歩きをしながら味覚を楽しむこともできる。

服部　真理（はっとり　まり）さん

東京都出身。2014年「山田町復興コーディネーター」に採用され「体験観光コーディネーター」として活動中

体験観光の考え方を地域で共有

町は、平成28年（２０１６）、観光協会や商工会員などをメンバーとする「山田町体験観光推進協議会」を立ち上げた。

アドバイザーを招き、商業者をはじめ町内の幅広い業種や層に向けて講演会を開催。観光への関心や興味を引き出し、具体的なプラン創出と観光推進への意欲をかきだし、行政と民間連携による体験観光推進の重要性を地域として共有していった。

「体験プログラムなどは揃いきっていませんでしたが、まずは『目に見えるものをつくろう』ということで、折りたたみ式パンフレットを作成したのです」

シーカヤックや新生やまだ商店街協同組合の震災語り部ガイド、白石集落ごっとん会のそば打ち体験、マリン・ツーリズム山田の漁業体験、カキ・ホタテ養殖体験、グリーンハートやまだ、いわき農園によるいろいろ野菜数種の摘み取り体験など、初期段階にあったプログラムを掲載し、まず「知ってもらうことから始めました（服部さん）」

楽しい震災ガイドで山田ファンを獲得

新生やまだ商店街協同組合の「震災語り部ガイド」は平成25年（２０１３）から活動している町で唯一の語り部グループだ。メンバーは組合員で、飲食店、時計店、写真館、消防団長、タクシー会社社長など男性4名、女性3名がいる。

そのガイドの一人で、組合事務局長の椎屋百代さんは立ち上げの経緯を「語り部がいなかったので、もともと中心街でご商売をされていた方々がそれぞれの体験を語り伝えていこうと結成しました」と語る。

「３つのコースがあって、時間は1時間から1時間半ぐらい。『震災語り部まち歩き』では中心街を歩きながらガイドします。『復興まち歩きつまみ食いツアー』では、まち歩きをしながら山田ならではの味覚を2～3種類つまみ食いします。これがいちばん人気です。また、『語り部タクシー』では、中心街以外の場所も訪ねます。いずれもタブレットをお渡しして、町の昔の姿も疑似体験していただきながらご案内します」

震災語り部ガイドがスタートしたころは、まだ震災の傷痕も「見えていた」が、復興が進む中、昔の様子などは伝えにくくなったという。

「でも、今を見て、今を知ってもらえたらと思います。だから『つまみ食い』などで、まちの復興の様子を明るく捉えていただけたらいいなと。他の市町村の語り部さんは、少し重たいお話が多いようですが、山田の場合は軽くていって思っています（笑）」

見ていただきたいのは復興した山田の姿です。「だからウェルカムです」と椎屋さん。

「山田はおいしい、楽しい、また来よう。そんな山田ファンになっていただけたらうれしいです」

椎屋　百代（しいや　ももよ）さん

ぴはん株式会社勤務。新生やまだ商店街協同組合の「震災語り部ガイド」も務める

タブレットを持って震災語り部が案内する

▼山田観光の受け入れを一本化

「語り部さんも含めて、体験プログラムの受け入れは、ほとんどをビューローが受け付けています」と服部さん。

また、事業者の収入を守ることも大事な仕事だ。

「団体旅行などではディスカウントを申し入れられる場合もあります。でも、例えば漁師さんは、本業の手を休めて受け入れるわけですよね。『お金なんていいよ』なんて言ってくれる方もいますが、しっかり線引きをすることも『体験観光』を長く続けていく上では大切なこと。受け入れ側にも責任感が出ます」

プログラムの入れ替えなども常に考えているという。復興が進めば街も変わる。時代も変われば体験に使える新しいツールなども出てくる。観光客のニーズも、受け入れ側にできることも変化する。

▼「マリン・ツーリズム山田」がJTB賞を受賞

「やまだワンダフル体験ビューロー」のこれまでの体制づくり活動は、山田町という町の知名度とともに次第に全国的に知られていった。服部さんには、これから体験観光を始めたい、という他の町からの講演依頼なども舞い込むという。

高い評価も得られた。令和2年（2020）1月、JTBが主催する「観光振興に対する斬新な取り組み」を表彰する『JTB交流創造賞』の組織・団体部門で、最優秀賞を受賞した。

授賞式で登壇した服部さんとマリン・ツーリズム山田のメンバー

「マリン・ツーリズム山田」は、平成17年（2005）に山田湾の漁師たちが「子どもたちに養殖漁業を体験してもらいたい」として結成したものだ。震災を境に活動を中止していたが、養殖漁場などハード面での復興が進んだ平成28年（2016）、体験ビューローなどと協力して復活した。養殖いかだ見学やオランダ島上陸といったプログラムは好評を博し、申込者も年々増えている。

▼未来を見据えた観光創造を

三陸鉄道リアス線が復活し、三陸沿岸道路も通じた。交通インフラの整備が進む中で、宿泊施設が少ない山田町に立ち寄ってもらうための魅力がなければ「通過型」になってしまう、と服部さん。

「まちの人口は減り続け、地域経済は力を失っていく。まちに人が来てお金を落としてもらうというシステムはつくって行かなければなりません。『ウィズ・コロナ』と言われるこの先、どうやって人を集めようか？ ひとつの転換点です。観光という事業は開始してから実を結ぶまで3年と言われています。でも、10年がひとサイクル。未来の町の姿から逆算したビジョンを、行政や町の皆さんと一緒につくりあげていきたい」

動画での情報発信や、オンラインで産品を買ってもらうなど、今できることは続ける。先を見越して立ちどまることはない、と服部さん。また、来年以降はオランダ島をどう活用するかも検討中だ。キャンプができるかどうかの実証実験も行っている。

▼もうひとつの施策展開「移住定住」

現在、町が取り組みを開始している定住人口の獲得に向けた施策にも触れておきたい。

地方の若者が都会を目指す一方、地方への移住を考える若者、または定年後の暮らしの時間を地方で持ちたいという人たちも一定数いる。

地方移住への関心は年々高まっている。そうした中、地方自治体でも、専門の窓口を設置したり、専任のコーディネーターを採用するなどして対応に当たっている。

山田エコツーリズムの舞台のひとつ、オランダ島

町では平成30年度から専任コーディネーターを配置して、移住・定住の個別相談を受け付けている。町のホームページでは、町内の空き家を紹介する「空き家バンク」というサイトも開設、また平成31年度からは、県の移住支援金活用やリフォームのための補助事業も制定し、事業の推進を図っている。

町では、令和2年度から個別相談や首都圏で開催される移住相談会などへもブース出展し、本町に興味を持った人を対象に「移住お試し住宅」という手頃な価格での滞在可能な住宅を提供し、試行的に滞在してもらいながら山田町を知ってもらう事業も開始している。

首都圏での移住相談会は、岩手県主催のものばかりではなく、さまざまな公共・民間の団体が主催しているものも多い。ただし、令和2年には新型コロナウイルスが流行した関係から、町へ人を呼び込むことが困難な状況にある。首都圏での移住相談会の開催に関しては、周辺市町村とも連絡を取り合い、同年度の参加は断念した。

▼移住促進は、一緒にまちを創る「仲間探し」

町の取り組みは3年目だが「相談数は増えている」と担当者。令和2年度はコロナ禍の事情もあり、オンライン相談へと切り替えた。相談者は若い女性が多く、次いで仕事をリタイアしたシニア世代の男性などだ。本来であれば「移住お試し住宅」へ誘い、生活環境なども確かめてもらう方向でいたが、現在は関係人口にとどまっている状況だ。

就職相談や住居といった個別のケースについての回答は、まだ整備の余地はあるというが、例えば県の「移住支援金事業」に登録してある企業に就職した場合には最大100万円を支給するといった制度もあり、これを活用した移住者もいる。企業および空き家の登録数を今後も増やしていきたい方針だ。

「コロナ禍の昨今、山田町へ帰りたい」というUターン希望者もいる。今後、テレワークなどが働き方のひとつのスタンダードとなれば、地方移住は選択肢となり得る。

ダブルライフ・ダブルワーク――ふたつの違ったまちに住み、ふたつの違う仕事をするという、そういう生き方を模索する人も増えている。地方へ移住するという仕組みや仕方を、それぞれの地域らしく創り出すことで、地方移住を考えている人の背中を押すことができる。

移住定住は、高齢化対策、人口流出へのカウンターという視点もあるが、一緒に地域をつくっていく仲間になってほしいという、人材探し、仲間探しという意味合いもある。

より満足度が高く、より注目されるような、山田町らしい移住定住への取り組みを継続していく方針である。

Photo essay
わたしの一枚
～私が見つめた復興の十年～

荒れ地に立つコスモス

震災前、母の介護の合間に息抜きによく行っていた船越公園が震災後、
荒れ果てて何もなくなってしまった風景はとてもショックでした。
でも、ある日、雑草の中にコスモスがすっくと立って
真っ直ぐに太陽の光に向かって花を咲かせているのを見つけました。

大丈夫だよー　大丈夫だよー　負けないよー　ここにいるよー

と応援してくれているように感じました。
花たちはたくましく上を向いて輝いていて勇気をもらいました。

菊池（きくち）　まゆみ（山田町後楽町　50代）

撮影日　2011年10月18日
場　所　船越公園

支援者の方々

順不同、敬称略。銀行振込の方についてはカタカナ表記とし、複数支援された方はまとめて記載しています。震災後の混乱により、把握できていない場合もありますので、ご了承願います。

1 義援金・支援金

■阿部　勲
■あいじつ子ども園
■あかつき篠路保育園　父母会
■青森県南部町役場
■アメリカロードアイランド州
　日米協会
■浅野貞雄
■青森県南部町
■青森県平川市
■青森県平川市企業
■アサヒグループホールディン
　グス
■アイカワ　カズトシ
■アイチケンハズチヨウギイン
■株式会社アイル　代表取締役
　伊東東海
■株式会社アインファーマシー
　ズ代表取締役社長　大谷喜一
■アオキ　カツミ
■アオキ　サアリ
■アオキ　サトコ
■アオキ　ナオユキ
■青木幹男
■アオノ　クミ
■青森県南部町　ぼたんまつり
　実行委員会
■青森県南部町長　工藤祐直
■青森県平川市　平賀ライオン
　ズクラブ
■青森県平川市民一同　代表
　平川市長　大川喜代治
■青森市都市整備部都市政策課
■アカサカ　ヨシエ
■アカザキ　ミサ
■アカバネ　ケイジ
■穐吉孝一郎
■秋田県仙北市、仙北市国際交
　流協会
■秋田市立寺内小学校ＰＴＡ
■アキモト　ヒロコ
■阿久津操
■浅井ふみ子
■アサイ　マミ
■アサヌマ　ケイコ
■アサヌマ　ユキヨ
■浅原　譲
■浅原　孝
■旭川圭泉会病院
■アシザワ　トモコ
■アジアアリガトウシエンキキ
　ン
■アズマネ　カノコ
■アズマリヨクカ
■アタカダイキ
■足立管工設備協力会　株式会
　社青路商会ほか27社
■アダチ　ヒロコ
■足立区立東綾瀬小学校　校長
　佐藤　宏
■阿智村
■厚木市議会議員　高田ヒロシ
■アーネストワン
■アビラチヨウシヨウコウカイ
■（シヤ）アビコシイシカイ
■アベ　ゴウ
■アベ　タカシ
■アベ　ヨシオ
■阿部喜光
■阿部正夫、幹男、勇司
■阿部光春、智子
■安部倫子
■アボ　ナオヒト
■アマヌマサチコ
■アライ　ヒロシ
■アライダ　コウジ
■荒河繁人
■荒川光明
■荒川義弘
■アラキ　フミヨ
■アラキ　ヨシノ
■荒木道雄
■アリハラ　ミノル
■ＡＬＳＲＵＨＥ　ＥＲＩＣ
■アンドウ　ヤスタカ
■アンドウコウレンユウリン
■安藤孝子
■岩手県校長会
■岩手県副校長会
■岩手県ＰＴＡ連合会
■岩手県法人連合会
■岩手県私立保育園連盟
■岩手掃除に学ぶ会
■市川保育園
■伊藤　ヒロ子
■岩手県社会福祉協議会
■岩手県共同募金会
■泉保育園
■岩手火災共済
■岩手県共同募金
■岩手県国公立幼稚園ＰＴＡ会
　費連絡協議会
■岩手県立大学
■社会福祉法人　岩手県共同募
　金会
■岩手県私立保育連盟
■一本木中ＰＴＡ
■岩手県県中学校長会
■岩手県山田町に義援金を送る
　会（香取市）
■岩手町川口女性コーラス　ラ
　ディアナ・Ｒ
■池田高校吹奏楽部
■一般社団法人岩手県社会福祉
　士会
■（財）岩手県消防協会
■イイダ　ユキオ
■イイノ　セイイチ
■Ｅ．Ｐ．Ａ．Ｖ．ＤＡＭ
■イガラシサトコ
■イキイキマツリジッコウイイ
　ンカイ
■池上保年
■イケダ　トヨコ
■池田町高島近牛農業部会
　代表　森繁良
■イケダチョウリツタカシマシ
■イケブクロノブヨ
■イザカヤ　ミチクサ
■石井三好
■イシカワ　エミコ
■イシカワ　サキコ
■イシカワ　サトコ
■イシカワ　ヒロコ
■イシクラ　レイコ
■イシズカ　ツトム
■イシトビ　サダノリ
■イシハラ　タケシ　ヨコハマ
　シ
■イシヤマ　カツヒロ
■イシヤマ　ヒデヒコ
■イシヤマ　ヒデヒコ　シナガ
　ワクニシシナガ
■イシワタ　アキコ
■カブシキガイシャ　イシカワ
　シヨウジ
■イズケンチクコウギヨウクミ
　アイ
■伊豆下田　今村商店
■泉正二郎
■イセ　タダオ
■イセリ　トヨコ
■イタクラ　ミツコ

板橋区若木1、2丁目会有志
イタミ　シホミ
イチカワ　ヨシトキ
イチカワシ　ホゾミ　マサヒロ
一号会（一号掃海艇戦友会）
一関商工会議所
イチノヘ　サトシ
イチムラ　トシヒデ
イトウ　アキラ
イトウ　イサム
イトウ　キヨウコ
イトウ　トシチカ
イトウ　ナミコ
イトウ　ヒデキ
伊藤　等
イトウ　ヒロシ
イトウ　マナブ
イトウ　モトオ
イトウ　ユキコ
イトウ　ヨシコ
伊藤慎一郎
イトウチュウ　エネクスサイガ
伊藤時子
財団法人　伊藤育英会
イド　マサトシ
イナ　セイジ
イナガキ　ユウコ
イナダ　ミズエ
稲玉修治、悦子
イノウエ　カズキ
イノウエ　タイシ
イノウエ　ナオミ
イノウエ　マサオ
井上　正彦
井上漢方堂　健康サロン
井上民雄
茨城県議会議員　石井邦一
イマジンカイ　エノキナカ
イマジンカイ　ナガヤマ
井村笑子
イモングループオキヤクサ
入船一浩、美子、亮太、大輔
イワセ　ヒデオ
岩手県生活と健康を守る会連合会　会長　渡辺勇一
イワナガ　アイコ
イワフチ　セイフウ
イワブチ　ヒロユキ
イワブチ　ヤスジ
イワブチ　リヨウゴ
イワブチ　レイコ
岩淵亮悟
イワマ　ユキオ
イワマ　ツバサ
株式会社岩手県北観光職員互助会
岩手県町村議会議長会
イワテケンノウソンシンコウキ
岩手県山田町に義援金を送る会代表　香取市長　宇井誠一　ほか
岩手県立宮古商業高等学校
公益財団法人　岩手県スポーツ振興事業団　理事長　大矢正昭
イワテケンシチョウソン
財団法人　岩手県対ガン協会　会長　大堀　勉
ヴィラのぞみ愛児園
ウィ　アー　オール　インデイス　トウギ
ウエスギ　ジュンヤ
ウエダ　タカナリ
ウエダ　テツオ
ウエノ　ヨシカズ
梶山剛
カシワギ　タカヨシ
カシワギ　ミカ
カシワバラ　モモコ
カシワヤ　アサミ
カシワヤ　サキ
カシワヤ　タケヒロ
カ．カスタムワイズ
カサイセイケイゲカナイカ
カタギリ　モエ
カタシオヒルノカイ
カタヤマ　ケンイチ
勝股恵美子
カツラ　サチコ
有限会社　加藤商店　代表取締役　加藤英明
カトウ　コウイチ
カトウ　タダシ
カトウ　ミチヨ
カトウ　ミヅホ
カトウ　ユキコ
カトリアオイロシンコクカイ
かとりししょようこう
香取市商工会
カナイ　ヤスヒロ
神奈川県足柄下郡湯河原町有志一同　代表　中条満男
神奈川県ダンプ屋一同　代表　昆行　実
神奈川県立逗子高校吹奏楽部
カナザワ　ミトリ
カネオカ　メグミ
金ヶ崎町長　高橋由一　金ヶ崎町議会議長　千田　力
カネヒラ　チカコ
カバサワ　ショウジ
歌舞音楽集団　荒野座
カフエビツツエリアウイラタマヤマ
釜石　はまゆり会
クマガイ　イズミ
カマタ　シズコ
上富田町
カミオカ　マサオ
上条　智佐雄
カミムラ　キミヒロ
カミヤ　ムツコ
カミヤ　ヨウ
カミヤマ　ヤスオ
上山田温泉
上山田温泉　役員一同
カムラ　ナツエ
カメイ　ユミコ
亀工房亀山
カラオケ　酔恋歌　山崎
カラオケレンチユウ
カリヤ　エツコ
カリヤケンセツカブシキガイシャ
Ｇｕｐ
カワギチ　ヒロシ
川越　正
川口博士
カワシマ　トシツグ
カワセ　キヨミ
カワセ　マコト
カワダ　アキオ
カワダ　カズトシ
カワノ　ヒロユキ
MITTSUKO KAWABATA
川端孝信
川端康昭
カワバタ　マサヤ
カワハラ　ナオミ
カワハラマコト
カワムラ　カズコ
カワムラ　シヨウザブロウ
カワムラ　マサアキ
カワムラ　マホ
カワムラ　ユカ
カワワダ　マモル
カンキヨウケイカクコウボウ
カンコクイザカヤスナツクソウル
カンダ　トオル
カントウヒシダイ　シラノカツヒコ
貫洞ケサノ（魚店）
カンドウ　ヨシノブ
広東明るい社会づくりの会
菅野昭博
カンノ　メグム
がんばれ！山田町　山田町復興支援の会（千曲市）
カンバラ　ノブオ
ガンバレヤマダマチ　ヤマダマチフツコウシ
ガンバレヤマダマチヤマ
カンベヨシアキ
京町いづみ保育園
京都自治労連保育部会
京町いずみ保育園
木村浩二郎
有限会社菊一オオハシ　有志一同
キクチ　キミヒロ
キクチ　サトシ
キクチ　シヨウコ
キクチ　テイコ
キクチ　マコト
菊地清秋
菊池長一郎
キクチナナコ　カナガワケンカワサキシナカ
ユウゲンガイシャキサラギ
ユウゲンガイシャキサラギセガワ　キヨウイチ
キシカミ　テツヤ
岸川産業株式会社　岸川嘉明
絆ドリームプロジェクト　須藤　巧
ギターサークルユウユウ
北岩手生コンカブシキガイシャ
キタカミシカイケイカンリシヤ
キタギン　ジヨウセイシ
キタザワ　ヨウコ
キタダイ　アケシ
株式会社北日本朝日航洋
北日本推進カブシキギアス社員一同
北原糸子
キタムラ　アサミ
キタムラギジュツカブシキガイシャ
キタヤマ　アキコ
吉祥寺平和通商店会
キチジヨウジムーバスアンドパーキングジ
キド　キヨコ
キナセ　ヒロシ
キノシタ　ミナコ
キノシタ　レイコ
キハラ　マユミ
キムラ　ヒロノブ
キムラ　ミズキ
木村直美
ギヤラリ　ハコヤ　カネコシズエ
ギヤラリーエイジウ
ギユウコカイ　オオカワ　ミホコ
キユシユウハードシステム
ヤマダ　カツ
株式会社　ぎょうせい　代表取締役社長　澤田裕二
弁護士　上原　邦彦
ウエヒガシ　サキコ
ウエヒガシ　ヒロアキ
ウエムラ　ヤスコ
ウガジン　ミユキ
ウスタ　エリコ
ウチダ　ミツエ
ウチダテ　タカ
ウチダテ　ヒデオ
ウチダテ　ヒデユキ
ウチダテ　ユカリ
内山直哉
ウノ　カズシ
ウブカタ　カツノリ
浦崎正遠
ウラタ　サトシ
浦和レッズサポーター　有志代表　三国　弥生
ウルシバラユカコ
ウンジヨウ　マユミ
エスコラピアス修道院
社会福祉法人　栄光会　伊豆栄光湯川保育園
株式会社エイエスシステムサービス
株式会社エイシンケンセツサービス
株式会社エイシンケンセツ代表取締役　小林宗介
オカワ　リヨウコ
オオキ　ミユキ
オオクボ　シヨウコ
大久保諒子
オオコシ　ヒデミ
オオサワ　タツヤ
大澤國宏
オオジシンサイガイギエンキン　ダイヨリ
オオシタ　マリコ
オオシマ　ナツコ
エノモト　タケシ
エフエムアキハバラアンドカブシキガイシャ　エフスタツフルームチヤリテイーオコノ
カ　エムシーエスシヨウガイガクシユウセン
株式会社ＭＸエンジニアリング　湊浄　一
エンドウ　イズミ
エンドウ　サチコ
岡村　早苗
おひさま工房
おとぎ保育園
おとぎ保育園父母の会
大宮中生徒会
小松学校運営協議会
オイカワ　ジロ
及川勝義、平賀幸光、菊池敏郎、山本一子（旧浜長）、今野侑子
王子総合病院
大石裕
オオイタケンタケタシチヨウシユトウ　カ
株式会社大金ゴルフ倶楽部
オオカワ　ミホコ
オオカワ　リヨウコ
オオキ　ミユキ
オオクシ　ススム
オオクボ　シヨウコ
大久保諒子
オオコシ　ヒデミ
オオサワ　タツヤ
大澤國宏
オオジシンサイガイギエンキン　ダイヨリ
オオシタ　マリコ
オオシマ　ナツコ
オオシダ　タケシ
オオタ　キヨタカ
オオタ　シゲコ
オオタ　フミノリ
オオタ　マユミ
オオタ　ユキコ
大館市役所だるま会
オオタヤ　トシオ
オオツボ　マキ
オオトモ　ジユンコ
オオノ　ヒサシ
オオノジヨウシヤマダコウオオバ　ゼイリジム
大場峰子
大胆　卓
オオヤマ　ユキナリ
オオサワラ　アキヨ
オカダ　ケイジ
オカダ　ユカ
オカダ　ヨシマサ
オカダ　ワカコ
オカダカイケイジムシヨ
オカダユウジ
医療法人社団　緒方医院　理事長　緒方杏逸
オガタ　イズミ
オガタ　ケンタロウ
オカビヨウインシヨクインイチドウ
オカベ　タケシ
オカムラ　カヨコ
オガワ　イチロウ
オギノ　ケンジ
オクダ　マサヤ
オクダ　ユカ
オクデラ　ユリコ
オザワ　カズトシ
オジマ　マユコ
小千谷市民義援金

■京都市中京区　山田町民一同
■カブシキガイシャキョウドウチシツコン
■協同組合岩手県資産評価システムセンター
■キヨウリツコウサン
■清原由美子
■キンダイチ　ナオミ
■金田一源武
■（吟道紘仙流　白鷗会　花水教室）川畑顕化
■吟道紘仙流　白鷗会　花水教室（吟道紘仙流　白鷗会　花水教室）中根義夫
■久遠会
■桑島　博
■黒沢尻幼稚園ＰＴＡ
■クンツ　留美
■厨川中生徒会
■厨川中ＰＴＡ
■久保紀子
■クドウ　ヨシヒロ
■クニチカ　カズオ
■クニミマチミンセイジドウクボ　エイコ
■久保チヤ
■クボタ　アキラ
■クボタ　ヒロシ
■クボタ　ヤスヒコ
■久保寺カヨ
■熊本県肥後銀行　太田健二
■クラサワ　ミツオ
■クラシキゲイジユツカガグラツチエ　シマムラ　ホタル
■倉本　豊
■クリハラ　シユンスケ
■来栖勝子

■グレル・ひろみ
■クローバー薬局飯岡店
■クロサワ　サオリ
■クロサワ　タミ
■クロダ　シユウジ
■クロダ　ヤスユキ
■クワシマ　シゲスミ
■クワハラ　ヒロミ
■クワバラ　シノブ
■クワバラ　ミカコ
■クワバラミカコ　トウキヨウケイバモール　カブシキガイシャラクテンケイバ　ギエ
■ケイユウカイ
■ケルンアサクサジチカイ
■ユウゲンガイシャケンシヨウズカンパニ
■原水爆禁止日本協議会
■県民ゴルフ場
■弘済会
■このはな保育園
■小鳥谷中生徒会
■江東区明治小ＰＴＡ
■公務員弘済会静岡
■神戸市北消防団山田支団
■後藤史郎
■小岩井自治会婦人部
■高知県精神保健ボランティア
■高知県心のケアチーム　ケンショク
■コウトウアカルイシャカイヅ
■江東区（総務課）
■コウノ　エイイチ
■幸福実現党　党首　立木秀学
■神戸康弘
■コウベシ　ヤマダシダン　シダンチヨウ　イ
■コウヤマ　ヨシムネ
■ゴーゴーテイフツコウシエン

■白百合保育園
■上水保育園
■正榮山　妙海寺
■雫石町国際交流協会
■下田市立下田中学校
■清水信純
■下田市商店会連盟
■新宿区下落合町内会
■ＧＮアサガヤ
■ＪＭＡＬＯＴＡＵＸ
■シイナ　ヨシオ
■ユウゲンガイシャジェイティーエスコーポレーション
■織笠喜章
■塩島悦子、池田真知子
■シカタ　スミエ
■シカダシヨウイチ
■シゲモリ　カズヒロ
■静岡県磐田市　農林水産課
■静岡県三島市役所　都市整備課一同
■静岡ジュニアユースサッカーフェスティバル　実行委員長　納谷義郎
■雫石町議会、議員互助会
■シズクイシカラゲンキトエガオヲ　ハタケヤ
■シチノヘ　マキコ
■ジチロウレンキヨウサイホジツイ　イクヨ
■カブシキガイシャジツビープロダクシヨン
■ジヌシ　ルミ
■シノザワ　ミキオ
■シバタ　カズヒコ
■シバタ　カツエイ
■シバタ　ミキコ
■シブヤ　テツシ
■シマイトシ・チクマブラント

■島田　節江
■シマダ　ツトム
■シマヌキ　アイコ
■シマンチユマート　ギエン
■清水恒男、昌子
■シミズベ　キヨト
■清水峰子
■シミズ　カズコ
■シミズ　ノブオ
■シミズ　ヒデキ
■シミズギンザシヨウテンガイシンコウクミアユ.シミズシヨウジ　トンチヤン
■志村桂司、静子
■シモカワラ　キミシ
■（イ）シモジナイカゲカ　シモジ　ヒデキ
■下田市商店会連盟　会長　森　秀樹
■シモダシボランテイアレンジメムラ　ヤスエ
■積丹観光協会
■ジヤストワン
■シヤビーブルー
■有限会社重機運輸機工　中川　孝則
■宗教法人　浄土宗　三佛寺代表役員　柴文人　檀信徒一同
■宗教法人　蓮花院
■宗教法人　蓮花院檀信徒一同
■横浜れんげ幼稚園職員一同
■寿楽の息子
■ユウゲンガイシャシヨウナンカンセー
■東海林邦彦
■正定寺門徒会一同
■浄土真宗本願寺派　正定寺

■駒沢秀人
■コマチ　ノボル
■小松平トシエ
■コマバ　サチコ
■小水内正明（元織笠小学校長）
■コムソフトカブシキガイシャ
■コムロ　ジユンコ
■コヤマ　ジンイチ
■コヤマタツキユウクラブ
■コヤマ　シゲル
■コンドウ　ユウジ
■コンノ　シヨウジ
■今野勝之
■一般社団法人札幌市私立保育園連盟
■佐藤　実
■佐々木和浩
■佐藤和久
■佐藤澄江
■佐藤佳奈子
■サイ　クミコ
■埼玉県立熊谷特別支援学校高等部職員　玉田　求
■埼玉県立熊谷特別支援学校高等部職員　丸橋洋子（旧姓佐貫）
■埼玉県立熊谷特別支援学校高等部職員一同
■サイトウ　エイ
■サイトウ　コウイチ
■斉藤　是
■サイトウ　ヒトシ
■サイトウ　ミカ
■サイトウ　ユウイチロウ
■サイトウ　ユタカ
■斎藤文俊
■サイトウ　コオスケ
■サイマ　リカ
■サイトウジヨサンイン　オキ

■正定寺住職　尼子　玄章
■正善寺　佐々木賢秀
■榛南建築工業組合
■シヨウノ　トモコ
■株式会社　叙々苑
■シヨツトバーサムライジエ
■シライシ　ケンジ
■シラト　マサノリ
■白野隆史
■シラハタ　ヒトシ
■シラユキ美容室
■新岩手農協協同組合　代表理事組合長　田沼征彦
■シンク・エンジニアリング株式会社　代表取締役　岡村國弘
■真宗大谷派（東本願寺）宗務総長　安原　晃
■新宿区下落合東町会　会長浅見幹夫　役員一同
■新生山田商店街協同組合
■シンセイコウギヨウカブシキガイシヤ
■有限会社　信　設備　代表取締役　佐々木俊信
■シンドウ　アキラ
■シンニホンセツケイ.カ.トウホクシシヤ
■シンニホンフジンノカイイワテケンホンブ
■新日東鋼管株式会社　代表取締役社長　藤村　誠
■新日本婦人の会　会長　高田公子
■新明和工業株式会社　東北支店
■秦明
■ジンモン　ヨウイチ
■新横浜町内会

■ＮＰＯ法人森林ボランティア山仕事くらぶ　理事長　小田克孝
■杉江宗祐の勲章を祝う会
■スマイルネットワークジャパン
■スマイルネットワークジャパン・日本児童保育出版美術家連盟
■諏訪間史子
■杉浦圭子
■スイカツコクラブタキザワ
■（社）水産土木建設技術センター
■スカイウエイカントリークラブ
■スガワラ　アキオ
■杉浦　正明
■スギタニ　トシオ
■杉並シナリオワークショップ
■スギモト　スミコ
■スギモト　ヒロシ
■逗子市商工会
■逗子市観光協会
■鈴木　彰
■鈴木晴治、芳子
■鈴木正雄
■鈴木安子
■鈴木留理子
■スズキ　アツコ
■スズキ　アヤノ
■スズキ　クミヨ
■スズキ　シンヤ
■スズキ　タカテル
■スズキ　ヒロミ
■スズキ　ヒロユキ
■スズキ　フサコ
■スズキ　ムツミ
■スズキ　ヨシコ

■ヤクサマ　ユウ
■サカイ　ルイ
■酒井タイ
■酒井れいこ
■サカキバラ　ミツコ
■財団法人　佐賀県総合保健協会　常務　山田秀男
■サカナタカ　タカジツコ　オサム
■サカマキ　ユウイチ
■坂宮敦子
■サカモト　ユミコ
■佐久間久信
■さくらクリニック・松戸　院長　宗像　薫
■サクラニチランキヨウカイモトカワ　マス
■サコン　カヨ
■ササキ　カツジ
■ササキ　キヨフミ
■ササキ　シオリ
■ササキ　ツトシ
■ササキ　トシミ
■ササキ　トシユキ
■ササキ　ノブヒコ
■ササキ　ノリヒサ
■ササキ　ヒサシ
■ササキ　ミホ
■ササキ　ミホコ
■ササキ　ヤスタダ
■ササキ　ユリコ
■佐々木敏人
■佐々木康忠
■佐々木由香
■ササゴ　タカシ
■笹原　心
■サツポロチヤリテイーロツク
■サツマ　シヨウコ
■サトウ　アキオ

スズキ　ヨシノリ
スズキミチ　チバケンウラヤスシキタザカエ
STITCHTING 'DE HOFREIS'
スドウ　エイジ
スドウ　マコト
スギタニ　ユウコ
スポーツオート　カブシキガイシャ
スマイルホウモンカンゴステーション
スミカワ　タカユキ
隅田川鮭の会
仙北市立生保内小学校
全国私立保育園連盟
全国保育団体連絡会
全国社会福祉協議会
全国社会福祉協議会・私立保育連盟　日本保育協会
公益法人全国私立保育園連盟
全日本特別支援連盟
Save The Children
医療法人社団　晴晃会　産科・婦人科　育良クリニック　院長　浦野晴美
セイダ　ケイコ
成友興業株式会社　代表取締役　細沼順人
セキ　マキコ
セキ　ユウキ
関　敏男
セキグチ　シユウイチ
セキスイハイムトウカイカブシキガイシャ
セキネ　キヨウコ
積和建設東東京株式会社　代表取締役社長　竹花嗣生
セグチ　リヨウタ
１０００ヒラタ　ミエコ
ゼンコクシチヨウソンスイ
全国町村議会議長会
全国友の会中央部（雑誌「婦人之友」の読者の会）
仙台白百合学園
仙北市　総務
仙北市仙北市職員労組
曹洞宗青年会
カブシキガイシャソウゴウコウコクシヤ
有限会社総合ライフサービス　勝目良一
曹洞宗　岩手県総務所所長　海野義清
ソウベツソウムカ
ソウマ　トモコ
カブシキガイシャ　ソウワ
蕎麦いざか家　田衛門　店長　平林
竹村　隆
ＤＯＮＤＯＮＵＰ
台湾赤十字組織
滝沢市保育協会　川前保育園　父母の会
高橋吉則
台湾赤十字
滝沢南中生徒会
滝沢南中教職員
滝沢中生徒会
滝沢村校長会
滝沢村教職員一同
滝沢村ＪＲＣ委員会
竹原和泉
田中隆二
高松北ロータリークラブ
台湾台北東ロータリークラブ
財団法人　台湾佛教慈濟基金会　日本支部
財団法人　台湾佛教慈濟基金
ツカシタ　ケンタロウ
ツカハラ　カツコ
ツカハラ　マコト
ツザキ　キユウゾウ
ツジ　コバヤシ　ミヨシ
ツヂイノモリコモレビノヤド
土屋日出代
土屋真一
ツツミ　ユキミツ　ノブコ
ツナザワ　アヤコ
椿　育郎
（社）津山青年会議所
ツヤマ　カズヨ
ディーアンドエフゴルフ倶楽部　株式会社　ケンユウ企画　代表取締役　川端　博
テイエヌテイエクスプレス　カブシキガイシャ
カブシキガイシャテイエムネツトワーク
ユウゲンガイシャ　デイズデユーハンキユウヤマダオキヤクサマイチド
デユーハンキユウヤマダシヨウテンカイ
カブシキガイシャ　デラmitsuko Terada（寺田光子）
ＴＥＬＦＯＲＤ　ＪＡＰＡＮＥＳＥ　ＳＣＨＯＯＬ　Ｃ/Ｏ　ＴＨＥ　ＬＯＲＤ　ＳＩＬＫＩＮ　ＳＣＨＯＯＬ　ＤＩＳ　ＴＲＩＣＴ　ＣＥＮＴＲＥ　ＳＴＩＲＣＨＬＥＹ　ＴＥＬＦＯＲＤ
有限会社　田園不動産　従業員一同
デンドウ　シユウゾウ
東京都社会福祉協議会保育部　会保育士会
社会福祉法人徳栄会
ドイツ連邦共和国ラインラントプファルツ州
徳島県私立保育園連盟
東京都社会福祉協議会保育士会
戸倉上山田中学校
トウカイドウフジエダシシヤ　トウキヨウカブシキガイシヤ　タツヒロ
トウキヨウサヤコドウキヨウ32 33年
東京山田　昭和
トウコウカセシヤ　カネシ
トウジマケイ
トウサザツク
トウシンキユウヨウ
時岡ふみ子（旧姓佐藤）
戸倉上山田商工会
トウダ　レイコ
トウバリ　タケシ
トベ　ワタル
トマル　マサノリ
富岡八幡宮神輿総代会
冨田　雅
トリイ　ジョージ
トリイ　ユキ
鳥居瑛子
トリツカ　トシヒロ
トリヤベ　シゲル
ドロップ　高島幹典
カブシキガイシャ　ドンドンアップ
中山　利彦
タカハシ　ヒデユキ
タカハシ　ヒロミ
タカハシ　マコト
タカハシ　マサアキ
タカハシ　ミツユキ
タカハシ　ユウ
タカハシ　ユタカ
タカハシ　ヨシミ
タカマツキタロータリークラブ
タカヨケンセツ　カブシキガイシャ
カブシキガイシャ　タカラシヨウカイ
タキサワ　ユリコ
滝沢市立滝沢第二中学校
滝澤成
滝沢村議会
滝沢村消防団第7分団
タキハラ　フミノリ
タクサリ　シユクコ
タグチ　アキラ
タグチ　トヨアキ
タケイ　ヒロユキ
タケウチ　ケイジ
タケウチ　セイシロウ　タチエ
竹澤節子
タケシ　ヨシコ、ミツタ　カズコ
武下一則、久子
タケダ　アキコ
竹田光江
タケモト　カズコ
タケモリ　シズコ
タケヤ電機株式会社　社員一同
タコマチテニスクラブ　ダイヒヨウ　シイナ
タイキヨクドウカイ　カガタ　ヒデオ
タイコクヤタンピン
ダイシヨウカ
大成建設株式会社関西支店第六区ＣＳセンター安全衛生協力会並びに六甲会
第二白百合乳児保育園
株式会社ダイモン
タカイ　ミツオ
タカイ　ミカ
タガイ　ミツル
タキガキ　ユキエ
タカギ　クニユキ
タカギ　サチコ
タカギ　トシオ
タカダ　イクコ
タカダ　マチコ
タカツカ　ノゾム
タカノ　ミキ
高橋景信
高橋　司
高橋輝昭
タカハシ　アキラ
タカハシ　エイイチ
タカハシ　カツヒロ
タカハシ　シゲル
タカハシ　ジュンコ
タカハシ　セイジ
タカハシ　タケシ
タカハシ　ツトム
タカハシ　トシユキ
タカハシ　ヒロシ
タカハシ　ヒロユキ
タカハシ　ユウコ
タカハシ　ユウコウカイ　カタカハシ　ヒデオ
タカハシ　ヒロミ
タカハシ　マコト
タカハシ　マサアキ
タカハシ　ミツユキ
タカハシ　ユウ
タカハシ　ユタカ
タカハシ　ヨシミ
タカマツキタロータリークラブ
タカヨケンセツ　カブシキガイシャ
カブシキガイシャ　タカラシヨウカイ
タキサワ　ユリコ
滝沢市立滝沢第二中学校
滝澤成
滝沢村議会
滝沢村消防団第7分団
タキハラ　フミノリ
タクサリ　シユクコ
タグチ　アキラ
タグチ　トヨアキ
タケイ　ヒロユキ
タケウチ　ケイジ
タケウチ　セイシロウ　タチエ
竹澤節子
タケシ　ヨシコ、ミツタ　カズコ
武下一則、久子
タケダ　アキコ
竹田光江
タケモト　カズコ
タケモリ　シズコ
タケヤ電機株式会社　社員一同
タコマチテニスクラブ　ダイヒヨウ　シイナ
田苗　明
タダ　ケンイチ
タダ　マチコ
タダ　ミキオ
タダ　ルミコ
多々羅政子
立川ハウス工業株式会社　代表取締役　栗原　元
タツシマ　ヒトシ
タテシタ　ノリエ
タテヤマ　フミコ
タテヤマクリニック
タナカ　イクミ
タナカ　ケンイチ
田中　幹人
タナカ　ミチテル
田中和明、三枝子
田中次郎
田中康幸
有限会社　田中酒販
タニハラ　マサトシ
タニフジ　コウヘイ
タニモト　トモユキ
タニモト　ヤスコ
狸の穴　店主　成岡真、お客様一同
タネイチ　ナギサ
種本隆一
タハラ　フクミ
タブチ　サトシ
千葉県香取市神生（旧山田町）高齢者クラブ「寿昌会」
千葉県香取市：ボランティアグループやまゆりの会代表　平野和子
千葉県香取市：山田町文化協会ダンス愛好会一同
千曲市
千曲市議会一同

中村恵子
ナイトウ　カツヤ
ナイトウ　キヨミ
ナイトウ　シンヤ
カ.ナウビレッジ
ナオイ　カツヒト
ナカイ　ノブヒロ
永井敬司
中岡正則
ユウゲンガイシャ　ナカガワシヨウジ
ナカガワ　コウイチ
ナカガワ　トモシ
長崎桂子
ナガサワ　モトノリ
ナカシマ　テルミ
ナカシマ　ミツル
ナカジマ　サトミ
ナカジマ　スグレ
ナカジマ　ヤスオ
中塚祐司
ナカニシ　ミカ
ナカニシ　ヨウスケ
ナカノ　マミ
長野県阿南町
長野県千曲市長　近藤清一郎
長野市水道局　給水班
中浜孝行
ナガミネ　アサコ
（ガク）ナカムラガクエン
ナカムラ　キヨコ
ナカムラ　クミコ
ナカムラ　サトコ
ナカムラ　タエコ
ナカムラ　ハナ
ナカムラ　ヒロキ
ナカムラ　マサトモ
ナカムラ　モモコ
ナカムラ　ヨシミ
永守勝子
ナガヤ　タケヒロ
ナカヤマ　ヨウコ
ナカヤマトモコ
ナガヤマ　キク
ナグラ　ジユンジ
ナゴミノヤドユミガハマ
名古屋医療センター　薬剤科
ナス　ツネヒト
名取和美
波岡茂行
名寄市
名寄市立豊西小学校児童
ナラザキ　ジユンイチ
ナルセ　サチコ
南部町役場　企画調整課
南部町福地中学校生徒会
ナンボ　ヒサオ
日本保育協会
日本保育協会岩手県支部
日本保育三団体
社会福祉法人　日本保育協会
日本保育協会　全国私立保育園連盟　全国保育協議会
日本保育協会　全国私立保育園連盟　全国保育協議会（第4期）
日本保育協会　岩手県支部
日本財団
公益社団法人日本社会福祉士会
新潟商事株式会社　代表取締役会長　媚山勝英
ニイジマ　ケンタロウ
ニイツ　ヒサエ
ニカワ　アキヒサ
ニコニコリサイクルジツコウイインカイ

ニシ　ナツコ
西川　忠（サンエイ株式会社代表取締役社長）
西川　忠　藤枝市詩吟
ニシダ　ミチヒロ
ニシダテ　シノブ
ニシデ　マイコ
西根ライオンズクラブ
ニシムラ　サトシ
西村ともえ、南ケイ子
ニシモト　オサム
ニシモト　ヨシエ
20セイキイザカヤ　タカヤ
27ニンノアーティストプラウ
ニセイカイメジロ　コジマジロウ
ニタナイ　サヤカ
カブシキガイシャ　ニチキ
日蘭協会
カブシキガイシャ　ニツキヨウコンサルタント
カブシキガイシャ　ニック
ニツケイケンザイコウギヨウロウクミ
ニツコウ　ミヨジ
ニツコウジダンシントイチドウ
ニツシンマルベニシリヨウカブシキガイシャ　セイブチク
ニツタ　カオル
新田陽子
株式会社ＮＩＰＰＯ東北支店
常務執行役員支店長　早稲田　高茂
（財）日本鳥獣保護連盟　神奈川県支部　支部長　室伏友三
ニホンエマソン　カブシキガイシャ
廣田みつ子
ヒロタ　ヒカル
ヒロタアツコ
ヒロハマ　ミエコ
ＶＩＮＴＡＧＥ24
ブラジル岩手県人会
福士吉平
福岡市青年部
フレックスジャパン株式会社
藤枝市文化協会
富士宮職員有志
フルオヤ　ミツヒロ
フカザワ　フミハル
フカヤシリツヤツモトシヨウガツコウ　シン
フクイエ　ヨウコ
フクシ　ヨシヒト
フクシ　ヨシマサ
フクシ　レイコ
カ，フクシマコウサクシヨ
福島忠夫
フクシマ　ヨシコ
福士由美子
フクダ　タツシ
フクダ　トシカツ
フクチ　ヒサシ
福原　潮
ふじえだ元気の会ネットワーク　代表　新出幸雄
藤枝市詩吟　吟舞愛好会　代表　吉野岳晴
藤枝市文化協会民舞連合会会長　高野伍郎
藤枝　肇
藤枝春美
フジエン
カブシキガイシャ　フジコー
フジサワ　ケンジ
フジサワ　キセコ

日本共産党中央委員会
日本工学院専門学校　コンサート・イベント科　16期1組・16期照明コース一同
日本工学院専門学校　助川香織
日本工学院専門学校　平緒邦子
日本工学院専門学校　吉野雄一郎
日本国土開発株式会社　代表取締役社長　工藤睦信
日本自治体労働組合総連合中央執行委員長　野村幸裕
日本自治体労働組合総連合千葉県本部
日本赤十字社
ＮＰＯ法人　日本理美容技能協会
ニホンフイニツシユ　カブシキガイシャ
日本ボランティア会
日本郵政募金会　代表　片野　健一
日本ユーラシア協会岩手県連合会
庭田　卓夫
沼宮内中ＰＴＡ
沼津市立第三中学校
沼津市
沼津市芸術祭ふれあい太鼓
ヌマサキ　シンゴ
沼田資源株式会社　安全協力会　チャリティーゴルフコンペ
ヌマズチヅクリ　カブシキガイシャ
ヌマズ　ハーモニカクラブ
ヌマヅシ　ピーティーエーレ
フジサワ　シヨウジ
富士市社会福祉協議会
フジタ　ナオコ
フジタ　ノリコ
フジタ　マモル
フジナミ　アキヒサ
ふじポン義援金
フジマツ　ヒロミ
藤村澄子、正彦、順子、聡子
フジムラ　ススム
フジモト　ケイコ
フジワラ　サチコ
フジワラ　マドカ
フセ　イクコ
フセ　ノリコ
フセ　ミノル
フナコシ　ユウコ
フナヤマ　マユミ
カブシキガイシャ　フヨウリースハンバイ　ジユウギヨウイ
カブシキガイシャ　ブリリアント
カブシキガイシャ　ブルーミングエージェンシー
古河機械金属株式会社　代表取締役社長　相馬信義　古河産機システムズ株式会社　代表取締役社長　渡邉　修
ふるさと山田同郷の会
フルサトヤマダドウキヨウノカイオガワツク
フルシヨウ
フルタ　ミズホ
フルヤ　ヒロカズ
ヘイセイナナネンドソツギ
ペンゴシ　クサナギ　ヒデキ
保育三団体被災地支援
香港コロボックル

ハセベ　イクエ
ハセベ　コウヘイ
八王子市議会議員　伊藤しょうこう
株式会社　八州
ハットリ　ケイスケ
ハットリ　タカヨ
カブシキガイシャハナブサキギヨウ　イマイ　ヨシエ
英聡子（元船越小学校長）
（フク）ハナブサカイ
ハナワ　シンイチ
ハマダ　トクシゲ
ハマベ　リヨウヘイ
ハマモリ　アツシ
ハヤカワ　チエ
ハヤシ　ケイコ
ハヤシ　ヒロコ
ハヤシ　リヨウスケ
ハラ　アスカロビン
ハラ　ジユンペイ
ハラ　ノリコ
ハラ　ハルオ
ハラ　ヒロシ（ジエシカ）
ハラ　マドカリリアナ
原フミエ
ハラナガ　セイキ
ハルタ　セイロウ
パワートウザピープル
株式会社ばんけいリサイクルセンター　代表取締役社長　大杉　章
ハンダ　サトコ
バンドウ　マユミ
バンナイ　ナナミ
バンバオムロヤマイセキ二マナブシミンフオ
公益社団法人東日本大震災支援雇用
社会福祉法人　マナ会
マルシンフーズ株式会社
マエカワリユウリズムタイコ
ユメノカイ
前田恵美
マエダ　ヨウコ
牧島良一
マキタ　ユリ
マキノハラシチヨウ　ニシハラシゲキ
マクアイバー　ミツコ
マゴタ　チエコ
マシコ　クニアキ
マスザワ　ケンタロウ
マチダ　アキラ
マチダ　ナオコ
マツイ　ノリユキ
マツオ　ヨシヒロ
マツオカ　チエ
マツクウイーン　ムラタ　マサヒロ
松島順二
松嶋伸三
松嶋辰巳
松嶋マサヨ
マツダ　タカヒロ
マツダテ　ユミコ
松戸気功クラブ　関谷富喜子
松戸市和太鼓連盟　会長　木村宏　鳳太鼓　会長　根本洋三
マツナガ　ミズエ
マツバラ　ヨシコ
マツモト　アキヒト
丸一物産株式会社　代表取締役　古橋利雄
株式会社　丸方ガス　代表取締役　黒澤喜久雄
マルヤマ　カズアキ　トウキ

ンゴウカイ
根子　光子
ネツツトヨタシズオカカブシキガイシャ
（フク）ネムノキフクシカイ
ネリマ　ニシモト　ヨシエ
ネリマヒカリガオカコウエンミナミクラブ
野井和光
ノウシ　チタケ
ノガミ　ハルヒト
野上マリ子
ノナカ　チヨコ
ノナカ　イチコ
ノナミクリニツクカンジヤサンイチドウ
Ｂａｒ　客家（ハッカ）
ハガ　ヒロカズ
ハガ　ヒロキ
ハガ　マサカズ
芳賀榮三
ハギニワ　トシ
ＫＩＮＺＯ　ＨＡＧＩＷＡＲＡ
ハギワラ　タクロウ
ハギワラ　ノブコ
白水岩人
ハコイシ　マミ
ハコイシ　ルミ
ハシグチ　ミツオ
ハバシタ　タカノリ
橋本　太郎
ハシモトシヤクシヨツリクラブカイケイセキ
株式会社パスコ　社員有志一同
ハセガワ　シン
ハセガワマナミ　タチカワシアケボノチヨウ
東社協保育士会
東山田中学校
東山田４丁目町内会
ビックシャワー下田実行委員会
Ｂ＆Ｇ財団
ヒガキ　コウイチロウ
東出光世
東日本大震災復興支援波津実行委員会
東日本ハウス株式会社　代表取締役　社長　成田和幸
東原桂守
ヒノ　コウキ
日野原鉄久、純子（旧姓倉本）他一同
ヒマワリガツキユウ　トウホクダイキヨウイ
兵庫県アートトラック協会会長　石田貴嗣
ヒライ　アキコ
ヒライ　シユンエイ
平泉町会計管理者
平泉町長　菅原正義
平川市長　大川喜代治
平川市総務課
ヒラサワ　マコト
ヒラサワ　ミツコ
ヒラタ　ミエコ
平舘　良
平林昌芳
ヒラヤマ　ノボル
広小路町自治会
ヒロサキネムノカイフアミリー
弘前ねむの会ファミリーコーラス＆ノーザンウィング代表
木村直美
ヒロセ　ヒデタカ

ヨウト　キタク
マルヤマキクコ
三重県四日市私立保育園連盟
三篠会京町いづみ保育園
みつばさ保育園
三島市商工会議所
三島市商店街
ミウラ　シンゴ
三浦産婦人科内科医院
ミウラ　フミ
有限会社　三重人材ニュース代表取締役　廣橋眞智子
ミシマカンナミノウキヨウハンバイカ
ミス　ユウコ
ミズノ　カズヒコ
ミズノ　シユウイチ
ミズモト　ヒロアキ
ミゾバタ　ノリコ
ミツマル　ジユンジ
ミト　ヒデトシ
緑の党
ミドリヤヤルキヨク（ド）
ミドリヤヤッキョク
ミナト　シンゴ
ミチマタ　イサオ
ミナト　テイコ
ミナミダテ　セイシ
南房総岩井支援隊
三橋芳夫
ミマ　ナオキ
ミマタ　カツヒロ
ミヤ　アツシ
宮内二集落
ミヤケ　シンジ
ミヤザキ　トシアキ
宮下光夫
カ，ミヤシタシヨウテン
カ，ミヤシタシヨウテン　シ

ヤインイチドウ
宮下　浩
ミヤタ　ミツヒロ
宮野友輝
ミヤマエカズアキ
有限会社　宮本プロパン　代表取締役　宮本榮
ミヤモト　トシアキ
ミヤヤマ　ヒロシ
明星大学　山田町応援し隊
代表　種田健太郎
社団法人　三次青年会議所
理事長　森下　和彦
（イ）ミヨシナイカシヨウカキカ
ムラカミ　トモコ
ムラカミ　ムツコ
ミワ　リヨウタ
グループホームみんなの家　与野鈴谷職員一同
武藤千賀子
ムトウ　クニハル
ムトウ　ミズホ
ムライ　ヒロシ
ムラカミ　アキラ
村上美枝子
村之郷一
ムラタ　ユウスケ
ムラヤマ　タカシ
メグチロ　ウルシバラ　メグミ
メグロ　リヨウヘイ
めだかの学校　代表　杉山知子
メンノボウ　トリデ　ナカ
盛岡市立青山小学校
盛岡大学短期大学部
森嶋瑤子
盛岡市私立園長会

モイチ　クミコ
ユウゲンガイシャ　モガミシヨウテン
モトシユク　ヨシオ
モリ　ハルミ
モリ　アヤコ
モリオカシカイケイカンリシヤ
モリオカシンリカウンセリングセンター　ダ
モリカワ　ワカコ
モリタ　カヨコ
モリタ　トモユキ
モリタ　レイノスケ
モリバタ　ヤスオ
モリヤ　アキフミ
モロ　ユウジ
門間　傳
社会福祉法人山百合会本部法人事務局
矢中保育園
山田町社会福祉協議会
山田不来方会
山田町水産加工業組合
山田靖子
山田町復興支援の会　代表
小山　立
ヤギ　ユキオ
八木　修
ヤガワ　トモヤ
ヤギ　マサシ
株式会社　薬王堂　代表取締役社長　西郷辰弘
八雲町訪問介護事業所　介護福祉士　奥田文恵
ヤスザワ　ハヤオ
ヤスダ　カヨ
ヤスダ　マキコ
ヤタチクマチヅクリスイシン

キヨウギカイ
ヤチ　カズヒト
ヤハバ　タカシ
ヤマイリ　トシユキ
ヤマウチ　カズコ
ヤマウチ　ナオ
ヤマウチ　ヒロフミ
ヤマウチ　メイ
ヤマウチ　ユキコ
ヤマウチ　リノ
ヤマオカ　タケヒト
山形呈太
有限会社　山金商店　代表取締役　山道金太郎
ヤマグチ　ナオコ
ヤマグチ　ノリコ
山口茂子
山口信二（祝賀会参加者一同）
山口凌平
ヤマザキ　ヒデオ
ヤマザキ　ユミコ
ヤマザキ　ヨシコ
ヤマザキ　リヨウサイ
山崎啓一
山崎徳子
山崎早智子
山條貞子
カブシキガイシャ　ヨウテン
元山田加工組合工場長兼営業課長　福村聖悟
ヤマダ　カツヒデ
ヤマダ　コウゾウ
ヤマダ　シユウイチ
ヤマダ　ジユウマ
ヤマダ　ジユンイチ
ヤマダ　タカシ
ヤマダ　タカヒロ
ヤマダ　タダオ

ヤマダ　ヒデアキ
ヤマダ　マサコ
ヤマダ　マユミ
ヤマダ　モトヨシ
ヤマダ　ユウイチ
ヤマダ　ユミコ
ヤマダ　ヨウコ
ヤマダ　ヨシマサ
山田二十五年の会（矢巾町）　会員　波岡康
ヤマダカンノンジゾウリ
山田邦子、ラサール石井、藤江伸二、季正寿
山田公民館
山田自治会（新居浜市）　会長　谷口武男
ヤマダジゾウソン（オオ）
山田町文化協会ダンス愛好会（香取市）
山田利男
山田直輝
ヤマダフレアイマツリウンエイイインカイ
ヤマダマチ
ヤマダマチ（観光協会）
ヤマダマチサイガイギエ
山田町特産品販売協同組合
ヤマダマチフッコウシエンノヤマビ　クミコ
ヤマモト　トモコ
ヤマモト　ノブユキ
ヤマモト　ミツタカ
ヤマヤ　ミツユキ
ボランティアグループやまゆりの会代表　平野和子（フク）
ユウイクカイ
ユウキ　ススム
宗教法人　妙智會教團　代表役員　宮本惠司

ユウシンデンキ　カブシキガイシャ　シヤインイチドウ
ユダ　トオル
由良町立由良小学校児童会（和歌山県）
萬　きそ
横田隆男
横澤　節
横浜ロータリークラブ
横浜北ロータリークラブ
ヨゴウ　タイチ（トウキヨウ）
ヨコカワ　マコト　キヨウコ
ヨコサワ　サトミ
ヨコオ　ユウイチロウ
ヨコタ　アキフミ
ヨコタ　キヨウコ
ヨコタ　ケンイチ
ヨコタ　サワコ
ヨコタ　マサヒロ
ヨコタ　ミユキ
ヨコタ　ミワコ
横田康博
横田由佳
横浜北ロータリークラブ　会長　木村博　台湾台北東ロータリークラブ　会長　邱　璟芬
ヨコフジケ　ヨコフジヒテ
ヨコミズ　ショウイチ
ヨコヤマ　セイイチ
ヨコヤマ　トミコ
ヨシイ　アキコ
ヨシオカマチギカイギチョウ
イワザキ　ユキ
ヨシカワ　フクトシ
ヨシザワ　アイ
ヨシズミ　ユリ
ヨシダ　タカオ
ヨシダ　ウチダ　リウ

ヨシダ　ケンイチ
ヨシダ　トモコ
ヨシダ　フジオ
吉田和道
ヨシノ　ケイコ
吉野石膏株式会社仙台支店　仙台支店長　佐藤樹郎（たつろう）
ヨシハラ　マサヒコ
吉原眞美、和紀子
Ｊｏｓ Ｌｉｍ（ヨスリム）
株式会社ヨネイ　田中豊誠
ヨネシマ　アキラ
ヨロズ　コウイチ
ライアン　ジユンコ
ライオンズクラブ国際協会３３２-Ｂ地区　地区ガバナー
相原文忠
ライトアップニツポン
楽々会
ラジオスクエア　エハラノフラスペートコウキヨウガクダン　ダイヒヨ
リスイカガク　カブシキガイシャ
立正佼成会一食平和基金
カブシキガイシャ　リユウツウギケンド
林間病院一同
ルクセンブルク国　千尋・ボルファール
レイニアー　ヘスリンク
レッズスノーボードショップ
財団法人　老年病研究所附属病院　内科医師　勝山　彰
ロツクオンジムキヨスクカ
和田祥子
わかくさ保育園
わかたけ保育園

若葉保育所
渡部祐子
和歌山市校長会
渡辺拓郎
ユウゲンガイシャ　ワイアンドケイ
ワイエス22ネンカイ　サトウ
ワカサ　カナエ
ワカバヤシ　タマキ
ワカマツ　リエ
和歌山県水墨画協会　会長　小川華鱗
ワジマシギエンキン（シキタクブン）
ワダ　マユミ
ワダ　ヤエミ
和田秀幸
有限会社渡辺工務店　代表取締役　渡邊義行
ワタナベ　カオル
ワタナベ　トオル
ワタナベ　マサユキ
ワタナベ　マリ
ワタナベ　マリコ
ワタナベ　ヨシユキ
ワタナベ（オリカサ）エツコ
渡辺　貢、たみ子
渡辺静哉
ワタナベ　マサコ
渡邊義行
ワタネベ　トオル
ワヤナベ　ミホコ
ワタベ　ヨウコ
渡部民子
わらび座劇場　副支配人　大和田しずえ

アイン薬局（新宿）
青森県・秋田県・岩手県農業法人会
青森県歯科医師会　二戸支部
秋田祐夫
青森県りんご協会
阿部エリカ
愛と緑を育てる緑の党
アトリエミルクル
アケボノ保育園
アピタ・ピアゴサークルKサンクス&花王共同企画
阿部　早百合　氏
秋田県国公立協議会
青木総合歯科
阿部自動車
アライス・ファインプロダクツ株式会社
アリコASCボランティアの会
株式会社あらき　板橋勇二
アストリア　スタッフ一同
アイン薬局（札幌）
IBC NPOアレルギー支援ネットワーク
阿部　真起子
秋田県仙北市
阿部　氏
秋田県小坂町（水道課）
あさひ保育園　園長　船橋様
IBC 岩手放送及びユースキン製薬株式会社
安部才郎・明子様
秋田県　仙北市
青森県りんご協会青年部
青森県平川市民

2 物資・炊き出し

アイン薬局（新宿）
青森県・秋田県・岩手県農業法人会
青森県歯科医師会　二戸支部
秋田祐夫
青森県りんご協会
阿部エリカ
愛と緑を育てる緑の党
アトリエミルクル
アケボノ保育園
アピタ・ピアゴサークルKサンクス&花王共同企画
阿部　早百合　氏
秋田県国公立協議会
青木総合歯科
阿部自動車
アライス・ファインプロダクツ株式会社
アリコASCボランティアの会
株式会社あらき　板橋勇二
アストリア　スタッフ一同
アイン薬局（札幌）
IBC NPOアレルギー支援ネットワーク
阿部　真起子
秋田県仙北市
阿部　氏
秋田県小坂町（水道課）
あさひ保育園　園長　船橋様
IBC 岩手放送及びユースキン製薬株式会社
安部才郎・明子様
秋田県　仙北市
青森県りんご協会青年部
青森県平川市民

Ａｍｉｔ　ＳＥＴＨＩ
株式会社荒井工務店
安津畑隆之
青森美術愛好会・（財）エムオーエー美術文化財団道央支部
株式会社アウォークス
青森市横内あおもり美術愛好会
味の素株式会社人事部
新井幸彦
青森県中泊町
青木景子
足利八木節連合会
安達洋子
味の素
あらた八戸支店
アピオ
青森県南部町
青森県六ヶ所村
青森県県立舘村
秋田県羽後町
阿部　祥代
株式会社アミューズ（ＢＥＧＩＮ担当）
秋田市立高清水小学校児童会
株式会社アイ企画
阿部園芸店
アソカ幼稚園
アディダスジャパン女性部員
宗教法人安養寺　光徳保育園
阿部　洸太
アディダスジャパン株式会社
あすなろ保育園
ＮＰＯ法人アレルギー支援ネットワーク
朝野　玉美
東京青山女子学院
有田市役所　田代利彦

財団法人青森県りんご協会・青年部
有田市役所
アーテストたちによる手作りイベント
ＩＢＣ岩手ユースキン製薬株式会社
アディダスジャパン
青森県立保健大学　吉池
青森南部町達者村ふれあい隊
財団法人青森県りんご協会青年部
アトリエミルクル
アケボノ保育園
アピタ・ピアゴサークルKサンクス&花王共同企画
阿部　早百合　氏
秋田県国公立協議会
青木総合歯科
阿部自動車
アライス・ファインプロダクツ株式会社
アリコASCボランティアの会
株式会社あらき　板橋勇二
アストリア　スタッフ一同
アイン薬局（札幌）
IBC NPOアレルギー支援ネットワーク
阿部　真起子
秋田県仙北市
阿部　氏
秋田県小坂町（水道課）
あさひ保育園　園長　船橋様
IBC 岩手放送及びユースキン製薬株式会社
安部才郎・明子様
秋田県　仙北市
青森県りんご協会青年部
青森県平川市民

■青森県倫理法人会
■青森県南部長商工会青年部
■ＮＰＯ法人秋田メビウス
■味の素株式会社
■有田市
■阿智村商工会
■荒川地区振興会
■荒川婦人会
■一戸町
■いであ株式会社
■岩手県土地家屋調査士会
■伊藤勢至、大宮惇幸、高橋昌造、三浦陽子
■岩手県北バス
■池田
■イシワタ大作戦　石渡慎也
■石川県警察本部
■いのち・くらし・みどりの会
■社会法人岩手県薬剤師会
■岩手学生協
■石川県　田中美絵子事務所
■岩手県農業法人協会会長　石川鉱一
■株式会社岩電
■岩手町
■糸坂智子
■ＮＰＯいわて・郷プロジェクト
■伊藤直子
■岩手県野球連盟　雫石クラブ
■ＮＰＯ岩手
■石崎加希子
■伊藤功
■石井　清
■岩手県司法書士会
■伊藤　学
■いわて生活協同組合
■ＮＰＯ法人いわて脳外傷友の会イーハトーブ
■エーザイ株式会社
■ＮＨＫ
■遠藤昭男
■株式会社ＡＡＡ-Ｇｒｏｕｐ
■榎　昌範
■ＭＥＤ
■株式会社エービーシー・マート
■ＡＯＰ有限責任事業会社　前島
■愛媛県町村会
■ＨＢＳ栃木営業所
■海老原清
■株式会社エネック
■株式会社　Ｍ．Ｃｏ．
■株式会社エビヌマ
■永昌寺被災地支援の会
■株式会社エルフ
■ＮＨＫ
■エイメイさん
■遠藤このみ
■ＮＯＰ高麗
■遠藤明子　大沢出身
■ＮＢＣ作戦（北海道）
■株式会社ＥＮＥＯＳウィング
■ＳＰＣ東北ライブハウス大作戦
■エステベール伊藤　氏
■江田島市立美術館
■ＥｉｇｅｎＡｒｔ ｍｕｓｉｃ
■小原鉄工
■株式会社大岩工業
■小澤廣芳
■奥州市国際交流協会
■大森秀悦
■大淵第一小学校６年　藤田楓
■大北証券
■小原　巌
■大久保　誠
■岩手県教職員組合下閉伊支部書記長　坂下正典
■伊藤栄一
■岩泉乳業株式会社
■入江忠徳
■岩手県牛乳普及協会
■伊藤美咲
■石毛弘子
■井上明子
■岩手・沖縄　かけはし交流協会
■飲食店４業者　ＴＥＣＯ７、ｍｏｔｔｏ、ＤＥＫＹＯ、柿沼修
■岩手日報サービスセンター
■岩手県中小企業団体中央会
■岩手中央酪農業協同組合
■いわて暮らし田舎暮らしサポートセンター
■石田陽子
■出雲ＪＣ
■岩手県地域婦人団体協議会
■石川錬治郎
■いわて生協
■岩田智
■社団法人今治青年会議所
■一野辺製パン株式会社【岩手県】
■岩手県県民暮らしの安全課
■食の安全安心担当
■株式会社岩手畜産物流センター【岩手県】
■伊尻郁江他
■伊藤智彦
■岩手県漁業協同組合連合会冷凍工場
■岩手県水沢営業所中田
■岩手県
■株式会社岩手畜産流通センター
■岩手畜産流通センター
■株式会社イトーヨーカ堂
■糸井由美子
■伊藤文祥
■岩手県マーマ食品
■岩邉八郎
■株式会社岩手エッグデリカ
■岩手県薬剤師会
■石川県穴水町
■有限会社巌工務店
■池薬須明子
■いとうひでみ他
■株式会社イチヤママル長谷川水産　株式会社エネック
■石峠地区自治会婦人部
■石峠地区自治会
■株式会社インサイトリサーチ
■岩手生協
■伊藤　實
■五十嵐　聡江
■岩手富士丸会
■伊藤勢至
■岩手県教育委員会
■岩手県小学校練習帳編集委員会
■岩手県生活衛生同業組合連合会
■市場保育園
■岩手県畳工事業協同組合
■（社福）銀杏の会バンビの森こども園
■いるまこども園
■岩手県医師会
■岩手県立総合教育センター
■いしまる　よしえ
■岩手県医科大学付属病院
■岩手県自治労連
■（社）岩手県薬剤師会
■岩田由美子
■岩手県予防医学協会
■飯山助け合いグループ
■岩手県保険福祉部保健福祉企画室
■岩手県私立保育連盟
■いずみ企画　小野田いずみ
■一戸町社会福祉法人カナンの園
■一関県立盤井病院ボランティアばっきゃの会
■岩手大学三陸復興推進本部釜石サテライト
■一歩一歩一歩山田
■伊東カヨ
■今井真見　山本真弓
■伊藤真海
■岩手交通安全協会
■株式会社イー・エフ・インターナショナル
■一條知美
■岩元
■いわて三陸復興のかけ橋推進協議会
■岩手県生命保険協会
■岩手県サッカー協会
■いなかフェ　畠中　氏
■株式会社イー・エフ・インターナショナル
■伊藤　真海　氏
■いずみ企画　小野いずみ　氏
■伊藤　真海
■岩崎　剛久
■有限会社インパルス
■生田保育園
■因島文化協会
■社会福祉法人　伊東市社会福祉協議会
■いわて郷プロジェクト　マブリットキバ
■ＮＰＯ法人岩手子ども環境研究所
■インターナショナルジャパンイシマルヨシエ
■岩手県合唱連盟
■一戸潤壱
■飯村蒼丘
■一戸隆男
■駐日イラン大使館
■岩手県畜産協会
■岩手県農民連　女性部
■今治青年会議所
■伊藤様（有志会）
■一戸町商工会
■石峠自治会
■上家　猛志
■梅香伸行
■梅澤司　ｇｕｌｐ、ちゃぶだい、ふくきる、まるけん
■株式会社梅田商店
■上野正太
■有限会社内沢工業
■打越パイプライン
■打越パイプライン　ダニエル・カール
■内田智久
■内館照明
■浦幌町役場　田村優聴
■羽部正義
■鵜木洋子
■有限会社ウィルビー
■内舘歯科医院
■浦和ひなどり保育園
■牛ヶ谷保育園　たま保育園
■上澤さん
■上澤
■ウルトラマン基金事務局
■ＮＴＴ東日本
■及川瞳・菊池響子
■及川誠志
■小野　浩
■大熊一郎
■小原智養
■大阪司法書士会
■岡村直美
■岡野
■小木曽淑子
■株式会社奥村組
■有限会社Ｏ・Ｃ・Ｍ
■株式会社岩手マイタック
■大石早苗
■株式会社オリオンベーカリー
■株式会社オリオンパン【岩手県】
■奥みのり
■大森裕子
■大久保恭子
■小原征二
■有限会社小野寺建設
■太田　精肉店
■大塚製薬株式会社
■株式会社オリエンタルランド
■オランダ王国大使館
■奥州市立細工小学校
■奥山　道江
■大柴　美穂他９名
■大和田　健二
■有限会社オノ・グラフィックス
■おがち保育園
■小沢田　晃　福田　修
■おばちゃんのきもちプロジェクト
■小澤　昇
■小野寺真
■岡市・西垣
■おすし支援
■お好み焼き・菊池響子
■小沢田晃
■太田敏晴
■大阪市　株式会社久本組
■大森恵美子
■大川
■お好み焼き　ようき屋本舗
■ＯＭＦ岩手支援プロジェクト
■大沢地区民生児童委員協議会
■ＯＭＦインターナショナルラ
イトハウスブック
■岡本次男
■大沢地区第十分団
■大塚食品
■大塚食品（メイト）
■大阪　熊野一郎　邦子ご夫妻
■大田
■織笠（山田出身）
■岡山県倉敷味野中学校
■尾崎　玲子　氏
■岡田保育園
■大友　勝彦
■太田　健二
■大野木工生産グループ
■奥山　吉夫様
■大曲仙北左官業組合
■桜美町若者会有志
■奥尻町観光協会
■大田原市商工会議所青年部
■岡山県アイドルパンチ
■岡山県津山青年会議所
■株式会社小川テック
■株式会社大塚製薬工場
■貫洞　ケサノ
■加藤アキラ
■関東倫理法人会
■海軍ネイビー
■川秀商店
■関東自動車工場
■河井工業株式会社
■金子みすゞ記念館
■鹿角市民の会チーム絆みんな友達プロジェクト
■社会福祉法人鹿角市社会福祉協議会「鹿角市民の会チーム絆」
■川前保育園
■カワデ教材販売株式会社
■株式会社偕成社　編集部
■川村商店
■加賀　富雄
■鹿志村　美也子
■株式会社河合楽器製作所
■金田　美樹
■株式会社学研教育みらい
■神城文化の森　藤田　勲
■加賀設備
■学研ネクスト地震対策部門
■川崎市国際交流協会
■学研ネクスト特別推進部
■フォトエッセイスト加藤芳明
■偕成社
■学研ネクスト地震対策部門４０００
■関西大学ＯＢ会　物流企業の経営者
■学協社
■川口和子
■川岸利光
■神奈川足柄マサカリー・神代活性化協議会合同、わらび座研修生
■神奈川未来カンパニー
■韓国民団岩手県本部
■金沢青年会議所
■川崎市　坂上恒平様
■釜石シーウェイブス
■カリタスジャパン
■金沢市役所
■川石水産
■株式会社カガヤ
■川村和子
■鎌田様方　櫻井澄子
■河原林佳代
■神奈川大学経済学部
■加藤芙峰弥
■環境維新隊　理事長　浜松敏廣
■かずさ災害支援ネットワーク
■神村真人
■株式会社勝建　早川勝実
■川村由香子
■鹿島道路株式会社北日本支店
■花王プロフェッショナルサービス株式会社仙台ＤＣ
■家庭倫理の会　スペシャルオリンピックス岩手
■がんばろう東日本支援プロジェクト
■柿野澄香
■金子桂子
■金子静江
■川千田健郎
■加藤光子
■甲斐厚志
■掛本浩司
■掛本浩司、大和雅子、杉山美紀、杉山美穂、藤沢由佳
■花王株式会社酒田工場
■花王
■花王ロジスティクス
■香川県町村会
■株式会社上組
■川辺七重
■花壇　宗次郎
■笠木裕美子
■片山幹

■財団法人　川崎市体育協会
■Ｃａｆｅ Ｄｉｖｅ
■株式会社川上木材
■勝山地区自治会
■上豊間根自治会
■ガソリンスタンド　サカモト
宇佐美
■学研ネクスト地震対策本部
■北日本銀行（山田支店）
■協和発酵キリン
■木村酒店
■菊田恵美子
■株式会社救命
■菊池長右ェ門事務所
■吉川竜二
■岸　茂美
■橋梁新聞
■キューピー株式会社北東北営業所
■北上済生会病院
■岐阜県神戸町役場
■木村孝宏
■菊地リツ子
■北印、北日本青果株式会社
■輝光建設株式会社
■岸和団だんじり祭震災復興協議会
■菊池郁夫
■ギャラリーはこ哉
■木澤信隆
■菊池清
■菊池寿宏
■木村瑞穂
■清見　利子
■岐阜県垂井町
■岐阜県揖斐川町
■菊池香織
■木村　洋子
■希望のひまわりプロジェクト

■吉川　淑子
■北浜自治会
■菊田　恵美子
■菊田　悌一
■きりたんぽなべ支援
■岐阜ボランティア
■菊地政隆
■北上川に鯉のぼりを泳がせる会
■京都きらら学園ＰＴＡ
■ギャラリー未来
■菊地みち子
■山田町議会議員　木村様　千葉県　白岩様
■岐阜ＮＧＯ　この指とまれ
代表　後藤様
■京都府印刷関連団体協議会
■京都舞鶴ワンモール
■京セラコミュニケーションシステム株式会社ＫＣＣ社
■牛べえ
■協和電工株式会社
■葛巻町役場
■黒田佳子、岩本由佳
■クライスラー日本株式会社パーツセンター
■クライスラー
■栗須裕子ほか8名
■黒田修治
■熊野寿彦
■ＮＰＯ群大クラブ
■ＤＨＬグローバルフォワーディングジャパン株式会社
■株式会社グローバルウォーター堀内
■楠田智子
■久野雅代
■桑原顕一
■工藤正則

■株式会社黒島建設
■ＮＰＯ法人クロスワイズ
■ＣＬＵＢ　コスモス
■クレヨンハウス&子どもの文化普及協会　ＨＵＧ&ＲＥＡＤプロジェクト事務局
■草野悟
■空自ＯＢ有志一同
■群馬県立小児医療センター
■久保稲子
■楠ふき子
■口と足で描く芸術協会
■口と足で描く芸術家出版
■楠　善治・文代　氏
■群馬県立小児医療センター職員他
■工藤明宏
■グリーンツーリズム西木研究会
■久慈市観光協会
■ＮＰＯ法人　ＧＲＥＥＮＰＬＡＮ
■クライスラー日本
■株式会社　グロース
■県薬剤師会くすりの情報センター
■株式会社ケーズホールディングス
■ケア・インターナショナル・ジャパン
■県民くらしの安全課　食の安全・安心担当
■株式会社ケイエス販売偕成社
■ＮＰＯ法人劇場創造ネットワーク
■京阪電気鉄道株式会社
■公益財団法人　ケア・インターナショナル・ジャパン
■県中華組合山田支部

■ケア・ジャパン
■公益財団法人ケア・インターナショナルジャパン
■芸能プロダクション・トランスワールド
■原水爆禁止日本協議会
■今野貴石株式会社
■小山みね子
■合田観光商事　パチンコヒマワリ北上店
■国土交通省（土工協清水建設）
■小橋研二
■株式会社コミュニケーションズ・コア
■小嶋　隆
■小張総合病院
■公益財団法人国際開発救援財団
■小出　正子
■財団法人　こうべ市市民福祉振興協会（しあわせの村）
■越田　充
■国際ロータリークラブ
■小高淳代
■小松美穂子
■上毛役場
■国際水産技術開発株式会社
■小林製薬株式会社
■国際開発救援財団
■株式会社コルファニ
■小林　高子
■甲府日通興業株式会社
■江東区立元加賀小学校ＰＴＡ
■菰原　京子
■子どもの本とおもちゃ百町森子どもの未来応援プロジェクト事務局
■小鳩こども園

■小枝裕子
■子ども支援ポレポレ
■小泉
■子どもの心のケア推進プロジェクト
■ＮＰＯ法人子どもの森づくり推進ネットワーク
■工房　ばぶ
■子ども文化普及協会商品センター
■航空自衛隊退職者有志
■小泉　ウメノ
■小泉　早苗
■近藤　良夫
■昆　昌
■航空自衛隊三沢基地
■子ども環境研究所　吉成　信夫　様
■子どもの本とおもちゃ百町森
山崎　直子　様
■国生さゆり
■子供のこと研究所いどばた
■小成史峰
■航空自衛隊
■特定非営利活動法人国境なき子どもたち（ＫｎＫ）
■特定非営利活動法人国境なきこどもたち
■こどものこと。研究所
■株式会社ゴールデン・サービス
■後志観光株式会社
■三陸北部（森林管理署）
■佐藤照彦
■佐藤信ユキ
■斎藤敏行
■佐藤
■佐藤誠、木村正人
■在日本大韓民国婦人会　岩手

■県地方本部
■佐藤泰広
■澤田和夫
■佐藤岳幸
■佐々木勝義
■櫻田正憲
■株式会社齊下産業
■株式会社サナンメディカル宮古店
■代表　佐藤章人
■佐用吉章
■坂本　光正
■佐藤　孝司
■佐藤製薬株式会社
■斎藤　茂
■佐々木義之
■ＮＰＯ法人　さいたま都市まちづくり協議会
■佐藤寛恵
■財団法人　日本歯科医師会
■佐藤晋一
■佐々木憲幸
■さくらクリニック
■斉藤克智
■佐々木優子
■酒井由紀子
■佐賀県嬉野市
■酒井玲津子
■株式会社サラダコスモ　渡辺・渡会
■齊下喜美男
■斉藤和久
■澤田隆幸
■桜田
■佐藤伊代子
■佐々木正子
■佐藤浜子
■佐々木高子
■佐藤直樹

■株式会社サンデー【岩手県】
■斉藤麻乃
■埼玉県庁
■佐々木純子
■埼玉県滑川町
■埼玉県嵐山町
■埼玉県小川町
■埼玉県ときがわ町
■埼玉県鳩山町
■埼玉県川島町
■埼玉県吉見町
■埼玉県東秩父村
■埼玉県寄居町
■佐藤知子
■佐藤浩、矢島宏志、金子桂子
■佐藤浩
■佐藤香織
■斉藤悦子
■佐藤　祝子
■西條　嘉吉
■佐藤　勝也
■佐賀県教育委員会
■ｔｈｅ ＳＡＳＳ ｗｅａｒ
■サンタ・プロジェクト実行委員会事務局
■佐々木　由美
■斉藤　あづさ
■佐々木晶子
■佐藤弘道
■埼玉県警
■災害ボランティアセンター川ちゃん
■震災復興支援（岩手・宮城・福島）
■札幌青年会議所
■株式会社サンワールド
■三桜
■佐渡　忠和
■佐藤　直樹

■佐藤　澄子
■佐野史郎
■社会福祉法人三篠会
■佐藤トキ
■埼玉県教員グループ
■境港青年会
■佐々木悦子
■３・11絵本プロジェクトいわて
■鮭川村
■桜野ミセスクラブ
■ＪＡあきた
■振興局
■紫波町
■株式会社しゃりー
■株式会社ジョイス
■雫石町役場
■静岡県
■静岡県ＪＡグループ
■有限会社しらいし
■清水健太
■静岡危機管理局
■有限会社新清工業
■株式会社写測
■昭和大学　北野
■ＪＡいわて中央
■ＪＡ５連関係
■雫石町商工会　女性部
■獣医師会
■秀明ナチュラルファーム盛岡
■滋賀県長浜市
■昭和シェル石油株式会社
■しまむら
■新十津川町役場
■情報産業労働組合連合会　岩手県協議会
■昭和コンクリート工業株式会社
■静岡県掛川市

■ＪＡなす南
■シスコンスラムズ合同会部
■ＪＲ東日本盛岡支社
■新生　釜石教会
■首都圏建設産業　ユニオン
■雫石町立七ッ森小学校児童
■湘南ビーチタイム
■雫石町議会
■静岡県トラック協会
■新納新之助
■清水雄一
■自由民主党和歌山県支部連合会　二階俊博
■清水公陽
■庄野朋子
■市長公室　危機管理部　総合防災課
■柴田栄子様のご依頼
■医療法人　志水クリニック
■白石食品工場株式会社【岩手県】
■島津幸子
■ＣＰＦ　ＴＯＫＹＯ株式会社
■清水　みゆき
■清水悦子
■下野市ｓｉｅｎ、森山弘子、庄野朋子、大薗みどり、高木誠一
■庄野朋子他
■新田自治会
■下田名部自治会
■浄土真宗　大谷派
■静岡県伊東市ボランティア協会
■島田自治会
■ＪＲ労組
■静岡県磐田市、袋井市、森町校長会・教頭会
■ＣＫＤ株式会社

■ＪＡ新いわて花卉生産者協議会
■自衛隊　埼玉Ａ
■篠澤　均
■新宿せいが子ども園
■自衛隊ＯＢ会
■新宿せいが子ども園　おひさま会
■実利用者研究機構
■自衛隊（ＯＢ）
■社団法人　慈恵会
■シールの支援
■自衛隊
■浄土真宗大谷派東本願寺
■白石秀正
■震災復興支援ＰＲＯＪＥＣＴ復興岩手
■静岡県ボランティア協会
■写真屋ＫＯＮ
■株式会社しもだミシン
■社会福祉法人三心会
■信州岩波講座ＮＰＯ法人ホーラム集団９９９
■静岡放送　ＩＢＣ経由
ＪＥＬＡ日本ルーテル社団
■ジョイセフ
■詢子美術館　及川詢子
■私立保育連盟
■修紅短大　野呂アイ教授
■Ｓｈｅｒｒｙ高田祥恵
■信州岩波講座実行委員会
■ＪＡ新いわて
■神代活性化協議会
■静岡県企業局
■下田市加増野区
■新十津川手打ちそば
■真宗大谷派豊橋別院
■ジェラートショップミラノ
■新岩手農協女性部（二戸市）

■新岩手農協（本所）
■積丹町
■公益財団法人シャンティ国際ボランティア会
■島田地区自治会
■自衛隊トラック
■Jyunko yamamura
■鈴木俊一
■鈴木俊一事務所
■鈴木釣具　釣り会員メンバー
■水産庁　全日本海員組合
■杉崎正樹
■鈴木友紀子
■株式会社スタッセンジャパン
■菊地
■隅田川　鮭の会
■スガワラ靴店
■住友重機械工エンバイロメント株式会社
■鈴木嘉郎
■鈴木雄寿
■鈴木克佳
■杉山千穂
■杉山美紀
■Ｓｗｉｅ昌子
■杉本　栄子
■菅原やすのり歌声キャラバン
■昴建設
■鈴木美穂
■須坂市子ども読書活動支援研究会
■杉山祐二
■首藤貴子
■瑞然寺
■鈴木美樹子
■スプリームマスターチンハイインターナショナル
■鈴木

■鈴木寿子
■管川洋子
■スタジオベレッツァ
■スマートスクール
■鈴木　厚子　氏
■砂川　光弘様
■鈴木隆啓
■鈴木映子
■有限会社鈴木製材所
■セキスイハウス
■仙台市さねやチルドレンドズファーム
■セイナン工業株式会社
■全日本海員組合
■ＳＡＶＥ　ＩＷＡＴＥ
■セカンドハーベストジャパン事務局
■西部産業
■箭田地区まちづくり推進協議会
■（一財）セブンイレブン記念財団
■（財）全国里親会　岩手県里親会
■セントヨゼフ女子学園高等学校
■誓教寺　藤本竜子
■生活共同組合コープみえ
■一般社団法人全国有料石材店の店
■株式会社全音楽譜出版社
■セイブ・モリオカ
■誠心福祉協会　おとぎ保育園
■全国の平和を願う仲間　原水爆禁止日本協議会　岩手県自治体労働組合総連合
■セントヨゼフ女子学園高等学校中学校
■全国里親会

■千葉幸世
■知　健一
■地域交流サマーキャンプ実行委員会
■千葉県市川市妙典小学校
■地球環境蘇生化実践協会河千田健郎
■千葉県かずさ災害支援ネットワーク
■千釜組株式会社
■地球・自然と食育を学ぶ研究会
■中国地区島根ブロック協議会
■チョキチクフェルト　北山真由美
■チームＤＥＡＲＳ　代表　藤原せりか
■千鳥台幼稚園
■ＮＰＯ法人小さな家
■Child Fund Japan
■千葉県香取市神生
■ちゃんこ大五郎
■千葉かずさ災害支援ネットワーク
■千曲市
■ツタヤ宮古店
■津田直・東さおり
■土信田実香
■築田淳子
■土本久美子
■塚本宗以知
■ツバメ工業株式会社
■つつみ保育園
■つながりあそび・うた研究所
所長　二本松はじめ
■津青年会議所
■テルモ株式会社盛岡支店　鶴

■尾、山崎
■照井学
■ディバーシー株式会社
■有限会社　ティーアイティー
■Ｔ・Ｍ良薬センター（ＮＰＯ）
■寺井充
■有限会社ティーアイティー
■寺田株式会社
■天馬株式会社　新白河工場
■株式会社テンダー
■寺田　勲功
■定置網　番屋
■電気工事組合　北上青年部
■遠野市
■東亜リース株式会社
■樋下建設
■東洋水産株式会社
■富山県学童野球連盟諸江プリンス一同
■豊間根保育園
■東北森林管理局　三陸北部森林管理局
■遠野ライオンズクラブ
■トヨタ自動車ＬＦＡ工房
■特定非営利活動法人　ワールド・ビジョン　ジャパン
■東北インテリジェント通信
■徳永東子
■（財）栃木県アイバンク
■東葛病院
■トミナガ幸子
■徳永エリ参議院議員と札幌有志の会
■戸田中央総合健康管理センター
■戸田ホールディングス株式会社
■戸倉キリスト教会
■富田安夫

■徳島県町村会
■株式会社鳥新
■冨永　幸子
■とぴあ浜松農業協同組合果樹営農センター
■東陽建設株式会社
■東京エレクトロンシステム部
■株式会社童心
■東北大学
■動物いのちの　とりや　のの
■寅丸水産
■東和町の方々
■株式会社東京
■戸澤　恭子
■東京都桶戸の
■株式会社　トイ
■豊田　氏・阿
■鳥居　勝一
■東京書籍
■十和田支援隊
■トリゼンフー
■戸田ホールデ
■東京ごぶらん
■東京都　焼肉
■株式会社図書
■図書館振興財
■東北ケータリ
■東京沢辺屋
■東北芸術工科
■在ドイツドレ
■中川ヒューム
■永井敬司
■中村美津緒
■那須南農業協
■長野県小諸市
■南建設株式会
■長野県上田市

■株式会社成田祭典
■那須、烏山市
■長野県千曲市
■中林かおる
■中村和子他
■中澤進
■中西こうすけ
■ナノズ株式会社
■永澤雅子
■長野県高山村
■長野県富士見町
■長野県小谷村
■中村匡孝
■長門市立仙崎小学校児童会
■那須田こどもクリニック
■和みの会
■なかふらのこども園
■株式会社ナイキジャパン
■中村　一
■長崎県医師会「Ｌｏｖｅ＆Ｓａｆｅｔｙおおむら」
■長崎県医師会
■長野県飯綱町観光協会
■長野県須坂市文化振興事業団
■奈良県　平群幼稚園
■長崎医師会
■和の会
■長野市立古里小学校６年２組
■中井貴恵
■長野青年会議所
■難民を助ける会
■南部屋敷（北上店）
■長野県飯綱町社協
■中村ナミ子
■中塚運送
■日清食品株式会社
■新潟県　ボランティア団体
■日本国土開発株式会社
ＮＴＴ

■日本国土開発株式会社盛岡
■（社）日本土木工業協会東北支部
■西原環境テクノロジー
■二戸市防犯連合会
■日本司法書士連合会　岩井英典、木下　浩、安田　捷
■西野靖光
■日本女性医療ネットワークの会（四季亭　間瀬信康）
■日本生命
■日本ボランティア会
■西岡千可志
■株式会社ニュートラル
■株式会社日進感光
■日本労働者協同組合連合会センター事業団
■日本タッパーウェア株式会社岡崎製作所
■日本ボーイスカウト青森県連盟　活性プロジェクトチーム
■日本青年会議所　島根ブロック協議会
■西村彩子
■西田奈々子、松本智明、山本和寛
■任天堂株式会社　宇治大久保工場
■任天堂
■日本食研株式会社盛岡営業所
■日清オイリオグループ株式会社
■日本ミクニヤ株式会社東京支店
■新潟県聖籠町
■新潟県刈羽村
■新潟県栗島浦村
■西根ライオンズ・ライオネスクラブ

■だるまの会
■田中和昭・三枝子
■ＷＦＰ
■田中公浩
■高橋秋二
■田村悟
■琢磨俊秀
■辰野町役場　山田勝己
■高橋史
■武田逸人
■たいまつ食品株式会社
■田辺誠一郎
■冨澤伸行、悦子
■竹内商店
■田口　良子
■高野　シズ江
■田村出荷組合
■竹内愛
■滝沢村職員互助会
■滝沢村教育委員会
■多田淳一
■高田陽一、藤川晃一
■田口　俊彦
■高橋　公洋
■高橋　公洋　美恵子
■タダノート事務局（横田商事株式会社）
■株式会社武井総業、地域ボランティア湘南ひまわりネットワーク
■滝沢村立滝沢小学校児童会
■滝沢市立一本木小学校
■谷本　仁是
■武井　日出治
■大宝保育園
■たんぽぽ保育園
■高橋　郁子
■滝沢市保育協会
■高橋（職員の父）

■谷口國博
■平よし子
■ＮＰＯ宅老所
■玉照農園
■滝沢村認定農業者協議会
■社会福祉法人滝沢村保育協会
■滝沢村認定農業協議会
■ダイドードリンコ株式会社
■玉家会
■滝澤　宏旨
■滝澤　由美子
■高石　静子
■大成建設
■滝沢市認定農業者協議会
■大坊保育園
■田代　朋子
■宝塚演奏家連盟　轟木裕子様
■高橋正美
■高橋矩彦
■瀧神巧業
■田沢地域運営体「荷葉」
■田沢湖包和会
■田沢湖高原旅館組合
■滝沢村村議会議員日当様
■高松北ロータリークラブ
■たきびカレープロジェクト
■大勝軒
■田村直司
■台北駐日経済文化代表処
■社団法人タンナーズ協会
■第18新生丸（清水幸喜）　大川冷蔵、起年廻船問屋　山縣弘明、第18福佳丸（高知）　湯川石油店（和歌山勝浦町）　株式会社馬詰造船所、第27勇任丸　第55号義丸
■大工智彦
■中央農協
■千葉　忍

- 日本ユニセフ協会・岩手県教職員組合
- （公社）日本フラワーデザイナー協会
- 日本マクドナルド株式会社マーケティング本部
- 日本ユニセフ協会
- 日世株式会社
- ニチレイマグネット
- ＮＰＯ法人日本グットトイ委員会
- ニチレイマグネット株式会社
- 日本ユニバース震災対策チーム
- 日本テーラワーダー仏教協会
- 日本赤十字社　野田みのり
- 西出水カメライメージングフォトシニアハウス
- 人形の勝
- 日本保育協会岩手県支部
- 日本サッカー協会
- 仁王幼稚園
- 新見絵美
- 日本ユニバ震災対策チーム
- 新潟市立下山中学校
- 日本ラーメン協会青森支部
- 日本青年会議所山口ブロック
- 新潟県十日町市飲食店組合
- 二戸市交通安全母の会
- 日本相撲協会
- 日本卓球株式会社
- 日本ユネスコ協会
- メフレ株式会社【岩手県（流通課）】
- 農林振興センター
- 野口まり子他
- 野口節子
- 野村淳子
- 野呂アイ
- 野田　和孝
- 野口　健
- ハウス食品
- 北海道札幌在　支援グループ
- 畠山秀雄・シメ子　伊藤重雄・スキ子
- 株式会社橋市物産
- 箱石正裕
- 浜登二郎
- 八幡平市
- ハウスウェルネスフーズ株式会社
- 林下泰法
- 馬場路子
- 原田武二
- 株式会社ＶＡＰＳ
- 浜屋さとり
- 林勝治
- 八木橋智絵
- 長谷川醸造株式会社
- 原野記美代
- 八角病院
- 有限会社ハーモニー
- 花巻地区企業防犯連絡協議会
- 早川友美
- 浜川真澄
- 医療法人社団　はつせ歯科
- 浜田青年会議所
- ＮＰＯ法人パワーアップ支援室
- 颯２０００
- 堀合　美代子　氏
- 榛南建築工業組合（福祉課経由）
- 泰南建築工業組合
- 畠山さん
- ハイヌーン・しまね　代表
- 菅野早苗
- 花岡佳代子
- 浜松市異業種交流会好心会
- 八戸　津村
- 株式会社番匠
- ハラダ製茶株式会社
- 八戸市
- 白山区
- 有限会社バイカンブランド
- 特定非営利活動法人パワーアップ支援室
- パティスリーウエダ
- 日立
- 平川市役所
- 蛭田（ひるた）孝文　吉田晃兵衛（りんご生産者）
- ＮＰＯ　ＢＨＮ
- ＢＲＡ（ＮＰＯ法人国境なき奉仕団）
- 平井美子
- 平山光幸
- 樋口哲人（ひぐちあきひこ）
- 久原　満
- 日野原純子
- 弘前ロータリークラブ
- 東山病院
- 株式会社ヒメプラＡＰＵショップＡｍａｚｏｎ
- 日高町役場　日高町長中善夫
- 株式会社平川食品
- 東日本大震災津波子どものこころケア推進プロジェクトチーム
- 被災地の子供達にカレンダーを送るプロジェクト事務局
- 稗田保育園
- ひまわり保育園
- 日立市ロータリークラブ
- 平野志津江
- 有限会社百町森
- 広島県江田市能美町図書館ボランティア
- 藤井賢・真弥子
- 福島工業株式会社
- 福田秀明
- 藤崎幼稚園　父母会
- 株式会社フクヨシ
- ブロガー某
- 藤田亜起
- 藤尾由美子
- 藤森工業株式会社
- ふんばろう東日本支援プロジェクト
- 藤原拓士
- 菅原徹
- 富士木材株式会社
- 株式会社ブレイン
- 株式会社ファースト・ファリオ
- フタバフーズ株式会社
- ファイダー
- 藤久株式会社
- 富士みのりこども園
- プラス株式会社スマートスクール
- 藤村　はるゆき
- プーマジャパン株式会社
- 福音館書店
- フジテレビ
- ふるさとセンター
- フェルトのソムリエ森下結城子
- フォコラーレ会
- 藤田
- 福岡県嘉麻市立山田中学校
- フェルトのソムリエ
- 富士宮市民楽友会コールエーコン
- 藤原　マリ　氏
- フジテレビ子ども応援プロジェクト
- ＦＩＤＡ国際開発援助財団
- ファイダー　中村
- 福岡市保育協会青年部
- 深澤幸雄
- 船越なを子
- 藤村春之
- 藤枝市
- 富士宮やきそば学会
- 富士市
- 富士宮職員イケメン隊
- 藤原顕秀
- 富士通東北システムズ
- 船山株式会社
- ベンゼネラル株式会社
- 米軍横須賀基地
- 株式会社ヘニルプラスコミッサリー
- 有限会社平成運輸
- ベネッセ
- 公益財団ベネッセ子ども基金
- ペコちゃんキャラバン隊
- ベルマーク
- ホクレン　他
- 堀合俊英
- 北海道池田町
- Ｐａｕｌ　Ｄｉｘｏｎ（ポール・ディワソン）神戸市教育委員会
- 本田すみ子
- 洞　理華
- 北海土木工業株式会社
- 北海道士幌町
- ホープインターナショナル開発機構
- 北海道町村会
- 北海道檜山町村会
- 北海道礼文町
- 北海道新冠町
- 北海道江差町
- 北海道利尻町
- 北海道秩父別町
- 北海道上士幌町
- 北海道足寄町
- 北海道長谷川水産
- 北海兼業株式会社
- ポピー名城
- 本郷谷　健次
- 保育連合会
- 北海道自衛隊
- 巽岩千裕
- ホームカバーお届け隊
- 株式会社ホビージャパン
- 北海道森林組合連合会
- 堀合剛夫
- 北海道商工会連合会青年部
- 北海道美唄ライオンズクラブ
- ホテル陸中海岸
- ボディフーズコーポレーション
- ボランティアグループ孝進会
- 株式会社ポケモンコミュニケーションズ
- 松山裕之
- 前川四郎
- 牧山直樹
- マルヨ運送
- 前田誠
- 丸山　進
- 松木由香里
- 間野隆司
- 真利子聖乃
- 松崎裕人
- 松本久美子他
- マルコメ
- 槇田智子
- マーマ食品株式会社【岩手県】
- 丸モ盛岡中央青果【岩手県】
- 松下政経塾青年部
- ママんずより愛をこめて～
- 丸田屋
- 松本和樹
- 松波昌代
- 松江青年会議所
- 松岡圭子
- 松山道後ライオンズクラブ
- ママドール助産院
- 一般財団法人Ｍａｒｃｈｉｎｇ財団
- 株式会社ＭＹ　ｍａｍａ　代表　蟹江幸子
- まこと保育園
- スマート　スクール
- ＭＹ　ユニバース
- 松田陽二
- 株式会社マルヰアミューズメント
- 道の駅山田
- 宮古地方振興局
- 民間
- 宮古警察署
- 宮古市
- 三浦晃
- 三浦
- 宮商レスリング　Ｏ・Ｂ
- 宮城県労働組合交流センター
- 宮古保健所
- みえ災害ボランティア支援センター
- 三菱マテリアル　岩手工場
- 宮古コミュニティー・チャーチ
- 宮本沙奈恵
- 箕輪直明
- 三好デンタルクリニック
- 宮野友輝
- 二宮　久子
- 南越前町役場
- 三五十　大杉繁雄
- 有限会社三郷解体
- 宮川由紀子
- 宮地誠
- みやこ災害ＦＭ
- 三田村　真紀
- 三重災害ボランティア
- ミクロ化成工業株式会社
- 三原市社会福祉協議会
- 水野明雄
- ＭＹｍａｍａ
- 皆川修
- 見前小学校
- 盛岡市見前南小学校先生方
- 水谷深幸
- 三浦陽子
- みやこ歯科医師会
- 三重災害ボランティア支援センター
- 瑞穂株式会社
- 株式会社瑞穂
- 有限会社ミキクリエート
- 宮古青年会議所
- 都城市立祝吉中学校
- 三膳眼科医院
- 三島青年会議所
- 三重県そば処おんたけ
- 三次青年会議所
- 三本コーヒー
- 宮城県河北アドセンター
- みらいカンパニー
- 三本コーヒー株式会社
- 村田美鈴・島橋憲子・米沢すみえ
- 武藤正道
- 武藤美恵子
- 村田明朗
- 村井美雅子
- むらっこ物産館
- メタウォーター株式会社
- ＮＰＯ法人　メビウス
- メガロシアター（ヒトとヒト）
- メッセージエイド
- 株式会社明文堂プランナー
- ＮＰＯメビウスファームロン
- 盛岡市　神社庁
- 盛岡市　兼平製麺所
- 盛岡商工会議所
- 守谷祐志
- 盛岡アビリティセンター
- 株式会社モリレイ【岩手県】
- モリレイ（県）
- 諸熊靖子
- 盛岡市ロータリークラブ
- 盛岡タイムス
- 盛岡市有志
- 森下　結城子
- 盛岡ＮＰＯ
- 盛岡ＹＭＣＡボランティアセンター
- 株式会社モルテントレンド本部東京支店
- 森のライフスタイル研究所
- 最上商店
- ＮＰＯ盛岡「復興岩手」
- 盛岡洋菓子協会
- 盛岡青年会議所
- 森下結城子代表「ピンクのハート」中区　私立東小
- 盛岡市コーヒールームだん
- 盛岡厨川小学校
- 薬王堂
- 山崎　衛
- ヤクルト
- 山口県
- 山崎美代子
- 矢巾町災害対策本部

■山口正司
■谷地研二
■やまびこバスターズ古里
■山崎信行
■山田地区部落連絡協議会
■山田郵便局
■安田喜博
■山九株式会社加須流通センター　ショーワグローブ
■株式会社山善　家庭機器関東営業三部
■ヤマト運輸株式会社　村木清
■山崎豊
■山崎正志
■ＹａＴｏｕｎ　ＡＲＴ
■矢作武治
■山田憲次
■八雲製材所株式会社
■山本香織、大和雅子
■有限会社山梨鶏卵市場
■八千代自治会
■やまだわんぴぃす
■山田ふる里同郷の会
■山田町商工会洋品納入組合
■山田伝津館
■山内　信子
■山田南小学校
■山田町セイブザチルドレン
■山田町社会福祉協議会
■山田町復興支え愛センター
■横浜ロータリークラブ
■山田町商業協同組合
■山田町ゾンタハウス内まちかどギャラリー
■山田町大沢地区震災復興事業共同企業体
■山田ガス

■やんちゃ工房代表　水野正徳
■山岸保育園
■山岸保育園保護者会会長
■山本千尋
■山田町に牛の丸焼き届け隊
■山田町元気隊による炊出し
■ヤマハ発動機
■矢巾婦人防火クラブ
■山形村　栃乃花後援会
■八千代工業株
■ユニセフ（岩手県生協連）
■株式会社ゆうちょ銀行東北エリア本部　総務部　総務担当
■湯沢商工会議所
■ユニセフ
■株式会社ユーキャン
■夢わかばプロジェクト
■ユーキャン・パパナビ（荒小経由）
■夢文庫　ピコット
■遊々楽々3とぴあ
■雄大株式会社
■ＵＣＣフーズ株式会社
■湯沢青年会議所
■横田トモ子
■横沢大、真知子
■吉田裕　福士卓弥
■横田厚
■吉田美智子
■吉田元子
■米戸　美織
■吉田初
■有限会社横浜こどものとも
■吉田里嘉子他30名のママさんグループ
■吉田　剛
■吉葉清子
■吉井隆子
■ようき屋本舗

■横浜マリノス
■吉見　正憲　様
■横綱　白鵬外力
■横澤高徳
■株式会社吉谷機
■ライオンズクラ
（社）楽水会
■ライフスタイル
■ライオンズクラ
■楽天たすけ愛事
■ライカース（神
護団体）
■ライオン
■ＬＩＯＮ社キャ
■ラーメン春一家
■株式会社リバテ
■両備トランスポ
会社
■龍泉寺
■ＮＰＯ法人療育
川崎
■菱華システムサ
社
■竜泉寺
■諄子美術館　及
■リアス観光
■有限会社リット
■緑菜肴房うのや
■陸上自衛隊
■力士会
■連合青森
■レオック
■ＬＯＴＳ（東京
ア）
■六条裕多孝
■ロータリークラ
■株式会社わしの
■ワールド・ビジ
ン

■渡邉昇
■和歌山県
■和歌山県高野町
■和歌山県かつらぎ町
■和歌山県九度山町
■輪島屋鮮冷株式会社
■渡辺豊
■稚内市
■和歌山市立功東小学校保護者
■若草保育園
■絵本作家　わたなべゆういち
■渡邊
■渡辺有一
■和歌山県有田地方4市町より
■和歌山市立西浜中学校
■ＮＰＯ法人　ＹＪＭＡ
■稚内ほっけ隊
■和歌山県議会
■わわプロジェクト

■青森県立名久井農業高等学校
■浅草バレエスタジオ　正木亮
■アトリエミルクル　鈴木　美穂
■岩手県立紫波高校
■糸あやつり人形劇団みのむし
■東京インターナショナル高校生
■いずみ企画

■岩手子育てネット
■池田高校吹奏楽部
■いわてグルージャ盛岡
■歌声喫茶　もりおか
■うつみ宮土理
■漆原　栄美子
■浦和レッズ
■浦和レッズダイヤモンドハートフルクラブ
■馬っこパーク・いわて
■上林理美子
■ＡＫＢ48
■ＭＣＬ　保育福祉学科
■江田島市立能美図書館
■遠州大念仏木原組
■小田代　直子
■沖縄踊り会
■オリエンタルランド
■小原日登美（レスリング金メダリスト）
■沖縄「おでんそーれ」
■オリエンタルランド（ディズニーランド）
■お芝居デリバリー「まりまり」
■大阪府警
■大石いちろうピエロ
■お芝居デリバリーまりまり
■神奈川県立逗子高校
■神奈川県警
■株式会社　カノン
■影絵いしとほし
■加藤登紀子
■加藤　久（ＪＦＡ特任コーチ）
■菊池千賀子
■黒澤有美（琴奏者）
■群馬工業高等専門学校
■クラウンいちろうくん
■くらしに音楽プロジェクト
■ぐれっち紙芝居

4 その他

■くらうんしゅがー
■株式会社グランまま社
■劇団四季
■劇団こがねむし
■航空自衛隊三沢基地
■小錦さん
■子森ネット
■ご当地紙芝居師なっちゃん
中谷奈津子
■3・11いわて協会ネットワーク
■さっぽろ青少年女性活動協会
■新日本フイルハーモニー
■自衛隊
■しらかば劇団
■浄土真宗大谷派名古屋　児童教化連盟
■神城文化の森　藤田財団
■有限会社ジロー・オオマ・プロジェクト
■ジュビロ磐田
■清水エスパルス
■須坂市子ども読書活動支援研究会
■瑞然寺関係（石川県、熊本県）
■ステヴァ・ミニ・キャラバン
■そらたんね
■滝沢　卓
■平希流
■大正琴出前講座
■男声合唱団（極）
■台湾赤十字
■ただじゅん企画／風光舎
■たにぞうさん　弘満お兄さん
■第一生命労働組合盛岡営業職支部
■多摩大学　日本大好きプロジェクト
■高槻サインオーケストラ

■ただじゅん
■手倉森　浩（ＪＦＡ特任コーチ）９
■株式会社ともしび
■鳥羽　一郎
■東京芸術大学
■豊永せつ子
■西村由紀江（ピアノ奏者）
■日本オリンピック委員会（永田睦子・宮崎義仁・上野雅恵・杉本美香）
■日本オリンピック委員会
■ニューバランス
■人形劇くぐつ（東日本大震災子ども支援センター）
■人形劇団　わたぐも
■人形劇団ぶらんこ
■人形劇団わたぐも　高橋
■日本セラピー協会
■２０１２ぬくもりコンサート
■フルート奏者　吉川久子
■人形劇団わたぐも高橋　一元
■八戸学院光星高等学校
■花　豆
■平瀬智行（元Ｊリーガー）
■平井　茂彦
■東日本大震災いわて子ども支援センター
■被災地応援イベントキャラバンプロジェクト
■フォークローレ
■富士宮発虹の架け橋
■ＮＰＯ法人ふおむら集団９９９
■公益財団法人ＦＩＤＲ
■風船太郎
■富士宮発虹の架け橋実行委員会
■ファンキーモンキーベイビーズ
■北海道池田高校
■有限会社朗天狗
■北海道おといねっぷ美術工芸高等学校　野村幸伸
■ポプラ文庫
■北部航空音楽隊
■前野博紀
■マジシャン　ソ
■松本哲也
■三重ボランティ
■宮古地域人形劇
てな
■めんこいわらし
■めんこいテレビ
■盛岡市立高校
■盛岡福祉専門学校
■盛岡医療福祉専
■門馬よし彦
■横浜Ｆマリノス株式会社
■横浜Ｆ・マリノ
■ラインラント・
の学生、花巻南
■わらび座（小林

■青森・京都南・函館ロータリークラブ・国際ロータリー東日本震災復興基金日本委員会
■アーツ・フォー・ホープ 高橋雅子&スタッフ
■アジア太平洋救済センター所長
■Aquinas College
■阿久津一恵
■アルソック
■秋田県大仙市
■秋田県仙北市
■青森県平川市
■岩手放送
■岩手県私立保育連盟　工藤美智子
■（社）岩手薬剤師会
■ＮＰＯ法人いわて・郷プロジェクト
■一関修紅短期大学
■イシマルヨシエ
■石塚　直樹
■伊藤義隆
■岩手日野自動車
■石鳥谷町
■岩手町
■岩泉町
■一戸町
■岩手県立博物館
■馬っこパークいわて
■ＮＨＫスマイルキャラバン
■ＮＴＴドコモ
■奥尻町立青苗小学校
■おばちゃんのきもちプロジェクト
■小樽ロータリークラブ　盛岡西ロータリークラブ
■岡田　純一
■大阪県警　４名

■幼い難民を考える会
■大熊秀一
■及川智志
■小野寺力
■黄優香
■大川　勤
■奥州市
■男鹿市
■角浜小読書ボランティア
■橿原市昆虫館
■カフェ「ア・ズーロ」
■梶原秀子
■河嶋浩司
■角館地区民生委員
■河津さくら案内にの会
■榛南建築協業組合、株式会社笠原産業
■軽米町
■川石昭人
■菊池榮光
■北牧裕幸
■北上市
■クロネコヤマト子ども交通安全教室
■クロネコヤマト
■クレヨンしんちゃん声優　島田晶子
■工藤清二
■黒船まつり実行委員会
■久慈市
■葛巻町
■九戸村
■公益財団法人ケア・インターナショナルジャパン
■げんき夢保育園
■江東区立元加賀小学校
■ＮＰＯ法人国境なき子どもたち
■航空自衛隊退職者有志一同

■味の素
■朝霞なるこ遊和
■秋野陽子
■有限会社アポロ
■秋田市立高清水小学校

3 文化・スポーツ

- 国際ソロプチミスト
- 小泉　敦
- 航空自衛隊三沢基地
- 小松山
- 小岩清水
- WFP国連世界食糧計画日本事務所
- 国立科学博物館
- 国立公文書館
- さっぽろスイーツカフェ運営協議会
- 佐々木　清志
- 佐久間社寺株式会社
- サントリーホールディングス株式会社
- 自衛隊体育学校（レスリング関係）
- 一般社団法人児童夢基金
- 静岡県清水船越小学校
- いずみ企画
- NPO乗馬とアニマルセラピーを考える会
- CAPリアス
- NPO乗馬とアニマルセラピーを考える会
- ジョカ
- 東社会福祉協議会保育士会
- 下田市役所
- 柴田正
- 篠田茂二
- 雫石町
- 紫波町
- スタジオアイ企画
- 鈴木
- 須坂市子ども読書支援研究会
- 仙北市立生保内小学校
- セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
- 全国交通安全協会
- 一般社団法人SAVE　IWATE
- 全国社会福祉協議会　2名
- 仙北市
- 全国曹洞宗青年会
- 玉川中学校
- 大震災出版対策本部（日本出版クラブ）
- 滝沢村馬っ子パーク
- 滝沢村子ども会育成連絡協議会
- 滝沢市立一本木小学校
- 滝沢市立滝沢第2中学校
- 平館保育園
- 田尻祝
- 田沢湖水深委員会
- ダニエル・カール
- 長曾我部光義
- 千曲市消防団
- 株式会社塚本總業
- 筑波大学
- 株式会社電創総合サービス
- 栃木さくら11
- 鳥栖市立基里小学校
- 東大まちづくり大学院プロジェクト
- 樋泉　慶一
- 東邦女子中学校保護者
- 東北総合通信局
- 遠野市
- 東京海洋大学
- 遠野市立博物館
- 東梅久子
- なすび（芸人）
- 長野県立東御清翔高等学校福祉コース
- 南砺市立利賀ささゆり保育園
- 日本相撲協会
- 日本保育協議会岩手支部
- 日本ストリートダンススタジオ協会
- 西松建設株式会社
- 日本ユニセフ　アグネス・チャン
- 新潟市立鳥屋野中
- 二戸市
- 間寛平
- 林幾三郎
- 花巻市
- 八幡平市
- パナソニック株式会社
- 株式会社バンダイナムコホールディングス
- 東社協保育士会の皆さん
- 久本組
- 東日本大震災子ども支援センター
- ピエロの一郎君
- 福山市立南小学校
- フェルトのソムリエ
- 福岡県立嘉穂総合高等学校
- フライパンダ
- 福岡市青年部
- ふれあい動物園
- 藤田勲
- 文化財等救援委員会
- ヘブンアーティスト
- （公財）ベルマーク教育助成財団
- 株式会社ベネッセコーポレイション
- 保護司・更生保護女性会・BS会他
- 株式会社ホビージャパン
- 北海道札幌青年会議所
- 法政大学応援団
- 牧之原市
- 丸田　節郎
- （社法）マナ会　みつばさ保育園　理事長　迫　匡
- 宮古映画生活協同組合
- みやこ映画生活協同組合
- ミスタードーナッツ
- 三重災害ボランティア支援センター
- みんなともだちプロジェクト
- 三尾　美由紀
- 三重立花短大
- みどりが丘保育園　七役　司
- 三島市
- 宮古市
- 宮本工業所
- 株式会社メルク（日本公衆電話岩手支部長）
- 盛岡市立青山小学校
- 森と風の学校
- 盛岡市
- 山田町ロータリークラブ
- 山田町木村商店
- 矢部公輔
- 山田康子
- 山田邦子
- 山形県鮫川村
- 矢巾町
- 山田町理容組合
- 湯口中学校3年生
- 湯浅町立山田小学校
- 吉川三枝子
- 株式会社ランクセスジャパン
- 和歌山市
- 渡辺有一　絵本作家

ボランティア団体一覧

都道府県別・敬称略。平成23年の東日本大震災と令和元年の台風19号で活動していただいた団体です。
山田町社会福祉協議会で受け付けた団体です。

北海道

- 北海道王子総合病院
- 函館大谷短期大学
- ヘルピングハンズ
- 滝川青年会議所
- 札幌カリタス
- 旭川ステーク
- ホクミン北海道クリスチャンネットワーク
- カリタスジャパン
- 災害支援くしろネットワーク
- ハーモニー気功会
- アンサンブルグループ奏楽
- 民主党参議院 徳永エリチーム

青森県

- 平元会
- 平川市社会福祉協議会
- 黒石商業高等学校
- 西目屋村社会福祉協議会
- 北日本銀行　青森支店
- 北日本銀行　南青森支店
- 青森県曹洞宗青年会
- 五所川原市社会福祉協議会
- 東北町消防団
- 三絃会
- ひろさきサポートチーム
- ボランティア薬剤師

岩手県

- NPO法人プラットフォームあおもり
- 車力楽歌声の会
- 三本木高等学校（バレー部）
- 千葉学園高等学校
- 特定非営利活動法人ひろだいリサーチ
- 正長園
- 宮古コミュニケーション
- いっぽいっぽ岩手
- 岩手県社会福祉協議会
- 盛岡市役所
- 盛岡青年会議所
- 滝沢村社会福祉協議会
- 雫石町社会福祉協議会
- ボランティア活動拠点盛岡市かわいキャンプ
- 東日本ハウス　岩手
- 株式会社損害保険ジャパン
- 北日本銀行　山田支店
- 盛岡市社会福祉協議会
- 大和ハウス工業株式会社
- 矢巾経友会
- 積水ハウス株式会社
- 株式会社佐藤建設
- 岩手県美容組合
- COOP（岩手県）
- 若年者復興サポートセンター
- 宮古
- JR東労組宮古連合分会
- 岩手県曹洞宗青年会
- 岩手県防災士会
- 西和賀町消防団第1分団
- 雫石町赤十字奉仕団
- 3・11いわて教会ネットワーク
- 一九会
- NPO法人三陸自然環境新産業プラットフォーム
- 岩手町消防団
- ZIP
- 資生堂ボランティア
- やまだおらほの復興会議
- 北日本銀行　花巻支店
- 北日本銀行　西花巻支店
- 北日本銀行　石鳥谷支店
- 子どもTOSSデー実行委員会宮古支部
- 株式会社モリレイ
- 宮古農林振興センター
- これからだ倶楽部
- 宮古音楽スクール
- 家の教会こひつじ
- スマイル東北プロジェクト
- 山田町美容協会
- DearNail
- Grazia
- 山田町ゲートボール協会
- Manabi8
- アンダーエイジ
- 傾聴ボランティアもりおか
- 社会福祉法人やまだ共生会
- 株式会社京屋染物店
- 小川中学校
- 小川地域振興協議会
- 沼宮内中学校
- 岩手町婦人団体連絡協議会
- 田原中学校
- 水沢第一高等学校
- カリタス大槌ベース
- 大槌町役場
- 三陸のぞみキリスト教会
- 岩手県東部地区郵便局長会釜石北部会
- 北上翔南高等学校
- 葛巻高等学校
- 雫石高等学校
- Shiwaウインドアンサンブル
- 岩手県立大学
- 滝沢中学校
- カッキー's（岩手県立大学看護学部）
- 遠野東中学校
- 岩手県日蓮宗青年会
- 平舘高等学校（山岳部）
- 花巻南城中学校
- 花巻北中学校
- 湯口中学校
- カリタス宮古
- 盛岡市立高等学校
- 盛岡高等看護学院
- 盛岡農業高等学校
- きずなプロジェクト
- 盛岡医療福祉専門学校
- NPO法人岩手県レクリエーション協会
- ハーティネットワーク
- ドロンピーク
- 岩手大学
- 盛岡工業高等学校（土木科）
- 盛岡誠桜高等学校（サッカー部）
- 東日本旅客鉄道株式会社盛岡支社
- 岩手大学・いわて学生ボランティアネットワーク
- WE　LOVE　三陸
- 豊間根中学校
- ポーラエステinnリリアス
- 山田民謡伝承会
- 一般社団法人あすなろ応援隊
- シルバーメンバーズ（織笠草刈りバスターズ）
- 陸前高田市社会福祉協議会
- ケーズデンキ宮古店
- 復興シンガーソングライター「光」
- 山田高等学校
- With you Global NPO
- OMF　インターナショナル・ジャパン
- JR東労組盛岡地方本部

宮城県

- 株式会社奥村組
- みやぎ楽健法教室
- 株式会社ニア

秋田県

- 秋田信用金庫
- ＪＲ東労組秋田地方本部
- 大館発電職員会
- 醍醐

山形県

- 山形信用金庫

茨城県

- 結城信用金庫
- マンホンマーボー

栃木県

- 野木町自衛隊父兄会
- 栃木さくら11プロジェクト

群馬県

- 群大クラブ

埼玉県

- ユニバーサルダイビングネットワーク
- 川口信用金庫
- 青木信用金庫
- グローバル・アグリ・リサーチ（ＧＥＲ）
- 埼玉県ボランティアバス
- ＮＡＶＩ
- 鳩ヶ谷市社会福祉協議会

千葉県

- きみつハウジング
- かずさ災害支援ネットワーク
- ＪＲ東労組千葉地方本部
- 農工大ＯＢ
- 株式会社ＨＲインスティテュート
- チトセサーフ
- Ｎａｒａｓｈｉｐ

東京都

- ＮＰＯ事業サポートセンター
- 昭和大学
- 早稲田大学
- 環境省
- 三桜工業株式会社
- 東日本ハウス　本社
- 新宿せいが保育園
- 東京海洋大学
- 日本体育大学
- 虎玄
- オリックスグループ有志

神奈川県

- 株式会社八芳園
- Ｚｕｃｋ Ｆａｃｔｏｒ

福井県

- 福井県防災士会
- 福井県南条どんぶしクラブ

山梨県

- 南部中学校
- 医療法人げんき夢保育園

長野県

- 長野青年会議所
- 築北村社会福祉協議会
- 御代田町社会福祉協議会
- 松本市社会福祉協議会
- 池田町社会福祉協議会
- 富士見町社会福祉協議会
- 須坂市社会福祉協議会
- 信濃毎日新聞社
- 軽井沢市社会福祉協議会
- 諏訪市社会福祉協議会
- 大町市社会福祉協議会
- 中野市社会福祉協議会
- 安曇野市社会福祉協議会
- 長野県岡谷市議会
- 伊那市社会福祉協議会
- 朝日村社会福祉協議会
- 岡谷市社会福祉協議会
- 南相木村社会福祉協議会
- 塩尻市社会福祉協議会
- 飯山市社会福祉協議会
- 山形村社会福祉協議会
- 飯田市社会福祉協議会

富山県

- 黒部青年会議所
- 富山県曹洞宗青年会

石川県

- 石川県曹洞宗青年会
- ＣＣＭＮ

岐阜県

- 神戸町防災士会

静岡県

- 三島青年会議所
- 静岡県社会福祉協議会
- 静岡大学
- 菊川市社会福祉協議会
- 富士市社会福祉協議会
- 裾野市社会福祉協議会
- 磐田市社会福祉協議会
- 伊豆の国市社会福祉協議会
- 袋井市社会福祉協議会
- 静岡工科自動車大学校
- 東伊豆町社会福祉協議会
- 東伊豆町町議会
- 掛川市民の会
- 富士市災害救援バイク隊ペガサス
- ながいずみホーム
- 青木建設
- 静岡県ボランティアドリーム・フィールド

愛知県

- 東海市社会福祉協議会
- 株式会社藤商事
- 愛知県曹洞宗青年会
- ファインカウンセリング研究会
- Ｄｒｅａｍｅｒ～夢人～
- 愛知県善光寺東海別院

三重県

- みえ災害ボランティア支援センター
- 伊賀市災害ボランティア支援センター
- 紀宝町社会福祉協議会
- 伊勢会
- 津青年会議所
- いせコンビニネット
- 東北太平沖大震災学生救援隊
- 南伊勢高等学校（ボランティア隊）
- 心和む蓄音機演奏会

京都府

- 立命館大学

滋賀県

- 境港青年会議所
- 鳥取青年会議所

岡山県

- 益田青年会議所
- 平田青年会議所
- ＪＣ島根ブロック協議会

広島県

- 玉野青年会議所
- 岡山青年会議所
- 日本赤十字社岡山県支部

山口県

- ひろしま災害ボランティアセンター　チーム広島
- カトリック
- 山口県曹洞宗災害支援現地活動部
- 山口県曹洞宗青年会
- 山口県曹洞宗

福岡県

- 防災士会　久留米支部
- ＡＮＧＥＬ ＷＩＮＧＳ

鳥取県

- 鳥取中央高等学校（レスリング部）

大阪府

- 株式会社久本組
- アート引越センター
- チームＪＡＰＡＮ

兵庫県

- 生涯学習サポート兵庫
- 吹田鍼灸マッサージ会
- 株式会社イトー
- シーズ加古川
- 神戸大学（学生ボランティア支援室）

奈良県

- ＨＧ会

和歌山県

- 木本産業株式会社和歌山サンライズケア

鳥取県

- 鳥取中央高等学校（レスリング部）

長崎県

- 長崎国際大学
- マンドリンシンガーひろ

熊本県

- Ｗａｌｔｚ サチコ＆テツ

鹿児島県

- ＮＰＯ法人かごしまホームレス生活者支え合う会

全国

- イーフォレスト（ＮＨＫスマイルキャラバン）
- ソニー生命保険株式会社「ボランティア有志の会」

全世界

- ケア・インターナショナル・ジャパン
- 国境なき奉仕団（ＢＲＡ）
- 秀明インターナショナル
- 末日聖徒イエス・キリスト教会
- シャンティ国際ボランティアの会
- 海外青年協力協会
- Save the Children JAPAN
- グリーンキャラバン

埼玉県

- 信金中央金庫
- 世田谷ボランティア
- 東芝グループ
- にんじんの会
- 立正佼成会
- 町田青年会議所
- 株式会社戸田ホールディングス
- ＣＯＯＰ（全日本）
- トップツアー株式会社
- 陸自立川駐屯地ボランティア
- 妙智会
- ラックファクター
- 東京と岩手を繋ごう（ＪＴＢ復興活動パック）
- クロス
- 代々木フォレスト
- 天理教城山ひのきしん隊
- 中国語クラス有志
- フラワーセラピー研究会
- コムウェル
- ＲＣＳ
- チーム絆
- ＶＩ-ＢＯ
- 高松グループ
- 愛とヒューマン実行委員会
- トランスパシフィックキャンペーン（八神純子）
- ＳＯＲＡ
- ＣＬＡＳＳＩＣ ＦＯＲ ＪＡＰＡＮ
- ロレアル
- 日本フィルハーモニー交響楽団
- ワハハ本舗
- トータルライフコスモス研究会
- 曹洞宗総合研究センター
- ＮＰＯ法人東日本ネットワーク手にぎり隊
- 日本赤十字社看護大学（災害看護ボランティアサークル）
- 白土シェフを囲む会

千葉県

- 龍谷大学
- 京都花園大学
- ナデシコ
- 妙蓮寺
- みのむし人形劇団

東京都

- Ｍｉｘ Ｊａｍプロジェクト（静岡県内大学生団体）
- 笑座楽し舞歌
- 心和む演奏会
- 静岡産業大学
- 常葉大学（結志）
- 笑顔届け隊
- 静岡県茶業青年団

神奈川県

- 横須賀市社会福祉協議会
- 日本ユニバ震災対策チーム
- 日本キリスト教奉仕団アガペセンター
- 茅ヶ崎社会福祉協議会
- 神奈川大学（阿久津ゼミナール）
- 神奈川災害ボランティアネットワーク
- よこすかボランティアセンター
- 日本いきいきライフ協力機構～ＪＩＬＣＡ～
- ＢｕｰＶｏ
- ＲＥチーム
- スパイラル
- かないち
- ｓｈｉｎａｇａｗａ
- 明治学院大学
- 座間災害ボランティアネットワーク

富山県

- 株式会社八芳園
- Ｚｕｃｋ Ｆａｃｔｏｒ

福井県

- アナザアクト

山梨県

- 南部中学校
- 医療法人げんき夢保育園

長野県

- 長野青年会議所
- 築北村社会福祉協議会
- 御代田町社会福祉協議会
- 松本市社会福祉協議会
- 池田町社会福祉協議会
- 富士見町社会福祉協議会
- 須坂市社会福祉協議会
- 信濃毎日新聞社
- 軽井沢市社会福祉協議会
- 諏訪市社会福祉協議会
- 大町市社会福祉協議会
- 中野市社会福祉協議会
- 安曇野市社会福祉協議会
- 長野県岡谷市議会
- 伊那市社会福祉協議会
- 朝日村社会福祉協議会
- 岡谷市社会福祉協議会
- 南相木村社会福祉協議会
- 塩尻市社会福祉協議会
- 飯山市社会福祉協議会
- 山形村社会福祉協議会
- 飯田市社会福祉協議会

長期派遣職員一覧

都道府県別・順不同

北海道
菅井 大介
西谷内 文一

北海道池田町
定仙 康弘

青森県南部町
市澤 裕二
沖田 学
小橋 昭裕
助川 和典
根市 知典

岩手県
阿部 勝則
大澤 純子
大山 博幸
小笠原 幸司
菊地 賢
賢木 祐
佐々木 修
佐藤 淳一
佐藤 友善
千葉 昭仁

岩手県任期付き
秋好 賢一
阿部 茂
伊藤 光春
猪股 猪一郎
大石 祐二
小笠原 努
木村 一郎

静岡県静岡市
青島 匡志
上石 恭臣
浅場 俊之
足立 文昭
石原 宏樹
磯部 貴美仁
稲葉 祐輔
岩崎 紀樹
遠藤 亮太
大前 明生
影山 徹
片瀬 雄介
草谷 昂嗣
桑名 宏和
榊原 勝
杉山 太佑
鈴木 利典
髙橋 賢二
竹下 晴英
田代 博紀
乘松 琢也
畑 剛由
藤井 勇太
中村 康恵
野田 利浩
平岡 拓朗
平田 和也
廣瀬 敏雅
細木 奈央子
三倉 博英
八木 秀幸
矢崎 祐美
山田 匠
山田 勢大
山本 庸介
吉野 信央
藁科 彰良

静岡県島田市
金野 正
坂野 大徹
佐藤 晋
鈴木 郁也
髙橋 潤
竹村 昭彦
飛澤 尚弥
永山 恵理
野村 繁幸
堀江 孝次
前川 智明
八重樫 勝
山下 知子
横澤 郁恵

盛岡市
小笠原 健介
工藤 智也
小綿 孝志
佐羽内 大郎
髙橋 慎一
高橋 聡治
田中 将大
船越 俊明
目賀田 佳佑
森田 美彦
吉田 正夫
我妻 秀俊

花巻市
阿部 博
川村 真哉

静岡県富士宮市
松永 孝夫
松南 克彦
宮嶋 正
望月 祐治
山口 秀人
山崎 昭彦
山脇 明宏

静岡県静岡市任期付き
西浦 光寛

静岡県沼津市
伊藤 浩士
佐藤 正浩

静岡県三島市
相田 真
井原 甫
杉山 孝二
鈴木 啓司
肥後 恵子
宮本 啓之

静岡県藤枝市
石上 哲也
岩ケ谷 純一
榛葉 隆浩
鈴木 庸介
待井 崇幸
松倉 夏輝
森田 匠

静岡県磐田市
柴田 智大

静岡県袋井市
小川 貴司

静岡県下田市
土橋 一登

静岡県伊豆市
堀江 真理

大阪府大阪市
大輪 祥史
山本 良介

和歌山県和歌山市
井口 一幸
池上 正道
久保 雅敬
瀬藤 和秀
得津 雅夫
中谷 伸吾
中村 途男
西浦 大貴
西崎 哲生
橋本 健太郎
松岡 雄介
三木 登士哉
山本 直志
渡辺 浩行

鳥取県米子市
山田 津八百

香川県丸亀市
吉田 裕亮

長崎県新上五島町
高山 賢次

秋田県北秋田市
大野 拓哉
小坂 健正
櫻田 亮平
高谷 大

秋田県仙北市
下村 勝
髙橋 大記

紫波町
菊地 直
三ケ森 誠

矢巾町
下河原 佑太
中村 昂平

金ケ崎町
桑島 崇規
鈴木 優哉

軽米町
明岡 寿
大川 訓寿
兼田 一史
清藤 文喜
外山 和寿
福田 丈幸
脇山 春陽

一戸町
管野 紀子
昆 広都史

秋田県北秋田市任期付き
昆 広都史

静岡県下田市
菊池 真也
佐々木 賢裕
駿河 世紀
髙橋 慶
髙橋 裕哉
筑後 貴之
戸田 直之
中野 敬
平賀 健司
藤井 善也
藤原 晋也
森山 清人
大和 将太

二戸市
久保田 駿
下斗米 裕弥
生内 雅史

八幡平市
佐々木 優聡

滝沢市
菅波 啓司郎
髙橋 昂希

雫石町
桐山 真一
小割 定勝
高橋 和範
和川 岳

岩手町
工藤 満広

静岡県伊豆市任期付き
堀江 真理

静岡県富士宮市任期付き
山口 秀人

静岡県藤枝市任期付き
石上 哲也

静岡県島田市任期付き
森田 匠

静岡県沼津市任期付き
佐藤 正浩

静岡県三島市任期付き
杉山 孝二

静岡県磐田市任期付き
柴田 智大

静岡県袋井市任期付き
小川 貴司

静岡県下田市任期付き
土橋 一登

静岡県伊豆市任期付き
堀江 真理

大阪府大阪市任期付き
大輪 祥史

和歌山県和歌山市任期付き
井口 一幸

鳥取県米子市任期付き
山田 津八百

香川県丸亀市任期付き
吉田 裕亮

長崎県新上五島町任期付き
高山 賢次

秋田県仙北市任期付き
下村 勝

静岡県
石田 安秀
伊藤 鎌太郎
伊東 信幸
岩崎 勝彦
大嶽 光司
小野間 健治
小柳津 啓介
梶原 大督
加藤 晴久
河村 健春
木下 紘輔
木原 寛
齋藤 雅文
杉山 明
鈴木 薫
鈴木 武晃
鈴木 健泰
鈴木 大貴
中戸川 達矢
中西 歩
内藤 時江

長野県川上村
田口 俊彦

山形県山形市
五十嵐 貴久

山形県最上町
齋藤 仁
須貝 満

千葉県香取市
荒井 世志紀
鬼澤 昭夫
神津 勇人
佐藤 喜一郎
椎名 晃大
篠塚 直弥
林 光一
平野 功
松本 博樹

神奈川県任期付き
木佐木 康宏

神奈川県川崎市
東 健二
堀口 保夫
松本 憲一
山中 森男
山本 茂
石川 武彦
伊藤 洋平
上杉 麻里子
江上 弘史
大泉 剛

長野県千曲市
池田 一貴
金井 貴弘
小林 勇
小松 功和
高島 洋一
武井 高典

長野県飯田市
羽生 俊郎

富山県富山市
小林 高範
渡邉 学

富山県南砺市
宮内 清和

石川県輪島市
倉本 啓之
瀧本 将雄
端 圭一郎
細谷 樹史
山下 敦司

長野県伊那市
黒田 隆一
小池 智也
小島 隆司
崔 正秀
佐塚 亮
佐藤 直文
平井 康夫
町井 和幸
若林 禎浩

長野県上田市
田野原 孝之
富岡 秀樹
野上 健
原田 貴明
平林 大樹
松本 賢志
宮坂 勇貴
宮澤 勲

災害協定締結一覧

地方公共団体

No.	締結年月日	協定相手	協定名
1	平成19年8月1日	岩手県	災害救助用米穀に関する協定書
2	平成8年10月7日	県内市町村	大規模災害時における岩手県市町村相互応援に関する協定
3	平成23年11月1日	国土交通省東北地方整備局	災害時の情報交換に関する協定
4	平成24年1月20日	秋田県仙北市	災害時相互応援協定
5	平成24年3月1日	岩手県市町村清掃協議会	一般廃棄物処理に関する災害応援協定に関する協定
6	平成24年3月17日	北海道池田町	災害時相互応援協定
7	平成24年6月21日	青森県平川市	災害時相互応援協定
8	平成24年6月22日	青森県南部町	災害時相互応援協定
9	平成25年3月14日	長野県千曲市	災害時相互応援協定
10	平成25年3月15日	千葉県香取市	災害時相互応援協定
11	平成25年7月17日	航空自衛隊第37警戒隊	山田町管理施設の鍵の保管等に関する協定
12	平成25年10月15日	県立山田高等学校	避難所施設利用に関する協定
13	平成29年8月8日	静岡県富士宮市	災害時における応援支援に関する協定

民間団体等

No.	締結年月日	協定相手	協定名
1	昭和63年10月20日	宮古医師会	災害時の医療救護に関する協定書
2	平成21年2月3日	東北電力株式会社宮古営業所	災害時における電力復旧作業の協力体制に関する協定
3	平成23年1月13日	岩手県石油商業協同組合宮古支部	災害時における応急対策用燃料調達に関する協定
4	平成23年1月13日	宮古薬剤師会	大規模災害時における医薬品等の優先供給に関する協定
5	平成24年3月28日	山田地区建設業会	災害時における応急対策業務に関する協定
6	平成24年7月9日	NPO法人コメリ災害対策センター	災害時における物資供給に関する協定
7	平成24年7月25日	日立建機日本株式会社	災害時における資機材供給に関する協定
8	平成24年10月25日	岩手県生活衛生同業者組合	災害時における救助に関する協定
9	平成25年3月12日	社会福祉法人正受会 社会福祉法人親和会 株式会社メイト 有限会社ヘルパーはうす 有限会社すずらん介護事業所 株式会社ウェルファー 有限会社介護施設あお空	福祉避難所の設置運営に関する協定
10	平成25年3月12日	医療法人晃生会 社会福祉法人山田町社会福祉協議会 有限会社あすなろ 有限会社山崎タクシー 特定非営利活動法人石峠宅老所	福祉避難所における人員協力要請に関する協定
11	平成25年3月12日	社団法人日本福祉用具供給協会	災害時における福祉用具等物資の提供協力に関する協定
12	平成25年5月14日	宮古歯科医師会	災害時の歯科医療救護活動に関する協定
13	平成25年12月18日	ヤマト運輸株式会社	災害時における物資の緊急輸送及び物資拠点の運営等に関する協定書
14	平成26年12月10日	(一社)日本防災防犯自動販売機推進機構	災害対応型自動販売機設置に関する協定
15	平成27年3月29日	みちのくコカ・コーラボトリング株式会社	災害時にける飲料供給に関する協定
16	令和2年1月6日	三菱自動車工業(株)	災害時における電動車両等の支援に関する協定書
17	令和2年11月16日	日本郵便株式会社　東北支社	山田町と日本郵便との包括連携に関する協定書

参考図書一覧

●山田町教育委員会『山田町津波誌』昭和57年
●山田町『山田町町勢要覧　キラリやまだ』平成13年
●山田町『山田町町勢要覧　元気創造をめざすまち』平成19年
●山田町『山田町復興計画』平成23年
●山田町『広報やまだ』平成23年～令和2年
●山田町議会『やまだ議会だより』平成23年～令和2年
●社会福祉法人山田町社会福祉協議会『やまだ福祉のひろば』平成23年～令和2年
●岩手日報社『岩手日報電子縮刷版』平成23年～令和2年
●山田町『山田町復興整備計画』平成24年～令和元年
●伝津館・山田町大震災記録誌編集委員会『あの日から明日に向かって　東日本大震災　山田の記録』平成25年
●山田町・山田町東日本大震災を記録する会『3.11百九人の手記　岩手県山田町東日本大震災の記録』平成27年
●山田町『山田町復興まちづくり計画』平成27年
●山田町『山田町まちなか再生計画』平成27年
●山田町『3.11 残し、語り、伝える　岩手県山田町 東日本大震災の記録』平成29年
●山田町『震災からの復旧と再生　～東日本大震災からこれまでの歩み～　山田町復興記録誌（概要版）』平成29年
●社会福祉法人岩手県社会福祉協議会　『平成28年度 東日本大震災被災者実態調査研究報告書』平成29年
●山田町『山田町地域公共交通網形成計画』平成31年
●山田町『山田町「新たな観光拠点」基本構想・基本計画』令和2年
●山田町『令和元年台風第19号水害からの田の浜地区復旧方針・復旧整備計画』令和2年
●山田町『田の浜地区台風19号水害検証結果等に関する住民説明会（資料）』令和2年

山田町復興記録誌　2011-2020

山海虹路〈SANKAIKOURO〉

発行日　令和３年3月11日
発行者　山田町
〒028-1392　岩手県下閉伊郡山田町八幡町3番20号
電話：0193-82-3111 / Fax：0193-82-4989
編　集　山田町・川口印刷工業株式会社
印　刷　川口印刷工業株式会社

2011 山海虹路 2020
SAN KAI KOU RO

山田町復興記録誌